『 大死一番 ～ストリートファイター・リュウが歩いた道～ 』

【大死一番（だいしいちばん）】 自我を一切捨てて仏道に身をささげること。
転じて、死んだ気になって精いっぱいやること。

（碧巌録）

☆ 原点～轟鉄一門

今度は十四歳年下のファイターと闘わねばならないのだ。相手は勇猛果敢な二十六歳のタイ人である。

まだ人々が寝静まる早朝に、俺はこの問題と闘っていた。

着古した道衣に身を包み、赤いハチマキを額に巻けば「格闘家・リュウ」としての一日がはじまる。静謐な空気漂う道場で、坐禅を組むことが俺の最初の日課だった。

道場は俺にとって最大限に自分自身を発揮できる場所であり、心を落ち着かせ、自分の内面を見つめることのできる場所でもある。道場の床には、どれほどの血と汗と涙がしみこんでいることだろう。

六月の彼誰時に昇る陽は早い。

まもなく、太陽が日差しの強さを予告するかのように、地平線を描こうとしている。

俺は今年の七月で四十一歳になる。

格闘家・リュウとして闘うことに一生を捧げ、ただただ、真っ直ぐに歩んできた四十年だった。

――真の強さとは何か。何のために闘うのか――

これは俺が生涯をかけて探し求めている飽くなきテーマだった。

峻厳な山の頂上には何があるのかをこの目で確かめるために、俺は闘い続けてきた。
しかし山頂にたどり着いたと思えば、更なる高みがあることに気づいて、再び山へと登る。真の強さを求めて闘い続けることは、果て無き頂上を求めることと同じなのかもしれない。
実は、この期に及んで自分の進むべき道を探しあぐねているのである。
あさってには、タイでの国際試合に参戦することになっている。今日までには発たなければならないというのに。
年齢が、問題なのではない。
負け続けているから、やめるのではない。
勝ち続けているから、続けるのでもない。
俺は二十年以上も、いまだ見出せずにいる山頂を仰ぎつつ、今後も登り続けるのか、それとも下山するのかという道の岐路に立っているのだった。
目を閉じ、深い呼吸をゆっくりと。心に思うことを思わず受け流し、ただ無為となって無となる。坐禅は俺にインスピレーションとして天啓を授ける。時間を忘れ、為すことを手放し、ただ存在するだけの存在となるのだ。
瞼が闇から光を感知し、ゆっくりと目を開けてみると、窓から朝日が差し込みはじめていた。
朝日は幾重ものスペクトルを構成し、鎮静した空間に鮮やかな色彩をもたらした。虹は規則正しくグラデーションを描いている。虹色の光線は、俺自身の心の奥に投影するかのように瞳孔を貫いて網膜に映し出していた。
その光は、若かりし頃から現在までの俺をまざまざとよみがえらせた。
今日タイへ発つ前に、自分の歩んできた轍を振り返ってみれば、何らかの決心がつくかもしれない。俺の記憶は、青い修行時代へとタイムトリップした。

俺のルーツをたどるには、轟鉄老師を語らずしては始まらない。まずは師匠から聞かされた、轟鉄老師の生き様を思い起こしてみた。
轟鉄老師は、我が一門の始祖であり、俺の師匠の師匠に当たる人物である。
その素顔は、僧侶のくせに酒と女を好む、豪快奔放で身体頑健な大男だった。
まるで僧侶らしからぬ像を抱かせる轟鉄は、もともと禅の修行僧・雲水だったという。
禅は坐禅を通してひたすら無を追求しようとするのが教義である。しかし轟鉄の実体は

とんでもない破戒僧だったのだ。

轟鉄は親の名も知らずに僧堂で育てられた。

何らかの事情があったのだろう。親が産声を上げて間もない我が子を、僧堂に置いて立ち去ったのだそうだ。寺に置いていったのは、立派な人物に育って欲しいというせめてもの願いを込めてのことだったのだろう。

物心付いた轟鉄にとって、坐禅が日常となった。無の境地に至り、大悟すれば師家（しけ）――いわゆる禅マスター――として生涯禅道を貫く人生が、目の前に敷かれたレールだった。

しかし青年となった轟鉄は、幸か不幸かそのレールに分岐点を見出してしまったのだ。

「持戒は驢馬（ろば）になる。破戒こそが人間」と詠んだ一休禅師の言葉に、稲妻のごとく衝撃を受けたことが、若き轟鉄の人生を大きく覆すことになったのである。

一休禅師は後小松天皇の落胤ゆえに、六歳で禅寺に入門した経歴を持つ名僧だ。轟鉄は一休禅師と自らの生い立ちを重ね、人生の道を新たに見出したのだろう。

雲水とは禅の修行僧のことである。

行雲流水のように淡々として一処に止住せず、天下に正師を求めて遍歴するといういわれがある。轟鉄の選んだ道は、その意味のごとく、一所にとどまることを選択しなかった。

轟鉄は僧堂を飛び出したのだ。

若き轟鉄が禅の次に求めた先は、理論は抜きにして、ひたすら実践を通して悟りを体得しようとする修験道だった。

修験道とは、山にこもって大自然と一体となり、苦行・荒行を通して神通力を得ようとする、山岳信仰である。修験道は古代から中世にかけて、神道陰陽道や中国から輸入された仏教や道教などの宗教が渾然一体となって成り立ったといわれている。

轟鉄は修験者、つまり山伏として修行を積むことを選んだ。その中で体得したのが、波動によって氣を物質化させ、体外へと発する奥義――これぞ轟鉄の体現した神通力だった。

これが波動拳の原型である。

波動拳は、雲水から山伏の道に入ったという異質の経歴を持った轟鉄だったからこそ、成しえた所業だといえよう。

静と動の相反する作用を、静（禅）と動（修験）の修行を通じて見事に調和させることで、完全さを生み出すことができたのだ。

物心付いた頃から僧堂で生活していた轟鉄は、おそらく家庭の温かさや世俗を知らぬまま、雲水として生きてきたのだろう。この頃の轟鉄にとっての反逆行為とは、世俗に心を

煩わすことではなく、僧堂を飛び出して大自然の中で最高の自分を表現することだった。

轟鉄が目指した最高の自分とは、人間の限界を破ることだった。轟鉄にとって人間の限界を破る行為とは、心身ともに鍛え上げる手段――全人格を練磨させ、なおかつ五体を武器化させる手段――すなわち格闘術だった。

しかし、轟鉄青年はやがて、一休禅師の詠んだ「持戒は驢馬になる。破戒こそが人間」という句の本質を知るようになるのである。

一人前の若者となった轟鉄は、血気あふれる生々しい実体を持つ我が肉体の衝動に直面することになった。

沸き起こる肉体の欲求の正体がいったい何なのか、その謎を暴こうとするのが人間というものである。おそらく、幼い頃より経典に親しんできた轟鉄にとって、その答えを求める先は、やはり経典だった。

仏教の経典の中には『理趣経』というものがある。この中に記されている十七清浄句には「妙適清浄の句、是菩薩の位なり」という句を筆頭に、十七句記されており、その意味は「男女交媾の妙なる恍惚の境地は本質として清浄であり、とりもなおさずそのまま菩薩の位である」というものだった。

あろうことか、欲を捨てようとする禅や修験の教義と、相反する内容が述べられていたのだ。

また、性的エネルギーであるタントラは、一部のネイティブ・アメリカンやチベットの仏教徒、ヒンズー教徒などで研究され伝えられてきた。その本質は、男女の交合を通して宇宙の最高真理を知ることだった。

森羅万象は男性原理と女性原理の二種があり、この二つが交わることで神の力を得ることができると考えられたものである。

これを中国の道教においては、不老不死の仙人となるための奥義のひとつに房中術――男女の精気を循環させる術――として性交渉が養生法として行なわれていたという。その内容は門外不出の書に記され、秘伝中の秘伝とされたという。

このような驚くべき内容を教義とする思想が確かにこの世に存在する。轟鉄青年の衝撃は、筆舌に尽くしがたいものがあったことだろう。

この世にはこれまで非とされてきた欲が是とする教えがある。

それを知った健全な青年は、感激に身震い、人間の根源にある欲求を解き放つことこそ悟りであると確信し、虚空を仰いで魂の雄叫びを発したことだろう。

しかし性の秘密を知ろうとする青年の衝動に、経典から知識を仕入れるだけで満足できるはずがあろうか。

奇しくも轟鉄青年は、坐禅を組んで答えを求めるだけではなく、実際に五感で体験してみてはじめて理解できるということを知っていた。轟鉄は修行の場である山から下山することを決心したのだった。

轟鉄青年が向かったのは歓楽街。僧堂とは対極に位置づけられる、欲望の聖地だった。

そこには人間の情念が澱み渦巻く、説法も経典も通用しない実世界があった。おそらく、袈裟姿の若い僧侶がそこに立っているだけで、シュールな絵になっていたことだろう。

異界の地に降り立った轟鉄は、色とりどりに光るネオンの忙しい点滅に目をしかめ、罵声と嬌声の入り混じった喧騒に耳を疑い、あでやかに着飾った遊女の官能美に目をそらしてはその場を立ち尽くしていた。

若き不犯の僧侶を、女たちはこぞって引き込もうと争いすら起こった。轟鉄はたじろぎ、抗いこそすれ、目的を果たさんと花街の闇へと消えていった。

沸き起こる欲求を抑圧することが当然として刷り込まれた轟鉄にとって、自らの肉体の意思に従うことは、罪と感じたかもしれない。しかし、それ以上に自らの情熱に忠実にあろうとした。それが生きることだと轟鉄は知っていた。

女とて人間には変わりない。しかし男とはとてつもなく思考も構造も似て異なることを轟鉄は目の当たりにしたことだろう。そして知りたい欲求が人一倍旺盛だった轟鉄ならば、女の柔肌に触れたとき、理屈を超えた世界があることを悟ったのに違いない。

未知の世界を体験した轟鉄は、口にしたことのなかった美食に舌鼓を打ち、酒にほろ酔う体験も味わった。経典を読むことを忘れ、欲望のおもむくままに享楽的な人生にどっぷり入り浸っていた轟鉄だったが、やがて轟鉄を決定的に目覚めさせた出会いが訪れた。

遊女のひとりを愛してしまったのだ。それは轟鉄にとって「菩薩の位」へと導く更なる未知の世界への探求となった。

僧侶と遊女の恋物語など、古典では定番のストーリーだ。しかしそれを実際に体験するとなると話は別だ。轟鉄は僧侶としての枠を超え、当たり前の男として愛する女性と向き合うことを体験してみてはじめて「人間とは何か」という本質を垣間見たのかもしれない。

もしかしたら僧侶として生きることをやめ、一瞬でも還俗することを考えたかもしれない。……しかし轟鉄にとっては、俗世で浴びる陽ざしは眩しすぎたのだろう。やがて棲み家にしていた古寺にひとり戻ることを選択した。

そして俗世の垢を落すために、人生のすべてを懸けて大成しようした格闘術に没頭する日々を送ったのだという。

しかし一度でも魂が打ち震えた経験をしたならば、再び人恋しくなるのが人間というものである。

轟鉄は寂しさという反動から時折花街へ降りては、享楽に浸る生活を飽きるまで続け、退屈と罪悪感にほだされては山に戻ったのだという。

轟鉄は肉欲と禁欲を振り子のように反復することで、人間の欲求のバランスを取っていたようだ。

このように轟鉄は、古寺を棲み家として自給自足しながらも、欲望に甘んじつつ格闘術の修行を積んでいた。このような生活が二十年以上も続いたのだ。やがて山野で迷子になっていた幼い兄弟と出会うこととなる。

兄弟のそばには衣類とわずかな食料、出生の経歴をメモした紙が添えられていた。兄弟は捨て子として置いていかれたのだ。

還俗し結婚する道を選ばなかった轟鉄は、この兄弟を引き取ることにした。ここにはじめて、轟鉄にとっての家族が誕生したこととなった。

その兄弟とは、剛拳と豪鬼だったのである。

――俺の師・剛拳もまた、必然的に僧侶として生きた男だった。

育ての親は、かの轟鉄である。

剛拳の人生は轟鉄に拾われたことで決まったようなものだった。

何の事情があって捨てられたのかは、今となっては知る由もないが、まだ年端もいかない剛拳と豪鬼は、幸か不幸か、一般人とはおよそかけ離れた救済者のもとで生きることを余儀なくされた。

幼子を扱う術など知らぬこの救済者は、子どもを小さな大人として扱うことに何の疑問もなかった。

轟鉄は格闘術を通して大悟することに人生を懸けた男である。ふたりの幼子を自分と同様に格闘術の修行をさせることこそが、轟鉄にとっての教育となった。

轟鉄は僧堂での生活方式をそのまま取り入れたことにより、子どもたちに対して大人と同様に家事労働をさせることも教育とした。その上で格闘術の修行が成立するのである。

「小さな大人」として扱われた幼い兄弟は、甘えや依存を知らずに成長することになった。

それが当たり前だったのだ。
なぜなら轟鉄自身もこのようにして育ったからだった。
母親を知らずして生きてきた兄弟は、母親を知らずに生きた男に育てられることにより、感情を表現することを知らずに大人になった。
代わりに悲しみや怒り、羨望や不安を感じることを禁じる術を覚え、感情を表さないことが美徳とした価値観を構築させていったのだった。
それは轟鉄の生きた道からして、当然の成り行きだった。
抑圧すること――欲求を持つことを許されずに育った兄弟は、時折轟鉄に置き去りにされた。轟鉄は幼い兄弟には欲を解放することを許さず、自らは欲を解禁するために山を降りたというわけだ。
兄弟はそれでも轟鉄の帰りを待ちわびつつ、修行に励む日々を送っていた。「破戒僧の小坊主」と揶揄されながらも学校へ行き、家に帰っては格闘術に励む日々。その他は家事労働にいそしんでいた。ふたりの兄弟は、身を寄せ合って互いの絆を深めていたのかもしれない。

……以上までが剛拳師匠から聞いた轟鉄老師についての話だった。
なぜか剛拳は弟・豪鬼のことについては、これ以上の話をしようとはしなかったのを覚えている。
そのような経緯を経て独身主義を貫いた剛拳と豪鬼は、世を捨て、ひたすら修行を積み、あらゆる欲望を克服することこそ格闘道への悟りの境地に至るという信念を構築させていった。
こんな息苦しい生き方を、轟鉄一門は――ことに剛拳と豪鬼のふたりの兄弟は――何の疑問も持たずに生きていたのだろうか。
いや、疑問はあっただろう。しかし、それ以外に生きる術を知らなかっただけなのかもしれない。
剛拳と豪鬼――。このふたりが、後に出会う俺の人生に大きな影響を与えることになるのだった。

☆ ゼロの時代

そもそも、俺は幼少のときから身体が弱く小さかった。

親はそんな俺をあらゆる面で丈夫にさせようと、武道をやらせたわけだ。これが俺の格闘人生のはじまりだったのだ。

剣道や柔道を覚えた俺は、面白くて夢中になって稽古に励んでいたものだ。

十五歳になった頃、風の噂で氣を物質化させて光の玉を発することのできる伝説の格闘家がいるということを耳にした。

少年だった俺は、ＳＦ小説か剣豪小説の中の主人公が実際にいるのではないかと胸を躍らせた。

やがて噂が本当なのかどうかを見破りたいと思うようになり、噂の男を探すために、あらゆる道場を必死で尋ねて回った。

その結果、伝説の格闘家は意外にも、家から一時間ほどのところにある小高い山に棲んでいるということがわかった。

俺ははやる気持ちを抑えながらその地を目指して山を駆け上がった。そしてたどり着いたのは、山道に差し掛かる石段を登りきった先にある、古びた寺だったのだ。

古寺の屋根瓦には雑草がはびこっており、すすや埃で汚れた壁にはクモの巣が張っている。おそらく百年以上は経過しているだろう。

こんなところに人が住んでいるのだろうかと疑うようなこの寺に、伝説の男がいるという。伝説の人物は、伝説らしい寺に住んでいるものだと勝手に納得しながら、寺の奥を覗き込んだ。

「何用か」

俺の背後に立っていたのは、達磨大師のごとくに眼光鋭く、背丈は見上げるほどの大男だった。体躯は楠のように太く、どんな外力にも頑として動じない体格の坊主だったのだ。

「無」を背負った袈裟をまとい、大きな数珠を首から下げた姿は、まるで不動明王を思わせた。風貌は言うまでもなく、煩悩を断ち切り、災害悪毒を取り除けるほど強力な氣を発していたからだ。

強烈な氣に圧倒された俺は、このときうまれてはじめて恐ろしいと感じた。しかし、今まで頑張ってきたのだからと自分を励まして、言葉を発した。

「ぼ、僕は波動拳を教えてもらいたくて来たんです」
坊主は、俺の目を射抜くような目で見た。
「帰りなさい。ここはただの寺だ。波動拳などわしは知らん」
そう言うと、俺をその場に残して寺の奥へ引っ込んでしまった。途方にくれたが、この人物こそ伝説の波動拳を放つ男に違いないと確信を持った。なぜなら、俺の膝が震えていたからだ。そして、精神が昂ぶって息が荒くなっていたからだった。
面と向かっただけで、相手を圧倒させるほどの強さを持った人物がこの世にいる。少年の俺は未知なる世界の奥深さに驚嘆せざるを得なかった。
(絶対に、あの人のところに弟子入りしてみせる!)
決心を固めた帰路の足取りは力強く、こぶしを固く握り締め、夕焼け空の眩しさに胸を震わせながら明日もここへ来ることを固く心に誓ったのだった。
……これが、俺と剛拳の出会いだった。

翌日も、剛拳の威厳に満ちた容貌に臆することなく弟子入りを志願した。
しかし剛拳は俺を見るなり、「弟子は取らぬ」の一点張りで、うるさい蝿を追っ払うかのごとく、邪険に俺を振り払った。
俺はあきらめずに毎日毎日門を叩いた。剛拳と俺は互いに根気比べをやっていたようなものだった。
朝、学校へ行く前に門前に立ち、学校帰りに再び門前に立つ毎日。雨が降ろうが、休日だろうが俺はあきらめなかった。
そんな俺にも転機が訪れた。剛拳のもとへ通い続けること百日目のことだった。
「おまえほど往生際の悪い者は見たことがない。これを今日からおまえに授けよう」
剛拳から手渡されたのは、白いハチマキだった。
「本日をもって、入門を認める。ただし条件がある。学校には休むことなく通うことと、毎日家に帰ることだ」
「はい!」
俺は早速ハチマキを額に巻き、晴れて剛拳の弟子となることを認められたのだった。
入門してすぐに技を教えてもらえると信じて疑わなかった俺は、授業を終えると学校を飛び出し、剛拳の棲む山を目指して全力疾走で駆け抜けた。

持ってきた白帯道衣に着替えた俺に、剛拳は開口一番、こう言った。
「パンツを脱げ」
俺は耳を疑った。俺は硬直したまま思考停止状態になっていた。
「よいから、パンツを脱ぐのだ」
剛拳ははっきりと言った。「パンツを脱げ」と。しかし俺の理性はいやだと言っている。けれど弟子入り一日目にして、パンツを脱ぐのを拒否したために破門だなんてことになったらどうする。パンツ一枚で波動拳が永遠に体得できないということになってしまうじゃないか！　俺はしぶしぶながら、ズボンの紐に手をやった。
「これを身につけるのだ」
剛拳の右手に持っていたのは、白くて長い布だった。俺は眉間にしわを寄せた。
「見るのは初めてのようだな。これは褌（ふんどし）だ。日本男児は昔から褌と決まっとるんだ」
褌を締める必要性に合点がいかなかったが、剛拳は手際よく俺の褌を締め上げた。
「ふむ、よく似合っとる。これが我が一門の基本スタイルなのだ」
俺の頬は赤かったに違いない。単に恥ずかしいのと、これからは褌を絞めねばならないということに対する複雑な気持ちが入り交ざっていたからだ。しかし案外心地よい。そういえば日本人の男達は、祭りのときには褌姿になる。その時の堂々たる姿は実に頼もしい。ともあれ、褌がいかに重要な「しんがり」役とも言える役割を果たしているものだということを、俺はずっと後になってから知ることになるのだった。
身なりを完璧にした俺は、鼻息を荒くして剛拳の言葉を待った。剛拳はおもむろに二メートルほど横に置いてあった鍬を手に取り、差出した。俺はかなり使い込んだ鍬を受け取ると、これを武具にして稽古するのだろうと勝手に予想した。さすがは轟鉄一門、やることが違う。意気込んでいると、剛拳はそこからそこまで畝（うね）を作ってみよ、とあたり一面を指差した。
鍬は武具ではなかった。そりゃそうだ、最初から武具を使った稽古なわけがない。しかし当たり前の農具として使うとしても、俺は畑を耕したことなど一度もない。それどころか鍬など見たこともなかった俺は、ただどうすることもできず、かといって放り出してしまえば技を教えてもらうことは難しいだろうと考えた。俺は周りの畝を見てなんとなくやってみた。しかし深く掘り進めることができなかった。
見かねた剛拳は、俺に再度鍬を持たせた。
背後から覆いかぶさるような影を感じたかと思うと、剛拳の大きくて日に焼けた手を俺

の手の上に重ねたのだ。
剛拳の熊手のように分厚く節くれだった手は、温かかった。
「このように振り上げ――下ろす。腰が引けていては深く掘れんのだ」
剛拳の助けを借りて深く土に刻み込まれた鍬は、黒々とした良質の土を地表に現した。
「こうしたことは、身体で覚えるのだ」
あのとき触れた剛拳の手の感触と温かさは今でもよく覚えている。
毎日、学校から帰ったらすぐに剛拳の寺に向かい、額にタオルを巻き、腕まくりして長靴を履き、鍬を握り締めて、大地と向かい合うことが俺の日課となった。
ひとかきひとかき土を耕していく。そのうち腰が辛くなってくる。思い切り腰をそらしてみる。
ふう、と一息つくと、雲ひとつない青空に意識が吸い込まれるような感覚に陥った。
この空の向こうには宇宙がある。
いったい宇宙には果てがあるのだろうか。そして宇宙人は本当にいるのだろうか。俺は時々こういうロマンを感じては、空想を膨らませることを楽しんでいた。
しかし現実は「そんなつまらんことを考える暇があるなら、勉強しなさい」と言われるのが落ちだ。……そんなことを考えながら、山から街へと視線を下ろした。
眼下には平野に広がる市街地が一望できる。遠くには立ち並ぶビル群、その向こうには港があるはずだ。ここに立てば、町全体がジオラマのように見える。公園で遊ぶ子どもたち、商店街でにぎわう人々、クラブ活動に励む学生、散歩する人々、行き交う電車や車……それらがまるでアリの社会のように見えてくるから不思議だ。
ここは町から見上げれば単なる山に過ぎない。けれども実際に山に立ってみれば、単なる山ではなくなってしまった。山には木々や草花、無数の石や土で構成されていて、虫や鳥や動物たちもそれぞれの社会を営んでいる。人間が耕した畑や田んぼ、そして家や寺も道路もある。視線を足元へと移すと土まみれになった俺がいる。
こんななりで帰ったら、きっと母さんは怒るだろう。そして父さんは遊んでいないで勉強しろと言うだろう。急に現実に引き戻された俺は、息をひとつついて再び土を耕し始めた。
「今日はここまで良い」
日が落ちてきた頃、剛拳は俺に畑仕事を切り上げさせた。
「続きは明日だ。今日はこれまで」

畑を耕しただけで、技に関しての一切のことは触れないままに、俺は寺から帰されたのだった。
（何だよ、技らしいことは何にも教えてくれないのかよ）
俺はただ、ふてくされるだけしかできなかった。
入門から一週間後、これまでと同様に畑を耕すことだけをさせてきた剛拳は、俺に畑仕事を早々に切り上げさせた。
最初に教えられたことは、基礎中の基礎である立位の構えだった。
ただ左手を鼻先の延長線上に、右手は丹田の位置に、ともに正中線を通るように構えさせたのだ。
足は左足を半歩前に、右足は半歩下がって大地をつかむように静かに腰を下ろした状態を維持させた。
剛拳はしばらく俺の様子を見ていたが、俺の身体を棒で押したのだ。俺はバランスを崩して倒れそうになった。
「身体に力を入れてはならん。臍下丹田に心をしずめ、腕の力を抜くように構えてみよ」
今度は剛拳の言葉のとおりに構えた。
剛拳は再度俺の身体を棒で押したが、今度はびくともしなかった。
あまりの変化に、目を輝かせて剛拳の顔を見た。
しかし剛拳は俺の隙を見逃さなかった。再び俺の身体を棒で押すと、いとも簡単にぐらついてしまったのだ。
「わしに氣をとられて丹田にしずめた心を浮かせたからだ」
注意散漫になると、ミスをしやすくなるのも同じことだと剛拳は言った。
畑仕事と構えの稽古だけが続いたある日、剛拳はこう言った。
「おまえはこの作業の意味を理解しておらん。わしと畝をいくつ作れるか競うてみよ」
思いがけず師匠と畑作業を競うことになった。先ほどまで心ここにあらずの状態からいっぺんに心胆を取り戻し、気合を入れて臨むこととなった。
おそらく剛拳はこのとき齢六十を過ぎていただろう。体格差はあれど、体力に自信のあった俺は、剛拳に負けまいと必死で畝を耕し始めた。
しかし結果は、俺がひと畝作りきったときには、剛拳はふた畝半も作り終えていたのだった。
剛拳のものは早さだけではなく、真っ直ぐ的確に、盛る高さも均一に仕上げられている。

俺の作った畝は蛇行していて、盛る高さもむらがあり、決して美しいとはいえない出来栄えだった。競争は、明らかに俺の負けだった。

「わしの作った畝のようにできるまで続けてみよ」

そう言い残して、剛拳は畑を去って行った。

その後ろ姿を見送りつつ、怠惰で無意味だと思い込んでいた畑作業に、大きな意味がこめられているのだということを知った。

(師匠に認めさせてやるまで、絶対にやり抜いてやる)

ここでやめてしまえば、今度こそ本当に俺の負けだ。意地だけが、俺を行動に駆り立てていたのだった。

そんなことがあってから性根を据えて畑仕事に挑むようになり、いつしか能率的かつ正確に仕上げられるようになった。

畝が出来上がったことを剛拳に報告するとただひと言「うむ」と言うだけで、すぐに次の仕事を与えられた。

今度は田植えだった。

愕然とした俺は剛拳の思惑など知る由もなく、むしろ弟子をこき使うためだけに入門させたのではないかという疑惑を抱くようになった。

畑の畝を作り終えた時点で、技の指導を受けられると期待していただけに、相当落胆したものだ。

しかし、ここでやめてしまえばせっかくの努力も水の泡と消えてしまう。悔しかったが黙って剛拳の言うことを聞くしかなかった。

やはり、剛拳と競争で田植えをした結果、俺が一列植えたときには、剛拳は三列も植え終えていた。

しかも出来栄えは真っ直ぐで均等な間隔を保っている。対して俺は蛇行していて間隔もまちまちだった。

畑仕事と同様、田植えを正確にできるようになるまでこの作業は続けされられた。

こんな日々が続いたが、農作業を終えた後にやっと構えの稽古がはじまる。

これが修行の第一歩と分かっていても、俺にとってはあまりに退屈で発展的でない稽古だった。

農作業は着々と進み、種まきの手順まで踏むと、俺の心は不思議と発芽の日を待ち遠しく思うようになっていた。

それはただ技を教えてもらえることが近づいたという理由ではなく、自分がやり遂げた仕事に愛着を感じられるようになったからだ。

自分の手で耕した畑に種を植えて命を吹き込む。野菜は調理されたものとして、無意識に食べていたのが、自分で野菜を作っているんだという意識に変わっていった。そのとき忘れていた何かを思い出したような気がしたものだ。

その一方で、構えだけで技の指導は一向に始まらない現実にジレンマを抱えていた。ときに馬鹿馬鹿しくて二度とここへ来るもんかとふてくされたことなど数知れない。

しかし、剛拳の伝説の波動拳をこの目で見ることもなくやめてしまうことは、どうしてもできなかった。

農作業に慣れてきた頃、俺は剛拳が変わった手法で作物を豊かに実らせていたことに気づいた。剛拳は雑草を引かず、農薬や肥料を使わないで見事に作物を実らせていたのだ。

唯一していたことといえば、黄緑色に色づいた畑の作物に、毎日触れていたことくらいだろうか。それだけで虫食いのない見事な出来栄えの収穫を得ていたのだった。その味は濃く、みずみずしい。普段家で食べている野菜の味とはずいぶん違っていた。俺は何でこんなに手抜きをしていて野菜ができるのかが不思議だった。

師匠は俺に土作りも教えてくれた。

「畑の土に手を入れてみよ」

師匠に言われるがまま、土に手を入れてみた。

「あ、あたたかい……!」

「土が温かいのは、土が生きておるからだ。人間の身体も同じことよ。冷たき身体は未病人であり、決して健康とは言えんのだ」

温かい土は柔らかかった。土には無数の微生物が共生しながらそれぞれの役割をこなしており、水を通して植物にエネルギーを送っているという。その作業に人間が手出しすることは無用であると剛拳は言った。

「人間の役割は地球の世話をすることなのだ。地球上のすべての生物の活動がうまく循環できるよう、調整するのが役目であることを知っておくことだ」

農作業は四季を通して行なわれた。

春に植えた種が実となって夏に収穫し、春に植えた苗が秋には豊かな稲穂となって稲を刈り、夏の終わりに植えた種が冬を越し、春に収穫された。

春夏秋冬を田畑とともに過ごし、大地の恵みのありがたさを体感できるようになった俺

に、剛拳はこう言った。
「よいか、天地ありて人あり。人は天と地から離れて生きることはできん。天地に畏敬の念を抱き、感謝することなくして人は生きてはゆけんことを、おまえも良く分かっただろう」
現代人として育ってきた俺に、一年を通じて天地人の三才を教えてくれた。
何よりも剛拳が偉大だったと感じるのは、技を創り上げる以前に、人間の土台創りを主眼にしたことだ。
人間の基本を創ることがもっとも大事であって、技を創ることは二の次としたのである。
当時は不満の方が大きかったが、溢れる若さと情熱だけで成り立っていた十代の俺にとって、技を創り上げることだけに専念していたなら、今の俺は創られなかっただろう。
世間知らずで、ただまっしぐらに前進することだけを考えていた十代の少年時代は、人格形成に大きな意味を成す時期だということを、師匠はよく知っていた。
俺は収穫した野菜を保存食にする方法も教わった。野菜は天日干しにすると水分がとんで、栄養価が非常に高くなる上、長期保存も可能になる。俺は切干大根や干し椎茸、干し柿の作り方、発酵食品としてみそや納豆の作り方なども教わった。
また、剛拳はぬか床を大事にしており、毎日素手でぬか床をかき混ぜていた。剛拳のぬか漬けは最高に美味だった。そしてこういうことをよく言った。
「日光を浴びた野菜は波動が高い。人間は高い波動の食物をとりいれることで、波動を上げることができるようになる。よって野菜は生きたエネルギーである。大地に根を張るものは陰であり、体を温める。太陽に向かって伸びるものは陽であり、体を冷やす。それが食養生の原理なのだ」
夏には、剛拳手製の甘酒が弟子に振る舞われた。甘酒は、人間が必要とする必須アミノ酸を完全に満たす、天然の栄養ドリンクなのだ。
剛拳は僧侶として弔いをする以外は、収穫した米や野菜を売って日銭を得、自給自足の生活を送っていた。ただ、村人たちには厚い信頼を得ていたようで、何かと相談を受けていた。
俺は収穫した野菜を大きな駕籠に背負って町に下り、道端に並べて野菜を売る仕事も任された。
いまどき、スーパーに行けばすべての食品がそろう時代だ。俺なんかがわざわざ野菜を売りに歩いたところで、見向きもされないだろうと思っていた。しかし予想は意外だった。

道衣姿で野菜を並べていると、客はすぐに現れた。客は剛拳の野菜をひいきにしているようだった。

「和尚さんのお野菜を食べて、わたしは元気になったのよ」

客はうれしそうに言った。野菜で病気が治るなんて、俺には信じがたいことだったが同じことを言う客は結構いた。

俺にとっては、野菜が作れる坊主なんてめずらしくもなんともないことだった。とにかくこの頃の俺にとっての剛拳は、伝説の格闘家という異名は単なる幻想で、農業のかたわら寺で坐禅を組む単なる坊主に過ぎなかった。

ある日、俺はいつものように野菜を収穫しては町に売りに出たときのことだった。町人に俺が剛拳の畑を出入りする者だということが知られるようになると、こんなことを言われるようになった。

「あんた剛拳和尚のお弟子さんかい？」

「はい」

「あんたは久々のお弟子さんのようじゃな」

「久々ってことは……師匠には今まで弟子がいたんですか？」

「何年も前じゃが、ちらほら野菜を売りに来ておったのう。じゃが、辛抱しきれずに辞めていきおった。ここの和尚はちいと変わっておるからのう」

爺さんはあごひげを撫でながら言った。

意外なことを耳にした。剛拳は今まで弟子をとったことがあったというのだ！　しかし誰も続かなかったというところには大いに納得できた。

「師匠が伝説の格闘家だという噂は本当なのでしょうか」

「ああ。ずいぶん昔じゃが、山から出てきた熊を、手のひらから光の玉を出して追っ払ったことがあったのう」

「やっぱり噂は本当だったんですね！　その光の玉こそ波動拳なんだ！」

「あの和尚は変人じゃが、確かに神通力を持っておるぞ。確かもうひとり兄弟がおったはずじゃが、先代の和尚を殺めたせいで、いつの間にかいなくなってしもた」

「その話は本当なんですか？」

「わからん。村の人間は誰もその現場を見ておらんのじゃ」

俺はにわかに明かされた剛拳の過去に戸惑っていた。

「しかしあんたは見込まれたようじゃな。一子相伝の技を授かれるよう、せいぜい気張り

なされ」
そう言うと爺さんは、ヒッヒッとしゃくり上げた笑いを残して帰っていった。
爺さんが言った最後の言葉は、俺の心をくすぐらせるのに十分だった。
「一子相伝の技」というのは、まさに波動拳のことだろう！
一子相伝というからには、師匠はたった一人の弟子にしか秘技を伝授しないということだ。
（俺は見込まれたんだ。だったら絶対にやり遂げてやる！）
なおさら投げ出すわけにはいかなくなった。
剛拳は確かに波動拳を操る伝説の格闘家だと分かった。俺はどんな仕事もやり遂げることで剛拳に認めさせ、必ず波動拳を習得してみせると強く決心したのだった。

その日の稽古後のことだった。
剛拳は俺の浮ついた気持ちを察してか、背中を向けたままこう言った。
「波動拳など必要ない」
なぜ俺が波動拳のことを考えていたのがわかったのだろうか。そのことについての驚きとともに、剛拳の言葉に反射的に反発していた。
「どうしてですか」
今まで文句も言わずに修行してきたのは、波動拳を体得するためだったのに、なぜなのか。
師はおもむろに向き直った。
「大いなる波動をあやつるには、大いなる結果を引き受けなければならん。よいか、波動拳とは、その字のごとく波動をあやつる技。そこに邪心と傲慢に満ちた波動を繰り出せば、その者の波動は万物を傷つけ、相手を討ち取ることになる。さすれば、不調和な結果と相手の恨みを引き受けねばならんのだ」
「僕は邪心などありません。それに、絶対に驕りたかぶりません」
必死に抗議する俺のことなど、師匠はお見通しだった。
「では聞くが、なぜおまえは波動拳を必要とするのか」
「それは、強くなりたいからです」
「波動拳を使えたら強いというのか」
「はい。必殺技を使えれば、誰にも負けなくなるからです」

躍起になって――これが剛拳の問いに対する最上級の答えとして――答えた。
「今のおまえにはまだ早すぎる。今は基本を叩き込む。そしてたくさん学ぶことだ。しかし知識はまた、傲慢さを生む。おまえが成人したときに、再度同じことを聞こう。それによって波動拳を伝授するかを決めるとしよう」
俺の意識は一瞬遠のいた。
波動拳を伝授するか否かを決定するのは、今から四年後だというのだから。
「よいか、波動拳を強さの証明のために用いてはならん。まことの格闘家たるものは、必殺技など使わないものなのだ。基本の技に勝る必殺技などない。基本の技こそ無上の必殺技だと心得よ！」
俺は、茜色の落陽を背中に浴びて去りゆく剛拳の後ろ姿を、呆然と見つめながら立ち尽くしていた。
悔しかった。
今の俺はあまりにも無力すぎて剛拳に盾突く力も言葉もない。
このままおとなしく剛拳の言うことを聞くしかないのか。
幼い頃から武道に親しんできた俺にとって、技らしい技を身につけることは当たり前すぎたのだ。

剛拳に師事すること約一年。
覚えたことといえば農作業と基本中の基本だけだ。とはいっても、その基本さえ完璧になれたわけではない。
退屈との闘いの一年だった。しかしここで逃げ出してしまえば、俺は間違いなく波動拳を体得することはできなくなる。
それ以上に、脱落した今までの弟子と同じになってしまうことが何より悔しかった。
そんな俺の感情は、いつの間にか師匠を認めさせてやりたいという反骨精神に取って代わった。
修行には無意味と思っていた農作業も、手塩にかけて野菜を育て、収穫するという喜びを感じてはいたし、それを町に出て売りに行けば、人々は喜んでくれる。報酬も得られる。
剛拳は何も言わなかったが、土に親しみ、自然と人とに触れ合うことの大切さと、労働を通してお金を得るという社会のルールを教えたかったのだろう。
師匠は数々の知恵を教えてくれたが、質問に対して安易に答えはしなかった。まず返っ

てくる言葉はこうだった。
「自分でよく考えたのか」
そして一度だけ、こう言った。
「考え抜いた結論に至ることができてはじめて、答えを深く聞くことができるのだ。質問した時点で、すでにそれが答えなのだ」
俺は、師匠の無言の背中と対話することにより、答えを見出していく術を身につけていった。
これぞ師の背中を通して伝承する「教外別伝（きょうげ）」――いわゆる暗黙知――だった。
俺は師匠と交わす言葉さえ少なかったが、誰よりも師匠の「言葉ではない言葉」を聞いていた。
師弟の信頼関係は、言葉というものさしでは測れない。禅において、言葉や経典を越えた相伝の秘法が「教外別伝」なのである。

そんな平凡で非凡な日々を過ごしていたその頃、衝撃的な出来事が起きた。
俺と似た年頃の金髪の少年が、剛拳の前に現れたからだった。
地道な畑作業にいそしんでいた俺と剛拳の前に、突然大声で少年は叫んだのだ。
「俺はアメリカからあんたに技を教えてもらいたくて来たんだ！」
俺と剛拳は手を止めて、少年を見た。
少年は足を肩幅に広げ、拳は固く握り締めて立っていた。少年の堂々たる態度とは裏腹に、唇を噛み締めている。そこに見え隠れするのは、不安と恐怖……。そうだ、俺が剛拳に初対面したときと同じだった。
俺は、作物の水やりの最中に突然起こった出来事に釘付けになって、ふたりの様子を見守っていた。
少年は剛拳に対して、必死になって大声で関心を引こうとしたり、自慢の技を剛拳のすぐ横で披露したりしていた。その仕草だけでも十二分に滑稽であったが、この辺鄙な古寺にアメリカ人の中学生とおぼしき少年がたった一人で訪ねてきたこと自体が何よりも奇妙なことだった。日本の風変わりな僧侶と、このアメリカ人の少年の接点が皆目見当もつかないのだから思考回路がショートしそうになった。
しかし剛拳は終始無言で、少年など最初からいなかったかのように徹底的に無視した。
俺はまるで土佐犬に吠え続けるチワワがどのような態度を取るのかを、興味深く見守り

続けた。
やはり剛拳は一向に態度を変えなかった。
やがて少年は疲れ切ったのか、古寺のそばにある崖の切っ先に、膝を抱えて座り込んだ。
その寂しげな少年の後ろ姿からは、単に駄々をこねてすねているだけには見えなかった。
日本のこんな片田舎にたった一人でやってきたのだから、相当な事情があることは容易に察することはできる。少年には複雑な家庭事情があるのだろうか。それとも誰にも知りえない内なる問題をかかえているのだろうか。ただ、少年の後ろ姿からは、誰にも分かりはしないという反発だけは感じられた。
少年の姿を見て、剛拳に入門志願したときの思いがよみがえった俺は、次第にこのアメリカから来た少年に同情心を抱くようになっていた。
日が暮れかかったとき、剛拳はおもむろに少年に向かってこう言った。
「リュウと勝負させてやろう。それで気が済むだろう」
剛拳は俺に指をさした。そして悠然と椅子に腰掛けると、腕を組んで俺と少年の様子を見守った。
俺は戸惑った。
今まで構えだけしかさせなかった師匠が、「勝負させてやろう」とはいったいどういう了見なのか？　釈然としないままに、この迷子犬を前にしてただ突っ立っていた。
少年の年齢は俺とさして変わらない。俺は正面に向き合ってはじめて少年の姿を詳細に観察することができた。
少年の瞳は日本人のように黒く、肌の白さをより引き立たせている。女の子のようにカールしたまつげの愛らしさに、先程まで突っ張っていた少年の意外な一面を見たような気がした。それでいて鼻筋はまっすぐ通っていて、なかなかの美男子だ。
乱れた金髪は、おかっぱ頭に切りそろえられている。赤いポロシャツの裾はジーンズの中にきっちりと納められていて少しも着崩れていない。そんな様子から少年の育ちのよさが窺えた。
特に気になったのは、少年の身なりだった。
ヴィンテージものらしいジーンズ。良くなじんだ革のベルト。それについているバックル。洗練されたハイカットのスニーカー……。
要するに、俺はこの少年と試合をするという状況の中で、アメリカから来た少年のセンスの良さに引きつけられていたのだった。

対照的だったのは俺の姿だ。額には白いハチマキ、日に焼けた肌は土にまみれ、汚れきった道衣姿に裸足……。俺は気を取り直して、帯を締めなおした。

俺は一呼吸おいてから剛拳を一瞥した。剛拳は、何も言わなかった。

「ワーッ！」

少年はこらえていたものが一気に噴出したかのように、大声をあげて俺に跳びかかって来た。

俺は「礼に始まり礼に終わる」以外のスタートを切ったことがなかったので、突然跳びかかって来た少年の勢いに圧倒されてしまい、後ろに倒れこんでしまった。

少年は倒れた俺に馬乗りになってきた。ワーッと叫びながら俺の顔を小さな子どものけんかのように殴りつけてくる。俺はひたすら両腕で防御していた。

このときわかった。この少年は格闘技に関して素人だということを。殴られても、殴り返してはいけないということをすぐさま悟ったのだった。

ひとしきり殴り続けて冷静さを取り戻したようだ。少年は馬乗りの体制から身体を離して立ち上がった。そして俺を見下ろしていた。その目は落ち着いていたが、寂しさを感じさせた。

もう、不安と恐れは発散してしまったようだった。少年は自分の取り乱した行動に、いささか反省の色を見せながら俺に手を差し延べた。俺はその手につかまって立った。

少年に対して、不思議と怒りの感情は湧かなかった。

自分とよく似た存在と接することができて、むしろ親しみを覚えた。俺はうれしかったのだ。

「おまえ、名前は何て言う？」

「ケンだ。……さっきはゴメン」

これがはじめて俺とケンが交わした言葉だった。

少年は極まりが悪そうに乱れた金髪をかきあげた。ただ、俺と目を合わそうとしなかった。先程の一方的な行為に恥ずかしさを覚えたのだろう。

「俺はリュウ。ここで修行して一年になる」

俺たちは互いに目を合わすと、勢いよく糸車が回りだしたかのように笑い出した。何がおかしかったのかは分からないが、互いの胸に秘めていた何かを分かち合えた喜びの表現だったのだと思う。

山が動くように剛拳が俺たちに近づいてきた。

「親はどこにいる」
「僕はミドルスクールを卒業して家出してきたんです。財閥の息子だといわれるのが嫌で」
「まずは両親に連絡をとりなさい。それまではこの寺にいるがよい」
「はい」
ケンは素直になっていた。
その言葉を聞いて、俺は心の中で友情が芽生えるのを身震いして感じていた。
「ひとりもふたりも同じだ。どうせ今日は帰れまい。リュウ、小僧部屋に案内してやりなさい」
そう言うと剛拳は立ち去る足を止め、踵を返してこう言った。
「今日からおまえの名は、こぶしと書いて『拳』だ。日本人になりきってここで修行する。それが条件だ」
「はい！　ありがとうございます！」
剛拳の言葉によって、ケンの目は大きく見開かれ、最大限に輝かせていた。そして、俺たちは互いの希望と若さ溢れる目を見て、笑いあったのだった。
「リュウ、ここへ来なさい」
俺は剛拳の元へ歩み寄ると、一礼した。
「よくぞこらえた」
そのひと言でどれだけ俺の心が救われたことだろう。これまで過ごしてきた日々の辛さが一気に吹っ飛んだような気さえした。師匠が向こうへ行ってしまった後、ケンはすぐさま俺に近寄ってきた。
「あの人、怖そうな人だよな」
「うーん、見た目は怖いけど、いい人だよ」
「本当か？」
「多分」
「なあ、いつか笑わせてみようぜ、見てみたいんだ、あの人が笑うところを」
「おまえ、おかしな奴だな」
初対面とは思えないケンの人懐っこさと、ユーモラスさに俺は思わず笑っていた。
俺の場合は百日間通ってやっと弟子入りしたというのに、この少年はたった数時間で入門してしまった。
それも、あの岩山のような剛拳を笑わせてみたいというのだから、まったく脱帽する。

そんな天真爛漫なケンのことを俺はいっぺんに気に入ってしまったのだった。
それからケンとは、子犬のようにじゃれあってはケンカもよくした。互いに励まし合い、悩みを共有し、喜びを分かち合ってきた。俺にとってケンは、生涯にわたる無二の親友だ。もともと兄弟のいない俺にとって、ケンの存在がどれほど大きいかは計り知れない。
ところでケンが親から逃避行した先がなぜ日本だったかというと、ちゃんと理由がある。
ケンはアメリカ人として自分の系譜をたどっていくうちに、自分に日本人の血が混じっていたのを知って、日本の武道に興味を抱いたからだった。
それをきっかけに、伝説の波動拳を継承した剛拳の噂をこぎつけて日本にやってきたのだった。
まさにケンは、引き止める親をかなぐり捨てて日本に転がり込んできた「鉄砲玉」だった。
ケンは生まれながらにして名家を継ぐ立場の人間として育てられた少年だったのだ。
将来を固定され、親の敷いた道を歩むために生まれてきたという境遇に、嫌気がさして逃げ出してきたというわけだったのだ。
ケンは親の手が届かないところをと、あらゆる情報をかき集めて人里はなれた剛拳の元にたどり着いたのだ。
そんな「鉄砲玉」に両親は日ごろから手を焼いていたようだが、雲隠れした息子を捜索することはマスターズ家の隠密を使えばたやすいことだった。
しかしずっと後になって分かったことだが、ケンの父親は、ケンを連れ戻す手を途中で打ち切らせたという。
いずれアメリカを背負って立つほどの人物に育てるなら、一度アメリカから出て武者修行に出すことも一考に値すると踏んでのことだったようだ。
ケンの父親は、ちやほやされることしか知らなかった息子が、日本の秘儀参入者の下でしごかれるなどうってつけの機会だと逆手に取った。そして自らは一度も日本に降り立つことなく、陰ながら息子の留学手続きや仮住まいなど諸々の手配をしたり、まだ保護者の必要とする息子のために、召使を遣わせたりして本国でじっと帰りを待っていたという。
しかし父親も手を焼くほどの「鉄砲玉」もその実は確かなスナイパーの目を持っていた。
日本人すら知りえない伝説の波動拳継承者の居所を、いったいどこから嗅ぎつけたのだろうか。
やはりそれはケンの人を見抜く目という天分にあったからに違いない。

新たな人生を出発したケンは、有無を言わさず轟鉄一門の流儀を踏襲させられるはめとなった。
何せ弟子入りした先が、雲水と山伏という日本固有の伝統を受け継ぎ、かつ最も厳しいとされる修行僧の双璧を一挙に為した一門である。
覚悟はできていたとしても、昨日まで財閥の御曹司として扱われてきた人間が、一夜にして見習いに一変したのだから。
俺の新たな興味は、このアメリカから来た身の程知らずの少年が、いつしっぽを巻いて逃げ帰るだろうというところにあった。
何しろケンは、正座ができない。
この時点で壁にぶつかった様子を見るだけで、止めておいたほうが良いのではないかと思ったものだ。
しかしケンはただの御曹司ではなかった。
ゼロポジションどころか、マイナスポジションからはじめたケンは、躍起になってゼロポジションまで自らを引き上げた。
その根性はどこから沸いたのか。おそらく父親に対してだろう。
そしてもうひとつは、俺に負けたくないという理由からだった。
ケンにとって俺は、一年年長の兄弟子に当たる。
互いに修行中の身であっても、上下関係が厳しいのが日本の縦社会である。
しかしケンは持ち前の怖いもの知らずの性格の持ち主だ。初対面からため口で俺に接してきたのだから、逆に俺のほうがたじろいだくらいだ。
俺とケンの関係は友人として、あるいはライバルとして対等な立場として位置づけられた。
それが俺にとっては逆に、先輩であるからというプレッシャーから解き放たれることとなったのだ。
ケンの生意気さは、堅苦しい世界に新たな価値観を植え付け、ポジティブな方向へと開花させていった。
ケンが来てからというもの、剛拳と俺とふたりだけの静かな空間に数々の出来事が巻き起こった。これまで平和だが退屈だった修行の日々にあらゆる刺激をもたらしたのだ。
ケンが加わって数ヶ月経った頃だった。
古寺より山中に入ったところにある見晴らしの良い丘の上で、剣の素振りの稽古をして

いるときだった。ケンが腰をかがめて俺に耳打ちをしてきた。
「なあリュウ」
「何だよ」
にやけたケンの顔には何かを企んでいることが書いてある。ケンは稽古に飽きてくると俺にちょっかいをかけてくるのが決まりだった。
「ほら、こいつを捕まえたんだ」
大事そうに広げたケンの両手から、土色に黒いラインの模様が入ったトカゲが顔をのぞかせた。
「それ、どうしたんだよ」
「さっき石垣で見つけたんだ。こいつを使って面白いことを思いついたんだ。リュウも乗れよ」
手洗いに行くと言って姿を消したケンは、なんとトカゲを連れて戻ってきたのだった。
「そんなもんで何するんだよ」
「いいから来いよ」
ケンの口車に乗った俺も、実は単調な反復動作に飽きてきたところだった。
ケンについていった場所は古寺の縁側がよく見渡せる草むらだった。
そこには剛拳が椅子に座って居眠りしている様子が見て取れた。柔らかな日差しに温められて心地良さそうだ。
「こいつを師匠の頭に乗っけてやろうぜ」
「本気かよ」
ケンの顔を見ると、ニンマリとしている。どうやら思いついたいたずらを実行したくてたまらないようだ。
「師匠の頭の上で、こいつも日なたぼっこさせてやるのさ」
「ははっ、おまえよくそんなことを思いつくよな」
ケンは俺には思いもつかない悪知恵を働かせることが得意だった。その発案を聞かされるたびにおかしくて、つい徒党を組まされる羽目になるのだが、俺にはそれが楽しかった。
俺とケンは、足音を立てないように忍び足で古寺の南側へと回りこんだ。高床になっている縁側には、師匠が例のごとく居眠りしている。禿げ上がった頭は太陽に照らされて反射していた。師匠の頭は、トカゲの日なたぼっこにはちょうどよい温かさを保っていそうだった。

俺たちは目を合わせてうなずいた。
「もちろんおまえがやるんだよな、ケン」
「いや、たまにはおまえが行けよ」
剛拳の十メートルほど後方に回り込んだ俺たちは、どちらが師匠の頭にトカゲを乗っけるのかを押し問答しあうことになった。
「ここはジャンケンで決めようぜ」
ケンは拳を振り上げて大きく振り回した。
結局、ジャンケンに負けた俺が行くことになってしまったのだった。
俺は右手の中にトカゲを握り締め、息を殺して剛拳の後ろに忍び寄った。じっとりと背中に汗が流れるのを感じながら唾を飲み込む。
あと三メートル程のところで足を止め、止めていた息を思い切り――静かに――吸い込んだ。
振り返るとケンが早くやれと言わんばかりにうなずいている。再び前に向き直り呼吸を整えると、再度剛拳の頭上に視点を定めて忍び寄った。
一歩一歩、息を止めて近寄る。
剛拳の寝息は一定のリズムを保ったまま肩を上下させている。この調子なら、悟られずにいけそうだ。
あと一メートルの地点までたどり着いた。
残り一メートルがとてつもなく遠く感じる。それほどまでに、歩み寄る一歩に全神経を集中させていた。
手を伸ばせば、剛拳の頭は五十センチ程のところだ。
心拍数は剛拳に近づくにつれ加速している。心拍音が師匠に聞かれやしないかと思うほどだった。
おそらく後方ではケンが固唾を飲んで見守っていることだろう。そして慎重な俺に歯軋りしているに違いない。
この期に及んで、成功した姿をケンに見せつけてやりたいという気持ちがよぎった。俺はトカゲの冷たい腹を握り締めた。手を震わせながら、剛拳の頭上に手を伸ばした。
あと四十センチ、三十センチ、二十センチ…。心臓の拍動はピークに達していた。
そして、ついに剛拳の頭まで十センチのところまで近づいた。これまで師匠の禿げた頭をこんなにまで凝視したことがあっただろうか。それほどまでに、俺は師匠の頭に集中し

ていた。
あと五センチ、四センチ、三センチ……。トカゲのしっぽが触れそうになったそのとき
――！
「リュウよ、素振りはもう済んだのか？」
俺の心臓は口から飛び出そうになった。俺は息を止めたまま硬直してしまったのだった。
「先ほどからわかっておったわ。おまえたちの魂胆も知っておるぞ。そのトカゲをわしの頭に乗せられなくて残念だったな」
俺は企んでいたことが見抜かれていたことにショックを覚えた。絶対に成功するだろうと思っていたからだ。そしてその結果をケンに誇れると思っていたからだ。
俺は精いっぱい伸ばしていた腕を一気に下ろした。そのまま立ち尽くしていた。
右手からするりとトカゲがすり抜けて、いつのまにか居なくなってしまったことに、ずいぶん経ってから気づいたのだった。
俺たちの行為は修行中にはあるまじき行為だっただろうが、師匠はとがめることはしなかった。
おそらく師匠にとってこのようなことは屁でもなかったのだろう。むしろ、弟子を試していたのかもしれない。
それからも、ケンはたびたび師匠の様子をうかがっては師匠を負かしてやろうと企てていた。しかし、ことごとく見破られるのだった。
ケンの発案したいたずらによって、剛拳の底知れぬ能力を目の当たりにすることができたのは、俺たちにとって最高の経験の一つとなった。
剛拳は、あらゆるところに目がついているかのようだった。
俺たちが死角に入っているつもりでも、常に見抜かれた。どんなに知恵を絞っても、剛拳を騙すことはできなかったのだ。
ということは、俺たちのごまかしなどもすべてお見通しだったということになる。
剛拳の凄さを思い知るたびに、俺はその境地にたどり着きたいと思いなおしては、懸命に修行に励んだものだった。
ケンの場合、俺と同じように師匠を尊敬こそしていたが、いつか師匠を負かしたい――それは必ずしも格闘術に限らず、だましあいに勝ってみせるという――野心を持つようになった。そして轟鉄一門の考えに最後まで染まろうとはしなかった。
ケンは目当ての波動拳を体得することができれば、晴れて自由の身となって解放される

ことを考えていたのだった。

俺の場合は必然的に轟鉄老師から受け継がれた信念を叩き込まれた。

ただし、ケンのように表面的にその信念を振舞うのではなく、内面的に浸透していった。

ケンは西洋文化において育った人間だ。西洋人は何ごとも論理的に理解して初めて納得することができる人種のようだ。

また、西洋において師弟関係は希薄のようだ。あくまでも個人と個人は対等なのである。だから師匠の命令は絶対的であるということ自体がケンには理不尽に思えたようだ。

ケンが最もなじめなかったのは、日本の言わずと知れた暗黙知の世界だった。

しかし日本の伝統文化を受け継ぐ中で大切なことは暗黙知の中にこそ存在する。

師匠の背中を見続け、マニュアルや言葉では伝わらない細かな感覚と知恵を身につけるには、体験する以外にない。体験なくして知恵を身につけることはできないのだ。

日本の伝統文化だけでなく、現代の日本社会全体にも、この暗黙知は広く浸透しているといえるだろう。阿吽の呼吸といった表現もそれにあたる。日本において七世紀飛鳥時代には、すでに暗黙知が当然のごとく工人の中で息づいていたという。

ケンにはこの無言の意思疎通という、言葉や理屈で成り立たないことを、一から身につけること自体が厄介なことだった。

やはり剛拳も、技を手取り足取り教えはしなかった。いや、一度も教えなかった。弟子はただ、師匠の一挙手一投足を真似るだけしかできないのである。

それゆえメモは一切禁じられた。「頭で覚えるな、身体で覚えろ」というのが剛拳の持論だった。その上、「覚えて忘れろ」という剛拳の言葉の意味がケンにはまったく理解できなかったようだ。

言葉で教えてもらえない、メモは禁止、しかし覚えて忘れろなどと言う。だったらどうすればいいというのか？　ケンはそんなことを漏らしていたことがたびたびあった。

日本では、技術的なことさえ教われればいいという価値観はあまり尊重されない。

言葉を用いずに教え、学ぶという、理屈を通り越したところに見えてくるものがある。

師匠の技術をまねて盗むという以上に、師匠の人間性や生き様をとおして人間を学ぶということこそが、もっとも尊重されることなのだ。

師匠という絶対的存在は、肉親以上に模範的な大人として、必要不可欠な存在とも言える。特に少年にとって、父親以外の成熟した大人の男と接することは、理想の男性像を構築する上で、よきモデルとなる。剛拳はひときわ厳しい男性像の極致と言える存在だった。

ケンとともに修行を積むようになってからも相変わらず農作業をしていたが、ときには剛拳に山中に連れられ、山菜やきのこ類などの食用かそうでないかを教わりつつ、収穫に励んだ。

また剛拳は、雑草や木の生命力を熟知し、薬草としての知識も持っていた。ゲンノショウコやジュウヤク、ツワブキ、ヨモギ、スギナ、ビワの葉などのあらゆる植物を用いて俺たち弟子や村人の病気や怪我、食中毒などを治していた。

剛拳は周囲の山々や田畑を見渡してよく言ったものだ。「見よ、これを宝の山と言わずして、なんと言おうか」と。

また、川で仕掛け釣りやおとり釣りなどの釣りのノウハウや、火起こしの術、マムシに噛まれたときの解毒法なども教わった。それらは俺たちには刺激的な冒険だった。

俺たち弟子はときどき、山の手入れに駆り出された。

木が太く健全に育つためには、木で込みあった森を間伐しなければならない。その作業を怠れば、木の生長が阻害されて根を張ることができないために、保水できなくなって水脈が途絶えてしまう。その結果、山に棲む動物たちも餌が確保できないために、人家へと下りてきてしまう。山は人間の手入れが必要なのだ。人間が間伐した木枝を持ち帰り、燃料とすれば生態系のすべてが循環する。そんなことも体験することによって知った。

剛拳は俺たちに、そのように手入れした山を駆け回ることを常に指示した。その意図は、肚を中心に据え、股関節、膝関節、足関節のすべてにバランスをとる感覚を身につけさせるためだった。俺たち弟子は、平らであることが前提で造られたアスファルトの道の上を走らされたことは、あまりなかった。

「最大の相手は自然であり、自分自身である。大自然を相手にしてみれば、いかに人間が小さきものであるかを思い知らねばならん。それを知ることが知恵なのだ」

剛拳は、山中稽古でこのようなことをよく言ったものだ。

格闘術は本来、殺法なのであるが、人事不省に陥った時の復元法や骨折の際の応急処置法、脱臼時の整復法などの活法も体得させられた。

こうして剛拳は、生きていく上での知恵を弟子に伝授することも怠ることはなかった。

そのおかげで俺は世界中を単身で、どんな苛酷な環境の下であろうと生き抜くことができたのだ。剛拳に出会わなければ、俺は青白い顔をした日本人のままだったかもしれない。

俺たち弟子は十代のうちは試合を禁じられていた。

師匠はまず基本を叩き込むことを目的とし、応用を教えようとはしなかったのだ。基本

が完成していないのに、試合をすれば型が崩れてしまうことになるからだ。

試合は競争心をあおり、勝ちたい気持ちが型を崩すということを、剛拳は分かっていたのだ。これは俺たちの溢れるエネルギーが不完全燃焼という、精神衛生上不健康ともいえる現実でもあった。

轟鉄一門は、最初から最高の型、もっとも基本の技を五体に叩き込むことを第一とし、技が未熟であるのに試合など言語道断という考えだった。

実際、かの剣豪宮本武蔵でも、現在行なわれているような試合はしなかった。試合（死合い）と言うからには、命懸けの闘いということだ。人生のうちでそう何度も命を懸けてはいられない。武蔵もまた普段はただひたすらに大自然を相手に修行に励んでいたという。

試合とは、本来生か死かを決めることであり、勝負の本質は全人格をあげての命懸けの闘いなのである。

頻繁に試合に出るということは単に競争心を育てることでしかなく、本来あるべき自己を陶冶することから逸脱してしまう恐れがあると剛拳はよく言った。

そういうことがまだ理解できなかった俺たちは、公式試合に出させてくれない剛拳に対して、いぶかった気持ちを隠せないでいたこともあった。

また、瓦割りやビール瓶を手刀で割るというパフォーマンスを人前ですることも禁じられた。

五体を武器化できてはじめて技が駆使される。その武器の仕上がり具合を試すために瓦を割り、あるいは板を割るのであって、これを決して見世物として人前にさらすものではないと剛拳は断じて許さなかった。

そもそも格闘術とは護身のための術である。その裏に人を殺めるという一面も備えている。すなわち、活殺とは表裏一体。突き、蹴り、投げ、締めなどの体術のみならず、剣術、棒術なども叩き込まれた。

命懸けというだけに、あらゆる道具をも使いこなすことが剛拳の言うところの技なのである。

そのためもともとルールは持ち合わせてはいない。あえて言うならば、目潰し金的以外はフリーということだ。

しかし命懸けの場であるならば、目潰し金的さえもやむを得ないことになる。ただし何でもありというわけではなかった。

そこは相手を思いやる気持ち、他者を敬う気持ちがあれば、安易に人を傷つけることは

できないはずだからだ。
本来僧侶である轟鉄一門が、自らの技を誇るために相手の命をおとしめることなどありえない。対峙すべきは相手ではなく自分ということを、口酸っぱく言われたものだ。
剛拳は俺たちが完全に五体を武器化したことを認めるまでは、弟子同士の試合さえも許さなかった。そのため、自分の実力がどれほどのものなのかを、弟子は知る術がなかったのだった。
頑なに流儀を守る剛拳の思惑は正しかった。
試合偏重になり、競技性重視、西洋のスポーツ化となっている現代の武道は、まさに剛拳の懸念のとおりとなっている。
スポーツにおいての試合は、その日のその時間のためにコンディションを整えて挑むものである。
しかし格闘術は、いついかなるときも最高の状態に自分をおかなくてはならない。なぜならいつ起こるか予測のつかない事態に備える護身術だからである。
今となっては動機が不純ながらも、入門した俺たちに対して、決して手を抜かなかった師の教えはありがたかったと思う。

高校を卒業してからというもの、いよいよ俺の修行人生が本格的なものとなった。
そしてそれは俺の人生で最初の一大転機となった。
人生を変えたきっかけは、俺と父親との関係だった。
父は官僚だった。
若い頃から昇進することに神経を尖らせ、家庭を顧みない人間だった。
父親にとっては息子とキャッチボールするよりも、息子の成績が上位にあるかどうかが重要だった。俺は学歴至上主義の家庭で育てられた人間だったのだ。
そもそも俺が武道に関わりを持ったのは、父の教育方針がきっかけだった。文武両道の武、つまり心身を鍛えるために道場に入門させられたのだ。それが後になって期待の息子の人生を狂わせようなどとは思いもしないで。
厳しい父親と、夫に従順な母親との間には俺しか生まれなかった。そのために、俺に対する期待は相当なものだった。
両親は俺を将来官僚にすることに何のためらいもなかった。
幼かった俺は、親の期待に応えようとすればするほど、逃げたい気持ちに駆られた。家

にいるときは、つねに机の前に座らされたからだ。
――息子を高級官僚にさせること――これが親にとっての務めだと思っていたのだろう。
そしてそれが息子の幸せのためであるとして疑わなかった。
俺も親の期待に応えることが、最大の親孝行だと思っていた。しかし、中学生にもなれば、親に対する素直さが、偽善であることを知るようになる。
中学生の俺は、親の期待とはまったく違う世界を見ていた。男には、強烈に強さにあこがれる本能がある。やはり俺にとっても強くなることが最大の関心ごとだった。
そんなことを親に言えばどうなるかはその年頃にもなれば分かる。
親の期待を取るか、自分のしたいことを取るか。思春期の俺は、いつも葛藤でいっぱいだった。
高校はもちろん進学校へ進んだ。無論、エリートコースを行くために。ここまでは、親の目論見どおりの人生だった。
しかし高校生になったとき、幸か不幸か剛拳と出会うことになってしまったのだ。
剛拳は、俺の入門に断固反対する父と直接合議した上で、一人息子を預かることに承諾を得たようだった。
剛拳はおそらく、学歴至上主義の父親の方針が、俺にとって最善の道ではないことを知っていたのだろう。
「弟子として預かるからには、こちらで教育もさせてもらう」
剛拳はそう言った。
その教育方針は父の望む机の上での教育ではなかった。
剛拳のめざす教育とは、大自然の中で身体を実際に動かし、武技の習得を通じて、心身ともに健全な人間を創り上げることだった。それは実際、俺に喜びを与えた。
長時間座ったままで頭しか使わない退屈な「お勉強」がいかに不自然であるかということを知ってしまった俺は、次第に学校の授業が睡眠時間に取って代わるようになった。
それに対して父は、理解と不満が交錯していたようだ。泥まみれになって帰ってくる息子を見て、眉をひそめたことなど数知れない。
父は稽古から帰った俺に、山のように積み上げた問題集の中から一冊を、毎日俺に与えた。これをやらねば剛拳の元から引き離すことを条件に。
俺にとっての父親は、抑圧と制限の象徴だった。同じように厳格ではあっても、剛拳からはむしろ創造と発展を導く存在として映った。

剛拳の教育はすべて体験を通して教えるものだった。
それが俺にとって最良の教育であることを知っていた。だから剛拳から引き離されないよう、必死で父の命じたノルマをこなしていたのだった。
そんな父の顔色をうかがいながらの高校生活も、大学受験という壁にぶち当たることになった。剛拳のもとから離れ、完全に受験勉強に徹することを強制されたのだ。
俺がそれを受け容れるはずはなかった。
母から父への説得もあって、受験勉強をすることを条件に、剛拳のもとへと通うことを許された。俺は仕方なく受験生となったのだった。
やがて、俺の中に疑念が浮かび上がるようになるのだった。
（父の期待する官僚の道が果たして本当に自分にふさわしい道なのだろうか）
父が官僚だったにもかかわらず、俺は父の仕事を何一つ知らなかった。そこで実際に、図書館で調べたのだ。
父の職業は、国を担う上級の役人だ。ただし、あらゆる面で優遇されている役人らしかった。そういう役職に就ける人間は、特権階級と呼ばれていた。
しかし俺にとって、特権階級には何の魅力も感じられなかった。
だが父は「今は分からずとも、大人になればその選択は正しかったと分かるはずだ」と言った。
俺は「大人になれば分かる」の言葉が嫌いだった。その言葉からは、未成年者には知りえない大人の事情という、一種の狡猾なニュアンスが漂っていたからだ。
剛拳からはそんな言葉は微塵も感じられない。
確かに剛拳は世間からはアウトロー的な存在かもしれない。しかし、れっきとした生き方を、その生き様を以って示す姿に、俺は並々ならぬ尊敬の念を抱いていた。
父はいわゆる超エリートだ。その高いハードルを息子は飛び越えなければならないとしたら、息子はどうあればよいというのだろう――息子は偉大な父親を見上げて、ただため息をつくしかできないのである。
息子にとって、超えなければならないハードルが高ければ高いほど、相当なプレッシャーとなる。高みにいる父親を呆然と見上げることしかできないのだ。
そこで息子は、父親との勝負には勝てないことを悟るのである。勝てないとわかっている勝負に挑むほど、俺は命知らずではなかった。
高校を卒業した日、とうとう俺と父親は決裂した。俺が大学受験をすっぽかしたからだ

った。
「なぜ大学を受けなかったんだ！　おまえは自分のしたことがどういうことか、わかっているのか」
「わかってるさ。俺は大学へ行きたいんじゃなくて、格闘家になりたいんだ！」
「格闘家だと？　あんな、殴る蹴るしかできん博打人間になるなど断じて許さん！」
「俺の人生は、俺が決める！　もう父さんの言いなりにはならないよ！」
「なにをっ！」
瞬時に、父の振り上げる拳を手のひらで受け止めていた。
父の拳は怒りに震えていた。俺ははじめて父に反抗したのだ。
今までは、たとえ容易に交わせるものであろうとも、父の殴りつける拳を甘んじて受けてきた。「何があってもお父さんに逆らってはいけない」と母から常日頃、諭されていたからだ。それがルールだと思っていたのだ。
俺は父の震える拳を、五本の指と手のひらに力を込めて握りしめ、父の目を真っ向から見据えていた。
父の怒りの目はやがて閉じられ、ため息をひとつつくと再び目を開いた。
「勘当だ。二度とこの家の敷居をまたぐな」
父の鋭い目は、失意の目に変わっていた。
母は、その場で泣き崩れた。
この瞬間、俺は自由を勝ち取ったと思った。
だがすぐさま親を裏切った罪悪感に取って代わった。長年両親が築き上げてきた家庭を俺が崩壊させたということに気づいたからだ。
しかし興奮していた俺には、親に詫びることなど出来るはずがなかった。長年の鬱屈した不満が、今やっと、噴出させることができたのだから。
すぐさま、前を向いて自分の足で生きていかねばならない切迫感が体中を駆けめぐった。
それがどういうことかはわかっていた。勘当されたとなれば、これまで何不自由なく過ごしてきた生活を捨てなければならなくなるからだ。これからは、何もかも自分で責任を負わなければならなくなる。
ここで自分の行為を父親に詫びてしまえば、楽な暮らしを続けることは可能かもしれない。けれど俺は躊躇しなかった。自由になりたかった。
俺は嗚咽する母に振り返ることさえ自分に許さず、二度と帰らぬ決意をこのとき肚に納

めたのだった。
俺は荷物をまとめて二月の寒空に飛び出した。なるべく早く家から離れたくて、全力で走った。そうすればあれこれ考えずに済んだ。走れば走るほど、頬に感覚がなくなってきた。喉も切れそうに痛い。いつの間にか、走る速度を落として歩いていた。
家並みはどこも雨戸で閉じられ、街灯だけがともっていた。どこの家も、今ごろ暖かな部屋で家族団らんの時間を過ごしていることだろう。この町で過ごすのも今日が最後。十八年間慣れ親しんだこの町を、誰に見送られることなくひっそりと出て行く。そして俺は、どこへ行くんだろう……。
ダウンジャケットのポケットに手を入れると定期券が入っていた。これで毎日高校へ通い、剛拳の元へと通ったものだ。……師匠は何と言うだろう。親不孝者の俺をきっと説教するだろう。それでも足は剛拳の寺へと向かっていた。
毎日通った道であっても街灯の明かりの届かない山道はやはり不安だ。腕時計を見ると夜の十時は過ぎていた。
ふと夜空を見上げた。今日は月が出ていない。どおりで暗いはずだ。漆黒の闇の中に、白い息とともに、ひときわ輝く星たちが見える。シリウス、ペテルギウス、プロキオン――冬の大三角だ。視線を下に移せばぽっかりと街灯の明かりが浮かんでいる。視線を左に移せば小高い山が見える。その中腹には剛拳の棲み家があるはずだ。
右肩にかけていた荷物を左肩にかけなおすと、足元を踏みしめて古寺へと向かった。
「師匠、リュウです、開けてください」
俺は僧堂の門前で、声を張り上げた。
しばらくすると、門が開けられた。剛拳はいつもと変わらない様子で俺の姿を一瞥した。
「入りなさい」
底冷えのする薄暗い本堂に通された俺は、一抱えの荷物を脇に置いて正座した。
「寒かろう」
そう言って、剛拳は火鉢をおこしてくれた。そして俺に熱い番茶を出してくれた。師匠に茶を淹れてもらったのは、これが最初で最後だった。
寒さに震える手を湯飲みで温めながら、黙って茶を飲んだ。沈黙さえも寒さで響き渡るかのような空間に、俺と剛拳はただ座っていた。剛拳はこんな時間に突然やってきた俺に、何ひとつ聞かなかった。
冷たかった頬に血色が戻ったとき、剛拳は言った。

「今晩は小僧部屋で休むがよい」
たったひと言だった。そのひと言だけで、俺は自分自身を保つことができたのだった。
与えられた部屋は、薄汚れた四畳半の小僧部屋だった。裸電球がともると、日に焼けた畳と所々剥がれ落ちた茶色い土壁、四隅に張り巡らされたクモの巣が露になった。もちろん小僧部屋には暖房設備などなく、座卓だけが部屋の隅に置かれていた。小さな押入れには、薄っぺらい布団が一組入っていただけだった。
俺はすぐさま布団を敷くと、疲れきった身体を横たえた。視線を天井に移すと裸電球が時々消えては明るさを保っている。その不規則な点滅を、じっと見つめていた。
剛拳は一切の事情を知っていたのだろうか。剛拳は言葉を使わずとも察する能力のある人物だ。今までもそうだったように、俺の家庭の事情さえもお見通しだったのかもしれない。
剛拳は何も聞かなくとも、すべてを承知の上で、俺を受け容れてくれたのだ。
息子の意志を認めようとしない父親と、何も聞かずに受け容れてくれた剛拳――。
このふたりの対比から、言いようのない思いに押し寄せられた。家を出てからずっと押し殺してきた感情が、堰を切ったようにあふれ出した。
俺は布団の中にもぐりこんで大声で泣いた。泣いて泣いて、こんなに泣いたことがないほど泣いた。抑圧してきた積年の感情をひとつひとつ再確認しながら、流した涙とともに俺の心は浄化していった。泣きはらした後は、まるで台風が去った後のように心が澄んでいた。
落ち着きを取り戻した俺は、やがて冷静にものごとを考えられるようになっていた。
父にとって俺は、出来損ないの息子だったに違いない。期待をかければかけるほど、反対の方向へ行こうとする息子に、何度も落胆したことだろう。それでもたった一人の息子を、立派な人間に育てようと父なりに必死だったのだろう。
そんな父親の期待に応えようと一生懸命だったこれまでの日々。その背後に潜んでいた父親への愛情と憎しみの感情が一気にあぶりだされた。
今まで俺の中に隠し持っていた怒りと悲しみ。自分の感情のあまりの激しさに、打ちひしがれたのだった。
賽はすでに投げられた。もう後戻りはできない。俺は父親と訣別したのだ。もう誰にも遠慮することはない。これからは大いに自分のやりたいことをやればいい。
……その夜、格闘術に夢中になれるありのままの自分と、父を見返してやりたいという

意地が決意を固めた。

――格闘人生を極めてみせる――

これが、俺を真の格闘家へと駆り立てた、最初のきっかけだったのである。

☆　秘儀参入

翌朝、寺の家事の一切を引き受けることを条件に、剛拳は俺を内弟子として修行することを認めてくれた。

母親に対する後ろ髪を引かれる思いはぬぐいきれなかったが、厳格な父と勉強から解放された俺は、きつい修行も楽しくさえ感じた。

飯の炊き方も知らなかった俺が、家事全般を一から覚えることは大変だったが、いつかは自分も最強の格闘家になれると思うだけで心が奮い立った。

母は、息子が剛拳のもとに転がり込んでいることを知っていた。

剛拳とはよく協議した上で、内弟子として息子を置いてもらうことに母はとりあえず安心したようだ。それからは、毎日重箱におかずをめいっぱい詰め込んで、縁側にそっと置いて帰ることが母の日課となった。

母とはひとこと言葉を交わすのがせいぜいだった。母にとってはひと目息子を見ただけで得心していたようだった。

その一方で、空の重箱を抱えて帰る母の後ろ姿を見送ると、母を悲しませたことに対する自責の念に駆られた。

愚息のために、無言の愛情を食事に込めて与えてくれる母に対して、俺は無言の感謝としてしか表現できなかった。しかし母の味を毎日口にすることができたことで、俺は自尊心を保つことができたのだと思う。

俺にとって必要だったのは、父親ではなく剛拳だった。

剛拳は父親的存在として以上に、俺の歩むべき人生の象徴だったところにその理由がある。

剛拳の生き様は、俺を大いに啓発させた。師匠に将来の自分像を重ねたことさえあった。

それがどんなに非凡な生き方であったとしても、剛拳師匠を心から尊敬していた。

剛拳は不動明王を思わせた第一印象のとおりの人物だった。

不動明王とは、釈迦が悟りを開くまではその場を決して離れまいと覚悟を決めて、菩提樹の下に座した時の内証を表現した存在だという。そのときの表情が、怒りの形相だったために激しい憤怒の相を呈しているのだという。その憤怒の相が、我が子を見つめる父親としての慈しみ――外面は厳しくても内心で慈しむ父性――を表現したものであると言われている。

俺は心の奥底では父親に慈愛を求めていたのだろう。剛拳の厳しさの裏に隠された優しさに触れることで、父親に対する渇望を癒していた。

内弟子となった俺は朝の四時半に起床することが日課となった。六時の粥座（しゅくざ）（朝食）の仕度と、五百回の木剣の素振りを終えたあとに坐禅を組むことになっていた。

師匠と粥座を済ませてからは掃除全般を行なう。何から何までやったことのないことばかりだった。それも、スイッチ一つで何でもやってくれる、この時代にそぐわぬやり方で。

飯は薪で火をおこし、窯で玄米を炊いた。洗濯は洗濯板で。ここに掃除機はない。あるのは棕櫚（しゅろ）の箒とはたきと雑巾。俺は掃除といえどもそれぞれの作業に筋トレをひそかに行っていた。この動きにはこの筋肉、というように意識をしてやっていた。それらが済んでからようやく体術の稽古に入る。この稽古は通常行なわれる基本の技に加え、剛拳の創意工夫がなされた。

たとえば、木で細工された年季の入った弓矢の装置――これは轟鉄老師の存命中につくられたもの――を使って動体視力を鍛える。剛拳も修行に用いたものだ。

この装置はバッティングマシーンをイメージすれば分かりやすいだろう。九本の弓が並んで取り付けられており、ランダムに矢を放つようになっている。弟子はバッターボックスに立つ打者のように立って構え、放ってくる矢をよけるという仕組みである。

その修行をクリアすると、今度は放ってくる弓を素手でとらえた。バッティングマシーンが投げるボールを素手で取るというイメージだ。このように、対人の稽古でないやり方で上級の修行が加算されていった。

内弟子は、家事一切をこなした上で稽古することになっているので、師匠が床につく午後九時まで自由時間などほとんどない。テレビはもちろんのこと、電話もパソコンも携帯電話もない。師匠の背中を流すことも弟子の仕事のひとつだった。

風呂場では師匠が次に移る行動を前もって察知するために、背中の筋肉の微小な動きに

注目し、師匠が必要としているものを、いち早く察知して手渡すということも徹底してやった。

それは阿吽の呼吸を身につける鍛錬でもあり、相手の動きを先読みするという修練にもなった。それ以上に、風呂場が師匠と弟子としてのコミュニケーションの場となったのだった。

剛拳は格闘術を極めた男である以前に、僧侶として生きた男である。

修行には教養も必要だとして、弟子に禅の書を読ませることも徹底していた。それは夕食後、家事を終えてからのもっとも辛抱のいる修行だった。日中の疲労から漢文を目の前にすると、たちまち眠気に襲われる。これぞ己に克つための静かなる闘いだった。

剛拳は古典を読めということは常々言ったが、学校の教科書を読めとは一度も言わなかった。剛拳は俺の学校での成績には全く関心を払わなかった。

剛拳は弟子が漢文を読む際、行っていたことがある。それは金剛鈴（ガンター）を用いて鈴を鳴らしたり、木の棒で叩いて音を共鳴させたりしていたことだった。それにより、心地よい音が細胞の隅々まで響き渡っていた。

「知性を拡大するためには、感性をも拡大しておく必要がある。音はすべての波動の根源であり、思考もまた波動である。両者相まって脳の潜在能力は賦活されるのだ。宇宙の一切すべては波動なのだ」

と常に剛拳は言っていたが、弟子にとっては鈴の音が睡眠を促す以外の何物でもなく、眠気をどうにかすることの方がよっぽど重要なことだった。剛拳は鈴の音を止めては、四尺二寸の警策で弟子の肩を叩くのに忙しかった。

一方、三ヶ月後にはケンも内弟子となった。俺の内弟子生活を知って、先を越されまいと転がり込んできたのだった。俺としても仕事量が減るのでケンの内弟子志願を素直に喜んだ。

勘当された俺と家出してきたケンとは、共通の事情を抱えていることから、友情以上の絆を感じていた。その思いが通じ合っていたことで、厳しい修行も投げ出すことなくやってこられた。

家を出て半年ほどたった頃のことだった。

俺とケンが庭を掃いていたとき、剛拳は俺に郵便物を取ってくるように言付けた。その際、剛拳は俺にこう言って立ち去ったのだった。

「リュウよ、おまえに懸想文がきておるぞ」
俺とケンはふたりして「ケソウブミ」とは何だと議論しつつ、郵便受けに手を伸ばしてみた。すると一通の手紙が入っていた。俺宛のものだった。
差出人は、覚えのない女性の名前だった。
ケンは素早く俺の手紙をかすめ取った。そして勝手に封を開けると、ニヤリと俺に一瞥してから、大声で読み上げた。
「ゴホン、『以前からお友達になってもらいたいと思っていました。ご迷惑でなかったら一度お会いしたいと思っています』だってよー。ラブレターだぜ、これ」
ケンは手紙を掲げると目を輝かせた。俺はその手紙を奪い取り、背を向けて読んでみた。心当たりのない名前だった。同じ高校だった女子だろうか。
それよりもショックだったのは、剛拳が内容を読まずしてこれがケソウブミ、つまりはラブレターだと言い当てたことだった。
先に師匠に悟られてしまった俺は体中が真っ赤になり、頭から湯気が立ち上るかのごとく赤面した。
「会ってみろよ。おまえもようやく春が来たというわけだ」
ケンは愉快でたまらないのをこらえながら俺の肩を叩いた。しかし俺はそういうことが何より苦手なのだ。
「これは男として受け止めるべきだぜ」
「いや、俺は興味ないよ」
「おまえ、そんなことじゃ一生ツマラナイ人生になっちまうぜ。奇特な女子に感謝しろよ」
なんとその夜ケンは、抵抗する俺をよそに、勝手に手紙の返事を出していたのだ。俺が逃げも隠れもできぬように約束の場所と日付まで書き添えて。
それを知った俺はケンと殴り合いのケンカを交わしたが、結局、約束の日に会いに行かなければならないことには変わりなかった。これが俺にとってのはじめての「果し合い」となったのだった。
当日。約束の喫茶店で待っていたのは、まっすぐな黒髪が肩まで伸びた清楚な可愛い女子だった。
彼女は俺と同じ高校で同学年だと言った。ただし、一度も同じクラスになったことはなく、俺はまったく彼女の存在を知らなかった。
初対面の女子と何を話せばよいのか皆目見当もつかなかった俺は、ただうつむいている

彼女を前に、何も言えなかった。相手もまた沈黙の壁にさえぎられて黙っていた。
この日彼女と何を話したのかはほとんど覚えていないが、格好をつけて注文したブラックコーヒーがことのほか苦かったことだけは覚えている。
数日後、再び手紙が届いた。
――あなたとはお友達になれそうにないと分かりました。ごめんなさい。――
ケンは俺から手紙を奪い取ると、黙って読んでいた。
「まあ、落ち込むな。おまえの良さがわからなかっただけさ」
ケンは力ない犬のようにうなだれている俺の肩を叩いてなぐさめた。俺は振られたのだ。
確かに俺は、テレビもパソコンも携帯電話もない生活にどっぷり浸かり、流行を知らず、事前にケンから半ば無理やり教え込まれたとはいえ、女子とのコミュニケーションの取り方も分からず、ただ同じ空間にいるだけのつまらない男でしかなかった。俺は、それをわかっていながら少なからず落ち込んだものだ。
「気にするな。おまえにふさわしい相手がこの世のどこかにいるはずだ。人生は長いんだぜ」
分かったような口ぶりでケンは言った。ケンの言葉に返事する余力さえ残っていなかった俺は、ケンの言葉を無言で認めてしまったようで余計に自分を落胆させた。
実際、ケンの周りには女子がいつも群がっていた。すでに少年時代から人を惹きつける才能を開花させていたケンは、修行中もときおり姿をくらましては俺にアリバイ作りをさせたものだ。
要領がよかった上、天性の運動能力を持っていたケンは、俺と比較にならぬほど技を上達させていった。稽古の量も、俺よりずっと少ないにも関わらずである。ケンは手を抜くことも上手かった。
対して俺は鈍才な弟子だった。
俺にはケンがウサギに見え、自分がカメに思えたものだ。
それでも幻の波動拳を体得するためならば、とウサギが修行そっちのけになっている間も懸命になって励んでいた。そんな俺の一部始終を知っていた剛拳は、風呂場で背中を流す俺にこう言ったことがある。
「ウサギは自らの要領で技を仕上げようとする。しかしカメはそれができん。ゆえに地道に手本を真似るしかできんのだ。ウサギとカメの十年後を考えてみよ。おまえはどちらを選ぶのか」

剛拳は、俺が苛立ちを覚えていることを見抜いていたのだった。
師匠からは、肌理（きめ）の粗く浅黒い背中を通して大事なことを気づかされた。父との確執、修行においての行き詰まり、自分自身に対しての苛立ち……。そんな苦境にいる俺を見守ってくれる剛拳の言葉が、俺にはうれしかった。

俺が成人を迎えた日の夜、俺は剛拳の部屋にひとり呼び出された。剛拳は俺に四年前と同じ質問をした。
「おまえは波動拳を必要とするのか」
その言葉を今か今かと待っていた俺は即座に答えた。
「はい。ぜひともご教授願います」
「では聞くが、なぜ波動拳を必要とするのか」
「これまで師匠から基本がいかに大切かを教わってきました。基本技は無上の必殺技であると。しかし自分には、基本技に対しての応用技、つまり波動拳を知ってこそはじめて基本の大切さを知ることができると思うのです。応用技を知らずして、基本技が無上の必殺技であることを知りえないと思うからです」
剛拳の質問に、前もって考え抜いた答えをここぞとばかりに訴えた。剛拳はしばらく黙っていた。
「なるほど。では聞くが、応用技を体得する以前に、基本技を無上の技として完成させたのか」
俺は黙り込んだ。
そんなことは言わずと知れたことだ。基本技を完成させただなんて、到底言えることではない。まだ二十歳になったばかりの俺は、向こう意気の強さだけでものを言おうとする身の程知らずの少年ではなくなっていた。
これで波動拳はおあずけだろう。唇を噛んで下を向いた俺に、剛拳はこう言った。
「おまえはこれまで真面目に修行に打ち込んできた。ここまでついてきた弟子はおまえがはじめてだ。そろそろ応用も覚えるがよかろう。ただし忘れるな。大いなる波動を発するには、大いなる結果を引き受けねばならんということを」
その言葉の真意をまだ知らなかった俺は、波動拳を伝授することができることに、ただ諸手を上げて――ただし心の中で――喜んだ。
入門してから五年間、波動拳を待ち続けた。待って待って、何を待っているのかさえ忘

れてしまいそうになるほど、不断なる日常の小さな修行を続けてきた。
やっと、剛拳の伝説の波動拳をこの目で見、それを体得するチャンスがめぐってきたのだ。俺はまるでうまれてはじめて飛行機に乗る小さな子どものように、躍動感を抑えきれずにいた。小躍りしながら小僧部屋に帰ると、ケンが言った。
「やけにうれしそうじゃねえか。カノジョでもできたか」
「違う！　やっと波動拳を教えてもらえることになったんだ。じっとしていられるわけがないだろう」
「そうなのか！　じゃあ俺も師匠に教えてもらえるよう、聞いてくるぜ」
ケンは、早速剛拳のもとへ飛んでいった。俺はなんとなく複雑な気持ちだった。ケンは優秀な奴だ。もしケンも波動拳の習得を認められたなら、あいつは俺よりも先に波動拳を会得するだろう。
しかしケンもまた、はるかアメリカから剛拳の噂だけを頼りに家出して来た男。覚悟を決めてここへ来た男なのだ。ケンも俺と同様に、波動拳を待ち焦がれてきたのだ。日本の伝統とか文化とかいった、ケンにとってはどうでもよかったことを一から覚えなければならなかったジレンマと闘いながら……。
俺ははじめてケンと出会った瞬間に知っていた。ケンとは人生において、あらゆる場面で永遠のライバルになるであろうことを――。
剛拳は俺と同じ質問を、ケンにもしたのだろうか。
そしてケンはどう答えただろうか。
先ほどまでの躍動感が、焦燥感へと変化している自分に気づきつつ、ケンが俺にとって脅威の存在となるのではないかという予感に心を煩わせながら、静かに待つしかなかった。

二十歳の誕生日から三日後に梅雨明け宣言がなされた。
蝉の声が耳にまとわりついている中で、俺とケンはしたたる汗をぬぐうこともせずに、坐禅を組んでいた。俺たちは晴れて波動拳習得という秘儀参入の門をくぐったのである。
俺たちは、応用技というからには即実技だろうと期待していたが、まったく意外な結果に戸惑っていた。なぜなら、最初の課題は坐禅だったからだ。
しかし、ただ座っているだけなら簡単じゃないかとたかをくくっていた俺たちをよそに、剛拳はこう言った。
「土用大接心（どようだいぜっしん）を行なう」

はじめて耳にする言葉が何を意味するのかを知らない俺たちは、その後坐禅がどんなに過酷な修行なのかを知ることになるのだった。

「土用大接心」とは、年間を通して最も厳しい禅の修行のひとつ。一日十二時間、無念無想となるための坐禅を一週間行なう最も過酷な修行なのである。

睡眠は二時間ほどしか与えられず、夜中にも「夜坐」という突然叩き起こされて坐禅に入るという、静かでありながら壮絶な試練を乗り越えなければならない。

何より苦心したのが睡魔との闘いだった。一瞬でも氣がゆるめば警策で肩を叩かれることになる。この一週間の過酷な修行は「雲水殺し」ともいわれている。

このときの俺は、ケンとともに修行をすることができることを、幸いだと思う気持ちに変わっていた。

ケンはあの夜、自分にも波動拳を教えてくれと剛拳にひたすら嘆願したのだ。

剛拳はひとりで修行させるよりも、ふたりで修行をさせた方が、相乗効果が高いということを知っていたのだろう。ケンも同じく秘儀参入の徒となることを認められたのだった。

壮絶な一週間を、俺たちは何とかくぐり抜けることができた。「雲水殺し」に殺されかった俺たちは今度こそはと、目を輝かせて技の伝授を期待したが……。期待は再び裏切られることとなった。

先ほどまで雲水だった俺たちは、山伏となることを余儀なくされたからだ。俺は剛拳が、轟鉄老師の歩んだ道を、踏襲しようとしているのだと勘づいた。

大接心を終えてから一ヶ月後、俺とケンは山伏となって修験の世界に足を踏み入れることとなった。

日本で唯一残された女人禁制の山に十二日間入峰し、全長二百四十キロを踏破する山岳修行に挑むのだ。

剛拳は法螺貝を吹き鳴らし、修験の過酷な行の口火を切った。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前、エエイッ！」

剛拳は激しい氣合とともに、九字を切って唱えた。これは山に入るときの魔除けの呪文である。師匠は弟子を守るという責務を負っているのだ。

身・口・意を清浄にし、すべての欲を断ち切るための厳しい修行――その内容は、山中の岩屋に籠もり、あるいは山林を駆け巡り、絶壁の岩に逆さ吊りになり、蟻の戸渡りや滝に打たれるなどの十八もの壮絶な荒行だった。

修験道とは実践がすべてである。実践とは、大自然とじかに向き合い、そこにあるあら

ゆる生命エネルギーを自身に取り込むことなのである。
自らに厳しい修行を課すことで、限界を知り、その限界を超えたところにある超常的な力を会得しようとするのが修験の目的なのだ。
おそらく世間一般の人々からは過酷な修行に赴く山伏たちの行動を奇異な目で見ることだろう。豊かで安全な社会にいながら、なぜに自身をストイックで危険な環境に追いつめようとするのだろうかと。あるいはなぜに全神経を集中してひたすら坐りぬこうとするのかと。
ケンにとっても現代社会から切り離された日本の修行者の世界観がナンセンスに映ったようだ。むしろ馬鹿馬鹿しくさえ感じていただろう。時代にそぐわないこれらの修行が未だに守られ続けている日本の伝統に、ほとほと辟易していた。
「なあ、リュウ、この俺が女人禁制の山籠りだなんて、信じられるか？　冗談にもほどがあるぜ」
「ほんとだな」
「第一、修行なんて今どき流行らねえんだ。大体こんな格好、俺に一番似合わねえ格好だと思わないか」
この荒行には白装束を身にまとうことになっている。この世を捨てて一心に苦行に挑むというわけだ。
「まんざらでもないぜ。それに褌姿もなかなかのもんだ」
「それを言うなよ」
ケンは天を仰ぎ、額に手を当てて苦笑しながら言った。
俺はケンがすっかり褌愛好家になってしまったことを知っている。入門時に着用を命じられたときの衝撃度は、俺と比にならないほどだったに違いない。
しかし今となってはトランクスが履けないほどの気に入りようなのだ。あのケンが褌にすっかりはまってしまったわけは、単に絞め心地がよいからなのかもしれないが、剛拳は褌について次のように語っていたことがある。
もともと褌は麻でできていた。麻は大変強い植物で衣服にすれば丈夫で乾きやすく、帯電しにくいという利点がある。
そもそも麻は縄文時代より日本人とともに共生してきた植物で、日本が第二次世界大戦で敗れるまでは、どこにでも生えていた。麻は戯れを祓い福を招く神聖なる植物として、神事に利用されたり、薬になったり、衣食住に必要なあらゆる道具となって人類をサポー

トしてきたのだという。

麻が戦後ＧＨＱの政策により法規制されてしまったのは、麻があまりにも素晴らしい万能の植物であるために、日本を石油文化にしたいアメリカにとって、邪魔な存在だったのだ。麻は本来、日本人にはなくてはならない植物なのだ。

剛拳いわく、日本人はパンツを履くようになってから霊性が囚われてしまったのだという。

日本人の肚の氣が抜けてしまったのは、西洋スタイルになってからだ。それまでの日本人は下半身を締め付けたり、蒸れさせたりすることをしなかった。下半身は性センターを司る重要な部分である。性センターを滞りなく巡らせることができなくなればどうなるか。今の病んだ日本人を見ればおのずと答えが出るはずだ。このように、褌ひとつについて、剛拳は実に深いうんちくを傾けてくれたものだった。

「ああ、うまいものが食いたいなあ……分厚いステーキにハンバーガー、パスタにピーナッツバターをたっぷり塗ったサンドイッチもいいなあ」

ケンはつぶやいた。どれもこれも内弟子生活になってから、口に入らないものばかりだ。それまでは俺もケンも自由に好きな食べ物を食べていたが、内弟子になるからには、「四つ足を食うてはならぬ」という剛拳の指示によって、欧米流の食べ物はほとんど口にしていない。

ケンは十二日間ずっとうつろな目になりながらぼやき続けていた。波動拳伝授という大義名分がなければ、ケンは日本からとうに逃げ出していたことだろう。

坐禅と荒行が轟鉄一門として外せない修行である以上、弟子は師匠の歩んだ道を踏襲せねばならない。

常日頃から剛拳が弟子に漢文を読むことを必須としたのは、禅と修験に通じていた轟鉄一門の「必須カリキュラム」だったといえるだろう。

剛拳は禅書『碧巌録（へきがんろく）』をすべて暗唱できる博覧強記の人だった。

一方、修験は経典を持たない。実践こそがすべてだからだ。その実践の場は、山だった。

轟鉄一門は、一に修身。二に実践。三に技なりということを信条としており、精神を先哲から学び、滝行や絶壁の崖に立つことなどで我欲をそぎ落とすことを目的としていた。

揺るぎない強靭な精神と肉体を獲得したうえで五体を武器化することが、人間として最高の存在になれるのだと剛拳は弟子に教えた。

技だけを追求しようとすれば破門させられることは暗黙の了解だった。轟鉄老師が残し

た指南書にはこう記されている。

――心、実してのち、外に求むるを本理とすべし――

しかし幼少の頃から僧堂で学んだ剛拳と、一般人として育った俺たちとは出発点が違うし目的も違う。

轟鉄一門は悟りの境地をめざしたのに対し、俺もケンもただ強くなりたいという思いだけしかなかった。剛拳が言うところの「動機が不純」といったところだ。

当時の俺たちのいう強さとは、他者に勝つことでしかなく、難解な教科書は俺たちにはまったくありがたくないものでしかなかった。それでも修行に耐えてきたのは、波動拳を体得したいという強い気持ちがあったからだ。

さて、厳しい修行を終えた俺とケンは、今度こそ波動拳にありつけると鼻を鳴らして剛拳の言葉を待っていた。

しかし剛拳の口から出た言葉はこうだった。

「ショウシュウテンを開通せよ」

俺とケンは、師匠の言葉が理解できずに互いに顔を見合わせた。

ショウシュウテン、つまり小周天とは、身体をめぐる督脈と任脈という二つの主要な経脈によって構成される氣の通り道をいう。

督脈とは、人体の背面の正中線を通る氣の通り道である。尾骨から始まって背骨に沿って昇ってゆき、頭部を通って上顎の口蓋で終わる。

任脈とは、人体の前面の正中線を通る氣の通り道である。会陰から始まって身体の前面を通って昇ってゆき、舌先で終わる。舌先を上口蓋につけることで、両経脈をつなげることができる。小周天はインドにおいてはクンダリーニと称される。

小周天を開通するということは、体内を循環する氣の経路を滞りなくつなげる作業のことをいうのである。

小周天には氣のたまるポイントがあり、小周天の通り道にある経穴――いわゆるツボ――とすべて一致する。経穴はインドにおいてはチャクラと称される。チャクラは第一チャクラから第七チャクラまであり、チャクラに相当する経穴は「会陰」からはじまり、次いで「氣海」「中脘」「膻中」「天突」「印堂」「百会」へと到達する。これらはすべて第一チャクラから第七チャクラに相当するのである。

まず坐禅から学んだ瞑想によって、小周天を開通する作業が可能となる。

「練功は、臍に氣を集めることに始まり、そこに終わるのだ」

剛拳はわずかな言葉によって、弟子にその手段を授けるだけだった。その言葉を手がかりに実践することだけが、弟子に許された唯一の手段だった。

丹田は第二チャクラに相当する。経穴でいえば「氣海」にあたり、字のごとく氣を溜める池である。丹田の三センチほど上には臍がある。臍は氣を蓄える身体のバッテリーに相当する。ヨガの行者も、臍を使ってただじっと瞑想するのである。

その際に大切なのは、呼吸法である。呼吸法には外呼吸（肺呼吸）と内呼吸（腹式呼吸）があり、この場合、内呼吸を用いて小周天を行なう。それは肚だけを使って氣を導いていくことを意味し、より上級な修行法でもある。

この小周天を開通することができれば、次に大地のエネルギーとつながることが必要となってくる。それは地に足をつける作業である。

氣は電気と同じく、その強度を増していくにつれて熱くなってくる。この熱をアースすることで逃がしてやらなければならないのだ。

より強力な氣を大量に扱う場合、外からのエネルギーを取り入れ、体内を循環させるという作業を的確に運用することができなければならない。これをうまくなされなければ、練功者は様々な副作用に見舞われることになる。

幻覚や幻聴、妄想症、見当識障害、不眠症などが挙げられる。この諸症状をクンダリーニ症候群とか禅病とかいい、白隠禅師は『夜船閑話』の中で、修行者たちがこれらの症状によく罹り、彼自身もそのために危うく死にかけたといっている。

だからこそ、大地に根づく作業をしっかり行なう必要があるのだ。そのための修行として、「鉄布衫功」を修練することが必須とされた。

「鉄布衫功」とは、戦闘時において、殴打を受けても怪我をすることなく耐えられる身体作りを行なうための実修法である。鉄布衫功を熟練するためには、堅強なる筋骨格構造と大地の牽引力である重力との間に完全な連携が取れるようにならなければならない。これをクリアすることができれば、氣を扱う上での副作用に見舞われることはなくなるのである。

次のステップに進もう。

地に足をつけることが十分にできたなら、今度は天につながる作業が必要となる。これを大周天につながる作業という。

天とは大宇宙である。

大宇宙の氣は冲氣ともいうが、この冲氣は陰と陽の両方を含んでいる。

宇宙の氣とはまさに、陰陽そのものが融合した太極図として表わされるのである。したがって陰の氣、陽の氣というのは、ネガティブな氣とポジティブな氣が存在することになるのである。

この大宇宙の氣を体内に取り込むために、眉間にある印堂を通して大いなる自己、すなわち小周天につながった自分とつながらなければならない。

大周天とつながるために大切なのが瞑想と呼吸法であって、修行の第一にそれらをマスターさせるために剛拳は俺たちに「雲水殺し」をさせたのだということがわかったのだった。

印堂（眉間）に大宇宙の氣を取り込んで大周天とつながることで無限のエネルギーを取り込み、小周天を通って氣の貯水池・丹田に大地から得た氣と混合する。

天（大周天）と地（小周天）のエネルギーを両手のひらに一気に集めて押し出す。これが波動拳なのである。

――大いなる波動を発するには、大いなる結果を引き受けねばならんということを忘れるな――

剛拳のかねてからのこの言葉は、大宇宙の氣は陰と陽で構成され、ポジティブなエネルギーを利用することができる反面、ネガティブなエネルギーを利用する恐れもあるということを意味していたのだ。

それだけではない。氣という目に見えぬものにも低次の波動から高次の波動がある。

自らの波動は、いかに目覚めているかによって裏打ちされており、低次の欲望に裏打ちされた波動は極めて陰の波動となり、高次に至った波動は限りなく陽の波動を出すことになる。すなわち、氣をあつかう人間の意識レベルによって、波動が変わり、陰の波動に属するのか、陽の波動に属するのかに二分されるのである。剛拳がいつか言った、「波動拳とは、その字のごとく波動をあやつる技」という言葉の意味はそこにあったのだ。

これら一連の練功に最も重要なのは、基本中の基本をマスターすることなのである。

だからこそ、剛拳が基本を無上の技に仕上げろと教えたのだ。俺が入門して五年目にして波動拳を伝授するという話は、決して出し惜しみしていたのではなく、それほどに基本を固める期間が必要だったというわけだったのだ。

秘儀を伝承するためには、その内容以上に重要なことがある。

それは有能なマスターに師事することが何より大切であるということだ。マスターとは叡智を感得し、人格を完成させた者をいう。

マスターでなければならない絶対的な理由は、すべての秘儀を惜しみなく弟子に伝授できる者でなければならないからだ。
人間という生き物は、自分を超える人物を生み出すことを恐れる傾向がある。未熟な師匠は弟子に肝心なことを決して教えはしないだろう。そして未熟な弟子は、決して教えを正確かつ正統に継承することはできないだろう。そうすれば、秘儀はいずれ消滅することになるだろう。
秘儀を伝承する上でもっとも肝心なことは、決して言葉では伝えられないということだ。それゆえに、言葉を超えた以心伝心というものがどうしても必要になってくるのだ。
俺とケンは、剛拳というマスターからこのようにして波動拳を体得する手法を伝授されたわけだが、その質を決定するのは己自身の波動に他ならない。後は、自分次第で波動拳を生かすこともできれば殺すこともでき、波動拳は発する者によって質が異なるということをここでようやく理解することができたのだった。

このようにして秘儀参入の門をくぐった俺たちは、技の稽古も次第にレベルアップしていった。
いち早く波動拳を放出することに成功させたのは、ケンだった。その後に俺が続いた。
ケンは波動拳を出した際、手のひらが火傷しそうなほど熱くなったと言った。しかし、俺の場合は決して熱くはなく、むしろ焼けつくほどの冷たさを覚えたものだった。そのことに対して剛拳はこう言った。
「ケン、おまえは燃え盛る炎の赤を帯びた波動を持っておる。そしてリュウ、おまえは深く静かなる水の青を帯びた波動を持っておる。つまりおまえたちは、相対する波動を持っておるのだ」
俺はそれを理屈ぬきで分かった。ケン自身が赤いわけでなく、俺自身が青いわけでもない。しかし目に見えない何かが、俺たちの色として表現しているのだろうということは分かった。
かねてから剛拳は、俺たちには分からない神秘的なことが視覚化できるようだった。
おそらくケンも俺と同様、理屈では理解し難くとも、剛拳の言葉を素直に認めることができたにちがいない。
なぜなら、剛拳の言うとおり、俺たちは常に同じことをしていながら対極の存在として認め合っていたからだ。

「人はそれぞれ独自の色彩を帯びている。その色彩は魂の色であり、その者が現世(うつしよ)に生まれ出た役割を意味する。すなわち、波動拳は魂の色を帯びた秘技なのだ。ゆえに感覚が異なるのだ。人生で最も大事なことは、己を知ることだ。それが悟りなのだ。自らの波動を上げれば色彩はさらに光を帯びて輝くようになる。そのとき、己の波動拳は姿を変え、自らの光を解き放ったのだ」

「己の波動拳は姿を変え、自らの光を解き放つ……」

俺はその言葉に引き止められた。

「さよう。虹の戦士となれ。さすればすべてを知るだろう」

剛拳の言葉は理屈で理解することはできない。弟子自身が経験し、成長できたときにはじめて分かるものだからだ。

俺とケンはこれまでも、目を見合わせて首をひねることが多々あった。そのときは師匠の言葉の意味を理解しようとするよりも、いかにして強力な波動拳を打つことができるかということに夢中だった。

必殺技ともなれば、捨て身で大技を出すことになる。一瞬のうちに技を出すことができなければ相手にやられてしまう。つまり、必殺技とは自壊するリスクを背負った技なのだ。それでも俺たちは必殺技を体得したかった。誰よりも強くなるために。

剛拳は、俺とケンをその場に座らせた。

「波動拳を伝授したのは、おまえたちがはじめてだ。よくぞここまでになった。その証にこれを授けよう」

目の前に置かれたのは、黒帯だった。俺とケンは目を合わせて喜びを共有しあった。

「付けてみるがよい」

俺は真新しい黒帯を両手で握り締め、眼前で真一文字に掲げた。そこには、刺繍が施されていた。

「風林火山……」

「さよう。波動拳の奥儀は、風林火山のごとく放つということだ。忘れるでないぞ」

隣でケンが俺と剛拳の会話を聞いていた。しかしその内容には興味を示すことなく、早々と黒帯をつけていた。俺も擦り切れ、ぼろぼろになった白帯をほどき、真新しい黒帯をつけたのだった。

「よいか、これが終点ではないのだぞ。ここからが始まりなのだ」

剛拳が目を細めて俺たちを見る姿からは、慈しみが感じられた。

こうして俺とケンは、剛拳から波動拳を伝授されたのだった。
のちに昇龍拳、竜巻旋風脚といった必殺技も教わることとなった。

それからの修行はこれまでにない、実戦を主眼としたものとなった。例を挙げてみよう。
ときどき未明の二時、三時に剛拳に叩き起こされ、師匠の手には真剣と、たいまつ一本だけを持って山の中へと連れられて行った。そこでたいまつは川に放り投げられ、辺りは真っ暗闇となった。これが「闇稽古」である。
師匠は俺たちにそれぞれ真剣を手渡して言い放った。
「これでわしを本気で切るつもりで向かって来い。一切手加減は無用。よいな」
寝ぼけていた俺とケンは、剛拳の言葉にいっぺんに目を覚ました。
師匠の言うことは絶対である。俺とケンはひと言も発することなく、闇の中にいる師匠目がけて真剣を振りかざした。
ここで注目すべきは一対二であることだ。
無茶苦茶に真剣を振りかざせば、味方をも斬ってしまう恐れがある。剛拳のわずかな氣の動きを察知して慎重に打たなければならない。俺とケンの真剣は空を切るばかりで、結局は師匠に徒手空拳で打ちのめされてしまうのだった。
「よいか、真実は目に見えないところにある。己の心眼を見開いて耳を研ぎ澄まし、己の観ずるところを信ずるのだ」
実戦の稽古には、いつも俺とケンのふたりがかりで師匠にぶつかっていったが、一度も勝てたことはなかった。
いや、一度も剛拳に触れることさえできなかったのだ。
おそらく、俺たちが十人力で師匠にかかっても、太刀打ちできなかっただろう。
師匠の動きは神技としか言いようのない妙技だった。闇稽古にとどまらず、師匠自ら目隠しをした状態で真剣勝負を弟子に挑ませたこともある。それでも、俺達弟子は、一度も師匠に触れることはできなかった。
剛拳は肉体に依存した五感に頼らず、第六感ですべてを観じとっていたようだ。
視覚のみに頼って手出しできなかった俺たちに対して、剛拳は目で見ず、耳で聞かず、心で観るのだということを実践してみせた。
しかし未熟だった俺たちには、その教えを体得できるはずもなかった。剛拳のいる境地には足元も及ばないことを思い知らされただけだった。

この頃の俺たちにとって、剛拳は伝説の格闘家であることは周知の事実となった。
この五年間、一度も見せたことのなかった必殺技のひとつひとつ、そして第六感を働かせた真剣勝負の強烈さは言葉で表すことはできない。
俺は師匠の実力を知ってますます尊敬するようになった。それ以上に人間として最高の境地に達した人物だと評して疑わなかったのだった。
そしていつか、自分もこの境地にたどり着くんだという強い決心を固めたのだった。
ある日剛拳は、弟子に問いかけた。
「我が一門の奥儀を授けたおまえたちにひとつ聞いておきたい。もし自分ひとりに対して大勢、それも十人の強豪と闘わねばならなくなったら、どうするかな」
「そりゃあ、必殺技で全員ぶっ倒しますよ。そのための必殺技なんすから」
ケンが意気揚々として言った。
「リュウ、おまえはどうする」
「相手が十人の強豪なら、なおさら命懸けで勝負します。もし闘いで果てたとしても、誇りをかけて闘いぬきます」
俺とケンは顔を見合わせてうなずき合った。
「リュウ、おまえに聞くが、格闘術とは何だ」
「護身術です」
「では、最大の護身術とは何だ。ケンよ、答えてみい」
「必殺技じゃないっすか」
「リュウ、おまえの答えは」
「……必殺技だと思います」
「逃げることだ」
剛拳の意外な言葉に、俺たちは唖然とした。
「最大の護身術は逃げることである。相手にならねば傷つくこともない。分かるか」
「だったら何のための必殺技なんですか」
俺は思わず叫んだ。
「だから言っただろう、必殺技など必要ないと」
俺とケンは目を合わせると、不服な表情を示し合った。
「よいか、もし土砂が崩れてきたらどうする。津波が押し寄せてきたらどうする。雪崩に遭ったらどうするかを考えてみるがよい。そこで逃げずに闘おうとしたらどうなるかな？

大自然を前にしてみれば、ひとりの人間がどうして太刀打ちできようか。同じように、十人の強豪を相手に果てたなら、それは無駄死にというものだ。よいか、命を粗末にしてはならん。おまえたちにはまだ、命懸けの闘いの本質とは何かを分かっておらぬ。自ら望んで人と争うでないぞ。よいな」

剛拳は、必殺技を使いたくて拳がうずいている俺たちに釘を刺したわけだ。しかし俺もケンも、剛拳の言葉など聞いちゃいなかった。

それから一年ほどたった頃だった。

剛拳に変化が見られるようになったのだ。今までじっと動かなかった岩が、轟々と音を立てながら動き出したのだ。

ある日の黄昏時、剛拳は焼けつくような紅の空に浮かぶ漆黒の雲や、松林に吹きつける疾風の行方を見つめながら立ち尽くしていた。今思えば、剛拳の中に一抹の予感……剛拳の第六感に去来する虫の知らせといえようか。そんな感覚的なものが剛拳を動かしていたのではないかと思う。

今から思えば察するに、剛拳は弟・豪鬼の出現という、肉親との因縁の再会を果たす日が近づいたことを知っていたのではなかろうか。それを予感させる言葉を、剛拳は死の前日に残していたのだ。

――俺はいつものように、師匠の背中を流していた。一枚岩のように大きな背中が、その夜はわずかに影を帯び、それを弟子に露呈させていた。

「わしは轟鉄老師より印可を与えられたが、未だ老師を超えられん」

剛拳が口火を切った。俺は師匠の背中をこする手を止めた。

「老師は武勇の傑物であった。しかも僧侶でありながら豪快奔放、世俗の酸いも甘いも噛み分けながらも、空手還郷（くうしゅげんきょう）――すなわち悟りの境地――に達しておった。そんな我が老師は、最期に我にすべてを与えたもうたのだ」

「すべてを……？　ですか」

「さよう。その真意は今のお前にはまだ分かるまい」

俺は剛拳の背中が語る言葉の本質を探ろうとしたが、見つかるはずもなかった。

そして、かつて轟鉄老師は剛拳の弟によって殺されたという噂があったという話を思い出した。このことは、長年俺の心の片隅にしまいこんでいたことだった。今ならその真偽

をうかがうことができるのではないかと思った。
「師匠には弟さんがいらしたのですか？　わたしはいつか、その人が轟鉄老師を殺めたという噂を聞いたことがあるんです」
その言葉に師匠の背中の動きが止まった。そして沈黙がその噂が真実だったのではないかと思わせた。
「……弟がいたのは事実。しかし、そんな噂のことなどわしは知らん」
語気を強めて剛拳は言った。
俺はこのとき剛拳は、何かを隠しているのではないかと思った。
しかし、この話題に関してはタブーであるということだけは確かなことだと分かったのだった。俺は、剛拳の背中を力いっぱいこすりながら、剛拳の言葉の続きに耳を傾けていた。
「わしと弟は、俗世を厭離して生きてきた。意固地に俗世を疎んでいたのには、奔放な老師に反発していた時期があったことも事実。しかし、おまえはわしらとは違う。いつか師を超え、大悟することもできよう。自由に生きよ」
これが剛拳の死の前日に、俺に託した最後の言葉だった。

鬼が剛拳の前に現れたのは、その翌日の雷鳴轟く黄昏時だった。
あれは確かに、真っ赤な目は眼光鋭く、憤怒の形相を呈した、怒髪天を衝く鬼だった。年季の入った黒い道衣には数多の闘いを繰り広げ、息の根を止めてきたのであろう数多の怨念をも背負っていることを察せられた。なぜなら、禍々しい氣で満ちあふれていたからだった。
本能的な直観だった。
俺とケンは、突然現れた鬼に底知れぬ恐怖と言い表せない不安を覚えた。しかし剛拳は、威厳ある山の如く、鬼と無言で対峙していた。
思わず生唾を飲み込む。
俺たちはふたりの様子を一瞬でもそらしてはならないことを知っていた。
ふたりの姿形は似ているが、それらの持つ氣はまったく正反対のものだった。
正の氣と負の氣。
マイナスとプラス。
陰と陽。

このふたりの間には、磁石のように引き合ったという印象を抱いた。
俺はとっさに昨晩の剛拳との会話を思い出した。剛拳とその弟のことを。
「あれは師匠の弟ではないか？」
「弟？　初耳だな」
「師匠は弟とともに親に捨てられたんだと以前に聞いたことがある。ほら、どことなく似ているだろう」
「確かに。どっちもいかついぜ。あんまり仲良しになりたくないタイプだ」
俺とケンはふたりに視線を定めつつ、論評しあっていた。
兄弟が久々の再会ならば、諸手で喜びを表現するはずだが、彼らは重い空間を形成しつつも、互いに何か言葉を交わしているようだった。俺はこのとき背中に悪寒が走った。
鬼が剛拳めがけて――虚歩の残像をまといつつ――瞬時に近寄ると、赤黒い炎を剛拳の懐にねじ込んだのが見えた。
それは確かに波動拳だった。
まるでブラックホールのような暗黒の空間が、剛拳の魂を抜き取るかのような、異質で強力な波動の塊だった。
しかし暗黒の波動は、剛拳の魂を抜き取ることに成功しなかった。
剛拳は真言を唱え、自身にほの白く輝くベールをまとったのだ。剛拳から数センチ離れた空間は、光に満たされていた。その光を一気に丹田に集めて手のひらから解き放つ。しかし鬼は光を寸でのところでかわし、徒手空拳のせめぎあいを繰り広げた。
まったくの互角。
おそらくこの兄弟は、轟鉄老師から一子相伝の秘技をともに伝授されたのだろう。俺とケンのように。
このふたりは命懸けで闘っている。
血を分けた肉親だというのになぜ？
いや、血を分けた肉親だからこそ、深い因縁があるのだと俺は思った。
今はそれよりも、師匠の渾身の対決をこの目で最後まで見届けなければならない。おそらく剛拳は俺たちにこう思いを投げかけたにちがいない。
――しかと見ておれ――と。
師匠の無言の投げかけにより、弟子は一挙手一投足の微細な動きひとつさえ取りこぼさずに見届けなくてはならない。

俺の目に映るのは、神なのか鬼なのか。
しかし同時に人間でもあることを忘れてはならなかった。
なぜなら、彼らの技は俺たちの身体の中に、染み込んだ血となって受け継がれたものだからだ。この現実を直視しなければならない責任は、弟子である俺たちが引き受けなければならないのだ。
神技と鬼の為せる所業――鬼は神に、神は鬼に相転じながら――轟々と周囲の空気を轟かせつつ、見たことのない技を次々と繰り出していく。
相手に打撃を与えれば、その次に自らが攻撃をこうむる。
鬼は暗黒の氣を巡らしつつ剛拳を正中線上に切り裂く。
それを皮一枚のところで回避する剛拳。
方や神の雷のごとく振り下ろす足刀を、間一髪で受け止める鬼……。
俗世で生きる者は、誰一人として、この壮絶な決闘を一生見ることも聞くこともない。世を捨てた兄弟がなぜに闘い合うかということさえ、知る由もないだろう。
雷鳴が轟いている。
吹き付ける風が、辺りの木々をざわつかせはじめた。
間もなく、果し合いのさなかに、無情の雨がふたりを打ちつけるだろう。重くのしかかる積乱雲の影が、ポジとネガを反転したかのように、風景を闇に変えた。
稲妻が天空を真っ二つに切り裂き、闇の中で閃光を解き放った。
その刹那、轟音が空気を顫動させた。
俺たちは、つぶさに注視していたが、一瞬の閃光によって目がくらんだ。何かが起きていたことは明らかだった。剛拳が、地に臥せっていたのだ。
雨が、そこにうずくまる剛拳に容赦することなく打ちつけはじめた。雷光が、鬼の背中に浮かぶ「天」の文字を明暗虚実に照らし出している。
鬼は、剛拳の首に下げていた大粒の数珠を奪い取り、自らの首に下げた。
そして、表情ひとつ変えることなく兄を見下ろしたかと思うと、こう言った。
「我が拳に敵う業なし！」
鬼は、雷雲とともにその場から去って行った。
俺とケンはただちに剛拳のもとに駆け寄り抱き起こした。頚動脈の拍動はわずかながら維持されている。しかし、剛拳はもう長くはないとわかった。
「豪鬼よ……闇を、極めおったか……ッ…ッハッハッ……」

豪鬼、と剛拳は鬼の名を呼んだ。

このふたりはやはり兄弟だったのだ。剛拳からは、豪鬼に対する憎しみの情は感じられなかった。なのにどうしてこの兄弟は命懸けの闘いをしなければならなかったのだろうか。あれほど弟子に闘うことを禁じてきた剛拳が、なぜに死に至るほどの闘いをしたのだろうか。俺には何ひとつわからなかった。

剛拳は俺とケンの腕の中で、最初で最後の笑い声を讃えながら、ほどなくして事切れた。師匠の亡骸は重かった。俺は剛拳の死という現実を受けとめられなかった。なぜか昨晩流した剛拳の背中が思い出された。もう、師匠の背中を流すことはないのかと思うと、涙があふれた。ケンは狼の遠吠えのごとく全身全霊で慟哭していた。

やがて雨はやみ、重くのしかかる雲の隙間から光が差し込み始めたのだった。

剛拳は、いつか俺たちに話したことがあった。

――我が死しても弔い・墓・戒名・諡（おくりな）は一切不要。我は大地の土となり、死して花を咲かそうぞ――我はただ、空（くう）より来たりて空へと帰らん――と。

剛拳は僧侶として弔う立場でありながら、自らは無為であることを貫いたのだった。

剛拳が死して一ヵ月後。

俺とケンが組手をしていた際に、異変は起こった。

先ほどまで晴れ渡っていたというのに、あたり一面は低く重い曇天に見舞われ、光を覆い隠してしまったのだ。

豪鬼が、闇を背負って現れたからだった。

そのときの感覚――恐怖というよりも、畏怖の念――は、認識するよりも先に、身体が反応していた。

俺の足の裏は、地面に張り付いたかのようにまったく動かせなくなっていた。俺は豪鬼を正面に相対していたのだ。

俺の身体は無意識に逃走モードにスイッチが入った。怖れに支配された非常時においては、まるで自動車を避けられずに硬直している猫のようだ。身体はその場を離れることさえできなくなる。俺の身体は居着いてしまったのだ。

一方、何もできなくなった俺の傍らでは、ケンが波動拳を放とうと、手のひらに氣を蓄えていた。

その時。
「うぬらに我は倒せぬ。犬死するは勝手であるが、それではつまらぬ」
豪鬼の発する声は地鳴りを思わせた。どうやら闘うつもりではないらしい。
異変はこの直後に起きた。
ケンが金縛りにかかったように身動きが取れなくなったのだ。
「くそっ、何なんだこれは！」
俺がケンに近づこうとしたその時だった。
俺の身体は急にけいれんを起こし、体中の血液が沸騰し、逆流しはじめたかのような感覚――。瞳孔は収縮し、急に視界が暗くなった。
筋肉の制御機構が解除され、筋肉自体が意思をもっているかのような筋肥大を成し、骨格筋が不随意筋と化した。俺は俺自身をコントロールすることが不可能となっていたのだった。
意識が遠のいていくのを、もうひとりの俺が見ているかのような感覚だった。
鬼は嗤った。
「うぬの眠れる波動を覚醒すべし。殺意の波動こそ闇の波動の奥儀なり」
記憶が遠ざかりながらも、俺自身が崩壊していくさまを細胞のひとつひとつが記録していた。
俺は立ちながらにして朽ち果てていくのだろうか。死ぬとはこういうことなのだろうか。
俺は死の領域に踏み込もうとしていたのかもしれない。
（いやだ！　俺は死にたくない！　死にたくないんだ！）
これが俺の最後の魂の叫びだった。その後の記憶は分断した。

命のスイッチは、切れてはいなかった。
目を覚ますと、晴れ渡った青空を仰いでいた。
鳥のさえずる声が聞こえる。
感覚が確かにあると認識できるまで、無感情のままだった。
俺が目を開いているのに気づいたケンは、とっさに近寄ってきた。
「気がついたか？」
「俺、どうなっちまったんだろう」
「豪鬼がおまえの唖門（項（うなじ）にある活殺穴）を一突きして、気を失わせたんだ。そうでなけ

れば、きっとおまえは狂い死にしていただろうよ」
どうやら、豪鬼が助けてくれたらしい。しかしなぜ、俺があんなふうになってしまったのかがまったくわからなかった。
「リュウがおかしくなったあの時、俺も身体が硬直して動けなかったんだ」
「なあケン、あれは闇の波動だと豪鬼は言っていた。……もし、俺が狂ったままだったら、今ごろ生きていなかったかもしれない」
「狂い死にしてたってか？」
「ああ」
俺は豪鬼によって眠っていた闇の波動を駆動させてしまったのだろうか。俺もいつかは豪鬼のようになってしまうのだろうか。
しかし、俺の問いかけに答えてくれる存在はもういない。
このとき、剛拳がかつて話した、「求道心から死に物狂いで寝食を忘れるばかりの修行を続けると、心火逆上する」という話を思い出していた。「殺意の波動」はまさにこのことだったのだろう。
「大丈夫。おまえは狂い死になんかしないさ。身体を休めて元気になったら、憂さ晴らしに街へ出ようぜ」
ケンの励ましが、泥地の底に沈みゆく俺の意識を引き止めてくれた。

俺の中に眠る殺意の波動。豪鬼はそれを、闇の波動の奥儀だと言った。
対して剛拳は光を解き放ち、虹の戦士となれと言った。
この対立する二つの言葉のどちらを選ぶかは、俺自身の自由だったはずだ。
しかし虹を見るよりも先に、闇を見てしまった俺には、己の宿業の深さを思い知らされることになってしまったのだった。
自分の意思の及ばぬ領域で、俺は闇に向かっていた――。このことは至極受け容れがたいことだった。
懸命に修行に励み、尊敬する剛拳の境地にたどり着こうと――つまりは虹の戦士となるべく――一心不乱に稽古に打ち込んできた。それが、あろうことか望んでいた境地と対極の境地に進んでいたというのだから。
求め続けた真の強さとは、殺意の波動だったのか……？
いや、そうではないはずだ。

少なくとも俺の求める道は、修羅の道ではない。
ならばどのように軌道修正すればよいというのか。俺は苦悩の日々を抱えつつ、カメはカメでしかいられない現実を受け容れながら、修行を地道に続けていたのだった。
次第に俺の中で、殺意の波動を拒絶する気持ちと、豪鬼に対する敵対心が相まっていった。

それから一ヵ月後。
俺とケンは、別々の道を生きることを決意した。外の世界へ旅立つ日が来たのだ。
ケンは慣れ親しんだ古寺を離れ、家出息子の帰還を果たした。
おそらく英雄の帰還を家族は温かく迎え入れたことだろう。ケンは祖国アメリカで穏やかな日々を送りつつ、表の世界に生きることを選んだ。
一方、勘当息子である俺は、帰る家も留まる場所もない。
俺は迷うことなく自分の実力を試すべく、世界中の猛者を求めて旅に出ることを選んだ。
俺たちは、誰よりも強くなるという共通の目的をもちながらも、対極の道を歩きはじめたのだった。
互いにその道の最終地点は必ず同じ場所であろうことは知っていた。
なぜなら、真の強さというものの答えは、一つしかないに違いないからだ。
俺たちの旅立ちは、どちらが先にそこへ到達するかを競う試みでもあった。
旅立ちの朝。
古寺の門前で、俺とケンはそれぞれに旅支度を整えて向き合っていた。
「リュウ、おまえはこれからどこへ行くんだ？」
「さあな。風の吹くまま、気の向くままってやつさ」
「おまえとは、いつか必ず決着をつける。最強の自分になったときに、必ずな」
「ああ、必ずだ。楽しみにしているぜ」
俺とケンは、拳を突き合わせてから別れの握手を交わした。互いに大きくうなづき、そして互いに背中を向けて、それぞれの道を歩き始めたのだった。

☆ 諸刃の剣

俺は世界に自分の実力がどれだけ通用するのかが知りたかった。実際、俺は強いのか弱いのかさえわからなかったからだ。

対外試合の封印が解けたまさにこのとき、俺は手当たり次第に実戦を求めた。

まず向かったのは、フルコンタクト制空手で有名な旭道館だった。

旭道館は格闘技専門誌によく取り上げられており、有名プロ選手も多数輩出していた。俺は単純に、ここが日本でいちばん強い道場だと認識していた。

他流道場を道衣姿で入るわけもいかず、俺は私服姿の一般人として見学することにした。

俺が道場の前で中の様子をうかがっていると、体格の良い練習生に中へ連れ込まれた。

入ってすぐ、場内の熱気に圧倒されることになった。

広い道場には、五十名ほどの練習生がひしめき合って稽古していた。俺は見学者のために用意されている椅子に座らされた。

練習風景は、実戦的なものだった。組手を重点的にしていたからだ。

剛拳が決して許さなかった組手を、彼らは必死でやっている。黒帯の者も白帯の者もすべての者が組手稽古をしているのだ。俺はこれが空手なのかと思った。

しばらく練習風景を見ていると、ひとりの中年男が道場に入ってきた。

中年男は、恰幅が良くパンチパーマに口ひげを生やし、サングラスをかけている。黒いワイシャツに紫色のスラックスをはいており、金色のブレスレットと重そうな金の腕時計を身につけていた。中年男は堅気の人間ではないような強烈な印象を周囲に放っていた。

中年男が上座に向かうと、練習生一同は手を止めて上座に注目し「押忍！」と声を揃えて言った。どうやら中年男はここの館長のようだ。

館長は俺の姿を認めると、練習生に向かってこう言った。

「型なんてどうでもいい。大事なのは実戦なんじゃ。実戦に型など役に立たんじゃろう？」

館長がそう言うと、一斉に失笑が洩れた。

「そうじゃ。実戦はケンカなんじゃ。ケンカは勝ってなんぼのもんじゃ。ただしケンカにも流儀がある。ケンカに情けは必要ないということじゃ。勝ちたい気持ちが強い者が勝つ。誰よりも自分が強いことを、拳で証明せい。わしはその信条を貫いて日本一の空手を創り上げたんじゃ」

「押忍！」
「続き、はじめ！」
館長の号令と共に、稽古が再開された。
俺は館長の言葉を聞いて、唖然としていた。俺は日本一の強さを誇る旭道館とはまったく正反対のことを教えられてきた、ということを知ったからだ。
尊敬していた剛拳の教えは本当だったと思う。
しかし、この館長は剛拳と逆の方針を立てたことで日本一となったという事実があるのだ。
複雑な思いを抱きながら練習風景を見ていると、ひとりの黒帯の男が声をかけてきた。
「一緒にやりませんか」
俺の返事も聞かないまま、黒帯男は半ば強引に俺を場内に引っ張り出した。
「経験は？」
「少し」
「じゃあ思いっきりかかってきな。遠慮すんなよ、どうせ俺の勝ちだから」
黒帯男は、態度を一変して嘲笑しながら構えた。
俺を叩きつぶそうとする魂胆が丸見えだ。
それはそれで正しいのだろう。この道場の方針がそうなのだから。
ならばこちらも遠慮しない。
黒帯男が連続で拳を打ってきた。シュッシュッと拳の唸る音が俺の耳をかすめた。
相手は俺を脅かすつもりだったのかもしれないが、俺には拳の軌道がすべて見えていた。
俺は相手のにやける顔をめがけて上段回し蹴りを一発お見舞いした。鈍い音が場内に響いた時、黒帯男はその場で気絶した。
そのとき、練習生全員の手が止まった。
場内にいた練習生は静まり返り、ただならぬ事態が起こったことを、ここにいるすべて者が察知したようだった。場内は緊迫した空気に一変し、もはや通常の稽古どころではなくなっていたのだった。
俺の放ったわずか一発の蹴りで、俺はここにいるすべての者を敵に回すことになってしまったようだった。
わが流派の面目をつぶされまいと、別の黒帯男が次々に勝負を挑んできた。
俺は三人続けて相手を倒した。館長は声を荒げて練習生の不甲斐なさを叱り飛ばした。

俺はここにいるすべての者と対決しなければならないということ、負ければ半殺しの目に遭うだろうということを即座に悟った。

娑婆に出てはじめての対戦が、まさに命懸けの勝負というのだから、自分の実力を試す絶好の機会だ。

俺はワクワクしていた。実戦が解禁された今、思う存分闘えるのだから！

旭道館は一対一で闘うつもりらしく、道場の中央に新たな黒帯男が進み出た。

他の者は中央のスペースを囲むように取り巻いている。

俺はここから逃げることは不可能というわけだ。しかしそんなことをするはずもないし、逃げるつもりなど毛頭もなかった。

四人目の黒帯が蹴りを数発放った。

攻めて俺を追いつめる算段らしいがそんなことはどうでもよかった。

相手はとにかく俺を倒そうとする氣でみなぎっていた。おそらく勝利を自分の手柄にしたいのだろう。

しかしことごとく打ってくる拳など、弓矢を掴み取る修行を重ねてきた俺にとっては、子供だましのように思えた。

そろそろこちらから「お礼」させてもらうとしようか。俺はケンとの組手のように攻撃した。すると相手は一発で俺の裏拳が側頭部に入り、失神してしまったのだった。

周囲が物々しい雰囲気に一変したのはこのときだった。

練習生が失神した黒帯を場外に引きずり出した。次は俺だといわんばかりに新たな黒帯が場内に進み出てきた。

今度は身長差も体重差もかなりある大男だった。しかし見た目の期待とは裏腹に、あっけなく勝負は終わった。もちろん、俺の勝利だった。

五人倒した時点で、自ら勝負を挑む者の腰が引けてきているのが見て取れた。

そのとき館長が立ち上がり、リーダー格の練習生に合図した。

「上田、おまえ行け」

上田と呼ばれた男は、俺より上背があり、肉もあった。表情を表さずに道場の中央へ進み出ると、静かに構えた。

上田は俺の攻撃を待っていた。ならばこちらから行かせてもらおう。

中段蹴りを一発放つと、上田はそれをよけた。

再び構える。

今度は上田が中段蹴りを放ってきた。
その蹴りを肘と膝で受け止めると、今までの相手にはない重さを感じた。
少しはできる相手のようだ。ならば本気で行かせてもらう。
回し蹴りで上田の鼻をかすめた。相手が仰け反った隙に肚に肘、顔面に裏拳が入った。
上田は苦しそうな顔を見せたが倒れなかった。一呼吸置いて、再度構えた。
間髪をいれずに上田の踵が頭上に振り下ろしてきた。
一瞬頭が真っ白になる。
俺ははじめて攻撃を食らった。その隙に、上田は俺の肚に一発拳を打ってきた。
なるほど、上田はここの切り札というわけだ。技のキレがこれまでの相手とは全然違う。
俺が期待していたのはこういう相手だったのだ！　大きく息を吸い込むと、再び構えた。
「おまえ、名前はなんて言う？」
「リュウだ」
「名字は？」
「捨てた」
「……ふん、変な奴だ」
上田はあざ笑ったが、目は真剣なままだった。
「道場破りのつもりらしいが、相手が悪かったな。あいにく俺は打撃系空手日本一なんだぜ。まあ、死なない程度に相手してやる」
言い終わると、上田は攻めの算段に出た。突き、蹴りは重さ、スピード、威力すべてにおいて他の練習生とは格段にレベルが違っていた。そのうちの数発は、俺の防御でもってしてもダメージを受けた。
「うりゃあ！」
丸太のような上田の脚が後ろ回し蹴りを放った瞬間、俺はまともに食らってしまった。
ダウン。
倒れこんだ時に、後頭部を打ったようだ。記憶がとぶというのはまさにそのとおりで、先ほどまでの一連の出来事が何だったのかがわからなくなった。頭を振って、立ち上がる。
上田が本気なら、俺も本気でいく。それが礼儀というものだ。
丹田に氣を沈め、外的エネルギーを取り込み、内的エネルギーと融合させ、呼吸力を発揮して上田に挑んだ。
「竜巻旋風脚！」

発生させた上昇気流に自分の身体を乗せ、頭頂部と足先とで磁場を作り、自身をコイル状にして電気を発生させる。強力な電気を帯電させて、磁場を維持しながらコンパスのように片足を蹴り上げて身体を回転させる。上田の腹部、胸、側頭部に連続でヒットし、上田を空中に舞い上げた。

俺が着地すると同時に、蹴り上げられた上田の身体も着地した。上田は意識を失ったまま起き上がらなかった。このときはじめて剛拳の教えが見事であったことを痛感したのだった。

場内は沈黙に包まれた。

上田が倒れた今、勝負を挑む者はすでにない。俺の闘志は消失してしまっていた。

館長は茹蛸のように顔が高潮していた。こめかみの静脈が怒張し、けいれんを起こしている。館長は冷静を装って俺に聞いてきた。

「所属道場はどこじゃ」

「道場ではなく、お寺です」

「寺だと？　誰に師事した」

「剛拳師匠です」

「知らんな」

館長は腕を組んで思い巡らせていたようだが、表情は依然固かった。

「もうやめます。心配要りません。ここでのことは誰にも言いませんから」

そう言い残して旭道館を後にした。

俺は行くあてもなく歩いた。今ごろ館長は練習生を相手に怒鳴り散らし、歯軋りしているに違いない。しばらく歩いているうちに、俺をつけてくる輩が十名ほどいることに気がついた。

おそらく先ほど対戦した黒帯たちだろう。もしも世間に今日のことが知れ渡ってしまえば、日本一を誇っていた旭道館の名に泥を塗ることになる。きっと奴らはどんな手を使ってでも俺を半殺しにするだろう。そして意識が遠のいていく俺に、命と引き換えに口止めを迫るに違いない。

そのとき、いつか剛拳が言った言葉を思い出した。

――俺は、全力疾走で逃げたのだった。

ケンカ空手日本一にあっさり勝ってしまった俺は、世界へと関心を向けた。

――世界には俺よりも強い奴がいるに違いない――

そう思うだけで血が沸き立った。俺は刺激を求めていた。道場破りではなくもっと肉迫していてサバイバル的な勝負を求めて、ストリートファイターとしてルール無き修羅場の世界へと足を踏み入れたのだった。

世界にはあらゆる無法地帯がある。俺がそんな場所を求めて闘い歩いていたのには理由がある。逆に言えば、無法地帯でなければ俺の目的は叶わなかったからだとも言える。

それは表社会にはない、生死をかけた勝負ができるからだった。裏を返せば、そこで負けることは半殺しの目に遭うことをも意味する。現に生きて帰れない挑戦者もいた。それでも俺は命懸けで強い相手を求めていた。「虎穴に入らずんば、虎児を得ず」と。

猛者が集まる非公式試合は、おおよそがスラム街やマフィア牛耳る裏社会。試合は基本を無上の技として体に染み込ませてきた成果を発揮した。日本で道場破りをしたときのように、おもしろいほど勝っていった。相手がいとも簡単に負けるので、拍子抜けしたほどだった。

俺はこのとき勝負の質よりも量をこなすことで、自分が強くなれると信じて疑わなかった。そして実力を身につけていくと同時に、実益も伴っていく現実を知った。

闘えば勝ち、勝てば金が手にいる。まとまった金が手に入ると、渡航費用に当ててあらゆる国へと飛び回り、新たなスラム街へと闘いを求めて歩く。

俺は勝利する喜びを感じる一方で、自分の中で息づいている殺意の波動の存在を意識していた。

いつかまた、殺意の波動が動き出すのではなかろうか。不安を抱きつつ、己の闇を見据えて闘い続けていたのだった。

剛拳が死んでちょうど一年目のことだった。俺は師匠の魂を回顧するために、日本に降り立った。奇しくも、ケンが古寺のふもとにある崖の切っ先たたずんでいるところだった。

「ケンじゃないか！」

「リュウ！」

俺たちは、拳を突き合って再会を喜びあった。

「おまえ、相変わらずのようだな」

ケンは俺の身なりを見て苦笑した。ケンの洗練された服装に対し、俺は白いハチマキに

破れかぶれの道衣姿だったからだ。
このことは表の世界に生きるケンと、裏の世界で生きる俺との対比を見事に表していた。
このとき俺は、ケンとはじめて出会った日も正反対の格好だったことを思い出していた。
「俺は今、大学に通ってるんだ。堅苦しい生活から抜け出して、青春を謳歌してるのさ」
「専門は、帝王学ってわけか」
「ははっ、よせよ。これでも稽古は怠りないんだぜ」
「せっかく会ったんだ、ひと勝負しようじゃないか」
首と指を鳴らしながら、久々のケンとの勝負に士気を高めていた。そのとき、ひとりの女性が俺たちに近づいてきた。
「わたしは国際刑事警察機構（インターポール）の麻薬捜査官、春麗（チュンリー）と申します。リュウさんはあなたですか？」
春麗と名乗った若き女刑事は、身分証明書を提示して俺に近づいてきた。まだ十代の面影を残しつつも、毅然とした印象を受けた。凛とした美貌が、若くても優秀な人物であることをほのめかしていた。
女刑事は青いチャイナカラーのジャージ姿に身を包んでいる。色白の肌に切れ長で黒目がちの目が、芯の強さを物語っていた。二つに結った髪をくるりとまとめている姿から、中国人だと察することができた。
「緊急を要しますので単刀直入に申し上げます。あなたは悪の組織・シャドルーに狙われています。彼らは必ずあなたの能力を奪いに来るでしょう。あなたの命が危険にさらされる恐れがあります。どうぞ当局の保護を受けていただきたいのです」
刑事だという中国娘の口から、突拍子もないことが次々と飛び出した。
極めて冷静に話す様子から、まるっきり嘘でもなさそうでもある。しかし、俺にはにわかに信じがたいことには違いなかった。
中国娘の話によると、俺が一年前から非公式試合に常勝していることを、シャドルーという悪の組織が関心を抱いたのが発端で、俺をつけ狙っているのだという。
「狙われる理由が分からないが、自分の身は自分で守る。ややこしいことはゴメンだよ」
「超能力を操る人物があなたの肉体を得ようとたくらんでいるのです。その人物に徒手空拳は通用しません。どうか、説明は後にして今すぐ我々の保護を受けていただきたいのです」
どうやらことは深刻なようだ。超能力を持った相手が強いと分かった俺は、自分の実力を確かめてみたいという衝動に駆られた。

「そんなに強い相手なら、ぜひ腕を試してみたいな」
「あなたは実力を出してはいけないのです。決して技を見せてはなりません。あなたの潜在能力を彼らに悟られないよう、じっと動かないことです。どうか、正義のためにわたしを信じて」
「正義？　そんなものに興味はないよ。組織とかいったものに係わるのもごめんだ」
率直に言ったが、俺は自分以外のために何かをすることに興味はなかった。それに、組織とかいう権力でものを言わせるような団体に巻き込まれるなんて真っ平だ。
女刑事は何かを言おうとした言葉をいったん収め、しばらく黙っていたが、再び切り出した。
「では、組織としてではなく、わたしにあなたをサポートさせていただけませんか」
小首を傾けてにっこりほほ笑むと、女刑事は俺に手を差し伸ばしてきた。さっきまで硬い表情をしていた女刑事だったが、こうして見てみると、普通の女の子じゃないかと思った。いや、普通というよりも、ずっと、かわいいじゃないか！
彼女もまた、組織の命令を受けて来たのだろう。自分の意志とは関係なく。
「へへっ、いいじゃないかリュウ。彼女、おまえを助けてくれるってよ」
耳元でケンが囁いた。
「女に助けられるようじゃ、俺の格闘人生も終わったようなもんだ」
俺は照れ隠しのために虚勢を張ってみせた。
「いいえ、助けられることは助けることと同じことなんですよ。わたしもあなたの承諾をいただけないことには、帰れないんです」
春麗といった女刑事は、苦笑していたが、差し伸ばした手は下ろさなかった。おそらく俺が承諾するまで居座るつもりなのだろう。
とにかく虫の居所が悪かった。
久々にケンと対戦しようと意気込んでいたというのに、とんだ邪魔が入ったせいで、士気がすっかり下がってしまったからだ。
結局、俺は春麗との根気比べに負けた。
「仕方ない、言うとおりにするよ」
「ありがとう」
春麗の表情がゆるんだ。そして俺の手を取って握手したのだった。俺は苦笑しつつも、春麗の後について歩いていったのだった。

五分ほど歩いた頃だった。途中、俺の背後に電撃が走り、急に身動きが取れなくなった。ケンと春麗は俺の異変に気づいて足を止めた。俺は息苦しくなったと同時に、急速に脈が加速度をつけて速くなっていった。ふたりは、俺の背後に忽然と誰かが姿を現したことに気づいた。

「ベガ！」と叫んだのは、春麗だった。

ベガと呼ばれた男は、ナチスドイツを思わせる――ただし真紅の軍服をまとい、全身を包み隠すほど大きなマントを翻した――異様な人物だった。目は、髑髏（どくろ）の紋章がつけられた帽子を目深くかぶっているせいで認めることはできなかった。長く突出した割れ顎が印象的だった。

驚くべきは、ベガの身体が宙に浮いていたことだ。超能力とは、このことをいうのだろうか。ベガは不気味な笑みを耳の付け根まで広げた。

突然背後に圧倒する黒い氣を感じた瞬間、憑依されたかのように自由が利かなくなった。その直後、肉体の制御は解き放たれたが、意識がまるで水に薄められていくかのように、遠のいていった。

同時に、別人格の俺が自分と取って代わっていくのを感じていた。眠っていたはずの、殺意の波動が再び目を覚ましたのだった。

「ふん、未完成品か。しかし器としては想像以上だ」

ベガのひと言だけが記憶の断片に刻み込まれたあと、俺の記憶は途切れた。

気がつくと、俺はとあるホテルの一室に横たわっていた。ケンと春麗が俺を心配そうに見下ろしていた。

「ここは？　俺はいったいどうなったんだ」

起き上がろうとすると、全身に激痛が走った。この感覚は、以前にも殺意の波動に狂った後と同じ痛みだった。

「覚えていないのね。相当なショックのせいで、記憶をしまいこんだのね、きっと」

春麗は至極冷静に言った。おそらく春麗にとって、俺の身におきた変化は数多くの一症例に過ぎなかったのだろう。

「おまえ、いったいどうしてそんな技を出せたんだ？　豪鬼と同じような技だったぜ」

「豪鬼と同じような技だと？　まさか」

「本当に、覚えてないのか？」

「……ああ」
俺はケンの質問に正直に答えるしかなかった。なぜなら、あのとき何が起こったのかをまったく覚えていなかったからだ。
ふたりの話によると、俺は荒れ狂い、ケンと春麗に対して野獣のごとく牙を剥いたらしい。
覚えのない技――しかしかつて見た豪鬼のような技――を次々と繰り出し、ケンと春麗を襲い続けたというのだ。白目を剥き、口からよだれをたらしながら咆哮を上げ、全身から湯気を立たせたらしい。怒張した血管が脈打ち、一瞬にしてボディビルダーのような筋肉に肥大していたそうだ。
そんな超人的な肉体によって、殺人的な技を駆使した俺は、破壊力も人間離れしていた。放った拳の先にあった大きな岩をも打ち砕いたそうだ。
結局、春麗の平手打ちによって、狂気から目が覚めた。同時に、ケンが俺の後頚部を手刀で殴打して意識を失わせたということだった。
それから丸二日間も眠り続けていたそうだ。
ただ意識が遠のいていったとき、ベガが発したキーワードだけが記憶に残っていた。それが何なのかが気になった。
「ベガは俺のことを器と言ったが、何のことだったんだろう」
「大量の氣を乗せられる人物を器と言っているようよ。普通の人間には、自分以外の氣をまとうことはなかなかできないの。けれどあなたは実際に莫大な氣をまとったわ。ただし、コントロールできなかったために荒れ狂ったのよ」
「例の、殺意の波動ってやつだ」
ケンが言った。
「俺に殺意なんてあるはずないのに」
「いや、あのときは確かに殺意があった」
ケンの目は、笑っていなかった。
殺意の波動に支配されたということは、自分自身をコントロールできなかったということだ。それは俺自身の弱さでもある。
「俺、自分自身をコントロールできなくなる自分が怖いんだ。いつか本当に誰かを傷つけるかもしれない」
「それと、あなた自身もね」

春麗が言った。
「ベガは無意識下のあなたを狙っているのよ。あなたは自分をコントロールできるようにならないと、今度は本当に悪の組織に取り込まれてしまうわ。気をつけて」
「それはそうと、君は中国拳法の使い手だったんだな」
ケンが、ブルース・リーのパフォーマンスをしながら春麗に言った。
「ええ、拳法は父譲りなの。……わたしの父はあのベガに殺されたのよ。ベガはシャドルーの総帥なの。だからわたしは復讐のためにインターポールの捜査官となって彼を追っているの。なのに今回も逃げられてしまったわ。チャンスだったのに……!」
涼しい顔だった春麗は、突然唇を噛みしめた。拳を椅子に打ち付けて憎しみを露にした。
俺は妙齢の女性の口から「復讐」という、物騒な言葉が飛び出したことで、春麗という人物に関心を抱いた。
世間知らずの俺でさえ、その若さでインターポールの捜査官に就職することが、どれほど至難の業であろうことかは分かる。
十三億もの人口を抱える中国で、インターポールの麻薬捜査官というキャリアを持つ人物は、まちがいなく中国人のエリート中のエリートだといえる。その地位まで登りつめるためには、遊ぶことも楽しむことも放棄して、父親の復讐を果たすために、命懸けで国際刑事となったのだろう。春麗は拳法の腕前だけでなく、知性も備えた超エリートの女性なのだ。
「君の技をかすかに覚えているよ。またいつか勝負してくれるか」
「ええ、もちろん。そのときは、正気のあなたとね」
春麗は笑みを見せた。俺はこのとき女に格闘家が務まるものかと思っていた。
「あなたにはしばらくここで過ごしてもらうわ。シャドルーはどんな手を使っても、あなたを連れ去るでしょう。だからリュウ、あなたはここから一歩も出てはならないのよ」
つまり春麗は、俺を軟禁状態にするというわけだ。それだけは真っ平ゴメンだ。
「悪いが、いくら君の命令だからといって、素直に聞くわけにはいかない。今すぐ解放してくれ」
言ってから立ち上がろうとするが、激痛が走る。結局逃げられないことを観念するしかなかった。
「ふふっ、今の状態じゃ逃げられないわね。せっかくだからここで安静にして、身体の回復を待つことね」

俺は春麗の言うことを素直に聞くしかなかった。
「じゃ、俺は行くぜ。春麗さん、リュウをよろしく」
ケンは、手を上げてウインクし、逃げるようにしてそこから立ち去った。俺は心の中で「裏切り者」とつぶやいた。

三日が経過し身体が回復してきた頃、俺はなんとかホテルから脱出することに成功した。今ごろ春麗は、任務不履行の責を受けて始末書を書かされているに違いない。春麗には悪いが、俺は最初からそのつもりだったのだ。
まずは自分自身をコントロールする必要がある。そのためには一度日本に留まり、強者を求める旅は休戦することにした。
さて、日本人にとって、身体と精神を回復するのに最適な手段と言えば、温泉である。
俺は、これまで稼いだ賞金をすべて鞄に詰めこんだ。列車に飛び乗ると、成り行きに任せて人里離れた温泉地へたどり着いた。
手近なところにある民宿に転がり込んだ俺は、そこでまず温泉に浸り、身体を癒した。
頭に浮かんでくることは、なぜ俺が殺意の波動を持っているのかということだ。
ケンや春麗の話によれば、俺は豪鬼と同じ技を駆使したという。ということは、潜在的に豪鬼と同じ波動を持っていて、闇を宿しているということになる。
今回ベガに狙われたときに発した殺意の波動は完全ではなかった。それは、俺の中にわずかな理性が残っていたからだ。完全な殺意の波動を発動しきれなかった俺に対してベガは「未完成品」だと言ったのだろう。
ベガは人間の心に内在する闇をよく知っていた。
おそらく、ベガは自らの超能力を研鑽した結果、人を操ることができるということを見出したのだろう。人間の弱い部分と、自己の能力が引き合えば、驚くべき化学反応を起こすことができることに気づいたのだ。
それを正しい方向へ使うのではなく、人心を煽動し、私利私欲のおもむくままに矛先を向けてしまったことが、悪の組織を作り上げたきっかけとなったのだろう。
ベガはもともと人をひきつける能力があったにちがいない。人間の心さえコントロールすることができれば、世界もコントロールできると考えたのだろう。
おそらく、悪とか闇とかいった組織は、人間に潜むマイナスのエネルギーを集結させて出来上がったものなのだ。

ベガは俺の中にある闇の部分と共鳴し、殺意の波動を引き出したのだ。それは俺にとって、至極受け容れがたいことだった。なぜなら、光を求める俺にとって、闇は悪であり弱さだからだ。

（俺が弱いだと？　そんなはずはない。俺は強くなるためならどんなこともやってきた。その証拠に、俺には波動拳があるじゃないか！）

考えれば考えるほど、自分が弱いだなんてことは、断じて認められるはずがなかった。このことを考えただけで、体中が火照ったように激しく抵抗するのだ。

しかし実際は、俺の中にはどんなに拒もうとも闇が存在している。これは抗いようのない事実だ。

俺は、いつかベガに肉体を乗っ取られて、悪の組織に利用されてしまうのだろうか。いや、そんなことは絶対にさせない。俺にとって、殺意の波動は活性化するべきものではなく、克服するべきものだからだ。

思考をめぐらすと頭の中が煮詰まってしまう。

このままだと本当に気が狂ってしまいそうだ。まずは身体を癒して頭を冷やすために、ここを定宿にすることにした。

しかし、俺はじっとはしていられなかった。何か行動に起こさなければ、自分を保てなかったのだ。

自分の強さを証明しなければならないという無意識のプレッシャーがあったからだ。

朝から宿に防犯用に備えてあった木刀を借りて素振りを行い、型稽古を始める。そして坐禅を組む。これまで剛拳のもとで過ごしたように俺の朝はまず稽古から始まる。

次に筋力強化のトレーニングに励み、ランニングで一汗かく。そして汗を流し、湯に浸かる。我ながらたいそうなご身分だ。このリラックスすることこそが、俺に必要なことだったのだ。それから大自然を相手にひとり稽古に励むのが日課となっていたのだった。

このように民宿で過ごしているうちに、宿の女将からこんなことを言われるようになった。

「あんた、まさか自殺願望者じゃないでしょうね。ときどきいるのよね、そういう人が」

閑散期に連泊しているのは俺だけだということもあって、俺の行動を不審に思っていたようだ。

女将はナツキという名の三十歳後半の女だ。よく働くが、その横顔は憂いを帯びており、陰があった。

ナツキはそんな俺の身体と心の状態を見逃さなかった。
「あんたの体、あざだらけじゃないか。まったく、男って生き物はどうしようもないねえ」
ナツキは俺のシャツを引っぺがして上半身を裸にすると、消毒薬を塗ったり、絆創膏やシップを貼ったりした。……と思いきや、銅褐色に光った筋肉を、大胸筋から腹筋の腱鞘にかけて細い指先で触れたのだ。同時にあどけっぽい目で俺を上から下までなめるように見た。
「あんたは真面目すぎるんだよ。人生もっと楽しまないと損だよ。何ならアタシが協力してあげてもいいんだよ」
ナツキは後ずさりする俺に迫ってきた。
「遠慮はいらないよ。ダンナはもうこの世にいないんだ。あんた、まだ女を知らないんだろう？」
ナツキは夫を一年前の交通事故で亡くしており、悲しみからまだ立ち直れずにいたのだったのだ。
そして俺は、自分の波動に恐れを持っている。ナツキはそんな俺の陰に共鳴したのか、淋しさを俺で紛らわすようになった。
俺は俺で、禁欲の世界から、当たり前の若者の突き抜けるような欲求を解放することを知った。轟鉄老師が歩んだ衝撃的な人生の転換期を、俺もまた、たどっていたのだった。
己の肉体から強烈に発する生臭い欲求は、沸々と煮えたぎる性センターから産出されている。この猛烈なエネルギーを客観視するたびに、愕然とした。これは男ならば、誰でも知っていることだ。
性センターから産出したエネルギーは、まるで炉のごとくに燃え盛っており、決して枯渇することはないだろうと思われる。性センターから発せられた炎を本能レベルで燃やすのか、あるいはもっと高みに向けて燃え盛ろうとするのかによって、男をつき動かすベクトルは対極の方向をなすといえるだろう。
このときの俺は、本能レベルでエネルギーを燃やしていただけに過ぎなかった。強くなることへの高みを目指すことよりも、目の前にある、抗いようのない欲求に忠実であろうとしていたのだ。
ナツキの誘惑に飲み込まれていくことに、罪悪感はなかった。むしろ、これまで抑圧していた肉欲を開放させることに取り付かれてしまっていた。ただし、ナツキに対しての特別な感情はなかった。俺は肉体と精神のバランスを取れずにいたのだ。

ナツキはそんな俺を利用して、自分の空洞を埋めようとしていた。その空洞が、少しも満たされないことを知っていながらも。

ナツキは俺に対して決して好意的ではなかった。むしろ反発してさえいた。

そこには亡き夫の影を俺に重ねてはみるが、所詮他人であることを突きつけられる現実に対しての拒絶だった。

「アイツはあんたなんかよりもずっといい男だった」

「なんでアイツはアタシを置いて先に逝っちまったんだ」

「なんでここにいるのがアイツじゃなくてあんたなんだよ、バカヤロウ」

俺はナツキにサディスティックな言葉を投げつけられても、不思議と傷つかなかった。それはナツキに対して特別な感情がなかったからなのだろうか。

俺はただ、ナツキの心の空洞に吹き込む隙間風としてしか存在しなかった。隙間風は空間を暖めることはできないのだ。

ナツキの夫はおそらく、俺と比にならないほど包容力のある大人の男だったのだろう。

俺はナツキの夫のことに関心はなく、ナツキを救いたいとも思わなかった。それなのにナツキから離れずにいたのは、自堕落になっていく自分を戒める存在がなかったからだ。

その一方で、理性はナツキから逃れたがっていた。ナツキの発するネガティブな波動によって、殺意の波動が共鳴しそうだったからだ。

もしも師匠が生きていたなら、堕落した弟子を見て何と言うだろうかと思うと、恐ろしかった。そんな思いとは裏腹に、俺とナツキは、互いに依存していたせいで、一歩が踏み出せないでいたのだった。

手持ちの金が底をつくと、ナツキは「いつ追い出してやってもいいんだ」と言いながら、俺に日雇い労働の働き先を、自ら探して持って来た。俺も先立つものがなければ、旅立つこともままならない。とりあえずはナツキの勧めに応じて日中は働きに出た。

昼過ぎから夜遅くまでの肉体労働は、思考を紛らわすよい手段だった。

労働仲間は皆堅強な肉体の持ち主で、家庭を持つ者、一人身の者、出稼ぎで遠方から来ている者など様々だった。

その中で二十代前半の若い男は俺だけだった。ということは、俺がいちばん下っ端ということになる。

仕事を終えると、労働者たちは飲み屋へなだれ込むのが決まりだった。俺もご多分に漏れず、飲み屋の席に座らされた。そこで俺は酒の飲み方を叩き込まれた。

古寺を離れ、ひとり立ちしてから覚えたことと言えば、勝負と酒と女だ。
とはいえ俺は、勝負の本質も、酒の味わい方も、女の底知れぬ深さの何ひとつさえ、本当は何も知らないということを知らない青二才に過ぎなかった。
ただ、肉体労働で日銭を稼いでは宿泊代にあてがい、それ以外の金を渡航費用に充填することは忘れなかった。
俗世間の谷間にいても、再び旅立つ日を常に夢見ていたのだ。ここから脱出することで、弱さから逃れられると思っていたのだ。
「ねえ、ここを出て行くときは黙って行かないでよね。また心の準備も無いままに、さっきまでいた人がいなくなるなんて真っ平だから」
ナツキの口癖は決まっていた。その言葉を聞くたびに、俺はここにいてはいけない人間だということを痛感させられた。俺の人生、ケンカと酒と女に明け暮れるためにあるのではないと分かっていたからだ。
そんなとき、少年時代に剛拳の強さにたどり着きたいと願った日々を思い出す。
あの厳しかった修行の日々は、落ちぶれるために過ごしたのではなかったはずだ。今、俺は限りなくつまらない男に成り下がってしまった。
ケンは今頃どうしているだろう。なお一層強くなって、さらに遠くへ行ってしまったのではないか。そう思うと、いても立ってもいられなくなった。
少年時代からケンに追いつき追い越そうと必死でやってきたのは、こんなことをするためなんかんじゃなかったはずだ。
こんな退廃的な生活をしていて一体どうして真の格闘家になれるというのか。
そんなことを考えると、がんじがらめになった自分から脱皮したくてたまらなくなった。
そうだ、今の俺は本当の俺じゃない。
真の強さの境地がどんなものなのかをこの目で確かめるために生きてきたはずだ。
初心を取り戻した俺は、やっとここを出る決心がついたのだった。
「しばらくだったが、世話になった。俺はもう行く」
「行っちゃうのね。……わかった。行けばいいわ、どこへでも。いつかこの日が来ることはわかってたから」
別れの日は互いに笑顔になれた。それだけが、精一杯の誠意だった。そしてもう二度と会うことはないということも、互いに知っていたのだった。
このときの俺はまだ、ひとりの女を光の下へ連れ出せるほどの強さも自信も包容力もな

かった。俺はあまりにも、若すぎたのだ。
ナツキは見事に俺自身の弱さを投影してくれた。ナツキを前にして、俺自身の弱さを見ているような、そんな時代だった。

☆ タイ・バンコクへ

根無し草は、風の吹くままに飛んでいくのが定め。
まずは俗世の垢をどっぷり染み込ませた肉体と精神をニュートラルに切り替えたかった。様々なところを転々としては修行の旅を続けていた。ただし、旅の行く先は日本ではなく世界へと開かれていった。
――俺より強い奴に会いに行く――
狭い日本から再び世界へと飛び立った俺はまずタイ王国へと降り立った。
タイ王国は、東南アジア随一の都市でありながら、敬虔な仏教徒と軍事力を併せ持った国だ。国技は立ち技世界最強といわれているムエタイだ。俺はムエタイの猛者と闘うことを目的にバンコクへと降り立った。
ムエタイの聖地といえばルンピニーだ。そこへ行けばタイの猛者に必ず出会えるはず。俺は地下鉄に乗り、公園を歩いて数分もすれば、煌々とネオンが輝くスタジアムにたどり着いた。
到着したのは午後八時。スタジアムに入れば大勢の男たちがリングを囲うように占拠し、沸き立っていた。観客席は三階まであり、一階は外国人客や女性客がちらほら認められた。
観客たちが注目する先にいたのは、身長が二メートルはあろうかと思われる隻眼の男だった。試合前の調整中らしく、バンテージを巻いていた。
タイの男は決して大きくはない。しかしこの男はまさにムエタイの戦士として生まれてきたかのような恵まれた体格をしていた。身長に比例して体躯も太く、四肢も長い。キックボクサーとしては最高の資質を生まれながらに享受している。
スキンヘッドに斜めに掛けられた黒い眼帯がハンデを物語っているが、むしろこの男にとってはトレードマークのようだ。片眼を失っているということで選手の能力を判断する

のは賢明ではない。
俺はそばにいた観客に隻眼の男の正体を確かめることにした。
「ちょっとたずねるが、あの男の名前は何ていうんだい？」
「あんた、サガットのことも知らないでここへ来たのかい？『隻眼の猛虎』と崇められたムエタイ界最強の戦士だよ。サガットに闘いを挑んだ者は数知れないが、未だサガットを負かした者はいないのさ。サガットの対戦相手は超大穴万馬券になるんだが、誰も対戦相手に大枚を賭ける奴なんかいないよ」
なるほど、ここは賭け試合が当然のごとく行われているらしい。どおりで観客も白熱するわけだ。
俺はひそかにサガットとの対戦を企んだ。人ごみを掻き分けてサガットに近寄り、隻眼の猛虎の前に立ちはだかった。
見上げるほどの身長差。体重差も相当ある。通常ならば階級違いで試合することはできないだろう。サガットから発する威圧感もかなりのものだ。ムエタイの帝王の貫禄は充分すぎた。
サガットは、俺に一瞥をくれると、付き人にあごで合図した。
「おい、じゃまだ」
付き人は俺の肩を突き放して向こうへ押しやった。
「待ってくれ、俺は日本人格闘家だ。サガット、あんたとぜひ勝負させてもらいたいんだ」
サガットは、ふん、日本人かと言い捨てただけで意に介さない。俺は食い下がった。
「俺は真の強さを求めて世界の強豪と闘う旅をしているんだ。あんたと闘わずして真の格闘家にはなりえない。頼む」
俺は頭を下げた。本当にサガットと闘いたかった。
サガットはあごをなでながらしばらく黙っていた。
「お前みたいな命知らずな奴は痛い目にあっておく必要がある。アドンとなら勝負させてやろう」
アドンと呼ばれたのはサガットの付き人のようだ。サガットの横で俺をいぶかしそうに見ていた。
「待ってくれ。俺がこの男に勝ったら、俺と勝負してくれるのか」
「よかろう。ただし、アドンに勝つことはできんがな」
アドンと呼ばれた男は面倒くさそうに言った。

「ふん、日本人ごときが俺に勝てるわけがない」
俺は高らかに言い放つアドンに足払いをかけた。見事に転倒したアドンを抑え込み、絞め技へともちこんだ。
「ウグッ……！」
アドンは真っ赤な顔をしてこらえていたが、とうとう観念して地面を叩いた。
周囲にいた者は、俺を見る目を一変させた。同時にアドンを見る目をも。それはサガットもまた、同様だった。
顔のほとぼりが冷めたアドンは、ゆっくりと立ち上がると、肩を上下させながら叫んだ。
「今のは卑怯だぞ！　こんなところで不意打ちをかけるなんて」
「見苦しいぞ、アドン。隙を見せたおまえの負けだ」
サガットはアドンの言葉をさえぎるように言い放つと、俺に不気味な笑みを見せた。そしてそのまま背を向けるとこう言った。
「明日のこの時間にここへ来い。勝負を受けてたとう」
隻眼の猛虎は、リングへ向かって通路を歩いて行った。

翌日。
約束どおり俺はコンディションを整えながらサガットを待った。
ムエタイはタイの人々にとって大きな楽しみでもある。本格的な試合は夜の八時以降に行なわれ、一流選手による試合はテレビ中継されることもある。国民的英雄であるサガットが出場する日は、たいていがテレビに放映されるようだ。ことに、今日は日本からの挑戦者という触れ込みで実況中継されるらしい。
スタジアムはすでに熱気が充満している。昨日の一連の騒動を起こした俺とサガットを相手にどんな試合をするのかが、もっぱらの観衆の関心ごとのようだ。それは賭け金に反映されるため、皆躍起になっていた。ただし、俺に勝機があると見る者はほとんどいなかっただろう。
会場が一気にどよめいた。サガットが入場してきたのだ。サガットは黄金のガウンをまとい、王者の貫禄を放っている。観衆の歓声を背中に浴びたサガットは、悠然と俺の前に立ちはだかった。そしてこう言った。
「今ならまだ間に合う。逃げるなら今だ」
「逃げるだと？　こんなチャンスをみすみす逃すわけがないだろう」

勝負の火蓋は切って落とされた。
サガットは黄金のガウンを脱ぎ捨てた。その腰には重厚な黄金のチャンピオンベルトが巻かれていた。ベルトは丁重にスタッフに預けられた。サガットはその場に跪くと、闘いの神に祈りを捧げるワイクルーという演舞を始めた。サガットの祈りは、他者との隔絶された空間を作り出していた。神と一体化させるべく祈りを捧げている姿から、国は違えど武道の精神に相通じる何かを感じていた。
観衆もこの儀式を敬虔な精神で受け止めていた。先ほどまで雑然としていた会場がいっぺんに静まり返ったからだ。
サガットの祈りは終えたようだ。
俺は中央に歩み寄ると、一礼して構えた。
空気が弦のようにピンと張り詰めている。観衆は、はじめて見る異種格闘技戦に固唾をのんで見守っている。俺はただ一点、己に集中していた。
ムエタイは、キックボクシングと理解すればよいだろう。独特のにじり寄る構えから、華麗に繰り出す長い脚を鞭のように自在に操る。その鞭に仕留められたら、即K・Oにされるおそれは充分にある。それほどの威力を帯びた脚力を前に、俺はじっと構えていた。
互いの空気と空気のつなぎ目を狙っていた。
俺とサガットはまるでヘビが見定めていた獲物を捕らえるかのごとく、同時に動いた。
ただ違っていたのは、サガットの持つ長いリーチとの差だった。
俺は寸でのところでサガットの振り上げられた脚を、下腿で受け止めた。痛烈な音をあげた凄まじい破壊力に、俺の身体はたちまち痛みを超え、痺れに見舞われた。
防御しているその時でさえ、先を読まなければならない。相手の技を身体で受け取り、それを分析するのである。
サガットの長い手足は利点でもあるが、技を仕掛けるまでのストロークが長い。つまり隙が生じるのだ。
この場合、小さな挑戦者は、隙の合間を縫って小出しに技を仕掛けるしかない。
しかし短い手足を伸ばして空振りを切ることは、あまりにもリスクが高すぎる。俺は、サガットの攻撃を受けるばかりで、手出しができないでいたのだった。
観衆から野次が飛ぶ。俺は圧倒的に不利な状況の中にいた。このままでは相手の懐に飛びこむことは自殺行為であろう。サガットは俺が飛び込んでくるのを待っていた。
俺は片足で立っているサガットの足元に注目した。

巨体を支える一点の重心を崩せば、相手を倒すことも可能だ。間合いを見極めて、ローキックを試みた。

「その程度か」

サガットは高らかに笑った。俺の攻撃を受けてもびくともしない様子をアピールしたのだ。

観衆は一斉に湧いた。

これをきっかけに、サガットの攻撃モードにスイッチされた。

蹴りと突きの見事なるコンビネーション――めくるめく技の披露――それは芸術でさえあった。俺は後退と防御しかできない背水の陣の真っ只中にいた。

このままでは確実にやられる。

どうにかしてサガットの術中から抜け出さねばならない。しかしサガットのキック力はすさまじい。俺はとうとうサガットの足元に崩れた。

レフェリーが仲裁に入る。しかしすぐさま試合は再開された。

俺はファイティングポーズをとったが、サガットの身を削るような攻撃の効果がいよいよ発揮されることになった。膝が抜けたため、足元からバランスを崩し、再び倒れこんでしまったのだった。

万事休す。

サガットはとどめの一撃を狙うべく、勢いをつけて、拳を上段に振りかぶった。その時――俺の体は右へ回転してサガットの渾身の突きをかわした。サガットの拳はマットに激しく打ちつけられた。その一瞬の隙を、俺は狙いを定めていた。

サガットの正中線めがけて、深く身体を沈めた状態から天高く右拳を突き上げる――。

「昇龍拳！」

拳の軌跡を描くようにサガットの体幹から鮮血がほとばしり、巨体は豪快に倒れこんだ。その姿は、天にそびえたつ大木が切り倒されたかのような光景だった。

俺は着地した瞬間、サガットがもう起き上がれないことを悟った。サガットは大の字になったまま、動かなかったからだ。俺はあがった息を整えながら、構えを解いて地に叩きつけられた帝王を見下ろした。

サガットの意識は失ってはいなかった。その片眼に、リング上に照らし出された光を一点に集約したまま、天井を見つめていたのだった。

会場は静まりかえっていた。

まさかの王者の敗北を、誰もが夢ではないかと疑い、それが現実であることを確かめるまでに、沈黙の時間を要したのだろう。

レフェリーが俺の腕を掴んで振り上げた。

「勝者、リュウ！」

得体の知れない日本人格闘家の勝利を宣言したレフェリーでさえ、何かの間違いではないかという疑念が掴んだ手から伝わってきた。

俺は天井に向かって掲げられた腕を下ろした。サガットはセコンドたちに抱き起こされ、リング下へと下ろされているところだった。俺もリングを降り、サガットのそばへと歩み寄った。俺は何かを言いかけたが、やめた。サガットの独眼には、あらゆる感情が宿っているようだった。そんな感情を宿した光が俺を突き刺していた。

「リュウ、おまえの名を覚えておこう。今度おまえを倒すためだ。この屈辱は必ず晴らす」

俺は何も言わずにサガットから遠ざかった。

サガットのあの眼。憎しみさえこもった、怒りにふるえていた眼を、俺は一生忘れないだろうと思った。

その直後、俺が我に返るきっかけを与えたのは、観衆の怒号と野次と紙屑の嵐だった。

先ほどまで英雄だった男を、得体の知れない日本人格闘家によって、敗者におとしめてしまった罪は大きい。俺はいち早く会場を出るべく、足早に出口へと急いだ。

翌日。

メディアはサガットの敗北をこぞって取り上げた。タイ国民ならばそのニュースを心地よく受け止める者は誰一人いないだろう。なぜなら無名の日本人が王者を打ち負かしただけでなく、タイの英雄の胸に大きな傷跡を残したからだ。

俺はムエタイの王者に勝った。俺は興奮冷めやらず、歓喜に酔いしれ、魂が打ち震えて眠れない夜を明かすはずだった。それなのに、そうではなかったのだ。

あの眼だ。リングに伏せったサガットが俺を見上げていた眼……。勝者であるはずの俺が、なぜこんなに後味の悪い思いをしなければならないのかが、理不尽だと思った。敗者は素直に負けを認めるべきではないか。

どちらかが勝ち、負ける。傷つきもする。勝負とはそういうものだ。俺が勝って何が悪い？　スタジアムの観衆はもとより、タイの国中の人間が俺の勝利に不服だとは心外だ。強い者は強いと認めさえすればよいのではないか。サガットを倒した俺が新王者となって

当然のことではないのか？　それが何だ、俺はすっかり悪者呼ばわりではないか。俺は勝利した喜びよりも、苛立ちに心を煩わせていたのだった。

タイの王者を破ったとはいえ、黄金のガウンなんてものをまとうわけでもない。ただ気の向くまま風の吹くままに動いていた俺は、ヒッチハイクで一台の車に乗り込むことに成功した。

運転手は五十代くらいのおやじだ。気のよさそうなおやじは、目的地に急いでいるわけでもなく、積み荷を遠方に運ぶためだけに雇われたらしい。それさえ済めば、賃金を受け取れるというわけだ。その間、退屈だからという理由で、鈍行運転で走行中に俺を拾ってくれたのだ。

おやじは車を止めると俺を見て言った。

「おや？　あんた日本人じゃないのか。正直言って乗せたくないが、あんたがサガットを負かしたわけじゃない。まあ、乗りな」

おやじはまさか、俺がサガットを負かした張本人だとは知らずに受け容れてくれた。Tシャツにジーンズ姿で、寝袋と大きなザックを背負った俺を見て、おやじは俺をただの旅行者と思ったようだ。俺は助手席に乗り込んだ。

「昨日の試合を知ってるかい？　日本人がムエタイの無敗の帝王を破ったのさ。こんな虫の居所の悪いことはない。タイの国技の面目丸つぶれだ。これじゃあ、ムエタイは世界一強い格闘技と言えなくなっちまうじゃないか。あんたもそう思うだろう？」

急に問いかけられて、俺は返事に困った。

「そ、そうだな」

「それも、サガットよりずいぶん小さい相手に負けたんだから、なおさらだよ。本来なら試合するはずのない相手だったんだ。ほら、ふつうは体重別だろ。それがサガットの要望で無差別級の試合をした結果があれだ。まったく、恥さらしもいいとこだ」

おやじは頭に血がのぼっていた。車のスピードも幾分速くなっていた。

「だがな、サガットは本当に悔しいだろうよ。ムエタイをここまで盛り上げてきたのはサガットなんだからな。ムエタイの選手に敗れたなら、まだ面目を保てただろうに」

俺は黙って聞いていた。

「タイのファイターは皆、貧困層出身の若者たちなんだ。彼らはムエタイで強くなりさえすれば、富を得られると信じているのさ。サガットだってそうさ。シューズも買えないくらい貧乏だったんだ。それが富も名誉も名声も得た英雄になった。サガットは貧困層の少

年たちの夢と希望だったんだ。サガットが負けたということは、少年たちの希望を奪ってしまったことになるのさ。本人はさぞつらいだろうよ」

俺は車窓に流れる林の風景を眺めてはいたが、意識はおやじの話に向いていた。おやじの苛立ちの本当の理由がだんだんわかってきた。勝負事は勝つか負けるかの単純なことにすぎないが、そこに人間の生き様を重ねると、単純な話では済まなくなってくる。

誰しもそこに至るまでの歴史があり、現実的には生活がかかってくる。勝負の世界に情け容赦はないのだ。

サガットは強いファイターとしてだけでなく、英雄としての役割を担ってきた。その役割を取り上げられてしまったとしたら、少年たちに対しての責任はどうなるのだろう。胸に大きな傷跡をつけられたサガットは、英雄の座から転落した烙印を押されたことになりはしないか。サガットを打ち負かした俺は、サガットの人生と少年たちの夢を壊した乱入者にすぎなかったのではないか。俺はこのときはじめて、自分が悪役だったということを自覚したのだった。

「サガットは、俺たち国民の誇りなのさ。サガットが傷つけば、俺たちだって傷つくんだ。わかるかい？」

それからも、おやじは口角泡を飛ばしながらムエタイの話を延々としゃべっていた。道のりはずいぶん遠くへと進んでいった。

おやじの話をバックミュージックのごとく耳から耳へと通り抜けながら、俺はザックに入れてあった、チャンピオンベルトを取り出した。

ずっと、サガットはこれを守ってきたのだろう。それを俺が奪った。心の底から勝利を喜べなかった理由を、俺はどこかでわかっていた。それに、俺はこんな物が欲しくてサガットと勝負したわけではないのだ。

おやじは俺の膝の上に出されたチャンピオンベルトに気づくと、目を白黒させて言葉にならない声を発した。

「あ、あんた、そそそ、それは……！」

「ここで止めてくれ。世話になった、礼を言うよ」

おやじは車を停車させた。

「これを預かってくれるかい？　俺には荷が重すぎる」

俺はおやじにチャンピオンベルトを手渡した。おやじは予想以上にベルトが重かったらしく、両手で受け取った手が膝まで落ちた。

俺は車から降りると、ザックと寝袋を肩に背負った。おやじはチャンピオンベルトをそのままに、茫然としていた。おやじの車は長い間停車したままだったが、俺が辻に入ると見えなくなった。

それからだ。俺はただ勝てばいいということではなく、闘いそのものに意味を問うようになったのは。

それ以来、その答えを探す旅となった。ただ、相変わらず俺は強い対戦相手を求めていた。

ときどきは日本に帰り、日雇いのアルバイトをして渡航資金を稼いでは海外に飛び出し、海外では賭博試合で稼いでは新たな強者を求めて歩いた。こんなふうに世界中を転々と渡り歩く生き方を、二年間も続けていたのだった。

☆　中国・上海へ

旅の途中でたどり着いたのは、発展と混沌が渦巻く都市、上海だった。

宇宙のモニュメントを思わせる浦東新区はまるで未来都市に迷いこんでしまったかのような錯覚を思わせる。一八四二年のアヘン戦争後に開港させられたこの都市は、絶えず近隣の地から流浪者を受け容れてきた最も異質な文化都市である。

近代化が著しく進んでいるここ上海の風景は、自動車を利用する一部のブルジョワが増えたとはいえ、自転車通勤でひしめき合うその風景は残されたままだ。上海の表玄関を通り、庶民の住む裏通りの街並みを歩けば、妙な安心感を覚えるのはなぜだろう。おそらく、俺の知っている中国の風景が変わることなく守られていたからなのだろう。そんな上海の下町で中国拳法を使いこなす相手とストリートファイトしていたときのことだった。

「あなたたちを決闘罪、および傷害罪、賭博罪の現行犯で逮捕する！」

そのひと声で、そこにいたすべての者がクモの子を散らしたかのように一斉に退散した。ただし、俺ただひとりを除いて。

そこにいたのは、まさに掃き溜めに鶴。

「君は、たしか……！」

見覚えのある顔を見た瞬間、俺は逃げることをすっかり忘れてしまっていた。そこにいたのは、かつて俺をシャドルーから守るためにやって来たと言った、女刑事・春麗だった。
「こんなところで会うとは奇遇だな」
「あなたこそ、こんなところでストリートファイトしていたなんて」
春麗の服装は青いチャイナカラーのジャージ姿から、青いチャイナドレスの闘衣に変わっていた。
思わず目を引いたのは、チャイナドレスの深いスリットから覗かせた、真っ直ぐに伸びた――しかし強靭に鍛え抜かれた――脚だ。腰に手を当てて仁王立ちしているさまから、その姿に少しも恥じらう気配が感じられない。惜しげもなく露わにされた大腿部は、おそらく足技を駆使するためのものなのだろう。
しかし男にとってその姿は、冷静さを失わせるのに大いに役立たせるのもでもある。それは彼女の実力の一部でもあり、それだけで大技として発揮しうる要素として成していた。
色白の肌に、一点の迷いもなく一筆で描かれたかのような切れ長の目は、一瞥するだけで男どもを殺すほどの眼力を具えている。しかし決して鉄壁の女という印象を与えないのは、大人の女性になっても、中国娘らしく、髪を二つの白いシニヨンにまとめ上げていたからだろう。真っ白く長いリボンが、うなじの後れ毛とともに風にたなびかせているさまは、格闘家としての春麗の、唯一の隙をうかがわせていた。
春麗はまだ少女の面影が残っていた当時と違って、華のある女性らしい面と、蠱惑的な雰囲気を併せ持った、およそ格闘家らしからぬ体裁をたずさえた格闘家になっていたのだ。いや、格闘家ならばそれだけで至極やっかいな相手であることは容易に察しがついた。
「君には世話になったな……というより、あのときは悪かったな」
春麗の表情が曇った。そりゃそうだろう。かつて春麗はインターポールの命令により、俺を「保護」する任務を受けていた。それなのに俺は春麗の目を盗んで脱走したのだから。おそらく、春麗は上司にこっぴどく叱責されたに違いないのだ。
「いいえ、あのときはわたしの失態だったわ。あなたのせいじゃない」
そう言ってからも、春麗は硬い表情を崩さなかった。
「あれからどうしているかしらと思っていたけれど……残念だわ」
「どういう意味だ？」
「一流の格闘家なら、ストリートファイトなんかしないはずだからよ。自分の格闘術に誇りを持っているなら、自分の技をケンカの道具にしないはずよ」

春麗は腕を組んで俺をにらみつけるように言った。どうやら俺は歓迎されてはいないようだ。春麗との再会劇は、喜びを分かち合うどころか、険悪ムードとなっていた。
「俺は武者修行のためにストリートファイトしているだけだぜ」
「そうかもしれないわね。わたしは格闘家として言っているの。格闘家としての誇りを持たない人は認めたくないだけ」
「ずいぶん手厳しいな」
俺はなぜ春麗が不機嫌なのかなど、知る由もなかった。しかし春麗の前にしてみると、なんとなく師匠に叱られているかのような錯覚を覚えた。剛拳が生きていたら、おそらく闘いを求めて放浪の旅をしている俺をとがめたに違いなかったからだ。
その一方で、春麗が一流の中国拳法の使い手だったことを思い出すと、とたんに俺の血が騒ぎだした。
「俺は格闘家としての誇りは持っているよ。それなら、試合の申し込みを受けてくれるよな」
「そういえば以前あなたと約束していたわね。今度会ったら試合をするって」
このときの春麗の表情は、刑事としてではなく、格闘家としてのものに変わっていた。俺はしめたと思った。春麗はしばらく考えていたが、すぐさま決心した表情になった。
「いいわ。ただし今は勤務中だから、一本勝負ということで」
春麗の案内でたどり着いたのは、そこからわずか数分のところにある、武術道場だった。
「ここは父が残した道場よ。今はわたしだけしか使っていないの」
新しくはないが、手入れが行き届いた道場だった。春麗の父親らしき武人の色褪せた写真がかかげられている。その横には、春麗に良く似た女性――おそらく春麗の母らしき人物――の写真もあった。道場の壁には、さまざまな武具が掛けられていた。ここは春麗が格闘家として育った場所だったのだ。
春麗は腕時計を一瞥してから、両手を組んで手首を回し、つま先を片方ずつ地に付けて足首を回しはじめた。俺も拳を鳴らして間合いをとった。
「断わっておくけど、手加減無用よ」
「ああ！」
これが俺と春麗の、あるいは女性格闘家との初対戦だった。
女性と闘った経験がない俺は、まず春麗の出方を見ることにした。しかし一瞬にして、女性だからという先入観は音を立てて崩れ去ることとなった。

春麗は直線上での攻撃は一切仕掛けてこなかった。そのために、こちらの攻撃もヒラリとかわしてしまう。円の動きで、俺の死角をすり抜けて巧みに攻撃してくるのだ。こちらが攻撃しようとしたときにはすでにそこに春麗の姿はなく、春麗の姿を認める前に俺は技を食らってしまっていた。

春麗の動きを捕らえようとすれば、まるで鹿が丘を駆け下りるかの如くに跳躍して捕らえることができない。しなやかな体躯と四肢をまるで、新体操の選手のように優雅に使いこなし、次々と技を仕掛けてきた。春麗は俺にとって至極やりにくい相手だったのだ。なるほど、手加減無用というわけだ。

「ハーッ、ヤッ、ヤッ、ヤッ、ヤッ、ハイーッ！」

結局は、鍛え抜かれた春麗の脚から繰り出す蹴りの応酬に、俺は防御も利かずに後方へ転倒してしまったのだった。春麗との初対戦は、まったく翻弄されっぱなしの結果に終わった。

「あなたの実力はその程度なの？」

春麗はひっくり返っている俺を冷ややかにに見下ろした。

「驚いたよ、君は強いんだな」

「言ったでしょ、手加減無用よって」

春麗はまるで気高い女豹のようだった。軽やかな身のこなしに加えて、決して触れることを許さない鉄壁なオーラを放っていた。春麗との初勝負は、俺の完敗だった。

「あなたの実力はそんな程度じゃないはずよ。わたしはあなたの本当の実力を知っているもの」

やはり春麗は単なる拳法の達人ではなかった。気が強く、プライドも高い。おまけに確固たる信念も持っている。そんじょそこらにいる格闘家ではない。それ以上に女ときた。格闘は男のものだと思っていた俺にとって、今回春麗にあまりにあっさり負けてしまったことに、むしろ痛快に感じていた。

「君の拳法は見事だったよ。だが俺も負けっぱなしでは気が済まん。君ほどの実力の持ち主なら、また勝負を申し込みたい。受けてくれるか？」

春麗は俺の言葉にしばらく黙って考えていた。その横顔さえ、隙がなかった。

「あなたのように試合を申し込みに来る人はいくらでもいるわ。でも、あなたはわたしを女だからといって馬鹿にしなかった。だから少しくらい相手にしてあげてもいいわ」

「と、いうことは……」

「今よりもっと腕を磨いて来ることね」
「ああ！　必ず強くなって君に再度挑戦するよ」
俺は興奮冷めやらぬうちに、春麗とその場で別れた。
軽やかに身を翻して去っていった誇り高き女性格闘家は、男を手玉に取るほどの拳法の達人だった。単に強いだけでなく、彼女には格闘家としての美学がある。そうだ、俺はそういう相手を求めていたのだ。
最高の勝負をするならば、春麗のような誇り高き相手と手合わせしてみたい。高みにいる相手に自分も追いつき追い越したい。俺は春麗の後ろ姿をじっと見つめながら興奮している自分に気づいていた。
（世界は広い。俺よりも強い女性がいたなんて……！）
春麗の強さに、心震わせずにはいられなかったのだった。

☆　ブラジル・アマゾンへ

俺は相変わらず闘いを求めて旅していた。強い相手と闘えるのなら、日本で暮らすよりも定住せずに旅をしていたかった。
そうすれば、出会いは必ずやって来た。強い相手を求めていれば、必ず強い相手が現れた。ストリートファイトが生業となっていた俺は、いつしか名の知れたファイターとして賭け試合では稼ぎ手扱いされるようになっていた。
アジアで渡航費用が十分貯まったところで、大陸を移動することにした。太平洋を渡って中米に入ると、どうせなら日本からもっとも遠い国へ行ってやろうと思い、ブラジルを目指した。野生の血が騒いだのだろうか、今回はふいにアマゾンの奥地へ行ってみたくなった。
アマゾンへ向かうために必要な道具や装備を整え、飛行機で飛んだ。ブラジリアのバスターミナルから夜行バスに乗り込むと、国土が広いために二十四時間走りっぱなしだった。さらに長距離バスに乗り換え、長い雄大な河をボートの流れに任せてただ導かれるがまま、アマゾン入りを果たした。
アマゾンの大地に降り立ったとき、見たことのない奇妙な形状の葉っぱの木や、根っこ

がむき出しになった木が「おまえは誰だ」と尋問するかのようにざわついた。聞いたことのない野鳥の声がジャングルの鬱蒼とした空間の中でこだましている。とにかく蒸し風呂のように熱い。おまけに吸血性の虫が血のにおいを敏感にかぎつけやってくる。蚊にヒル、ノミ、シラミ。これらはいずれもアマゾンサイズとなっており、やけにでかい。いちいち叩きつぶしていてはらちが明かず、体中が真っ赤に腫れた。アマゾンの敵はヒョウや毒ヘビだと思いこんでいたが、小さな吸血鬼がいちばんの難敵だとは心外だった。

たどり着いた先は、先住民の住まう土地。ここは大自然そのものと共生する道を守り続けている民族の地だった。彼らの土地はアマゾンのインディオ保護区に指定され、むやみに文明をもちこませないようにしているようだった。

「おまえは誰だ」

俺はジャングルではじめて人間から声をかけられた。声のした方を向くと、一人の男が……いや、獣のような人間……が立っていた。俺はその人物が本当に人間なのかを確かめた。

男は緑味をおびた茶褐色の肌に、赤毛の髪が伸びている。胸や四肢も赤毛の剛毛で覆われていた。何よりもその容貌は、口蓋が発達しているために、出っ歯でなおかつ、牙のように鋭い歯をしているのだった。耳には大きなリング上の耳環を付けており、足首にも輪っかがはめられていた。動物か魚のキバのようなものが連なった首輪もぶら下がっていた。衣服といえる代物とは程遠く、茶色い布切れを腰にまとっているだけだ。男はこちらに視線を外すことなくにらみ続けている。まずは侵入者である俺の方から挨拶するのが筋だろう。

「俺はリュウ。日本から来た」

握手を求めて手を差し出すと、男は歩み寄ってきた。

「何しに来た」

「俺は強い相手を求めて旅をしているんだ。旅の途中でアマゾンに行きたくなって、ここへ来たんだ」

「強い奴に何する」

「勝負する」

「勝負って、何だ」

「競争するのさ」

「競争って何だ。食えるのか？　それ」

「力比べするってことだ」
どうやら、相手は相当な未開人らしい。こんなことを一から説明せねばならんとは。残念ながらここには俺の相手はいないようだ。ひとつ大きく息を吐いて、吸血鬼にやられた腕をボリボリ掻いた。
「力比べ、食えない。おまえ、変な奴」
そう言って、男は大口を開けて笑った。キバのような歯が光っていた。
「日本人が来たのははじめてだ。おまえは白人じゃないから追い出さない」
ここでは白人を受け容れないようだ。
「おまえ、おもしろい。気に入った。こっち来い」
何が面白かったのか見当もつかなかったが、ここで一人残されては帰るに困る。とりあえず男の案内する方へついて行った。
ジャングルの陸地にはいくつかの部族が一定の距離を保って共存しているらしい。狭い道を十分ほど歩いて行くと、ヤシの葉で作られた家が見えてきた。すると集落が集まった広い空間に出た。そこで暮らす村人もいた。基本的に全裸で男女とも腰巻ひとつだ。耳環に首輪は基本装備のようで、これらのデザインにそれぞれの個性を表現しているようだった。
男は村人に声をかけながら奥に進んでいった。俺は村人の好奇の視線を一身に集めながら歩いていた。
子どもたちが好奇心旺盛なまなざしで俺を見ている。子どもは皆、全裸だ。おそらく彼らにとっては、目鼻や口を恥じることがないように、性器もまた自然の身体の一部として認識しているのだろう。性についての恥ずかしいとかいやらしいという概念は、もしかしたら文明人の色眼鏡であって、不自然なことなのかもしれないと思った。
ひときわ大きなヤシの葉の家の前に着くと、男は誰かを呼びに入った。中から出てきたのは、頭に鳥の羽根をつけたかなりの老人だった。顔には入れ墨を施しており、右手には長い杖を持っている。どうやらここの長老のようだ。ここは失礼のないように自己紹介をせねばならんだろう。
「わたしは日本から来たリュウという者です。格闘家として世界を旅しています」
「おぬしがここへ来ることは知っていた。森の精霊が教えてくれたのだ」
俺はどんな返事をすればよいのか分からず戸惑った。長老はそんな俺に構わず言葉を続けた。

「ここはめったに文明人が入れぬよう、森の精霊に守られておるのだ。おぬしは森の精霊の許しを得て、ここにたどり着いたのだ」
「それに、オレの許しも得た」
最初に出会った男が言った。男はにかにか笑顔でなぜか跳ねている。長老が言った。
「この者はブランカ。村の門番をしている。ブランカはこの村一番の力持ちなのだ」
「おいらは白人を追っ払うのと、長老を守るが役目」
そう言って、ブランカとかいう男はゴリラのように胸を叩いた。どうやら、この村でいちばん強いのはこの男のようだ。俺は思わず苦笑した。
「久々の客人だ。皆でもてなそう」
長老はそう言うと、ブランカは大きく二回うなずいて、周囲にいた部族の者に身振り手振りで指示した。するとそれぞれが大きくうなずくと、各持ち場へと歩いて行った。
アマゾンでのもてなしは、日本のそれとは全く違う。そんなことはわかりきっていたが、実際のもてなしは想像以上に度胸が必要だった。まずは食事でのもてなしだ。これが何より衝撃的で、度肝を抜かされた。
狩りから戻った男は、黒いサルの手足を縛って持ち帰ってきた。サルはまだ生きていた。そのサルを、なんと熱湯が沸いた大きな鍋に、いきなり放り投げたのだ！　サルは断末魔の叫びをあげながら死んだ。
考えてみれば、スーパーで売られている肉の切り身を調理したものを口にしたところで、命の尊さを感じることは難しい。目の前で繰り広げられる「命の授業」は、われわれ文明社会に住まう者こそ必要なのだと思った。
茹であがったサルは、毛をむしり取られて大皿に盛られた。俺はとっさに、客人であることを自覚した。インディオたちにとって、生きたサルは最も贅沢な獲物だ。普段は口にすることはないという。その御馳走を遠慮することは、十中八九無礼にあたるだろう。俺は目を閉じてサルにかぶりついたのだった。
そんな俺の内情を知る由もないブランカは、一人の女性を連れてきた。
「これ、オレの奥さん」
ブランカはうれしそうに紹介した。ブランカの奥さんはまだ二十歳くらいで初々しい。俺は握手であいさつした。
「おまえの奥さんは？」
「いないよ」

俺が答えると、ブランカは目を見開き、上半身を広げて後ずさりした。
「おまえ、まだ一人前の男、なってなかったか！」
ブランカの大げさに驚いた様子と言葉に戸惑っていると、長老が言った。
「ここでは成人の儀式がある。男は十八歳になるともっとも高い崖から海に飛び込むことになっておる。これができてはじめて一人前の男と認められるのだ。それではじめて妻帯が許されるのだ」
なるほど、そんな話はどこかで聞いたことがある。通過儀礼というやつだ。俺は長老に聞いてみた。
「ここで男にとってもっとも価値のあることは何なのですか」
「勇気だ」
長老はすかさず答えた。
「勇気がなくては家族を守れん。崖から飛び込む勇気がある者と認められてはじめて、一人前になれるのだ」
確かに、自然と共に生きる民族にとって、危険は常に隣り合わせだ。そんな環境で生きるには強さよりも勇気が必要だ。長老の言葉に、俺は納得した。
「そして知恵だ」
長老は張りのある声で言った。
「勇気ある者には奥さんはひとり、勇気と知恵のある者には奥さんがふたり。だから長老には奥さんがふたりいる」
ブランカが言った。
「ふたりもいて、ケンカしないのか？」
「ケンカしない。皆仲がいい」
「インディオたちは所有するという概念がない。妻も夫を所有するという概念がないし、子どもを所有するという概念もない。ゆえに子どもを村全体で育てることになっておるのだ」
日本では夫婦や育児の問題が山ほどある。その解決策は日本にいればなかなか見えてこないが、ここにいると単純な問題だと気づかされる。日本ではすべてにおいて所有するのが当たり前だから争いが起こるのだ。ここにいると争ってばかりの先進国が野蛮に思えてくるから不思議だ。
「妻帯するのにも意味がある。長老はシャーマンとしての役割がある。精霊とつながるた

めには女性の感性が必要だからだ。おぬしの国とはずいぶん事情が異なるのだよ」
「おまえも崖から飛び込め」
ブランカは、カカカと笑いながら俺の背中を勢いよく叩いた。その一撃が、結構効いた。
食事の後は、村の祭りがはじまった。ちょうど暗くなったころ、たいまつが燃えさかる中、男たちの身体は赤や青の染料で鮮やかに彩られていた。
男たちが手作りの楽器をかき鳴らしはじめた。村全体に音が響き渡ると、なぜか魂が懐かしさを覚えるような、不思議な感覚に陥っていた。ブランカが俺の手を引っぱって踊ろうと誘った。俺はただ楽しくなって一緒に踊ったのだった。
その晩、俺は長老の家に泊まることになった。長老の家に俺を泊めてくれたのは、長老の家が最も大きかったからかもしれないが、長老は俺に何か話がしたいからのようだった。膝を突き合わせての話が始まった。
「おぬしには話しておかなければならんことがある。われわれの現実を、聞いてほしいのだ」
深刻な話が持ち上がってきた。俺は無言でうなずいた。
「アマゾンにはいくつもの部族があるが、ほとんどが白人の持ち込んだ文明によって狂わされているのだ」
俺はブランカとの初対面でのやり取りを思い出した。ブランカは俺を見て、白人じゃないから追い出さないと言っていた。
「白人はわれわれに砂糖と塩とアルコールをえさに近寄ってきた。未知の味覚に狂わされた者は白人が来るのを待ちわびるようになった。われわれの一部を手なずけた後、アマゾンの乱開発が始まったのだ。白人はわれわれ一部の者を意図的にアルコール中毒にし、アマゾン開発に参加すればアルコールを与えたのだ。奴らの狙いは石油の採掘、木材の伐採、そして金採掘だ。金採掘には水銀が使われた。水銀がインディオを水銀中毒にし、アマゾンを死の森へと蝕んでいったのだ」
長老は怒りで筋張った身体を震わせた。
「白人が持ち込んだのは、石油で作ったビニール製品、疫病、それに宗教とお金だ。おぬしらにとっては日常のものであろうがな」
俺は今まで未開の地に住む人々にとって、文明化はよいことだと思っていた。なぜなら不便な生活から解放されると思っていたからだ。しかし現実には、西洋文明がインディオたちを脅かしているという。

俺は何にも知らないで日本の地で西洋文明の恩恵にあやかって、ぬくぬくと生きていたことを初めて知った。そしてどっぷりとその暮らしに浸かりきっていて、何の疑問も持たなかった自分の無知さを恥じた。

「われわれインディオは、生きていく上で必要なものはすべてアマゾンから与えられてきた。富とはアマゾンの自然そのものだった。そしてわれわれは、皆平等だった。それは人間だけでなくすべての存在が平等だったのだ。白人が来てからというもの、必要なものはお金がなければ手に入らぬようになった。貧富の差が生じたことから、嫉妬やねたみという感情が生まれ、争いが起きた。宗教はインディオの精神を失わせた。なにもかもが、狂ってしまったのだ」

長老は、眼を伏せた。苦悩の深さを、思い知った。

「おぬしは我々と同じ黄色人種だ。アマゾンの現状を知り、人々に知らせてほしいのだ。これはわしの一存ではない。森の精霊の意志なのだ」

長老は射抜くような目で、俺を見た。その想いを託すかのように。

俺は通りすがりの一旅人にすぎないが、長老をはじめ、アマゾンのインディオたちにすれば、白人以外の来訪者は助け舟に映るのかもしれない。

この俺に、いったい何ができるだろうか。そんなことを考えているうちに、いつの間にか寝てしまっていた。

結局俺は、ブランカや村の子どもたちに引きとめられて、しばらくこの村にとどまることになった。

彼らとともに生活をしてみて、不便ではあるがただただ自由なのに驚かされた。それぞれの者が得意なことをやっているだけなのだ。たとえばブランカは手製のモリで魚をしとめるのが得意だった。一日のうち、数匹の魚をしとめればブランカの仕事は終わり。あとは自由時間だ。他の者は木の実をとってきたり、畑で収穫物を取ってきたりする。それぞれが食料を持ち寄って皆で食べる。何てシンプルなのだろう。

ここにいればせかせか働く勤勉な日本人が憐れに思えてくる。ここでは朝から晩まで学校や会社に缶詰にされることもなければ、税金やローンの支払いに明け暮れることもない。

ここには学校も会社も警察も病院もない。子どもたちはジャングルの大自然に育まれ、長老をはじめとする知恵者から学び、皆いきいきとしているのだ。おまけに老人はみなピンピンしていた。

今の日本社会がいかに窮屈なのかがここに来てわかった。日本の常識は決して世界の常

識とはいえないということだ。そして、人間はもっと自由な存在なのかもしれないということに気づかされた。

ここにいれば時間も忘れるし楽しかったが、俺には目的がある。アマゾンインディオの皆と別れることは後ろ髪を引かれる思いだったが、一カ月ほどしてアマゾンを後にしたのだった。

☆ インド・ムンバイへ

アマゾンの次は、無性にインドに行きたくなった。俺はインドでもっとも繁栄した都市・ムンバイに下り立った。

都会は近代的な建築がそびえ立ってはいるものの、特徴的な文化は感じられないものだ。しかし爆発的な人口問題を抱える国にとっては、人々の生き様は隠しようにも隠せないほどににじみ出るようだ。壮観な建築物を誇る空港であっても、野宿者の多さときたら類を見ない。おそらくインドではあちこちの駅で同様な光景が見られるのだろう。

インドは新興国として著しい発展を遂げている最中であるが、俺にとってどの国においてもここ数十年の間に発展した都市には関心はない。かつて栄えたその国独自の文明を訪ねることで、今を見つめることに意味がある。

俺はアウランガバードから西へ十三キロの地点にあるエローラ石砦を訪れた。そこは一つの大きな岩山を砦としたダウラターバードがある。木と岩しかないその地は、自然物に人間が施した彫塑の技術が見事に調和している。岩には仏教、ヒンズー教、ジャイナ教の神々の彫刻がなされており、その規模といい、数といい、壮大なものだ。これこそがインドの文化遺産である。

必然の出会いというものは実に奇妙だが、この広大な地球の、それも人口が過密するインドのたった一点の場所で出会わされる因縁の深さを思い知ることになったのだった。

ダウラターバード砦の城門で、俺は足を止めた。背中には冷や汗が滴り落ちた。視線の先には……あのサガットが――。

互いに眼を見開いたまま、硬直状態で立ち尽くしていた。俺とサガットをつなぐ空間だ

けが、時間が止まっていた。
いったいなぜ？　出会わなければならなかったのだろう？
それは多分、清算せねばならない問題が、俺とサガットとの間にまだ残されていたからだろう。おそらく出会いの必然性の深遠さと驚愕の思いは、サガットとて同じだったに違いない。
当時のサガットと違っていたのは、サガットの周りに群れていた付き人たちがひとりもいなくなっていたことだった。サガットも旅をしていたのだろう、リングの上にまとっていた黄金のガウンの代わりに、マントを翻していた。
「リュウ、なぜおまえがここにいる？」
唸るような声で、サガットが言った。
「俺は強い相手を求めて旅をしているんだ。あんたこそなぜインドに？」
「タイを出て一から出直したのだ。わたしはおまえともう一度闘うためにすべてを捨てたのだ」
「俺と闘うために、すべてを捨てたのか？」
「そうだ。すべてを捨ててから二年……。二年だ。この二年間の苦しみは誰にも分かるまい」
サガットの隻眼には鈍い光が宿っていた。サガットは、今なお俺を恨んでいたのだ。俺は何も言えなかった。
「おまえに負けたことで、わたしは帝王の座を引きずりおろされたのだ。地獄を見た男の苦しみなど、おまえにわかるまい」
俺とサガットは、人気のない荒野へと方向転換した。俺たちは、無言で再戦を果たすことを同意していたのだった。
荒野の立ち枯れた木々に囲まれた茂みにたどり着くと、俺とサガットは互いに向かい合った。
サガットは羽織っていたマントを勢い良く放り投げると、ボクサーパンツが露になった。
俺はサガットの胸の傷跡に目が止まった。その傷は俺が二年前につけたものだ。傷跡を露にしているということは、サガットにとって大きな意味があるのかもしれない。
一度地面を舐めた経験が、サガットの精神を支えてきたのだろうか。あるいは臥薪嘗胆の思いで再び帝王の座に返り咲くことを目指してきたのだろうか。
いずれにしても、この傷こそサガットを奮い立たせる原動力として、日々修行に励んで

きたのだろう。
隻眼から差し込む強烈な光が、俺を突き刺す。そのせいで俺の目はサガットに捉えられたまま、金縛りにあったかのように身体を動かせずにいた。サガットの目から野獣に首を掻っ切られるかのような宿怨の情を感じたからだ。
そのとき俺は、内からうごめく闇を感じた。
「クッ……クソっ！　またか！」
その場にうずくまり、過去に二度経験した感覚が、足音を立てて忍び寄ってきているのを感じ取っていた。心拍数は急上昇し、血管が沸騰しているような感覚と、滴り落ちる脂汗。そして遠のいていく意識……。
「う、ウオォーーーッ！」
サガットの負の情念に触れたことにより、再びあの忌まわしい殺意の波動が俺の人格を支配したのだった。
トランス状態に陥った俺は、通常はある程度のパワーしか出せないように抑制されているはずの肉体が、驚異的な肉体へと変貌し野獣のごとくサガットに牙を剥いたのだった。
（嫌だ！　俺はもう狂いたくなんかないんだ！）
遠くの方で理性の俺が叫んだが、あまりにも無力だった。サガットに蹴りと突きを絶え間なく浴びせながらも、狂気と理性がせめぎあっていた。
断片的な記憶を繋ぎ合わせてみれば、やはり俺は信じられない技を次々と出していたようだ。殺意の波動に支配されたのは、これで三度目だ。
どうやら負の波動に接触してしまうと、殺意の波動が稼動してしまうようだ。それも自分の波動よりも、より高い負の波動をもった相手に触発されると、俺の殺意の波動のスイッチが入ってしまうようなのだ。
その証拠に、今まで触発された相手が、豪鬼、ベガ、サガットといった強豪ばかりだったからだ。そして彼らは皆、負の波動が正の波動を凌駕している者たちだった。
サガットの巨体はまるでサンドバックのようだった。
サガットは理性を失った俺に攻撃の嵐を受け、ただひたすら防御体制に専念していた。狂った相手とまともに組むつもりがないのか、あるいはまったく手が出せないのか。そんなことを思い巡らす余裕など、理性の削げ落ちた俺にはなかった。俺はひたすらサガットを切り刻んでいたのだ。
一方で、俺は無我夢中で狂気から目覚めようとあがき叫び、のた打ち回っていた。その

功を奏してか、狂気の俺の身体は金縛り状態になり、サガットと一時休戦状態となった。
サガットも人間離れした俺の狂気の攻撃に耐えかねて、相当ダメージを負っていた。
正気が狂気に対して優位に変わったとき、俺は自分の肉体をようやく取り戻すことに成功した。とはいえ、自らが肉体に与えたダメージは相当なものだった。
俺は肩で息を切らしながら言った。
「サガット、試合を仕切りなおしてくれないか。さっきの俺は、俺じゃない」
サガットは間合いを保ったまま肩を上下に動かしながら、俺を睨んでいた。その目は一層怒りに震え、俺から決してそらすことはなかった。
「見損なったぞ。リュウよ、おまえは魂を悪魔に売ってまで、強さを求めるというのか」
怒りから悲しみに変わったサガットの目を、俺は何も言えずにじっと見つめていた。
「この二年間、わたしはおまえの技を超えるためだけのために、血のにじむような修行をしてきた。おまえに勝つことだけを考えてここまで来たというのに……！　ウオーッ！」
咆哮とともに、サガットは俺に向かって走り出し、低く身体をかがめた状態から一気に拳を突き上げた。
「タイガーアパカーッーー！」
気づいたときには、俺の身体はすでに空中に舞い上げられていた。
踏み固められた土の地面に、鈍い音と痛みが俺を捕らえた。俺は、そのまま動けずに天を仰いでサガットが何かを言うのを待っていた。
「弱いおまえに勝っても何の意味もない」
淋しげに去りゆくサガットの背中を見届けた後、俺は地面にひれ伏していた。サガットの言葉が俺の心に突き刺さったまま、いつまでも痛みうずいていたのだった。

☆　ヒマラヤ山脈へ

それから一週間ほど、安い宿に転がり込んでは、ムンバイの下町をふらつき歩いていた。
幸か不幸か、ボロ布のような日本人がうつろな目をして歩いていても、警察沙汰にはならずに済んだ。

ここ一週間、考えることは殺意の波動のことばかりだった。
俺が弱いだと？
少なくともサガットに負けたのはこの俺じゃない。負けたのは狂気の俺だ。本当の俺はただ強くなりたいのだ。
そのために、日々精進してきた。なのになぜ、狂気の自分が存在するのだろうか。俺はなぜ、殺意の波動を発動してしまうのだろうか。そしてどうしたら殺意の波動を打ち消すことができるのだろうか……。
今回のサガットとの対戦は、予想外の出来事だった。不測の事態に対処できるよう修行を積んできたというのに、殺意の波動に支配され、人格を失うようでは何にもならない。俺はこれまで何のために修行をしてきたのかがわからなくなっていた。
もうひとつ考えることは、あのサガットが昇龍拳を我がものとして体得していたことだ。多少の差異はあれども、ムエタイのスタイルでアッパーカットの必殺技を、新たに編み出したとしか思えないのだ。
サガットは俺への復讐のために、憎き昇龍拳を研究しつつ、肉体に刻みつけられた深い傷を直視して修行してきたにちがいない。
今回の勝負は、俺自身の狂気とあがきに敗れ、血のにじむ思いで成し遂げたサガットの実力を見せ付けられたものだった。
自分自身に負け、サガットに打ちのめされては、さすがの俺も落ち込むしかなかった。
狭い部屋に独りでいると、ますます陰鬱になりそうで、宿のロビーに置かれたテーブルに臥せって酒に入り浸っていた。
宿の主人は俺を不審な客だと思ったのだろう、俺に声をかけてきた。
「あんた、ひどく疲れた顔をしているね。日本人だろう？」
俺は、うなだれていた重い頭を持ち上げた。
「そうさ。ただし、はみ出し者の日本人さ。俺をやっかい払いしたいんだろうが、心配はいらねえ、金ならここにあるぜ」
ストリートファイトで稼いだ札束をザックから取り出して放り出してみせた。
主人は腰に手を当てて、ため息混じりに首を振った。
「その様子じゃ、行く当てもないんだろう？　だったらヒマラヤ山麓にあるシッキムを目指すといい。そこに悟りを開いたヨギがいるという噂だ」
「ヨギ？」

「ヨガの行者のことさ。一日中ヨガのポーズを取りながら瞑想している連中だよ。中でも噂のヨギは、宙に浮いているらしいぞ。おまけに瞬間移動もできるそうだ。いつか旅人が話していたよ」

宿の主人の話はまるで嘘っぽく聞こえた。正気であったとしても聞ける話ではない。宙に浮いているだと？　おまけに瞬間移動ときた。ばかばかしい！　しかし、今の俺の体たらくときたらどうだ？　俺が真の格闘家を目指していると言っても誰も信用するまい。だったら主人の話も同じようなもんだ。

とにかく今の状況から脱皮できるのなら、どんなものにでもすがりたかった。俺は殺意の波動に支配されることを恐れて、ストリートファイトの世界に戻ることさえも躊躇していたのだ。

主人が言うとおり、俺には行く当ても目的もない。だったら本当に、そのヨギが宙を浮き、瞬間移動する人間なのかを見極めに行ってやろうじゃないかと思ったのだった。

翌朝、わずかな荷物を詰めたザックを肩に担いで宿の玄関に出た。

「行くのかい？」

宿泊費の勘定を済ませてから宿の主人が言った。

「ああ。インドの奇人を見つけに行くという目的ができたよ。ありがとう」

外へ出ると北に向かって吹く風が、追い風となって俺を後押しした。俺ははるか北東にあるというシッキム目指して放浪の旅を再開したのだった。

そこはネパール、チベット、ブータンに囲まれた山岳地帯だった。長い間ヒマラヤ山脈の奥深い地域でシッキム王国として鎖国していたらしい。一九七五年にインドの最後の州として吸収され、今に至るという。シッキムのシンボルとされる八千メートル級の高峰カンチェンジュンガは信仰の対象とされている。高低差八千メートルもあるこのシッキムには、多彩な動植物が息づいており、紅茶の産地としても栄えている。

ムンバイと比べると、同じインドとは思えないほどの異世界である。何よりも、ここは寒い。焼け付くほどに暑かったムンバイから北上するにつれ、防寒着を一枚、また一枚と重ねつつ、目的地へとやってきたのだ。俺は宿の主人から聞いた噂を人づてに尋ねながら歩き進んだ。

現地の人は、見慣れないはずの日本人に奇異の目を向けることはなかった。この地はチベット人、ネパール人、そして日本人とよく似たブータン人など多種多様の人種が混在し

ているためなのだろう。俺は行く先々で人をつかまえては、噂のヨギの情報を聞きだしていた。この地ですれ違ってきた人は皆両手を合わせて「ナマステ」という言葉を送ってくれた。

やっとのことで、噂のヨギの素性が明るみになった。ヨギの名前はダルシムというらしい。

何でも、かつてはプロの格闘家として生計を立てていたそうだ。後年に出家し僧侶となって、悟りを求めて北へ東へと移住してきたという。

俺はダルシムがかつてプロの格闘家だったことがある、という点に興味を抱いた。俺自身、格闘家として旅を続けている本当の理由は、強くなるためという目的の根底に、強さとは何かという真実を求めていたからだ。

ダルシムなら、俺の問題を解決することができるかもしれないと期待を抱いていたのだった。

人の噂によると、ダルシムはときおりゾングリ峠に出現するらしい。案内先のその場所は標高四千メートルという、およそ人が住むには不適合の土地だった。

普通の人間ならば、誰しも歩いているだけで息切れやめまいを起こすだろう。そこは日頃鍛えた成果を発揮したのか、高山病特有の症状は一切現れなかった。ここまで来たからには、ダルシムを探し出すまでヒマラヤ山脈を後にするわけにはいかなかった。

防寒服に首をすくめながら立ち尽くしているときだった。

「旅人よ、こんな辺境の地まで何かお探しかな？」

声がした方向へ振り向くと、そこには誰もいない。

「こちらですよ」

今度は背後から声がした。しかし振り返ると、誰もいない。

「はっはっは、お遊びはこの辺にしておきましょう」

なんと、男が俺の眼前に忽然と姿を現した。男は、目を閉じてゴムのように両足を首に巻きつけながら両手を合掌している。驚くべきことに、男は地面から浮いていたのだ！

（こ、これが瞬間移動なのか……！　しかも、浮いている……！）

その上、男は極寒の地だというのに腰布一枚だけしか身につけていないのだ。男は幾重にも重なった腕輪を痩せた浅黒い両腕にはめ、胸には小さな頭蓋骨を繋いだネックレスをぶら下げている。そして浅黒い頬とスキンヘッドの額には、紅色の顔料が対をなして塗られていた。骨と皮だけのように痩せているために、年齢はよく分からない。しかし若くはな

いようだ。
俺の思考回路は完全にショートしてしまっていた。そんな俺を察してか、男は首に巻き付けていた足をほどき、結跏趺坐の姿勢でゆっくりと地面に着地した。男の目は依然閉じたままだ。
我に返った俺は、思わず頭を振って、目をこすった。先ほどの妙術は高山にいるせいで起きた幻覚だったのだろうかと思ったが、そうではなかったことを思い知るのだった。
「はるばる日本からおいでなすったのですな」
俺は一瞬たじろいだ。何で俺が日本から来たことが分かったのだろうか。
「そうです。武者修行をしているリュウという者です。あなたのお名前は……」
「あなたはすでにわたしを知っています」
「えっ……。では、あなたがダルシムさんなのですか！」
うろたえる俺をよそに、ダルシムは結跏趺坐の姿勢からするりと足をほどいた。まるでタコだ。そして今度は数匹のヘビが絡まりあうかのように両手足を絡ませたポーズをとった。
「いかにも。よくぞここまで来られましたな」
ダルシムは微動だにしないまま、目を閉じて穏やかな口調で言った。俺はダルシムのやせ細った身体を見て、本当に格闘家だったのかを確かめたくなった。もしもそれが本当だったとしたら、その実力を試してみたいと思った。
「あなたは格闘家だったと聞きました。どうか一試合、胸を貸してもらえませんか」
俺は丁重に申し出た。ダルシムは目を閉じながら言った。
「懐かしいですなぁ。わたしが格闘家だった頃を思い出したのは、本当に久しぶりです。かれこれ三百年以上も前になりますかなぁ」
「さ、三百年……！」
三百年以上前に格闘家だった、ということは今はざっと三百数十歳ということになる。この男を目の前にしては、これまでの既成概念が音を立てて崩れ去ってしまうかのようだった。
「試合の仕方も、とうに忘れてしまいました。しかし懐かしい。あの頃はわたしも若かった。毎日闘いに明け暮れていましたが、家族がいて楽しかった。あの頃のわたしは現世（うつしよ）こそが現実で、肉体だけがすべてだと信じていましたなぁ……」
ダルシムは目を閉じたまま三百年前の思い出に浸っているようだった。俺の闘争心はす

っかり失せてしまっていた。
「あなたはわたしが特別な人間だとお思いなのでしょうが、そうではありません。わたしもあなたと同じ人間なのですよ」
ダルシムの言葉に、まさか！　と心の中で叫んだ。
「普通の人間には浮いたり消えたりなんかできません。それに三百年も生きられない。あなたが特別なんだ」
「いいえ、本当は誰もがわたしと同じことができるのです。それに老いることもない。ただあなた方と違う点があるとするならば、宇宙にあまねく存在する法則を知り、実践しているということだけなのです。あなたも知っているでしょう。波動をあやつると言うことを」
俺の心拍数が一気に高まった。波動をあやつるという言葉に反応したのだ。ダルシムはやはり目を閉じたままだった。
「ならばお聞きします。殺意の波動を克服する方法を教えていただけませんか。波動をあやつるどころか、波動をコントロールできずに暴走してしまうんです」
ダルシムは俺の質問など聞いていないかのように、静寂の中に浸っていたが、やがてゆっくりと腹の底から言葉を発した。
「真の闇を知る者は、真の光をもたらす。闇とは恐れなり。恐れの対極を知らば、汝は光となるであろう」
「真の闇……」
「答えはあなたの中にあるのです。静かになり、自分が誰かを知りなさい」
俺は呆然としていた。
(自分が誰かって？　俺は俺じゃないか。わけのわからないことを言う人だ)
ダルシムの答えは俺にとっては意味不明のものでしかなく、抽象的で感覚的な言葉にしか聞こえなかったのだ。
(そういえば、いつか師匠も同じようなことを言っていたような……)
俺はかつて剛拳から聞かされた言葉を思い出した。
――人生で最も大事なことは、己を知ることだ。それが悟りなのだ――と。
「自分が誰かを知れ、と言われても、わけが分かりません」
ダルシムは俺の回答を聞くやいなや、口辺に笑みを漂わせた。
「必ずや、思い出す日が来るでしょう。あなたは良き師を持たれた」

俺の師匠のことを、ダルシムは知っているというのか？　俺はすべてを見透かされているような気がして、心を覆い隠したくなった。

確かに剛拳もダルシムと同じことを言っていた。あのときは剛拳の言葉を理解しようとも思わなかった。だが今は、この言葉の意味にはじめて疑問を持つようになった。俺はここへ来てよかったのかもしれないと思った。

「よくわかりませんでしたけど、あなたに会えてよかったと思います。ありがとうございました」

「ありがとうは他人に言うのではなく、自分に対して言うものなのだよ。若者よ、今を精一杯生きなさい」

ダルシムは静かに合掌し、「ナマステ」と言ってから再び瞑想に入っていった。その姿をしばらく見ていたが、ダルシムはじっとしたまま動かない。もし、俺が今ダルシムに攻撃したらどう反応するだろう。そんな思考がよぎった。けれど今の俺にはそんな真似はできなかった。いや、俺の思考さえダルシムはきっとお見通しなのかもしれない。俺はダルシムに心の中でありがとうございましたと言ってから礼をして踵を返した。

そのとき標高四千メートルから見渡す限りの壮大な山々、自然の美しい姿に圧倒された。注目していたのは宇宙と大気圏の境目だ。俺はさらに昼と夜の境界というものがあるのかを確かめようとしていた。闇に溶けてゆく夕日は、まるで融けゆくアイスクリームのようだった。強烈に放つオレンジ色の光は、漆黒に飲み込まれてゆくことを甘んじて受け容れている。自然界には一切自我が存在していない。何ひとつ、抵抗などしていない。俺は太陽が闇に融けていくさまを見つめつつ、冷えゆく大気に身を震わせていた。

光と闇のコントラストが残像として網膜に焼き付いたとき、思いがけない発想が脳裏をかすめた。

あたかも、太陽が闇に飲み込まれていくかのような現象を俺は今ここで確かに見ている。しかし実際は、太陽は太陽のまま存在していることに変わりはない。闇に飲み込まれて消えてなくなったわけではないのだ。

俺の中に確かに闇はある。けれど光も消えてなくならずにちゃんとある。殺意の波動に俺の良心が駆逐されたわけではないというわけだ。この思いつきが俺を救った。俺の中にある殺意の波動は、いまだ息づいてはいたが、暴れまわることはなくなった。

今振り返ってみても、ダルシムの成した業が夢だったのか現実だったのかわからない。それにダルシムの言葉の意味もわからないままだった。

ただ、一つだけはっきり分かったことがある。それは、「ダルシムのように、骨と皮だけの、空気だけで生きているかのような人間にはなりたくない！」ということだった……。

俺は日本へ立ち返った。母国に帰ってほとぼりを冷ましたかったのだ。

インドで出会ったダルシムの言葉は、俺に新たな課題を与えることとなった。それは、サガットとの闘いに破れ、自暴自棄になっていた俺を再起させるきっかけとなった。

そして、かつて剛拳から聞いた言葉の数々を思い出しては、ダルシムと剛拳の言葉の本質は同じだということだけは気づいていた。

ただ、闘うことにすべてを懸けていた俺にとって、その言葉の本質が何かを探ることよりも、肉体の鍛錬に明け暮れることに忙しかったのだった。

俺にとって、勝利という結果を残すことが、人生最大の関心ごとに変わりはなかったのだ。

そんな俺が「自分は誰か」という問いに答えられるはずがなかった。答えは俺の中にあるというのなら、こうに違いない。

「俺は真の格闘家を目指している日本人の男である」

これが答えだ。それ以外に何があろう？

☆　アメリカ・ビバリーヒルズへ

日本に帰国した俺は、暴漢に襲われているところを助けたことがきっかけで、ひとりの女性と出会うことになった。

その女性は雪乃といった。年齢は二十代後半の一般人だった。

職を持たない放浪格闘家の俺と、社会人としてまっとうな生き方をしている雪乃とは、まったく畑違いの人間同士だった。

俺のような人種が珍しかったのか、雪乃はたびたび俺の潜伏場所を訪れては、食事の差し入れや身の回りの世話を甲斐甲斐しくしてくれるようになった。

しかし、俺にとってその行為は、決してありがたいものではなかった。なぜなら、俺は

人に構われるのが苦手だからだ。
「リュウさんって、人を寄せ付けないオーラを発していますよね。わたしだってあなたに助けてもらわなかったら、絶対に近寄らなかったわ」
雪乃はそう言って笑った。いつかケンにも同じようなことを言われたことがあったと思った。
「迷惑千万って、顔に書いてあるわね。でもわたしはあなたを好きでいる気持ちはやめられないわ」
「今はそうでも、きっと嫌いになるにちがいないんだ。俺みたいな男は」
「だったら、嫌いになるまでなら、いいってことね」
そう言ってから、腕に抱きついてきた。雪乃は一枚上手だった。
とは言うものの雪乃が関わるようになってからは、単調だった日々に彩が差しはじめた。疲れきって帰宅すると、玄関に手製の弁当がぶら下がっている。独り身の男にとっては、ありがたいことだった。
頑なな心が緩みだしたとき、雪乃は文字通り、押しかけ女房となって転がり込んできた。
「殺風景な部屋ね。ちゃぶ台ひとつしかないなんて！　でもいいわ、わたしがコーディネイトしてあげるから」
腕まくりをして、俺の部屋の中に上がりこんで片づけはじめた。
こんな調子で雪乃のペースに巻き込まれていったのだった。
やがて待っていてくれる存在が、俺の支えとなっていった。いつのまにか、雪乃のいる日常が当たり前となっていたのだった。
雪乃は格闘のことはまったくわからない、ごく普通の女だった。
雪乃が俺に求めたことは、同じことを考え、同じものを見、同じものを食べ、同じ空間で過ごすことだった。それが次第に俺の心に重くのしかかるようになっていった。
雪乃はとりわけ俺と一緒にいたがった。同時に干渉もよくしてきた。俺がふさぎこんでいるときには、悩みを共有しようとわけを知りたがった。
しかし俺にとって、自力で問題を解決することができなければ、何の解決にもならないことを、雪乃は知らなかった。
「こんなに心配してあげているのに。あなたはいつだって自分のことしか考えていないのよ」
そう言っては頬を膨らませた。

こんなとき、俺は何も言えなかった。雪乃の言うことは正しかったからだ。
いつも正しいことを言う雪乃は、いつまでも定職に就かず、日雇い労働をするかたわら修行を続け、金が貯まれば海外へと武者修行に出て行く俺を、まっとうな人間にしようと躍起になっていた。
「また殴り合いをするために外国へ行くのね。いつまでもそのままでいいと思っているつもり？」
「闘いで死ねたら本望だよ」
「バカじゃない？　そんなことで死なれちゃこっちが困るわよ。いやなことがあっても毎日真面目に働いて、やりくりして将来を考えている立場から見ちゃ、やってられないわよ。大体、殴り合いとわたしと、どっちが大事なのよ、何とか言って！」
しばらく沈黙が続く。
だが、自分に嘘はつけなかった。
「ゴメン、俺、やっぱり行くよ」
「……誰にもあなたを止められないことは分かってるわ。それでも、わたしは待ってるから」
女と関われば束縛されるに違いない。それに普通の女性なら誰しも俺の生き方を理解できないだろうとずっと思っていた。……俺の見立ては正しかった。
放浪癖の治まらない俺と、常に一緒にいたがる雪乃との間にある溝は、ますます深く刻み込まれていった。そして、互いに譲歩しない姿勢が互いを傷つけあっていることもわかっていた。そんなことは、最初からわかっていたのだ。
だからこそ、離れていれば傷つけあうこともなくなり、時間が傷を癒してくれるだろうと話し合ったのだった。その結果、俺は必ず雪乃のもとへ帰ることを約束して、別れたのだった。
自由を得た俺は、まずケンのことが思い浮かんだ。アイツも修行を怠ることなく精進しているに違いない。俺はわずかな荷物を背負って、アメリカへと旅立ったのだった。
ケンはかつて剛拳のもとを発つとき、俺に住所を書いたメモを手渡していた。そのメモを、俺はずっと大事に持っていた。いつかケンと勝負するだろう日のために。
メモを頼りにたどり着いた先は、ビバリーヒルズ。ハリウッドセレブたちが住まう、超高級住宅地だ。広い道路の両サイドには、やしの並木がそびえ立っている。高級ブティッ

ク街で有名なロデオドライブは、彼らセレブにとっては安心して買い物にいそしめるのだろうが、俺には縁のない場所だ。なにしろ、ここは治安がよいことで有名だ。こんな瀟洒な街に、ケンは住んでいる。まさかここでヒッチハイクというわけには行かない。俺は不審者と間違われないかと思いながら、地図を片手にケンの生家を訪れることに成功した。

「リュウじゃないか！　よく来てくれたな」

ケンはまるで、ゴルフ場のように管理が行き届いた芝の庭園にそびえたつ、城のような邸宅に住んでいた。これでケンが想像以上の御曹司だということが証明されたわけだ。ケンは俺を、まとわりつくように毛足の長い絨毯のフロアに通した。

「しかし、突然どうしたんだよ、今まで音信不通だったっていうのに」

「おまえの顔が見たくなってな」

「ガラでもないことを言ってくれるぜ。実は俺もおまえに会いたいと思っていたところだったんだ。でもおまえは捕まえようがなかったから、途方に暮れていたんだぜ。おまえから来てくれて助かったよ」

ケンは俺との再会をことのほか喜んだ。だが、俺とケンの思惑は必ずしも一致しなかった。

「ケン、久々に俺と勝負しないか？　おまえもずいぶん強くなっただろう」

「ああもちろんだ。しかしその前に、おまえに会ってもらいたい人がいるんだ。……イライザ」

ケンは、隣の続き間に向かって女性の名を呼んだ。すると奥から、ウエーブがかかったブロンドの髪を腰まで伸ばした青い目の女性が、ケンの横へ歩み寄ってきたのだ。その女性は目鼻立ちがはっきりした、かなりの美女だった。

「はじめまして、ミスター・リュウ。お会いできて光栄ですわ。あなたのお話は、ケンからよくうかがっていましたのよ」

イライザは俺のほうに歩み寄って握手を求めてきた。俺は思わず日本流におじぎをした。

「やはり、あなたはサムライなんですのね。お噂どおりだわ」

イライザは俺の対応を見て、大げさに喜びをあらわにした。俺はそんなイライザを見て、マネキンのような美しさだと思った。

「意外にもイライザは、サムライ好きの日本びいきなんだ。彼女は大学時代の同級生で、ミス・ユニバースの優勝者なんだぜ。俺が日本に住んでいたことに話が咲いたことがきっかけで、交際が始まったってわけさ」

ケンはごく自然にイライザの肩を抱き寄せた。
「ケンから修行生活のことを毎日聞いていましたの。あなたの名前が出てこない日がないくらいに」
そう言うと、イライザの真っ赤なルージュから端正に並んだ白い歯をのぞかせた。
「あれからおまえはどうしていたんだ？　ベガに追われていた後のことさ」
俺はケンに促されて、飲み込まれるようなソファに座った。
「ストリートファイトをしながら、国から国へ転々としていたよ。おまえとは正反対の裏社会にいたわけさ」
「『転がる石に苔むさず』っていうぜ。おまえは俺と違って自由なのさ。ある意味うらやましいぜ」
それから互いにこれまでのいきさつを報告しあったのだった。ひとしきり話を終えるとケンが神妙な顔つきになった。ケンはイライザがその場にいないことを確かめてから、身を乗り出して話を切り出した。
「なあリュウ。俺はイライザと結婚したいと思ってるんだ」
突然の話題の転換に、俺の思考は一瞬思考が止まった。
「三ヵ月後、俺は全米格闘技選手権大会に出場する。そして必ず優勝する。そこでおまえには、どうしても俺の出る試合に来てもらいたいんだ。これは俺のけじめなんだ」
こんなに真剣なケンの顔は初めて見たと思った。
「わかった。おまえの晴れ舞台を見に行かせてもらうよ」
「そうか！　よかった。おまえが来てくれなきゃ、気合が入らねえんだ。絶対に来てくれよな」
「ああ、いいとこ見せてくれよ」
「もちろんだ」
ケンは白い歯を覗かせて笑ったが、目は真剣だった。俺が承知したことでスイッチが入ったようだ。ケンの三ヵ月後に控えた試合に対する意気込みは相当なものだった。
対して俺は欲求不満に陥っていた。ケンとの勝負を申し出るチャンスを失ってしまったからだ。
どうやらケンは、俺と勝負するよりも恋人のことに夢中のようだ。ケンの気持ちはすでに三ヵ月後の試合に向かっている。それにケンは表社会で生きるまっとうな人間だ。ここで俺と殴り合いをしている余裕はないのだろう。それに俺と勝負することで恋人を混乱さ

せることになるかもしれない。俺は口をつぐんだまま、ケンの様子をじっと見ていた。
「イライザとはすごく話が合うんだ。だからよく相談もする。こんなに一緒にいて安らげる女性ははじめてなんだ。価値観が同じってやつなんだと思う。とにかく俺の最高のパートナーなんだ」
「分かるよ。似合いのふたりだと思った」
「俺もずいぶん回り道をしてきたが、それもすべてイライザに出会うための過程だったんだと思う。俺は心から彼女を愛しているんだ」
俺に真正面を切って語るケンの言葉は心から出たものだとわかった。
おそらくケンの数々の恋愛遍歴から結婚を決意するに至るまで、紆余曲折があっただろう。それでも、こうしてひとりの女性と人生を共に生きたいと堂々と語るケンが、俺とはどこまでも違う人間に見えた。
「で、おまえはどうなんだ？」
ケンが不意に話を振ってきたせいで、一瞬戸惑った。
「俺は相変わらずの風来坊だぜ。それに、俺みたいな奴は結婚しちゃいけないのさ」
このとき、日本に置いてきた雪乃のことを思い出してため息をついた。
「いや。おまえにもきっと、ふさわしい相手が現れるさ。必ずな」
「ははっ、そうだといいな」
俺とケンが最後に会ったのは、俺がベガによって二度目の殺意の波動に目覚めたとき以来だ。あのとき、真の格闘家になるために、再会を約束して互いに別々の道を歩いていく決心をしたのだ。
今回ケンとの勝負は果たせなかったが、俺とケンの行く道はまったく正反対の道を突き進んでいるということだけは確実だった。
それ以上に、恋人と正面から向き合っているケンを見て、男としてのあり方を見たような気がした。
方や俺は格闘のことに気をとられ、雪乃のことはなおざりにしているような男だ。ケンのイライザに対する真剣な態度を見ていて、自分の浅はかさを見せ付けられたような気さえした。雪乃はこんな俺を許してくれるだろうか。
今度こそ関係を修復させようと気持ちを高めて帰国した俺を待っていたのは、雪乃からの置手紙だった。
「お互いの人生を尊重したいと決心しました。どうかお元気で」

俺の意識は遠のいた。
もう関係を修復させるチャンスは永遠に失ってしまった。俺は暗澹たる気持ちになり、自己嫌悪に陥った。
闘うことだけの人生に、安らぎを与えてくれたことを、どうしてもっと雪乃に感謝しなかったのだろう。どうしてもっと、そばにいようとしなかったのだろう。雪乃の人生と俺の人生を切り離すのではなく、並んで生きてみようとしなかったのだろう……。
雪乃はおそらく、自分の持てる臨界点まで俺を待っていたに違いない。
俺を待つということが、目的それ自体となり、待つということ一点に、すべてを帰納させてしまったことが、雪乃の苦しみとなっていったのだろう。
雪乃にとって、俺が「自分のもとへ帰ってくる」という期待に応えることで、愛情のバロメーターを計っていたのだろう。そして、「帰ってこない」という事実が、俺の答えだと認識したのだろう。
待たせることに対しての意識が足りなかったのは、俺の非だったと思う。
自分を弁護するわけではないが、決して、相手を意図的に待たせていたわけではなかった。雪乃の怒りと悲しみは、今回のアメリカ行きが問題ではなかったのだ。これまで蓄積されてきた不満が、雪乃の決断を下させたのに違いない。
雪乃を失ってみて、ようやく気づいた。俺は自分のことしか見ていなかった。そして、またケンに先を越されたと思った。
俺は二重の敗北感を味わっていたのだった。

それから三ヵ月後。
俺は再びアメリカの地に降り立った。ケンが出場する全米格闘技選手権を観覧するためだ。
共に修行してきたケンと別々の人生を選んでから、今回はじめてケンの闘う姿を見ることになる。俺は興味深くケンを見守っていた。
ケンには結婚したいと思う恋人がいる。
そのことが修行時代にはなかった真剣さを感じさせた。
それを裏付けたのは、ケンのトレーナーから聞いた話だった。あれほど練習嫌いだったケンが、寝食以外はすべて試合のために打ち込んできたのだという。そのことを知って、いかにケンがこの試合に賭けていたかがわかったのだった。

真紅の道衣をまとい、リングに立ったケンの最初の相手は、プロレスラーだった。
プロレス使いの術中にはまってしまえば寝技に持ち込まれるか、関節を極められるか、パワーで押しつぶされるかのうち、いずれかだ。
しかしケンは、やはり普通の格闘家ではなかった。相手の間合いに飛び込まず、遠隔操作の可能な波動拳を放つことで相手を完全ノックアウトに追いつめたのだ。
あれほど師匠に禁じ手とされた必殺技を、ケンはリングの上で自由自在に使いこなしてみせたのだ。
観客席からもケンが波動拳を繰り出すたびに多大な歓声が湧き起こった。
ケンは、エンターテイナーとしての一面を兼ね備えた格闘家として活躍していたのだ。
ケンが師の教えを順守する男であったなら、アメリカに帰国しても単なる一格闘家にすぎなかっただろう。
隠者として生きながら、一子相伝の秘儀を伝承してきたのが轟鉄一門の技だ。その技がアメリカの地において披露されることになろうとは、始祖とて夢にも思わなかったに違いない。
しかしケンが一門に加わった時点で新たな風が吹き込んできたことは、剛拳も分かっていたはずだ。ケンが身につけた日本伝統の技は、アメリカの地において見事に花開き、脚光を浴びたのだった。
ケンが日の当たる場所で格闘道を突き進んでいたその裏で、俺は日陰を求めて闘ってきた。
法律もルールもない修羅場を生き抜いてきた俺には、ケンの姿は眩しく見えた。眩しさは、リング下の最前列からも感じられた。ケンの恋人イライザの存在だった。
イライザはケンの勝利を祈ってか、始終両手を胸元で組んでいた。その視線は、真っ直ぐにケンへと向かっていた。イライザは、たとえどんな攻撃がケンを襲おうとも、決して目をそらさなかった。
そんなイライザから、華やかな印象だけでなく、内面の強さも備えた、ケンにふさわしい女性であることを知ったのだった。
俺がケンの試合を見ていて感じたのは、格闘技のプロたちの実態と世界観である。
格闘技で身を立てる者は、ケンカレベルを超えた実力を間違いなく持っている。それは自分こそ一流だと、それぞれが認識しているからだ。

勝てば報酬と地位が得られ、負ければ報酬は得られず、地位をも失うというシビアな世界だけに、真剣さが違う。それにプロとなれば自分をサポートするチームを立てる者がほとんどのようだ。

公式試合では、ルールという制約もあるが、正々堂々の勝負ができる。そして自分の実力を正当にジャッジされ、格闘家としてのランク付けもなされる。これがプロの世界なのだ。

それ以上に、格闘家として相当なプライドは皆がもっているということだ。

プロの世界では、自分こそが最強だという自信に加え、勝負の内容にも流儀を持っている。つまり美学を持っているのだ。

気高い精神を持った格闘家同士が、心・技・体を最高のレベルまで引き上げてぶつかり合う。これこそ命懸けの闘いにあるべき姿だ。一流が一流を相手に人生を賭けて闘う。これぞ真の格闘家たりうる姿ではないか！

俺はストリートファイターとして凶器を持った相手と徒手空拳で対戦してきた。

凶器とは拳銃であったりナイフであったり、鎖や鉄パイプ、メリケンサックなどいろいろだ。ギャング達は大抵それらを装備している。自らの身を守るためなら相手を傷つけてもよいというわけだ。武器を装備した相手と闘うのは、修業時代に修練した経験が大いに役立った。

その上、彼らは大抵群れを成している。一対一ならまだいい方で、一対複数人とで闘うこともしばしばだ。そんな場合は、勝つか死ぬかのどちらかとなる。彼らの殺意のこもった、ルールも容赦もない攻撃は、確かに命懸けの闘いには十分な条件だった。

そもそも俺がそんな修羅場の世界に飛び込んだのは、命懸けの闘いを求めたからだ。

しかし、裏社会に生きる者は、ほとんどが格闘技に関して素人ばかりだった。彼らが武装するのは、武器に頼らざるを得ないからだ。

俺には武器は必要ない。武器はこの五体に仕込んであるからだ。まずもって、相手の武器を取り上げることでほとんど試合は決まる。

武器を失ったときの彼らの不安は、怒りから恐れへとその場の空気を一変させた。そんな彼らの首根っこを捕まえてやり込めることなど俺には必要なかった。ただ、逃げ去っていく彼らの後姿を見て感じることは、虚しさだけだった。

俺はその虚しさを満たそうとするために、新たな闘いを求めてさすらってきたのだ。

ケンの試合を見た俺は、ストリートファイトに闘いを求めたところで、所詮は素人を相

手に勝利して自己満足を得ているに過ぎなかったことに気がついた。
俺は強さを求めていると言いながら、強さを求める相手をはき違えていた。
ストリートファイトに精神と精神のぶつかり合いを求めても無駄なのだ。そこにあるのは獣性と狂気。そこから真の強さを見出せるはずなどなかったのだ。闘っても闘っても虚しかったのはそのためだったのだ。
ギャング達は格闘家ではない。俺は素人を相手に、自らの強さを証明するために修羅場を求めてきたに過ぎなかったのだ。
いつか、春麗が言った言葉が頭をよぎった。
――自分の格闘術に誇りを持っているなら、むやみやたらにストリートファイトなどしない――
そうだ、そのとおりだ。
俺は、自分の自己顕示欲の強さに愕然としたのだった。
ストリートファイトの世界だけでは味わえない醍醐味がプロの世界にはある。
ようやくそのことに思い至った俺は、はじめて公式試合に出ることに対して、前向きに考えるようになったのだった。
もうひとつ、ケンの試合を見ていて感じたことがある。
格闘家とは孤独なものだ。決して群れることはないからだ。
しかしケンは決して孤独ではなかった。対照的なのは、俺自身が孤独を許していたということだ。それが闘う男の道だと信じてきたのだ。
ケンが陽を求めれば求めるほど、俺は日陰を求めてきた。それが正しいとか正しくないということではない。俺とケンの関係は、そういうものだということだ。そして今はまだ、経過であって結果ではない。しかし現時点ではケンのほうが間違いなく先を進んでいると認めるしかなかった。

優勝したのは、ケンだった。
これからチャンピオンベルトやトロフィーが授受されるはずだ。会場関係者はその段取りに忙しく動き回っている。あろうことか、それらを無視してケンはリングを降りたのだ。
ケン以外のすべての者は、あっけに取られながらケンの意外な行動を見守っていた。
なんとケンは、イライザを抱きかかえてリングの上に戻ったのだ。そしてイライザをリング中央に下ろした。闇の中にぽっかりとスポットライトが浮かび上がっている。光の中

にはケンとイライザがいた。
ケンは恋人の顔をじっと見つめ、言った。
「イライザ、俺と結婚してくれるかい？　うんと言ってくれるまで、俺は一生ここで待つよ」
ケンのプロポーズの言葉は、マイクに拾われていたせいで、ここにいるすべての者が立会人となった。そしてケンと同じように固唾を飲んでイライザの返事を待った。
会場は水を打ったような沈黙に包まれた。
イライザは、ケンの演出に感極まって言葉にならずに打ち震えている。ケンはイライザの言葉を辛抱強く待っている。
すべての者が、いつのまにか映画のクライマックスを見ているような感覚に囚われていた。会場にいる者すべてが、ケンになっていた。
やがてイライザは伏せていた顔を上げた。
「ケン、あなたは誰もが認める最高のヒーローよ。だけど覚えておいて。わたしはあなたが最高のヒーローじゃなくても、あなたを愛しているわ」
イライザはケンの胸に飛び込むと、一斉に歓声が湧き起こった。ふたりは見つめ合った後、熱烈なキスを交わした。会場は熱狂的な祝福に包まれたのだった。

翌日。
ケンの偉業は全世界に知れ渡り、一躍ケンは世界一の有名人となった。
ケンは全世界の人々を感動させた一流の格闘家であり、一流のエンターテイナーであり、最高の男と評され、一躍話題の人となったのだった。
アメリカを代表する名家・マスターズ家の跡継ぎは、アメリカ全土の新たな英雄となった。それは誰もが認めることだった。
メディアはケンを格闘家としての実力について以上に、プロポーズ劇をこぞって書きたてた。
俺もケンの一連のプロポーズ劇に少なからず感動を受けた人間のひとりだった。俺にはケンのような真似ができないからこそ、余計に胸を打ったのだと思う。
愛を惜しみなく表現できるケンが、俺にはまぶしかった。
真剣に女性と向き合っているケンは、真の大人の男になったのだ。俺もケンも、格闘家である以前にひとりの男なのだということを忘れていたことに、気づかされた。

真の格闘家になるためには、真の男にならなければいけないのではないか？

俺は高みを目指すことに気をとられ、自分の足元を見ていなかったのかもしれない。まず何よりも、ひとりの男として自分を高めなければならないのではないか、という思いに至ったのだった。

ストリートファイトの世界でしか生きられない男が、はたして真の男だといえるだろうか。孤高に生きているつもりでも、地に足をつけていないようでは、足元からすくわれてしまうだろう。ケンの男としての器に対して、ようやく自分の器がどれほどのものなのかを思い知ってしまった。

ふと、俺もケンのように生きることはできるだろうかという気持ちが湧いた。これまでの俺には考えたことのない発想だった。

まさかとは思ったが、その思いつきは俺には案外心地よかった。もしかしたら、難しく考えるのではなく、自分の求めるものに素直になれればいちばんいいのかもしれない。

ずっと日陰で生きてきた俺が、陽の光を浴びてみたいと思うようになったことは、俺自身を変える最初の一歩だった。

格闘家としての誇りを思い出した俺は、ある人物にもう一度会って、再度勝負してみたいと思ったのだった。

☆上海へ再び

上海の華やかな表玄関を通り過ぎると、その風景は市井の人が息づく下町へと一変する。上海の街は都会と下町が背中合わせになっている。先進国を思わせる都会の上海に一歩踏み入れれば、上海人の現実的な日常生活がそこにある。そのギャップを感じるたび、俺はここが中国であることを改めて思い知るのだった。

俺は、いつか訪れた春麗の武術道場へと向かっていた。そして開け放たれた道場をのぞきこんだ。

「あら、あなたは……リュウじゃない！」

現れたのは、あの威勢の良い格闘家・春麗ではなかった。休暇中だったのだろうか、あ

の青いチャイナドレスの格闘衣姿ではなかった。代わりにピンク色のチャイナカラーのトップスに八分丈のパンツルックの一般的な女性としての春麗だった。ただし、中国娘のトレードマークとも言える、春麗のふたつのおだんご頭は健在だった。

「突然来て申し訳ない」

「驚いたわ、あなたがここへ来るなんて。御用は何かしら？」

「実は君に試合を申し込みに来たんだ」

そう言うと、春麗の表情は急に暗くなった。

「せっかくあなたに来てもらったのに、悪いんだけど……。わたしはしばらく拳法から離れていたのよ。だから、もうあなたとは勝負はできないわ」

俺は少なからず、春麗の発言にショックを覚えた。かの誇り高き女性格闘家が、拳法から遠ざかっていたというのだから。

「もしかして、格闘家をやめてしまったのか……？」

「ええ。今はただの女よ」

「何かあったんだな」

春麗は俺の問いには答えず、おもむろに道場の隅にある長椅子に掛けた。

春麗はかつて父の復讐のためにすべてを懸けた女だ。

俺の知っている春麗は、父の仇・ベガを討つためなら捨て身で鉄壁の組織に乗り込むほどの行動力と情熱を持った、強い女性だった。春麗の父親譲りの中国拳法は、大男をなぎ倒すほどの発剄を駆使し、世界の強豪と互角かそれ以上に闘えるほどに練磨されたものだった。

それほどまでに鍛え上げた技のすべてを、捨てたというのか……？

「あなたとの約束を、忘れたわけじゃないのよ」

髪に結われたリボンが風で揺れた。

「わたしは組織の一員としてシャドルー壊滅作戦に携わってきたわ。シャドルーは凶悪テロ組織であって、ベガを倒すことができれば、世界は平和になると信じてきたの。何より、父の仇を討つことがわたしの人生の最大の目的だった」

はじめて春麗に出会った頃がふと思い出された。あのとき復讐に燃えていた春麗の印象は、怒りと苦しみ、そして憎悪に満ちていたものだった。

「組織力を駆使して、見事シャドルーは壊滅させられたわ。当然ベガも捕まえることができた」

「仇は討てたのか」
「ベガは国際裁判にかけられたわ。今や彼はいつ処刑されるかわからない身よ。そのとき、ああ、わたしの目的は叶ったんだ、これで平和に暮らせると思ったわ。……でも、何にも変わらなかった」
春麗は一息ついて、顔を上げた。そよ風に、結わえたリボンが涼しげにたなびいた。
「シャドルーが壊滅しても、何にも変わらなかった。麻薬も犯罪も暴力も、ちっともなくならなかったのよ。ベガを処刑したとしても、きっと何にも変わらないわ。ベガ一人を吊るし上げたところで、世界はちっとも平和になんかならないのよ」
春麗の表情は硬いままだった。
「わたしは悪の本丸がどこにいるのかを探ってみたわ。わかったことは、闇の支配者という存在がいて、彼らが巧妙に世界中の組織権力を操って、世界が平和にならないようにコントロールしていたということだったの。国家機関の表看板であっても、マフィアやテロ組織という悪役をつくりあげて、裏で麻薬を流通させて莫大な利益を得ていたの。おかしいでしょ？　そうやって悪がはびこる世界を作り上げていたのよ」
春麗の口から飛び出した言葉は、まるで映画や小説の中に出てくる話のようだと思った。にわかに信じがたい話ではあるが、国際刑事である春麗が冗談を言っているとは思えない。ベガは悪の本丸ではなく、真の黒幕が他にいるというのだ。俺は頭の中で春麗の言うことを整理しはじめていた。
「シャドルーは所詮悪の一駒に過ぎなかった。それに、正義であるはずの警察権力でさえも本当に正義なのかどうかさえわからなくなったわ。犯罪者がいなくなったら警察はいらなくなる。だから犯罪は警察にとって必要なことなの。犯罪ありきの世の中でいたいわけよ」
俺は相槌も打たずに春麗の言葉をじっと聞いていた。
「刑事として、正義という大義名分のもとでがむしゃらに生きてきたわ。でも悪と呼ばれる犯罪者も、自分が正義だと思って行動している。そして彼らにとって、わたしたちは悪なのよ。結局、人は誰もが自分は正しいと思って生きているのよ。けれどわたしは刑事として、どこまでも正義であるべき立場なの。正義対悪の構造の中にいるかぎり、わたしの心は少しも休まることはなかったわ」
俺は社会の仕組みから外れた生き方をしてきたために、春麗の言うことがよくわかる。
確かに有史以来、世界は一度も平和を実現したことがない。ネガティブな権力が増大す

るに比例して、世界は混沌さに拍車をかけていることを考えれば、春麗の言うとおりだとうなずける。誰かの操作によって、この世界のしくみは作り上げられたものだとしたら……。

この世界を支配する者は、組織権力者を配下に置いて多くの人々の生きる権利を蹂躙し続けてきたことになる。なるほど、金融・宗教・政治などのシステムは人々からエネルギーを搾取する手段として完全に世界中に浸透しているために、誰もかれもが疑わない。いまや未開の民族までもこのシステムが組み込まれてしまった。そうやって大多数の人間を弱らせ、権力者に依存させる仕組みを作り、狂った世界を維持しようとしている。法律はその秩序を乱させないためにあるのだろう。

ならば世間の犯罪に荷担する者は所詮木っ端でしかないのだ。世界を支配する頂点に位置する者は決して表には出てこず、自ら手を汚すことなく平然として一般社会に溶け込んでいるのだろう。そうして悲劇的なカタストロフィを迎えた世界を見下ろしてはほくそえんでいるのかもしれない。善人を装って……。

木っ端は一つの駒として動かされているという構図を知らずして、警察権力の正義を憎んでいる。彼らは我こそが正義なりという信念を持っている。しかし、正義対正義という図式は決して成立しないのだ。

いったい何をもって正義というのだろうか。正義という大義名分を掲げさえすれば、戦争を起こしてもよいとでもいうのだろうか。それも、すべて出来レースだとしたら……？

春麗は現場の麻薬捜査官として、裏社会の実態を知っていた。

組織に所属する人間は、考えを一色に染められることを強いられる。とはいえ、組織のイデオロギーと個人の考えとの間に相違があることに気づいてしまうと、葛藤が生じるのが人間というものだ。組織そのものの仕組みを知ってしまった春麗は今、自分の立場に揺れ動いていたのだった。

「今のわたしには、もう闘う理由がなくなっちゃったの。それで、毎日当たり前にやっていた稽古を一切、やめたのよ。だから、もうあなたと試合はできないの。あなたもここへ来ることはもうないのよ」

春麗はどことなく寂しげだった。

俺の知っている春麗は、矜持に満ちた誇り高き格闘家としての春麗だった。

俺と勝負して勝ったときに見せた堂々たる態度は、同じ格闘家として目を覚めさせられたものだ。春麗の強さに感服したときに覚えたすがすがしさは、今でも忘れられない。そ

のときの思いを、もう二度と味わうことができないのかと思うと、惜しまずにはいられなかった。
「君は、絶対に格闘家をやめられないはずだ」
「え？」
春麗は、振り返って俺を見た。
「今の君は、格闘家でないふりをしているだけだ。その証拠に、君は格闘家としてのプライドまでは絶対に捨ててはいないはずなんだ。あの見事な闘いっぷりは、君にしかできない。おとなしいふりをしたって、似合わないぜ」
「おとなしいふりですって？　ずいぶんな言い方ね」
俺の言葉に食い下がってきた春麗は、沈んでいた表情から、持ち前の勝気さを取り戻した。
「そう来ないとな。いつだって勝負するぜ、この拳でな」
俺は、幾戦もの勝負で砕いてきたこの拳を突き上げてみせた。
「ふう、まったく。あなたには敵わないわ」
春麗が苦笑しながら立ち上がると、俺は構えを取った。そしてすぐさま間合いを詰めて拳を突き出すと、春麗は円を描くように俺の拳の軌道をかわした。
「健在だな」
「あなたって、相変わらず格闘のことしか頭にないのね。それにつられちゃうわたしも、あなたと同じなのかもしれないけれど」
俺たちは笑いあった。
このとき、俺の中にすがすがしいそよ風が吹いたのを感じた。
「決めた。俺はストリートファイトから脱出する。ケンを見ていて思ったんだ。格闘のプロと闘わねば、強くなれないってな」
「あなたもプロになるの？」
「よく分からんが、とにかく公式戦に出て、自分の強さを試してみる。そこから目標を達成してみせる」
「もうあなたを逮捕する必要はなくなるわけね、残念だわ。……ねえ、あなたの目標って、何なの？」
「真の格闘家になることさ。真の強さとは何なのかを、俺はずっと追い求めているんだ」
「そうなの……。意外だわ、あなたが哲学者だったなんて」

「俺の場合は、闘うことしかできない単なる格闘バカさ。机の前に座って考えるよりも、身体で答えを探すことのほうが向いているようだ」
「フフッ、それがあなたの美学だったのね」
春麗の笑顔を見たら、もうひとつあることを思いついた。
「公式試合で優勝したら、今度こそ君に試合を申し込みにいくことにする。君はそれほど強い格闘家だから」
「光栄ね。あなたのことは陰ながら応援させてもらうわ」
「今度は必ず俺が勝ちをもらいに行く。格闘家同士の約束だぜ」
「勝手に約束しないでよね。言っておくけどわたしは普通の女よ」
「知ってるさ。君は闘うことのできる、普通の女性なんだ。だから、今度また試合を申し込んだときは、断れないぜ」
「さあね」
本来の春麗の笑顔を見届けた俺は、玄関に向かった。
「真っ直ぐお帰りなさいね。あなたの帰りを首を長くして待っている人がいるんでしょ?」
「いや、俺みたいな男を待っていてくれる人なんていないよ」
そう言った後で、心の中に日陰から陽なたへと導く一筋の光が差し込んできたかのように感じた。人間関係に疲れ、無気力な毎日を送り、しばらくは誰とも関わりたくないとさえ考えていた俺だったが、新たな出会いを喜んでいることに気がついた。別れ際、春麗は俺の名を呼び止めてこう言った。
「必ず優勝しなさいよ。優勝できなきゃ、約束不履行で逮捕するから」
俺は手を高く上げながら、振り返らずに真っ直ぐに歩いて行ったのだった。

☆　初舞台

無名の格闘家が大きな公式戦に出るためには、それなりの順序が必要だった。
まずは小さな大会に出場し、実績を上げなければならなかった。俺は片っ端から試合に出場し、優勝を総なめにしていった。

ただし、波動拳は封印することにした。師匠の言葉のとおり、差し迫ったときの秘技として切り札は大事に取っておきたかったからだ。

大会の規模が大きくなるにつれて、出場者のレベルが高くなっていくのは自然の摂理である。

俺の目的は実績を上げるにとどめず、より強い相手と闘うための基盤を強化するべく、これまで以上のトレーニングメニューを組んだ。

パワー、瞬発力、持久力。

この三点はジムへ通い、専門知識を持ったトレーナーのアドバイスに従って取り組んだ。

それだけでは不十分で、技の練磨をおろそかにしてはならない。基礎体力を強化するに比例して、技のバリエーションをつける必要性も考慮しなければならない。俺は必殺技をより練磨するために、かつて秘儀参入の門をくぐった時のように大自然と向き合いながら、新たな技を生み出すべく山に篭ったのだった。

世界中の強豪と場数を踏んできた俺は、青二才の頃の無茶さは影を潜め、勝負に対しての姿勢が変わった。

二十代前半の頃は、肉体が完成する時期でもある。

鍛えれば鍛えるほどパワーと勢いに磨きをかけることになり、実際それだけで強くなれた気がしたものだ。もちろん若さは何物にも変えがたい武器になる。

しかしその武器はまだ熱い鉄のままであって、相手を火傷させるおそれと、振りかざしたときに自らの身を斬る危険性をも併せ持つ諸刃の剣だった。要するに、肉体は完成しても、精神と技術は未完成だったのだ。

一方で、この時期は肉体の限界の閾値がどの年代よりもはるかに高く、言うまでもなく持久力もあった。勢いがあった分、勝利は先手必勝という観念が揺らぐことがなかった。自分の能力を過信していたのもこの時期だった。

何よりも経験が少なかった分、怖いもの知らずだったと思う。格闘スタイルはそれほどバリエーションがあったわけではなかったので、迷いというものがなかった。

選択の幅がなければ、おのずと取り出す戦法が決まってくる。同じ相手と二度三度と対戦したら、手玉に取るように技を見抜かれていたに違いない。技術的にも精神的にも未熟さを露呈していた時期だったのだ。

場数を踏んだ二十代後半にもなると、強さはパワーや勢いだけではないということを知り、戦略という頭脳プレーがインプットされるようになった。

身体的に差のある相手とパワーだけで闘えば、決して勝利することはできない。
この頃から勝負の場において、ファイターとの間であらゆる駆け引きが行なわれることになる。それは相手の先を読むということだ。
先を読むという術を身につけた分、繰り出す技に取捨選択が迫られることになる。相手の身体的特徴や戦法、心理面、コンディション、試合の流れなどを総合的に考慮して、試合のスタイルを変えてゆく。
試行錯誤していくうちに、先手必勝という法則は必ずしも成立しないものとなった。勝機は試合の中盤にあることもあるし、終盤にひっくり返すこともある。逆に言えば、有利に運んでいた試合が、逆転負けを喫するということもありうるということだ。
経験を積むことは、闘い方に論理的（ロジカル）な面が加わることになる。その分幾通りかの戦術を選択する場面に直面したとき、迷いが生ずることになってしまう。試合の中で迷いを持ち込んでしまえば、勢いを殺すことになりかねない。こういう場合、計算は無駄な作業でしかなく、あくまでもインスピレーションに依存する場面が大きいのだ。
そのような経験を経ると次第に頭脳プレーから脱するようになってくる。試合の真っ只中で、幾通りかの戦術の選択が直観的に閃くようになるのだ。
それは一朝一夕に身につけられるものでも、鍛錬して身につけられるものでもない。
山篭りは、インスピレーションを研ぎ澄ますには最適だ。かつて剛拳のもとで修行した日のことを思い出しながら、世界の強豪と闘う日のためにひとり励んでいた。

日本において、格闘技界はエンターテインメントのひとつである。
ルールなきストリートファイトの世界に身を置いていた俺にとって、ルールの敷かれた勝負は好都合でも不都合でもあった。
好都合だったことは、一対一の正々堂々たる勝負ができることと、選手のレベルが高いということだった。
不都合だったことは、時間制限や判定があることだ。
しかし世界中から集まった格闘のエキスパートが、スポーツマンシップに則って互いの強さを競い合うというシステムは、俺にとって総合的には好都合だった。
わざわざ世界中を旅しなくても、そこに世界中の強豪が集まってくるからだ。
俺にとってのリングはただ、その場で闘えばいいだけの効率の良い勝負の場所となった。
このときの俺は、格闘技界に参入する年齢にしてみれば遅すぎるくらいだが、経験は十

二分に積んである。修羅場で鍛えられた経験が、そのままリング上で応用することができたことも都合が良かった。

プロになればあらゆる責任が付きまとう。

プロの格闘家が背負う責務は、自分のためだけに勝つのではなく、他方からかけられる期待に応えなければならないということだ。

自分を励まし、応援してくれる人がいるということは、ファイターにとってこれほど心強いことはない。

だがその一方で、試合に負ければ自分だけでなく、支えてくれる者の人生さえも左右されるという現実に直面することになる。

勝てば保障された生活と、富と名誉が与えられる。負ければ闘う場を奪われ、生きてゆく糧を他に求めなければならなくなる。勝利を保証する手立てはどこにもないのだ。そのような現実が、無意識に彼らを追いつめていくのだろう。

しかし俺が求めている強さは、富や名誉や安定のためではない。ただ俺自身が納得したいだけなのだ。

選手登録したのは世界日本格闘技選手権大会である。

予選は難なく突破し本選の出場権を獲得した。

ここでアマチュアとして残ったのは、俺だけだった。おそらく俺はこの世界に乱入してきた異質のファイターだったといえるだろう。俺は単に実力だけでのし上がってきた無名の新規参入者でしかなかった。

選手の控え室が並ぶ廊下を歩いていると、ひとりの空手家とすれ違った。

「おい」

振り返ると、空手家は俺のほうを向いていた。

「おまえ、旭道館に道場破りしにきた奴だろう？」

空手家はそう言うと俺に近づいてきた。

「俺の顔を忘れたか。あのときおまえに負けてから、俺は死に物狂いで修行してきたんだぜ。おまえを倒すためにだ！」

男は、かつて旭道館の切り札として最後に闘った上田だった。

その上田に勝った俺は、非公式試合ではあるが、旭道館を失墜させた乱入者という烙印を押されてしまっていたわけだ。

また、俺は敵を作ってしまっていたようだ。

「おまえを探すのにどれだけ苦労したと思っている？　しかしいつかはリングの上でリベンジできる日が来ると思ってたさ。今日がその日だ。決勝戦で待ってるからな」
上田はそう言い残して去っていったのだった。
上田に恨まれているなど思いもよらなかったが、勝負というものは恨みを買い、敵を作る性質である以上は仕方がない。
しかし今まで俺を奮い立たせてきたのは、上田の存在ではなくケンに対しての対抗意識。俺は今までずっと、ケンに追いつくために、走り続けてきたのだ。
そしてもうひとり、心の片隅にたたずんでいたのは、上海にいる春麗の存在だった。
そもそも春麗と再度勝負するために、この大会に出場したのだ。あのしなやかな強さと俊敏さを併せ持つ春麗と試合するためには、まずはここで優勝せねばならない。俺は、ケンと春麗という一流の格闘家と同じ土俵に上がるために、この大会に参加したのだ。

約束どおり、上田とは決勝戦で闘うことになった。
前回上田と勝負したときは、ひときわ光る格闘センスを持っていたという印象があった。あのときは俺が勝ったが、磨けばもっと光る格闘家になる男だと感じたものだ。俺に負けてから、上田は臥薪嘗胆の思いで修行してきたらしいが、どんな技を披露してくれるというのだろうか。
「約束どおり、決勝戦のリングで待っていたぜ」
俺はリング中央で対峙した上田に言った。
「そうこないとな。今日こそ俺の修行の集大成を、おまえに御見舞いしてやるからな」
上田は俺をにらみつけ、ニヤリと笑った。そしてこう言った。
「出し惜しみはしねえぜ。一撃必殺だ、最初ッから叩きつぶしてやる」
ゴングが鳴った。
観客の沸く声が一斉に起こった。
「うりゃぁ！」
上田がアッパーを振りかざしてきた。
とっさに防御する。
ズシンと重い拳が俺の前腕に響いた。
そうだ、この感覚だ。
上田との初対戦のときに感じた拳の重さを、今一度再確認した。

確かに、前回以上に拳の精度が上がっている。上田は相当レベルアップしていたのだ。
今度はローキックが飛んできた。
上田の蹴りを、とっさにかわす。
しかし、かわしてもかわしても、上田の攻撃はやまなかった。
「逃げてばかりじゃつまんねえ。今度は逃げられねえようにしてやるぜ」
不敵な笑みを見せた上田は、勢いよくアッパーを振りかぶった。とっさに防御する。
「ウッ……！」
前腕部に急激な痛みを感じて、俺は思わずひるんだ。
「おりゃぁ！」
上田の攻撃は容赦なかった。宣言どおり、追いつめて俺の逃げ場を失わせた。
俺の防御を突き破らんばかりの連打。上田の拳が俺の身体をかすめるたびに、急激な痛みがともなった。
その痛みは、単に殴打によるものではなかった。まるでナイフのような鋭利な刃物で皮を切り裂くような鋭い痛みだったのだ。
（クソッ、何だこの痛みは）
痛みを感じた部位を見ると、十センチにも及ぶ切り傷が、十数本もできていたのだ。それぞれの傷からは、血が滴っていた。
すぐさま、上田の拳には何かが仕込まれているのかと疑った。公式戦はストリートファイトと違ってフェアプレイであるはずだ。まっとうな空手家なら、反則を犯すはずはない。
「悪いが、俺の拳には何の細工もしちゃいねえぜ」
俺の思いを察してか、上田はそう言った。
「俺の必殺技、閃刃拳だ。かまいたちの原理を応用したのさ」
「たいした技だ。さすがはケンカ空手日本一なわけだ」
「世界一といってもらおうか」
腕の痛みは次第に痺れとなり、感覚が麻痺しかけてきた。感覚が鈍くなれば、反応も鈍くなる。
上田はおそらく、長年練り上げた作戦通りに俺をダウンさせようとしているのだ。何度もしつこく俺に攻撃を続け、肉体を切り刻んでいく。執拗な攻撃ほどたちの悪いものはない。
接近戦では上田に削られるだけだと判断した俺は防御を解くことにした。

「悪いが、世界一はそう簡単に渡さん」
とっさに反対方向のロープまで移動し、深い呼吸をひとつついた。
臍下丹田に手のひらを引き寄せ、天の氣と地の氣を己を媒体にして取り込み、一気に噴出する。
「波動拳！」
手のひらに集めた天と地の無限なるエネルギーを瞬時に放出させた。
上田に防衛する隙さえ与えず波動拳をねじ込むと、上田の身体が光の波に押し倒され数メートル後退した。
「ぐああッ……」
上田の絶叫が会場に響き渡る。
同時に、観衆の驚嘆の声もまた、建物全体をゆるがせていた。彼らもまた、状況を飲み込むことができずにいた。
「ふう……」
俺は解き放った両手をおさめた。
すでに、上田は起き上がれない状態にあった。
レフェリーが駆けつけると、上田は口から泡を吹き、白目をむいて失神していたのだった。
封印したはずの波動拳を、とうとう使ってしまった。師匠が生きていたなら、この試合をどう見ただろうか。
そんな俺の心情とはよそに、レフェリーが俺の右腕を上方に掲げた。
「優勝者、リュウ！」
無名のファイターの思わぬ結果に、会場全体がどよめいた。
同時に、網膜が焼きつくほどのフラッシュを浴びせられ、マスコミの包囲網に引っかかることになってしまった。野外試合ではありえない事態が起こったのだ。
「あの光の玉の正体は何なのですか」
「あれは、ケン・マスターズと同じ技なのですか」
「ケン・マスターズとはどういう関係なのですか」
彼らの関心事は、俺と波動拳の正体一辺倒だった。ケンと同じ技だと勘づいた者は、躍起になって無名の俺とケンとの間柄を詮索した。あいにく、俺は愛想を言えるほどの度量も、機転の利く話術も備えてはいない。

的の中心に向かって、四方八方から矢を射るがごとくに、マイクを向けてくる彼らに言えたことは、ただひと言。
「俺はただの格闘家だ。俺はこれからも俺より強い奴に会いに行く。俺の目的は、真の格闘家になること。ただ、それだけだ」
そう言い終えると、なお執拗に押し寄せるマスコミを掻き分けながら、会場を脱出したのだった。
「リュウ選手、賞金と優勝カップの授与式があります。ただちにリングに戻ってください！」
必死のアナウンスが会場を響かせている。
しかし俺は、振り返ることなくリングとは逆方向の花道を歩いたのだった。

そんな俺の行動を、上層部は放っておかなかった。控え室に戻った俺を――ほとんど拉致に近い状態で――呼び出したのだ。
高層ビルの最上階に連れて行かれた俺を待っていたのは、中肉中背の白髪の紳士だった。背筋をピンと伸ばし、フロア全体がガラス張りになっており、階下に広がる街を見下ろしていた。
「君が噂の男か」
紳士はくるりとこちらを向いた。
「無名の選手が優勝するなど前人未到のことだ。君のようなファイターがいたとはな……今まで何をしていたのだね」
「ストリートファイトです」
「なるほど。ところで聞くが、君の技はあのケン・マスターズと同じだというではないか。彼との関係を教えてくれるかね」
「ケンとは同門です」
「ほう……」
紳士はあごに手をやって、なにやら一計をめぐらせているようだった。
「ところで、君の行動には驚いた。四十万ドルの賞金を置いて帰った選手は前代未聞だよ。しかし、賞金は賞金だ。勝ち取ったものは得なくてはいけない。やはり賞金は持ち帰ってもらうよ」
「いえ、そのつもりはありません」
「なぜ？」

「わたしの目的は、真の格闘家になることだからです。賞金が目的なのではありません」
「ほう……」
紳士は俺の目を、じっと見た。
「なるほど。君ほど金に興味がない男ははじめてだ。金に執着心がないと知れば、その価値を教えてやらねばならん。わしは君が気に入ったよ」
風格を備えたこの初老の紳士が誰なのかを、俺はまだ知らなかった。
「君には、トップクラスのトレーナーをつけてやろう。どうだ、組織に入って君の望む、真の格闘家にならないか？」
「ありがたい話ですが、わたしはどこの組織にも所属する気はありません」
「そう言うな。組織に入ってこそ、個人の能力が開花できるのだぞ。それは相互にとってメリットではないか？　このことはすべてにおいて通用することだ」
「……」
「君は、リングでケン・マスターズと勝負したくはないのかね？　彼は全米プロだ。全米プロはアマチュアとは組めない決まりがあるのだよ。まあ、よく考えなさい。誰もひとりでは闘えないのだから」
紳士はそう言うと、秘書に目で合図をした。
「良い返事を期待しているよ」
秘書はドアを開けると、俺を部屋から退出するよう促した。
俺は部屋を出て振り返った。
ドアには「最高幹部室」と書かれた札がかかっているのを確認した。
紳士が格闘技界の頂点に君臨するコミッショナーだということを、俺はこのときはじめて知ったのだった。

☆　変化

日本を出国して向かった先は、激動する魔都・上海。
公式試合に優勝するという約束を果たした俺は、春麗に勝負を申し出る権利を得た。春

麗の道場を目指してひた歩く。春麗は刑事だ。もしかしたら道場にいないかもしれない。それでも俺は待っているつもりだった。

今回は勝つ自信がある。俺の踏みしめる足は力強く、止まることなく前へと突き進んでいた。

春麗の道場に到着した。道場の表玄関に立ったとき、道場の中から子どもの声が聞こえた。俺は中を窓越しに覗いてみた。するとそこには青いチャイナドレスの闘衣をまとった春麗と、十数名の子どもたちがいた。どうやら春麗は道場で子どもたちに中国拳法を教えている様子だった。

久々に見た春麗は、子供たちに囲まれていきいきとしていて楽しそうだ。何より、今まで見せたことのない、穏やかでとても優しい顔をしていた。

俺ははじめて見る「春麗先生」の様子をこっそりと見ていたのだった。

しばらく経ってからのことだ。春麗はおもむろにこちらに向かってこう言った。

「そんなところで見ていないで、こっちへいらっしゃい」

声を掛けた先は、身を隠して見ていた俺に対してだった。さすがは春麗だ。

「最初からわかっていたわよ。あなたがここへ来ていたことは」

春麗は腰に手を当てて笑った。俺はなんとなく極まりが悪かったが、道場の玄関に回り込んだ。

「悪い。邪魔しちまったようだな」

「邪魔だなんて。さあ、上がって」

春麗は俺を半ば強引に道場に引っ張りこんだ。俺は片隅で見学させてもらうことにした。

子供たちに囲まれた春麗は、基本の一つを易しい言葉で説明しながら手本を見せている。轟鉄一門で鍛えられてきた俺には、柔らかな言葉としぐさで指導する女性の指導者に新鮮さを覚えた。そして春麗の新たな一面を見た気がした。

「みんな、このおにいちゃんが今からいろいろ教えてくれるわよ」

そう言ってから、春麗は俺にウインクした。俺は一斉に子どもたちの注目を集めることになってしまった。

俺は今の今まで人に教えたことなど一度もない。ましてや子どもが相手など……。躊躇していると、春麗がポンと背中を押した。

「あなたらしくしていればいいのよ」

微笑む春麗を見て、気負う気持ちが解けた。俺は胸を張って、声を張り上げた。

「さあ、俺にひとりずつかかって来い、全力でだ！」
俺はうまれてはじめて、子どもたちと過ごすこの時間を心から楽しいと思ったのだった。
子どもたちを解散させた後、春麗は道場脇のベンチに座って汗をふいた。俺に水の入ったボトルを手渡すと、春麗は手持ちのボトルを一気に飲み始めた。すがすがしい姿から、春麗の迷いが吹っ切れていることを知った。
俺も負けじと一気に飲み干した。汗をかいた後の水分補給は何物にも変えがたい爽快感をもたらす。細胞のひとつひとつに染み渡るみずみずしさと清涼感が、心地よく疲労した身体を癒した。俺も春麗の横に少し距離を置いて座った。
「ここで子どもたちに教えているの。といっても、教えながら学ばせてもらっているんだけど」
春麗はそう言って笑った。
このときの春麗からは、前回見せた組織の人間としてのしがらみなど、まったく感じられなかった。何よりも心から楽しんでいる。俺は新たな春麗を見た気がした。
「もしかして君は刑事を辞めたのか？」
「ええ。わたしの闘いはもう終わったわ。これからがわたしの人生の本番なのよ」
前回会った春麗は、父の復讐を遂げた後の虚無感の中にいた。
そのときの春麗は、今後も刑事として生きていくかどうかという人生の岐路に立っていたはずだった。
だがどうだ、今日の春麗はまったく別人になっているではないか！　長年の目的を果たした後は、あっさり刑事を辞めたという。これにはさすがの俺も驚きを隠せなかった。
中国共産党の掲げたプロパガンダの実態は共産主義国のイデオロギーとは相反した、天と地ほどある貧富の差を生み出す社会システムに他ならない。政治家は賄賂と汚職にまみれ、私腹を肥やすことに専念している。
真実というものは、決して表面には表れないというのが真実というもの。
国家は国民のために存在すると言う。しかしその実態は、国民は国家のために存在するのである。国は組織を維持するためなら個人を犠牲にすることさえも厭わない。そしてこのことは世間に明るみに出ることは決してない。いわゆる情報操作というやつだ。そんなことは当たり前の日常茶飯事のことなのだろう。
俺はあらゆる国を放浪し、世界情勢の実態を肌で感じてきたからよくわかる。

政府高官は十三億人もの国民を、アリほどにしか思っていないのだろう。頂点にいる自分さえよければそれでいいと考えているだけだ。そんな中国に生きる人間なら誰一人として、登りつめた地位と安定した生活を捨てることなど考えもしないはずだ。

刑事の肩書きを捨てるということは、国家権力を捨てるということだ。それは、あらゆる保障や既得権益を放棄することと同じことなのだ。

つまり、春麗は確実に安定した人生を自ら放棄して、振り出しに戻したのだ。

「君は刑事を辞めたことに後悔はないのか」

「ええ。今は一民間人よ。お国を背負っていた頃と違って、ずいぶん気楽なものよ」

「そうなのか」

「ええ。今がいちばん幸せなのかもしれないわ。こうして父の残した道場で、子どもたちと学びあう喜びは、刑事をやっていたわたしには知りえなかったことだもの」

春麗は道場に掲げてある写真を見上げながら言った。

「……父はね、拳法の達人だったの。強くて優しくて、わたしにとって最高の父だった。いつか父のように強くなりたいと思っていたわ。父がわたしを教えてくれたように、今度はわたしが子どもたちを教えているんだと思うと、自分の選んだ道は正しかったんだと思えるの」

「そうか……。いい親父さんだったんだな」

父親を殺害されたという過去を背負いながらも、春麗の表情には悲しみはない。

父親との早すぎる死別を経験していても、幼い頃から父親に愛され、大切に育てられた記憶が、のちの春麗を育てていったのだろう。

「母は、わたしが三歳になったばかりの頃、ぜんそくで亡くなったの。都会の空気になじめなくてね。母は歌がとても上手だったって、父さんはいつも言っていたわ」

母親の写真をみつめながら春麗は言った。

このとき、春麗が俺とはまったく正反対の環境で育った女性であることを知ったのだった。

「ホントはね、わたしの両親は、雲南省の山岳地帯の自治区から出てきた人たちだったの」

「ってことは、君は中国の少数民族ってわけか」

「ふふっ、そうよ。わたしもずっと上海人を装ってきたけれど、もういいかなって」

「それで刑事を辞めたのか」

春麗は小さくうなづいた。父親の肖像を見上げながら。

「父さんの故郷は空と山と田畑と川しかなかったけれど、大自然という宝に抱かれて育ったってよく聞かされて育ったの。村人はすべてに精霊が宿っていると信じていて、自給自足の生活をしていたそうなの。しょっちゅうお祭りがあって、歌を競い合ったり、踊ったりしてみんなが幸せだったって。いつかわたしを故郷につれてってやりたいって、父さんはいつも言ってたわ。実現しなかったけれど」

春麗の中に流れている血は、自然と調和に満たされた部族の血なのだと、穏やかな表情の春麗を見て俺は思った。

「父さんは村一番の武術家だったけれど、もともと争うことは好まなかったわ。長く都会に住んでいても、好戦的な都会人になりきれなくて、きっと疲れていたんじゃないかと思う」

「君も都会暮らしに愛想が尽きたというわけか」

春麗は照れ笑いのようにはにかんだ。

「父さんは村に伝わる秘儀を体得した人だったの。本当は村以外の人には秘密にしておくはずだったんだけど、争いごとの絶えない都会でこそ、その教えが必要だと感じて、道場で武術を教えながらそのこころを伝えていたの。父さんは漢族の人たちから信頼されるようになったけれど、警察の目を光らせることになってしまったのよ。思想を布教しているなんていいがかりをつけられたの」

俺は春麗の言葉に相槌を打たずに、ただ聞いていた。

「父さんは何にも悪くなかったわ。むしろ良いことをしていたのに……」

このとき、春麗の横顔はうつむき、眼を閉じていた。

「ある日わたしが学校から帰ってきたときに、父さんがいなくなってしまったの。探しても探しても、父さんは姿を現してくれなかった。警察に失踪届を出したけれど、何の報告もなかったし、取り合ってさえくれなかった。父さんがわたしを置いて、ひとりで出ていくわけないもの、きっと誰かに連れ去られたんだと直観したわ。わたしはこのとき決心したの。自分が警察官になって、自分自身の手で父さんを見つけてみせるって」

「そうだったのか」

「晴れて警察官になったけれど、父さんの行方はなかなかわからなかった。わたしは頭を抱えたわ。あるときひらめいたの。この中国で狙われたのは、少数民族としての父さんだったんじゃないかって。ちょうどそのとき、インターポールに出向する話が持ち上がっていて、国際的な問題なら、きっとインターポールに所属していれば何か手掛かりが見つか

るかもしれないと思ったの」
　このとき、はじめて春麗に会ったときの初々しいインターポールの捜査官としての春麗の姿が脳裏に浮かんだ。
「わたしの勘は当たったわ。シャドルーの諜報員が父さんをさらったの。理由は、父さんの体得した雲南の奥地の秘儀を、あのベガが欲したからなの。ベガはオカルトに傾倒していたカルト教団の中枢だった。きっと、この道場で人々に教えていたことがベガの耳に入ったんだわ。結局、父さんはベガに口封じのために殺されてしまっていたの」
　俺は春麗の深い過去の傷を、自らの心根に呼び覚ますように感じ入っていた。
　そういえば、俺もベガに狙われたことがあった。殺意の波動を発動したときだ。あの狂った能力を、ベガは欲したのだ。春麗は俺をベガから守ろうとしてくれていたことを思い出した。春麗の過去を知った今、そのときの春麗がいじらしく感じられてせつなくなった。
「この衣装はね、わたしが雲南の血を受け継いだ証なの。両親の故郷の民族衣装は、碧い絹地に金繍を施してあるのが特徴なの。わたしがこの衣装を着ているということは、両親の誇りでもあるのよ」
　春麗は闘衣の胸元に手をやって言った。春麗の強さの由来が誇り高き民族の血を受け継いだ矜持ゆえんであったと、このとき俺は初めて知ったのだった。
　春麗は思い出したように言った。
「ところで、あなたがここへ来たということは、優勝したということよね？」
「ああ、だからこうして君に試合を申し込みに来たんだ」
「そう、やっぱりあなたはただ者ではなかったというわけね。リングで陽の目を浴びた感想は？」
「何にも変わらん。賞金も何もかも置いてきた」
「そうなの？」
　まるで鳩が豆鉄砲を食らったかのような目で、春麗は声をあげた。
「あなたって……。いつまでたっても変わらないわね……。だけど、優勝したならその報酬は受けなきゃだめよ。あなたなりの美学があるのかもしれないけれど、与えられたものは、受け取らなきゃ。それが世の中のルールってものなのよ」
「そういうものなのか」
「もちろんよ。それに、生きていくには糧を得なきゃ。一生放浪して生きていくつもりなの？」

「放浪生活も悪くはないぜ」
「バカ」
なぜかふくれている春麗をよそに、俺は試合のエピソードや、コミッショナーとのやり取りを話して聞かせた。
「組織に所属しなければ、闘えないのがプロの格闘技界ということなのね。どの業界も同じなんだわ。あなたはこれからどうするつもり？」
「俺は一匹狼として生きていくよ。しがらみに縛られるのはゴメンだ」
「格闘家は皆、一匹狼よ。ただ、組織は一匹狼にとっての縄張りなんだと思う。あなたはさしずめ、はぐれ狼ってとこね。プロの世界に挑戦するには、組織に入らないと先へ進めないのが現実なのよ」
「はぐれ狼、か」
「ねえ、たまには勝負から離れてみない？　闘ってばかりじゃ息苦しいじゃない。人生、楽しまなくっちゃ。何でもほどほどがいちばんいいのよ」
「待ってくれよ、俺は君との勝負のためにここへ来たんだぞ」
「つべこべ言わないの。さあ！」
春麗は俺にまるで教え子に語りかけるように俺の肩を叩いた。俺はしぶしぶながらも、春麗の後について行ったのだった。
「君は変わったな」
「そうかもしれないわね。いろいろあったけれど、過去に執着することほど無意味なことはないと気づいたの。今を大切に生きなくちゃね」
復讐に燃えていた春麗がこうして話せるまでに、おそらく何年も要したことだろう。
様々なしがらみや葛藤を乗り越えた笑顔から、春麗の本来持っている強さを感じた。
春麗は国際刑事として世界を股にかけて活躍してきた女性だ。世界的な視野と知識を持った、数少ない中国人であるといえるだろう。それ以上に、中国古来の少数民族として、中国政府をシビアに見る眼を持っている女性だ。
俺は闘うこと以外は眼中にない男ではあるが、世界を自分の足で歩き、世界の実情をこの目で見、肌で感じてきた人間でもある。
訪れる先の国の代表的な都市は所詮、化粧をしたよそ行きの顔でしかない。俺はストリートファイトが目的だったとはいえ、市井の村や町をこの目で確かめてきた。
先進国、新興国、発展途上国というそれぞれの肩書は、いったい何を基準に決めている

のか疑問に思うときがある。アスファルトを敷きつめ、コンクリートの建造物が乱立させた人工的な都市では、高速・利便性が重要視され、文明の利器を駆使しても人々は忙殺されている。化学物質で汚染された大気を吸い、土壌汚染された水を飲み、人工的に作られた食品を体内に取り込み、西洋医学の権威のもと、薬という名の毒物を投与され、血気盛んな青少年には受験地獄を強いる文化が本当に進んでいるというのだろうか。

対して、大自然と調和して生きる先住民族の文化は、本当に野蛮なのだろうか。女たちは家事と育児を中心によく働き、男たちは力仕事と狩りと祭りにいそしみ、夢を語り合う。子どもたちは大自然の中で育まれ、老人から知恵を学ぶ。老人は死ぬまで子どもたちに教え、人工呼吸器や点滴のチューブにつながれたまま寝たきりになることもない。ただ、自然はあらゆる恵みを与えてくれるが、ときに脅威となる一面も兼ね備えている。

国によって大きく人間の生きざまは異なるが、共通して言えることは、世界中のほとんどの人々は搾取され、困窮に瀕しているということだ。ただ、ごく一握りの人間をのぞいては。

人間は誰もが楽しく幸せに暮らしたいがために、必死で生きている。当たり前に生きること自体が命懸けなのだ。貧困、飢餓、戦争、経済格差、児童労働、人身売買……この世はまるで地獄だ。以前春麗が言ったように、ごく一部の支配者が意図的に悲惨な状況を現象化しているのだとしたら、支配下に置かれた人々はもはや為す術がないのだろうか。

まして現実にこんな状況が起きている事実を知っている人間はいったいどれくらいいるだろうか。無関心がこの事実を容認し、拍車をかけていることを先進国のほとんどの人間は知らないのだ。アメリカで毎日捨てられている一日分の食料は、一日分の地球人すべての空腹を満たせるほどだったという。

まずは真実を知ることが解決につながる糸口になるのではないか。組織権力やマスコミの言うことを鵜呑みにせずに、自らが正しい情報を得て判断することが大事なのではないか。そして自分に何ができるのかを意識し、実行する勇気を持つことが、真に必要なことなのではないかと思う。

春麗もまた、インターポール時代にこうした世界の実情を見てきた人間だった。

それゆえに正義とは何かを春麗自身も常に問い、答えを見出そうとしていたのだろう。

「前回あなたと会ってみて、わたしから拳法をとってしまえば何も残らないんだって気づいたの。ふふっ、わたしもあなたと同じ。だけどわたしには拳法がある。これはわたしの誇りなんだって気づいたのよ。だから刑事を辞めることにためらいは少しもなかったわ。

あなたのおかげで、本当の自分が見えてきたのよ」
「そうか……。よかった」
「あなたには、ずっとお礼が言いたかったの。あなたに出会わなかったら、きっと今でも刑事を続けていただろうから」
「俺に感謝するんじゃないぜ、感謝は自分自身にするものなんだ。……っていうのは、インドのヨギの受け売りなんだけどな」
俺たちは互いの顔を見て笑いあった。
こうして人と心を通わせたのは、本当に久しぶりだと思った。
誰でも皆、人生に妥協をしながら生きている。それが普通だと思って生きている。
しかし、本当は自分が心からやりたいことをして生きてゆけばいいのだ。春麗のように。
「わたしは子どもたちにクンフーを通して心と身体を育てるお手伝いがしたいと思っているの。そのためには自分自身がお手本にならなきゃいけないんだってわかったのよ」
穏やかに話す春麗からは、父親の復讐に人生を捧げていた頃の面影は微塵も感じられない。春麗は勝負に明け暮れて生きる俺とは対照的に、子どもたちに中国拳法を通して人間育成に力を注ぐ教師としての道を選んだのだった。
俺はこのとき春麗のことを、本当の意味で美しい女性だと思った。
しばらくぶりに会った春麗は、人間としてひとまわり大きくなっていたのだ。このことは、一段と技を磨き上げたことと同じくらい俺を刺激した。
「ねえ、あなたが探し求めている答えは見つかったの？」
「いや、探しても探しても、答えはまだ見つからないんだ。俺の旅はまだ終わりそうにないよ」
俺は今まで何をしていたのだろう。何のために長い旅をしてきたのだろう。もしかしたら、これまでの旅は堂々巡りの連続だけだったのかもしれない。
どんな相手と闘っても、答えを確信できなかった俺は、新たに強者を求めては答えを見出せずに今まで来たのだから。
「あなたの探している答えは、あなたの中にあるはずよ。それをあなた自身で見つけるしかないと思うの」
春麗の言葉は、いつかダルシムから聞いた言葉と同じだった。この言葉は、自分の中心に戻ることを思い出させた。
「ありがとう。今日ここへ来て君に会えてよかった。格闘家として、また君に試合を申し

込みに来るよ」
「ええ、格闘家として、待ってるわ」
春麗の見送りに、手を上げながらも振り返らずに上海をあとにしたのだった。
それからだ。度々春麗のもとへ会いに行くようになったのは。
勝ち負け関係なしに試合をしては、互いの技を讃えあった。それは俺にとって非常に楽しく有意義なことだった。
そして時折、春麗は格闘とはまったく関係ない世界に俺を連れ出した。闘ってばかりでは、バランスが保てなくなるからだと言って。
いつのまにか、春麗に試合を申し込みに行くということは、単に勝負するだけではなくなっていった。
そんな俺に、変化が起こった。
これまで格闘仲間としてしか見ていなかった春麗を、意識するようになったからだ。
それは同じ格闘家でありながら、違いを見たからである。
男には思いもつかないことを、春麗はよく指摘した。それが俺には新鮮だった。
格闘家という枠を越えて、春麗は俺にないものを持っていることに気づき始めたのだった。
同時に俺は、知っているはずの春麗のことを何一つ知らないということを思い知ることになった。
春麗の切れ長の目が物語る女心、うなじの後れ毛から漂う色香、艶やかな唇のやわらかさ、そして春麗の心ひとつさえも、俺はこれまで知ろうとしなかったことに気がついた。
とたんに、今まで知らずにいた春麗のことが知りたいと思うようになった。
しかし、どことなく男を翻弄するところのある春麗は、一筋縄ではつかみきれない存在でもあった。それほど高いところに春麗はいた。
一方で、届かないことはわかっていても、いつかこの手で春麗を捕まえてみたい。そしてこの手で触れてみたいという内なる感情が次第に大きく膨らんでいった。
だが理性は、俺のような男が高嶺の花に手を差し延べることを許さなかった。
それでも、俺の中で今までにない欲求が芽生えるのを、理性は抑え切れなかった。
その欲求とは、本能レベルではない、もっと高次なレベルの――この女性を守りたい――自分よりも高いところにいる女性を守れるだけの男になりたい――という強い欲求だっ

た。
そしていつの間にかその欲求が俺の原動力となっていった。
しかし、俺のような男が春麗を抱きしめることが許されるのだろうかと自問しては、かぶりを振った。いざ春麗を目の前にしてみると、自分の強さが幻想のように思えてくる。うまくは言えないが、俺にはまだ自信がなかったのだ。
そんな自分の弱さを覆い隠そうとするかのように、日本へと逃げ帰っては、公式試合に出て勝利を果たすことで自分を証明しようとした。俺は強い相手に勝つことで、自信を持つことができたのだった。
試合に勝って、高嶺の花を見上げる権利を得ようとしたのだ。春麗に認めてもらうために考えたことは、いうまでもなく、アイツに勝たなければならないということだった。
――ケンと決着をつけねばならない――
そう決心したのは俺自身のけじめのためだった。
ケンに勝つことができれば、絶対的な自信を勝ち得ることができるはずなのだ。
春麗にとって、俺が誰と闘おうが関係ないことだろう。しかし俺にとっては避けて通れない重要な課題だった。
宮本武蔵の著書『五輪書』に記された、「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とす」の言葉を胸に、寝食以外はすべて修行のために費やした。
必殺技を洗練しようとする行為が、自分自身を磨き上げることだと考えて疑わなかった俺は、春麗よりも、ケンよりも強くなりたい一心で、技を完成させるために修行に没頭したのだった。
ひとりの女性への想いが、これほどまでに自分を高めることができるのだという事実に驚きつつも、今度こそケンを超えてみせると固く決心して、アメリカへと飛び立ったのだった。

「リュウ！　よく来てくれたな。さあ、中へ入れ」
今やその名を知らぬ者がいないほどの有名人になってしまったケンは、俺を見るや否や、邸宅へと招き入れようと扉を開けた。
しかし俺はすぐさま躊躇した。扉の奥から赤ん坊の泣く声が聞こえたからだ。中へ入れば俺の闘志は失墜してしまうことは目に見えていた。
ケンの家族を目の前にして、はぐれ狼の俺が一家の平和を崩しにかかれるほど、俺は節

操のない人間ではなかった。
「いや、遠慮する。また今度出直すよ」
俺は踵を返してもと来た道を引き返そうとした。
「待てよ。おまえ、俺と勝負しに来たんだろう？」
俺はケンの言葉に足を止めた。
「そうだと思ったよ。……おまえとは決着をつけなきゃならねえことは重々承知しているさ。俺たちが、最強になったときにやり合おうって約束もある」
ケンは腕を組み、眉間にしわを寄せた。
「しかし、世の中は自分の考えだけでは動かせないのが現実なんだよ、リュウ。おまえとはぜひとも闘いたい。だが、全米チャンピオンは、非公式試合はできない立場にあるんだ。両者の契約なしで試合することは、許されないのさ。リュウ、その意味はおまえにもわかるだろう？」
俺とてそれくらいのことはわかる。チャンピオンたる者が、野試合で怪我を負うことになればどうなるか。
たとえケンが勝利したとしても、その後に控えた公式試合に無傷で出場できる保証はどこにもない。ケンも組織に所属している人間であり、一家の主なのだ。だが、それ以上に保守の立場に転じてしまったケンに、歯がゆい思いを禁じえなかった。
修行時代の情熱はもう、ケンにはないのか。
俺は沸々とした感情をケンにぶつけた。
「逃げるのか？　それとも組織が怖いのか？　おまえはいつから腰抜けになったんだ」
「何だと！」
俺の挑発にすぐさま反応したケンは、かつての鉄砲玉に戻った。
「いいだろう。リュウよ、おまえが勝負を仕掛けてきたことを後悔するぜ。おまえは絶対に、俺には勝てねえ！　絶対にだ」
「相当な自信だな。だが俺だっておまえには負けないぜ」
俺とケンは、ケン専用のトレーニングジムのリング上で勝負することになった。
これがお互い別々の道を歩んでから、はじめての試合となる。
真っ赤な道衣に身を包んで闘志を高めていたケンは、修行時代の青臭さは抜け、落ち着きが備わっていた。筋肉の鎧はより大きくなっており、日々のトレーニングを欠かしていないことが読み取れた。

先手を取るか、後手に回るか。
これまでのケンならば、必ず先手を抑えてくるだろう。
「いつものように軽くヒネってやるから、覚悟しな」
思惑とは裏腹に、ケンは人差し指でクイッと合図し、俺を挑発してきた。
今日のこの日をどれほど待ち望んだことだろう。ケンの挑発はむしろ、俺には喜ばしくさえ思えた。
さぞかし、ケンは強くなっていることだろう！
先に張り詰めた空気を切り裂いたのは、ケンだった。勝負の場において、口約束ほど当てにならないものはない。
拳、脚、踵が、胸、腹、脚を。
ケンは堂々と俺を攻めまくってきた。
（ぐッ、パワーもスピードも技のキレも格段に上がっている！）
ケンの技のすべてを俺の身体すべてで受け止めた感触は、俺の士気を一気に高めた。武者震いさえした。
「それでこそ全米チャンピオンだ」
転じて俺が攻撃側へと回る。ケンは、俺と同様にすべての技をキャッチした。
「伊達に修行人生歩んでねえわけだ」
ケンの口元に笑みがこぼれた。
緒戦は親友同士・ライバル同士の挨拶のようなものだ。拳と拳、脚と脚を交わすことは若かりし頃の相手の癖、得手不得手、攻撃パターンを思い出すための作業のようなものなのだ。
突き、打ち、蹴りといった打撃系をベースとしているが、ときに寝技や関節、絞め、投げも駆使するのが剛拳から受け継いだ技だ。基本技は体術であったが、その限りではない。あくまでも武術として「命懸けの技」すなわち、相手を死に至らしめる技として精錬練磨し確立したものなのである。
俺たちはともに寸止めというルールを架せられたことはなかった。
始祖は僧侶でありながら、我が一門はフルコンタクト制の活殺術というのがその実態なのである。
俺もケンも、受け継いだ技はしっかりと身に染み込んでいることを確認しあったのだった。

懐かしむのはここまでだ。ここから先から繰り広げられる肉体と肉体の駆け引きは、コンマゼロ秒の世界――。

ケンは真っ向から空気を裂くような連続パンチ、弾丸のような右アッパー、鮮明な弧を描くようなハイキックを繰り出してきた。俺はケンの攻撃をことごとくが芯を捕らえながら防御し、しかし同時にダメージをも受けた。

強い。

やはりケンは別格だ。

こちらとしても、防御を解かねば攻撃はできない。しかし、ケンは俺に防御を解除する隙さえ与えはしなかった。

「攻めの王者」とは、全米制覇した際のケンに冠せられた謳い文句だったが、まったくそのとおりだ。昔とちっとも変わっていない。

いや、昔のケンがさらに洗練されていた。

攻めて攻めて攻めまくる。

そして相手を削り込んでいく。

それが可能なのは、比類なき持久力の保持者、ケンだからである。誰でも真似できるものではない。

「どうしたリュウ、守ってばかりいないで攻めて来い！」

言いながら、ケンは間合いを保ったままファイティングポーズをとった。

「ああ、言われなくてもそうするさ」

これまで温存していたパワーとスタミナを解放した俺は、ケンのボディに回し蹴りを放った。ただし勢いを殺して。コンマゼロ秒の誤差により、まともに当たれば表面上には見えない衝撃を与えることができる。

ケンの内臓がたわんだであろうその刹那、鳩尾（みぞおち）を右で突くが防がれ、左でアッパーを放つところをよけられた。

よけられると、そのエネルギーは空を切る。そのときの隙をケンは見逃さなかった。

「疾風迅雷脚！！」

ケンの体が長軸方向に回転し、伸ばした脚が俺のボディを襲った。

ガードしきれずに強力な足蹴りを三回立て続けに受けた俺は、背後にあるロープに逃げ場を奪われた。

ケンの連続技がここでさらに牙をむく。

重いボディブローが左右から打ち込まれ、とどめの右アッパーが俺を宙に舞い上げた。
痛みは、感じなかった。
一端の格闘家なら誰しも、自らを無感覚の身体に切り替えることが可能だからだ。
戦闘モードになればノルアドレナリンやアドレナリンというカテコールアミン系のホルモンにより、痛み感覚を麻痺させるからである。
とはいっても、相当なエネルギーが身体に外力として衝撃を加えられれば痛みをまったく感じないわけではない。
この場合は痛みを切り離す、という表現が適切かもしれない。
感じられるべき痛みは、のちに感覚を取り戻した時に清算される。すなわち、痛みは後から感じるというわけなのである。
力なく空中に舞い上げられたそのとき。
俺には客観的に自分の身体が衝撃を受け、リング上に打ち落とされた感覚だけが存在した。
俺は口端がぬめりを帯びていることに気づかずに立ち上がろうとした。
そのときケンは、薄気味悪いような、得体の知れないものを見るかのような顔で俺を見た。まるでゾンビを見るかのように。
流血していることも構わず再び構えた俺に、ケンは気を取り直して突進してきた。
俺の手のひらには、白色矮星のごとく氣を縮退圧した青白い球体を隠し持っていた。ケンがジャンプした軌道に沿って、爆発寸前のエネルギー体を手のひらから一気に解き放った。
「真空波動拳！」
放たれた矮星は、彗星のごとく青白い尾を引いてケンの腹部にねじ込み、ケンの着地するべき地点は、その球体の圧力によって大きく後退した。
ケンは転倒した際、後頭部を打っており、一瞬意識を失ったかのようだった。しかし数秒後には悠然とかぶりを振ると、腹を抱えながら立ち上がった。
「へへッ、やるじゃねえか、リュウ！」
ケンの苦笑いは相当なダメージを負ったという証拠だ。これはケンの癖だった。
拳と拳。
脚と脚。
あらゆる攻撃を互いに交わす。

当ててはよけられ、よけては当てられる。
最も相手を知り尽くした相手とやりあうことは、格闘家として最高の喜びなのだ。そこに私情はなく、相手と互角に闘えることがうれしいのだ。
やはり俺もケンも、骨の髄まで格闘家だった。
なぜなら、互いにドローに持ち込む算段は決して持ち合わせていなかったからだ。俺たちの闘志は、若かりし修行時代から一度たりとも消えたことがなく、今ここで更なる炎となって燃え盛っているのだ。
互いにかなりスタミナが切れてきた。
後は持久力の勝負と、確実な一撃を狙うのみ。
必殺技とてそうたやすく出せるものではない。タイミング、相手のスタンス、攻めの間合いなどが一致しなければならない。この千載一遇のチャンスに出くわしたときのみ出せる技が必殺技なのである。うかつに出せば返り討ちにあう諸刃の剣ともいえよう。
先に仕掛けたのは俺だった。
正拳突きを放ちすぐさまアッパーを打った。手ごたえはあった。ケンがその場に屈したからだ。しかし……！
「昇龍裂破ァ！」
間髪を入れず、ケンのすさまじい威力を伴ったアッパーカットが俺の身体を引き裂く。焼けるような熱さが俺の肉体を貫いた。そのとき、剛拳から授かったハチマキが真っ二つに引きちぎられたことだけは覚えていた。
……俺の記憶は、ここで途絶えた。

一睡もできなかった。
疲れ果て、精魂尽き果てたというのに眠れないのだ。
これまで経験した悔しさを超えた悔しさというものを、俺は初めて経験した。
ケンは家庭を持ち、ぬくぬくとした環境の中にいる。対して俺は誰よりも修行に打ち込んできた。絶対に勝つ自信があったからこそ、ケンに勝負を挑んだのだ。
それがケンの必殺技をまともに食らって負けたのだ。俺は、己の不甲斐なさにやり切れぬ思いを抱えたまま、沸々とした思いをどうすることもできずに、日本に帰国したのだった。
今までの俺だったなら、おそらく殺意の波動を再び発動させただろう。しかしこのとき

の俺の気持ちは上海へと向かっていた。
ケンに勝てなかった俺は、春麗にふさわしい男になれなかったということになる。傷だらけの肉体と精神と情けない面を下げてまでも、俺は春麗に会いたい思いを抑えられなかった。
もはや俺は、ケンに敗北したこと以上に、春麗に対する想いが真摯なものとなっていたのだった。
会うや否や、春麗は俺の額にハチマキがないことに気づいた。
「あら、あなたのトレードマーク、どうしちゃったの？　それに、その怪我！」
「ケンと勝負してきたんだ。それでケンの拳で引きちぎられた。仕方ないさ」
春麗は俺を道場に招きいれると、すぐさま救急箱を取り出して、傷の手当てをしてくれた。俺の顔はバンソウコウだらけになり、腫れた顔には氷のうをあてがわれた。
春麗は俺が何も言わずとも、ケンとの勝負に負けたことを察していた。
「……残念だったわね。でも次があるじゃない。あなたたちは永遠のライバルなんでしょ？」
「悔しいが、結果を受け止めるしかないさ」
俺は氷のうをまぶたに当てて仰向けになった。ケンに負けた悔しさと自分自身に対しての怒りで火照った感情を、氷の冷たさで鎮めようとしたのだ。そしてそんな俺の内情を春麗に悟られまいとしていたのだった。
「あなたのハチマキって、大事な宝物だったんでしょう？」
「ああ。俺の師匠から授かったものだったんだ」
白いハチマキは俺が十五歳のときに剛拳から授かった、師弟の証だった。ハチマキは俺が師匠と過ごした日々のすべてを知っている。そして師匠のもとを離れてひとり立ちしてからの出来事も、ケンに真っ二つに引きちぎられるまでのすべてを知っている。血と汗にまみれ、擦り切れ、ほころび、くたびれたハチマキは、俺の体の一部だった。それをケンが引き裂いたのだ。これはいったい何を意味するというのだろう。しかし悔しさでいっぱいの俺には、その意味をさすらう余裕などなかった。
「ねえ、あなたのお師匠様のこと、聞きたいわ」
春麗はおもむろに問いかけてきた。その言葉によって、剛拳の姿がまぶたの裏によみがえった。俺は横たえた身体を起こし、あぐらをかいて座った。
「師匠は、険しい岩山のような男だったよ」
俺は剛拳師匠と、そしてケンとの懐かしい思い出の数々を――自分の足跡を整理しつつ

――春麗に話して聞かせたのだった。
春麗は膝を抱えて俺の言葉のひとつひとつを、まるで思い出を共有しているかのように聞いていた。
「素晴らしいお方だったのね……」
「俺もケンも、真の強さを求めて生きているんだ。俺たちはまったく別々の生き方を選んで、どちらが先に答えを見つけるかを競い合っているんだ。俺は絶対にアイツに負けるわけにはいかない。だからまた、修行を積んで……」
俺の話をさえぎるかのように、春麗はおもむろに立ち上がり、道場の片隅に立てかけてあった何かを持って戻ってきた。春麗の所作をじっと見つめながら、これから何をしようとしているのかを見守った。
春麗は椅子に座ると、はじめて見るシンプルな弦楽器を弾き始めた。
静謐な空間は、まるで色彩を帯びたかのようなまろやかな旋律で満たされ、そこが道場であることを忘れさせた。
静かで深い音色は、昂ぶった俺の心と身体に深く浸透していった。そしてちぎれそうになるまで引き絞り続けてきた俺の心の琴線に、やわらかく触れた。俺は目を閉じて、春麗が紡ぐ旋律に耳を傍立てていた。
それはどこかで聴いたことのある、懐かしい曲だった。
悠久の歴史に思いを馳せるようなその旋律は、俺の魂を沈静化させ、張り詰めていた心を解きほぐした。先ほどまで抱いていたケンに対する対抗意識と自分自身に対する怒りは、いつのまにかおとなしくなっていることに気がついたのだった。
「……蘇州夜曲よ」
春麗は曲を引き終えてから言った。
「蘇州……」
蘇州といえば、上海から程近い「東洋のベニス」といわれる街。趣のある中国式庭園と市内を縦横に流れる運河で有名だ。黒い瓦屋根の四隅を跳ね上げた蘇州式建築の街並みは、二千五百年前の歴史の名残をそのままに残している。
「この曲は、日本人が作った曲なのよ。あなたは知っていたかしら」
「いや、知らなかったよ」
春麗の奏でたこの曲は、はるか昔の中国の文化と歴史をたずさえて日本に伝わってきたものだと思っていたが、意外にも日本人が作曲した曲だというのだ。しかし見事に中国大

陸の壮大さと悠久の歴史を表現されていた。

「この楽器は二胡という中国の楽器なの。あなたははじめて見るかもしれないわね。この二胡は、弦を張りすぎても緩みすぎてもうまく鳴らないのよ。ちょうどいい張り具合でなきゃ、ちょうどいい音色が出ないのと同じように、何事もバランスが大事なのよ。だからあなたも、弦を緩めてみたらどうかしら。きっといい音色が出ると思うわよ」

俺は春麗の顔をじっと見た。

何でこの女性は俺のことをこんなにわかっているのだろう。こんなに俺のことを知っている人物は、師匠の剛拳くらいだ。巌のような剛拳と春麗とはかけ離れた存在のはずだ。似ても似つかぬ二人の存在が、なぜか同一人物なのではないかとさえ思わせられる。もしかしたら春麗という女性の内奥には、剛拳が住んでいるのかもしれない。なぜならば、暴走しそうな俺を鎮めさせることができたのは、剛拳と春麗だけだったからだ。

張り詰めすぎた俺の弦を緩めてくれたのは春麗だ。春麗の存在がなかったら、俺はまた殺意の波動に支配されていただろう。殺意の波動とは、張り詰めすぎた弦がプッツリと切れてしまった結果だったのだ。

俺はようやく自分をもとの中心に戻すことを思い出した。春麗は、さまよっていた俺を原点に戻すきっかけをくれたのだ。

闘うことでしか自分を表現することのできない俺にとって、音楽で人の心を動かした春麗の為せる業は実に見事に思えた。俺はまたしても、春麗に感服したのだった。

「なあ春麗、その楽器をもう少し弾いてくれないか」

春麗は微笑んでうなづくと、再び二胡を奏で始めた。俺は目を閉じた。美しい旋律は、俺の耳に浸透していった。

俺は今までずっと、自分で自分を追い込んでいた。弦を精一杯引き絞ることに気をとられて緩めることをしなかった。息を吸うことしか知らず、吐くことを忘れていた。このままだと、おそらく俺は壊れていただろう。殺意の波動によって、自己破壊をもたらしたかもしれない。

ケンはバランスを取ることを知っていた。

強くなることも、家庭を持つことも、地位や名誉を得ることもすべて、おろそかにはしなかった。そのすべてに向き合い、決して逃げなかった。

俺はどうだ？

強くなること以外に関心を払わなかった。

真の格闘家になるためにはまず、真の男になることが先ではなかったのか？
真の男になるためにはまず、当たり前の男にならねばならないのではないか？
そのためには何よりまず、地に足をつけて生きていかなければならなかったのではないか？
……俺はちゃんと答えを知っていた。
その答えを知らぬふりをして、既存の自分を正当化していた。自分が変わることをどこかで恐れていただけだった。
ケンはリングに突っ伏していた俺に、こう言った。
――おまえはいつでも死ぬ覚悟で闘っているんだろうが俺は違う。俺は生き抜く覚悟で闘ってるのさ。俺には守るべきものがある。どんなことがあっても俺は死なねえ！　俺の命はもう、俺のものだけじゃないんだ――
その時わかった。
一匹狼にあって、はぐれ狼にないもの……それは、大切な存在を絶対に守らなくてはならないという強い意志。その意志の強さは、ひとり身の男と、家族をもった男のどちらが強いかを考えればおのずと答が出る。
縄張りを持たぬひとり身のはぐれ狼は、勝っても負けても風の吹くままに流れていくのが定め。いつのたれ死んでも誰にも気づかれずに忘れ去られるのが宿命なのだ。
ケンにあって、俺にないもの……。
それは一匹狼なら誰でも知っていること――愛する女性や家族への強烈な想いと、強い責任感――
俺は当たり前の男にも満たない未熟な男だった。自分の本当の気持ちにさえも向き合わずに見て見ぬふりをしていた。
春麗の奏でる音色を聴いたあと、俺の気持ちはあるがままになっていた。
そのとき心に浮かんだのは、闘うことでも強くなることでも、真の格闘家を目指すことでも、たったひとりで生きていくことでもなかった。
目を閉じたまま、心を空っぽにしてただ自然に自分をゆだねた。
今、俺がいちばん必要としているのは何だ？
うれしいとき、いちばん先に思うのは？
辛いとき、いちばん先に思い出すのは何なのか？
そばにいてほしいと思うのは誰なのか？

今この時はもう二度と戻らない。それならば結果がどうであれ、あるがままの気持ちを表現してみたい。そう思った。

目を開けると、まっすぐ前を見た。

「春麗……」

春麗は弓を引く手を止めた。

ようやく緊張が解けたはずの俺は、再び硬直状態に陥っていた。

心臓が激しく打ち付けはじめ、額から脂汗が滴り、手には汗。膝は別の人格を持っているかのようにぐらついている。

今の緊張感は、試合のときのものとはまったく違う。

ただ、全人生を懸けて相手に挑もうとしていることには違いなかった。俺は極度の緊張状態のさなかにいて、務めて冷静さを装った。俺は胃から搾り出すように声を出した。

「ありがとう。君のおかげで俺はやっと目が覚めたよ」

俺は一息ついてから、肚をくくった。そして、春麗の前に近寄った。

「俺は必ず君にふさわしい男になってみせる。……だから、これからは格闘家としてだけでなく、ひとりの男としても君に会いに来てもかまわないか？」

春麗は目を丸くして、まっすぐに俺の目を見つめていた。そして、おもむろに立ち上がってポケットから取り出した赤いハチマキを俺の額に結んだ。春麗はゆっくりとうなづいた。

「わたしはいつだってここであなたを待ってたわ」

春麗は、頬を赤らめてはにかんだ。

高嶺にあると思っていた美しい花は、本当はいつもそこで咲きほころんでいたのだ。俺は、崖を登ることをやめてはじめて、その花が手の届くところに咲いていたことに気づいたのだった。

俺ははじめて春麗をこの手で抱きしめた。

抱きしめて心が震えているのを感じながら、頭の中ではケンを追うことを考えていたのだった……。

☆　分水嶺

帰国して向かった先は、格闘技界のコミッショナーのもとだった。
「これからは一格闘家としてお世話になります」
コミッショナーはニヤリと笑った。
誰かのために闘うという目的を得た俺は、公式試合において奇跡的な勝利をおさめることが多くなった。
圧倒的に劣勢だった試合が一気に逆転させて勝つという、劇的な勝利が相次いだ。これを火事場のクソ力というのだろう。理屈を超えた何かが、俺を突き動かしたとしか思えない。
おそらく、自分自身のためだけに闘っていたなら、この奇跡を経験することはなかっただろう。
ケンの強さの理由が、俺にもやっとわかった。
いや、この格闘技界に生きる男たちのほとんどが、それを知っていた。
縄張りを持たないはぐれ狼だけが、知らなかったのだけなのだ。
勝利の喜びを大切な誰かと共有することが、いかにすばらしいかを知ったのだ。
これまでいったいどれほどの勝利を無感情でやり過ごしてきたことだろう。
闘っては新たなる試合を求めてさすらうだけのはぐれ狼の生き様は、もしかしたら随分つまらない役回りだったのかもしれない。
縄張りを得た一匹狼となった俺は、勝っても負けても上海へ飛んで行くようになった。
春麗への強烈な想いが、俺を勝者に導くエネルギー源へと質量転化し、さらに新たなる士気を生み出して闘いに挑むという、ポジティブサイクルに動かされるようになった。
春麗のぬくもりを肌で感じる度に、俺は強くなれるような気がした。俺は自分がまちがいなく強いと信じて疑わなかった。
このときの俺には何も不可能なことなどなく、考えたことはすべてうまくいくという現実に、夢中になっていた。
俺はやっと強さを手に入れた。……そう思っていたのだった。

それから。
公式試合に順調に勝ち進んでいった俺は、いつものように春麗のもとへ飛んでいった。
意気揚々と春麗の道場の玄関に向かい声をかけると、春麗が出てきた。俺の胸はひとつ大

きく高鳴った。
「春麗！　試合に勝ったぞ！」
俺は駆け寄って春麗を抱きあげ、ぐるぐる振り回して力いっぱい抱きしめた。心の底から春麗が愛しかった。
「……苦しいわ」
春麗は絞めつける俺の腕を二回軽く叩いた。いつもこうだ。俺はいつまでたってもやさしく抱きしめることがうまくなれない。全身の力を抜いて腕を緩めた。
「ん……！」
何か言おうとする春麗に間髪を入れず、春麗のやわらかな唇の感触を確かめた。この瞬間のために、俺は生きていると思った。
「この調子なら全勝もいけるかもしれない」
相変わらず、俺にとって試合に勝つことが人生の中心だった。そんな俺に、春麗は快く練習相手になってくれた。これが俺たちの大切なスキンシップのひとつだった。
勝つために日本で修練する日々を費やしては、時折上海に向かう。こんな関係が続いてちょうど一年になろうとしていた。
春麗は俺を居間に通すと、茉莉花茶（ジャスミンティ）を淹れてくれた。甘い花の香りが部屋いっぱいに広がる。
「あなたはどんどん強くなっていくわね。わたしには足元にも及ばないくらいに」
「いや、そんなことはないよ。君も格闘家として第一線に出てみたらどうだ？　君の実力は世界的レベルだぜ」
「うふふ、ありがと。でもね、わたしは小さくてもこの武術道場で子どもたちに教える方がいいの」
「俺はもったいないと思うぜ……。しかし君は子どもたちと一緒にいるときは本当に楽しそうだ」
「そうでしょ。わたしは子どもが好きなの。子どもたちが上達していく姿を見るのが、わたしの喜びなの」
春麗のうれしそうな様子に、胸が打ち震えた。春麗が子どもたちに対してそうであるように、春麗の笑顔を見るのが、俺にとっての喜びだった。春麗が笑顔になってくれるなら、俺はどんなこともする、心からそう思った。
そのためには俺が試合に勝つこと――それが、春麗を喜ばせる最上の手段と信じて疑わ

なかった。
「全勝すれば、あなたの目標は達成したことになるんでしょ？　だったら、その次の目標も考えとかなくっちゃね」
「俺の目標はいつだって、強くなることに変わりないぜ」
「そして真の格闘家になること、でしょ？」
俺たちは笑った。
「君にも次の目標はあるのか？」
春麗は一瞬目を大きくした後、うつむいて何かを思いめぐらせているようだった。
「……きっとあなたは笑うから、秘密にしておくわ」
春麗は恥じらいながら首をすくめた。
「笑わないよ」
「本当？」
「約束する」
きっとよ、と念を押してから春麗は言った。
「わたしの場合は、目標というよりも、あこがれかな」
春麗ははにかみながら言った。
「にぎやかで、あったかい家庭に、ずっとあこがれていたの。父を失ってから」
そのとき、三時を知らせる時計の鐘が部屋に響き渡った。
「あら、もう稽古の時間だわ。子どもたち、きっと道場でわたしが来るのを待ってるわ」
春麗は我に返ったようにソファから立ち上がった。俺もとっさに立ちあがった。
「春麗、今日は出直すよ」
「もう帰るの？」
「ああ。……また来る」
頭に雷が落ちたかのような衝撃――。
こんな大事なことに、今まで気づかずにいたなんて……。
俺は半ば逃げるように上海の雑踏を掻き分けて、空港へと向かっていた。
春麗は国際刑事としてベガを追っていたときも、殺意の波動に狂った俺と初めて会ったときも、上海ではじめて俺と一戦を交わした、隙のない女格闘家だったあのときも、心の奥底では、家族を持つことにあこがれていたのだ。
俺は単純に、春麗も格闘家としての何らかの目標があると勝手に思い込んでいた。実際、

俺たちはともに励みあい、高めあう仲にとして認め合っていたからだ。互いに切磋琢磨して強くなれるパートナーであると。

俺はなんて愚かな男だったのだろう。

春麗の本当の望みを知ってしまった俺は、春麗のそばにいることがはばかられて飛び出した。自分の浅はかさにいたたまれなくなったのだ。

――父を失ってから――

春麗の言葉が俺の心に何度もこだまする。

冷静を保ちつつ商店街を歩いていると、人々の喧騒が耳に刺さるように飛び込んできた。しかしそれさえ、春麗の言葉をかき消すことには役立たなかった。むしろ新たな問題をより一層際立たせることとなった。

俺はいったい春麗の何を見てきたのか。

春麗の本心を何も知らなかっただけでなく、知ろうとしなかったことに愕然とした。

俺は自分のことしか考えていなかったという事実を受け止めきれず、全力疾走で商店街を駆け抜けると、ゆるやかな土手を目指して走っていた。土手を一気に駆け上ると、急降下した斜面に身体を投げ出し、河川敷に転げ落ちた。

太陽の光のまぶしさと、むせかえるような大地の草いきれを感じて仰向けになった。

ただ、空を見上げていた。

パンクしそうな頭の中をいったん空っぽにしたかった。

こうして大地に身をゆだね、空を眺めているだけで、心が落ち着いてきた。

……俺もまた、父を失った。

ただし、生きながらにして父親と訣別したのだった。

長い間、父との確執を遠ざけてきた俺に、春麗のあの一言で俺自身の問題を、目の前に呼び起こすことになってしまった。

俺の心は一八で家を飛び出した二月の夜に戻っていた。

この十数年間で俺の父親への気持ちはどう変化しただろう。

恨んでいたか？　憎んでいたか？　正直、両方だった。

あの夜。俺の家族は崩壊した。俺が崩壊させたのだ。そして剛拳師匠の小僧部屋で決心したのだ。「真の格闘家になってみせる」と。

皮肉なことに、俺の人生最大の目標は、父から勘当を受けなければ決心することはなかったのだ。

春麗は今ごろ、子どもたちに稽古をつけている最中だろう。
春麗はいつも稽古の前に、父の遺影に向かって拝礼している。奇しくも、春麗も亡き父の復讐のために人生を懸けてきたからこそ、一流の格闘家へと成長できたのかもしれない。
俺は家庭を壊し、父から逃れてきた男。対して春麗は、父を失ってから、家庭を築きたいと願い続けてきた女。
春麗は強くなることなんかではなく、家族にあこがれている、ごく普通の女性だった。
家族に恵まれていながら、父親から勘当を受けて家を飛び出してきた俺は、春麗とは対極の存在となる。そう思うと春麗に対して後ろめたさを禁じえなかった。
家族を遠ざけてきた俺が、家族を求めている春麗と正面切って向き合えるのか？　急に自信がなくなってしまった。
俺は目を閉じて再び心を空っぽにしてみた。
雑念が空をさえぎる雲のように流れてくるのを明け渡しつつ、無になってみた。
真の格闘家になりさえすれば、俺は父親に認めてもらえると思ったのではないか？
俺の本心は、父親を見返してやりたいのと同時に、俺という人間を認めてほしかったのではないか？
俺は家族を遠ざけながらも、本当は求めてやまなかったのかもしれない。
強さを求めるかたわらで、未だ父親から逃げている側面に気づいたとき、試合に勝ったことなどどうでもよく思えた。
春麗の本当の望みは、にぎやかであたたかな家庭を持つことだ。それは結婚して子どもを産み育てたいということだ。
春麗の年頃の女性ならば、誰しも考えることなのだろう。それが当たり前というものだ。春麗はごく普通の女性なのだから。
おそらく春麗は、俺の生き様から共に生きる将来を見出せないままに、ため息をついていたのだろう。
春麗は幼い頃に母を亡くし、そしてシャドルーの総帥ベガに父を殺された。そんな境遇でたったひとり健気に生きてきた。心細かったろう。さみしかったろう。誰かにそばにいてほしいと思ったことだろう。春麗のことだ、きっと弱音を吐くことなく気丈に振る舞ってきたに違いない。それは俺に対しても、そうだった。
俺は今の今まで結婚を真剣に考えたことなどなかった。そりゃあ、国境を越えなければ会えない春麗が、いつもそばにいてくれたらどんなにいいだろうと思ったことなど数知れ

ない。しかし春麗にも上海での人生がある。俺にはまだ、春麗の人生の責任を引き受ける自信がなかったのだ。

しかしそれでいいのか？　俺はたったひとりで格闘道をひた歩き、春麗は俺以外の誰かと家庭を持ったとしても？　……俺はかぶりを振った。

そもそも俺は、生涯ひとり身で格闘道に人生を捧げるはずだった。そんな男が誰かと生きるということは許されないという観念がどこかにあった。

剛拳は真の格闘家として生きた男だった。それは豪鬼も、轟鉄老師も同じだろう。ともに格闘術を大成することに人生を捧げ、独身を貫いた男たちだった。

俺はその男たちのたどった轍を追い、さらに向こうへと道を切り開こうとしてきた。

彼らもまた、親と別れて育った男たちだった。俺はその男たちの生い立ちと自分を無意識に重ねて見ていたのかもしれない。

俺は剛拳や豪鬼になろうとしていたのだろうか。

いや、俺は俺であって、剛拳でも豪鬼でも轟鉄老師でもない。

轟鉄一門にとって、求めれば求めるほど、遠ざけてきたもの――それが家族だったのだろう。親に捨てられた生い立ちが、彼らを形成した根っこにある。もしかしたら、彼らも家庭にあこがれたことがあったかもしれない。

それを実現させなかったのは、彼らもまた手に入れることを怖れていたからなのかもしれない。

家族から逃げ出してきた俺も、心の奥深いところで家族を渇望してきた。ありのままの俺を受け容れてくれる家族を……。

本当の俺が求めていること……。

今の俺が心から望んでいることは……。

――おまえはわしらとは違う。いつか師を超え、大悟することもできよう。自由に生きよ――

剛拳の最期の言葉が俺にひらめきを与えた。

自由に生きてきたはずの俺は、本当の意味で自由ではなかったことに気づいたのだ。

自由に生きればいい。

そう剛拳は言ってくれた。俺は上体を起こしザックを背負うと、土手から河を見下ろした。河は中州の岩礁から二本の河となって別々の方向へと流れている。その分水嶺をしばらく見つめて、俺はつぶやいた。

「春麗、俺は自由に生きるよ」
自然と走り出した。春麗のもとへ。
人は走ると情熱的になるようだ。全力疾走で来た道を引き返す。
走っていて思い浮かぶのは、春麗のことばかりだった。
やっとわかった。
探し求めていた答えを導いてくれたのは春麗だった。
俺が熱くなりすぎたときは冷静さを取り戻してくれた。
自暴自棄に陥ったときには叱咤激励してくれた。
頭で考えすぎたときにはインスピレーションを与えてくれた。
突っ走りすぎたときには、立ち止まらせてくれた。
照りつける太陽のように情熱を燃やす俺に対して、月のように静寂で神秘的な春麗。
プラスとマイナスが引き合うかのように、惹かれてやまない春麗。
俺は春麗といると、静かに中心を保っていられる。
そんな内奥無比なる春麗と、ずっとつながっていられたら……。
俺は自由に生きたい！
俺を縛り付けてきた観念を解き放って、自由に生きていきたい！
春麗が笑顔で喜んでくれるなら、俺は何だってやれる。
上海の雑踏を掻き分けてたどり着いた先は――。
「春麗！」
俺は道場の扉を勢いよく開けた。
そこには、春麗と教え子たちの一斉の注目があった。俺は荒れた息をそのままに、春麗を見つめた。
「リュウ……どうしたの……？」
丸い目で俺を見つめる春麗。その目は不安げでもあった。
「先生？」
子どもたちのざわつく声が、俺を冷静にしてくれた。春麗の表情は固いままだった。
俺は呼吸を整えて、春麗に近づいた。
「春麗……」
俺は息を切らしながら春麗をじっと見つめ、両肩をつかんだ。手は熱く火照っていて、思わず力が入った。

「俺、次の目標が何か、やっとわかったよ」
春麗は、俺の目を見て驚いたような顔をした。俺は肩を上下にさせつつ、春麗の瞳をしっかりととらえた。そして深呼吸をひとつした。
「俺は、君と共に生きていきたい。……これが俺の答えだ」
春麗は目を大きく見開いてじっと俺を見た。
「俺はこのとおり強くなることしか考えてこなかった男だ。でもな、君を一生大切にしたいと思ってる。この気持ちは本当だ」
一気に言葉を放っていた。春麗は相変わらずじっとしたままだ。にぎやかだった道場が、水を打ったように静まり返っていた。子どもたちの視線が矢のように突き刺さっている。脂汗が滴り落ち、心臓が口から飛び出そうなのを、ツバを飲み込んでこらえていた。俺は肚をくくった。
「……その……つ、つまり……俺に君の夢を叶えさせてくれないか？」
体じゅうが燃え盛っている。俺が人前でこんなことを言うなんて信じられるか？　しかし真剣だった。必死だった。俺は人生ただ一度の、全人生を賭けた大勝負に出たのだった。
春麗は目を伏せてうつむいた。口を真一文字に結んでいる。子どもたちは春麗の様子を心配そうに見守っている。
しばらく沈黙が続く。俺は春麗の肩をつかんでいる手に力が入っていることに気づき、その手を緩めた。
春麗は無言のままだった。こんな一大事に、春麗の気持ちが読み取れないなんて……。
春麗が答えないのは、ノーと言いたいからなのだろうか。……きっとそうに違いない。普通の女性ならば、俺のような男と一生関わるなんて、真っ平御免だろう。春麗もそうなのかもしれない。春麗は賢い女性だ。やはり、賢い選択をするはずだ。
しかし、それでいいのか？
春麗が俺の人生からいなくなっても本当にいいのか？　そんなことを考えただけで恐ろしくなった。春麗が俺から去ってしまえば、俺はとてつもなく弱くなってしまうだろう。春麗がいなくなれば、格闘家としてはもとより、当たり前の男として生きることすらできなくなってしまうだろう。春麗を失ってしまうことは、生きる原動力を失うことと同じことだ。そうなれば俺はきっと、抜け殻になってしまうことだろう。そんなことを考えただけで、急に胸が締め付けられ苦しくなった。
だったらどうしたらいい？

春麗が答えないならば、子どもたちに了解を得てみてはどうか？　しかし子どもたちがノーと言ったらどうする？　それで尻尾を巻いて帰るのか？　ええい、男なら答えを真摯に受け止めろ。俺は春麗から視線を子どもたちに向けて咳払いをひとつした。

「みんなに聞く。先生を日本に連れて行ってもかまわないか？」

俺の発言に、子どもたちは互いに目を合わせあって戸惑っていた。

「だめだよ！　先生を連れて行かないで」

五歳くらいの男の子が、声を張り上げた。ここでいちばん年少の教え子だ。顔を真っ赤にして、目を潤ませている。

俺はこのときわかった。春麗は子どもたちのことを考えていたのだ。

「先生の夢は、日本でなら十分に叶えられる。俺は先生の生涯のサポート役だ。みんな、わかってくれるか？」

春麗は俺の言葉に戸惑っているようだった。そしてやはり、黙ったままだった。春麗が何を感じ、何を考えているのかを子どもたちはそれぞれにささやきあっていた。

「先生、行きなよ。わたしたち、先生には幸せになってもらいたいんだ」

ここでいちばん年長の少女が言った。高校生くらいだ。少女はさっきの男の子の肩に手を添えた。

「みんなも本当はそう思ってるんだよ、ねえみんな！」

「そうだよ！」

子どもたちが異口同音に答えた。

「あなたたち……」

春麗はこらえていた涙を指でぬぐった。

「俺のことを、信じてくれるかい？」

俺は跪いてさっきの男の子と目線を合わせた。男の子は俺の目の奥を見つめてから、春麗の顔を見上げた。

「先生は、このおにいちゃんのことが好きなの？」

春麗はしゃがんで男の子の両肩をそっとつかんだ。そしてゆっくり深くうなづいた。

「先生はね、このおにいちゃんのことが大好きなのよ」

そう言って微笑んだ。男の子はしばらく春麗の顔を見つめていた。

「じゃあ、おにいちゃんは？」

男の子は俺の顔を見た。

「ああ！　俺も春麗先生が大好きだ。世界中を歩き回って見つけた、世界一の女の人だからな！」
男の子は俺と春麗の顔を交互に見た。半べそをかいていた顔が、ふっと笑顔になった。
「わかった。ぼく、おにいちゃんを信じるよ」
俺は男の子に手を差し出し、固い握手を交わしたのだった。
「先生よかったね。ホントはずっとお似合いの二人だと思ってたんだ」
高校生の女の子が近づいてきて笑った。春麗は頬を赤らめて微笑んだ。
「さあ、みんな！　稽古を始めるわよ」
春麗が両手を叩くと、道場の空気が切り替わった。
俺は春麗と目が合った。その目は赤く濡れていた。すぐさま春麗は先生の顔に切り替え涙を乾かした。そして俺に構うことなく子どもたちに稽古をつけ始めた。
俺は道場の隅でいまだ心臓の鼓動が鳴り止まないことに気づきつつ、気丈に振舞う春麗の姿を見守っていた。
春麗の涙の本当のわけを、まだ確かめてはいない。それにまだ返事は聞いていない。
――うんと言ってくれるまで、俺は一生ここで待つよ――
心の中で春麗に向けて言葉を放ったとき、いつかケンがリングの上でイライザに言った言葉と同じだったことに気づいて息を呑んだのだった。

☆　危機と好機

あれほど暴れた殺意の波動がいつのまにかおとなしくなった。ともすればその存在を忘れるほど精神が安定するようになった。もしかしたら、これが本来あるべき自分なのかもしれない。
得てして勝負の世界に生きる男たちには、支えてくれる存在が必要だ。生死をかけた極端な人生を生きるだけでは人間性のバランスを保てないからだ。
俺は春麗の美しさや柔らかさ、直観的な感覚の鋭さを見るにつけ、それらが自分の中にも息づいていることを発見するたびに、内なる喜びを感じていた。

男が女に、女が男に惹かれるのは、自分の中に眠ったままの性質を呼び覚まそうとするからなのだろう。男女が一つになろうとする欲求は、本能的には肉体的であるように見えて、実は精神的な欲求であることの方がより本質的なのかもしれない。

たくましさや屈強さ、理性的、行動的といった大和魂と、繊細さや優美さ、直観的、受容的な大和心を「結魂」させることこそが、人間としての真なる目的だと言えるのかもしれない。そのために必要なことが、ひとつある。それは勇気を出すことだ。勇気なくして対極の存在と融合することはできないということだ。

轟鉄一門の生きた道――それは異性を必要とせず、自らにおいて大和魂と大和心を融合させようと試みた難度の高い険しい道だった。

俺は春麗と出会うまでは、大和魂を練磨することだけを実践してきた。その結果、己の創造した世界で理性と闘い、苦行にいそしみ、自分を表現することを許さない息苦しい人生を自ら構築してきたと言える。

――極端に偏った生き方しか知らないで、一体どうして真の格闘家になれるというの？――

それを教えてくれたのがほかでもない春麗だった。

俺は春麗と新たな人生をスタートさせた。それがきっかけで試合に勝ち続け、いつの間にか無敗を誇るファイターになっていた。そんな俺に、コミッショナーは最高のトレーニングのできる環境とトレーナーを与えてくれた。

この世界では、それぞれの専門家がファイターを管理している。トレーニングメニューはそのファイターの身体的特徴に応じて作成される。食事についても同様に、試合前三ヵ月前からメニューを手渡されるのである。春麗はそのメニュー通りに作ってくれる。まさにチームプレーだ。

強さの秘訣は家庭にあった。

このままたったひとりで生きていく道を選んだなら、俺はこの生涯で果たしてケンに勝てただろうか。その自信は、今の俺にはない。生き方を変えるという選択は、俺にとって人生最大の賭けだった。

ケンは結婚し、家庭を持つ道を選んだ。

そして俺もまた、ケンの後に続いた。

大和魂だけを高めることに囚われていては、殺意の波動は眠らなかっただろう。俺は地に足をつけてあらゆる側面から経験をしてみて、ようやく自分が見えてきたように思う。

賭けは、大成功を収めたわけだ。
結婚しても、俺は格闘道に生涯を捧げる人生に何ら変わりはない。春麗はそれを承知の上で俺と結婚してくれた。春麗もまた、俺という男に賭けて日本に来た女だった。
俺にとっての結婚は、真の格闘家へ導く転機となった。
そして勝てば勝つほど、あらゆるものが俺のもとに入ってきた。
俺はやっと、本当の意味で自信を持つことができるようになった。それもすべて、春麗のおかげだ。

ある日、春麗は自ら受け持つクンフー教室で、ある噂を聞いてきた。
「最近、あちこちの道場で、トップファイターが謎の人物に大怪我を負わされているようよ。謎の人物は、黒ずくめの男で夜にしか現れないんですって。あなたも気をつけて」
強豪ばかりを狙う道場破りがいる。
その男の正体は謎なのだという。やられた選手は皆、知らない顔だったと証言したらしい。
格闘技界では、このことを相当問題視しているようだ。なぜなら、人気選手が次々に故障していては、格闘技界の面子にも関わる上、試合にも差し支えるからだ。
上層部では、道場破りに出会っても、決して相手にしてはならないという通達を各選手に出していた。
けれども、一流のファイターならなおのこと、噂の相手を前にすれば血が騒ぐものだ。そんな通達を素直に聞くファイターなど誰もいなかった。結局謎の人物を倒したものはひとりもなく、格闘技界は怪我を負ったファイターがマスコミに見つからないようにするために必死になっていた。
ある夜。
俺がトレーニングを終えての帰宅途中のことだった。
人気のない公園に差し掛かったとき、前方から人影が俺の行く手を阻んだ。
黒い影。
過去に感じた背筋に走る戦慄を覚えると同時に、禍々しい氣が体内を螺旋状に立ち上った。
俺はこの氣をよく知っていた。
何もかもを吸い込む闇のような氣に、俺は幾度となく触発されては狂った。そう、その

男は――！
「豪鬼！」
一瞬にして見破ったのは、かつて俺の中にも同じ氣が眠っていたからだ。闇を吸い尽くすような凄まじい氣を。
豪鬼は地鳴りのような声で言った。
「ふん、うぬも俗世にまみれたか」
「俺の人生だ。自由に生きるさ。あんたは何が目的なんだ」
道場破りの正体が豪鬼だったと分かった以上、その目的を問いたださなければならない。
俺はいつか豪鬼と決着をつけなければならないことを知っていた。
ちょうどこの頃の俺は無敵を誇るファイターだったということもあり、自信もあった。
今の俺なら、豪鬼と闘っても勝てるとさえ思っていた。このチャンスを逃してはなるものかと思っていたのだった。
豪鬼は月の逆光を背負いながら、かつて剛拳から奪った大きな数珠の輪郭を胸元に際立たせ、怒髪天を衝く修羅の形相で言い放った。
「心眼、未だ開かずか！」
「何？」
豪鬼はその一言だけを残して、その場から立ち去ろうとした。俺は躍起になって大声で引き止めた。
「待て、なぜ勝負しないんだ。俺と勝負しに来たんじゃなかったのか」
しかし豪鬼は、一瞥もくれずに公園の出口に向かって歩いていった。途中、豪鬼は立ち止まってこう言った。
「つまらぬ」
豪鬼の残したそのひと言に、俺は囚われてしまうことになった。それ以上に、豪鬼が俺と拳を交えずして立ち去ったことが、俺の自尊心を著しく傷つけた。
――闘って負けるほうが、まだ良かった。
（俺は闘うに値しない男だというのか？）
格闘技界を震撼させた「黒い影」はこれを最後に、格闘家の前に現れることはなかった。
その正体を知るのはおそらく、俺だけだった。
しかし、豪鬼は俺を相手にもしなかった。
放浪していた時代の俺とは違い、今となっては名の知れたファイターとなった。豪鬼を

前にしても、俺の中にあるはずの殺意の波動が呼び起こされることもなくなった。明らかに過去の俺よりも強くなっているはずなのになぜ、豪鬼は俺と闘わずして去ってしまったのか。

豪鬼は、頂点にいると錯覚していた俺の中に、一石を投じた。

しかし、頂点にいるときが最も危ないのだということを、このときの俺はまだ知らなかったのだった。

子どもが生まれてしばらくたった頃、もっとも大きな大会である、全世界異種格闘技選手権大会に出場することとなった。全世界から一流の格闘家たちがアメリカに集結し、その技を競い合うのだ。

まずはそれぞれの国で代表者を決めることになっている。もちろん、その場合もトーナメント方式で代表者を決めるのだ。そして出場国はトーナメント方式で試合することになる。

このトーナメントに勝ち上がり、最後まで勝ち続けた者が世界一の格闘家となれる。勝ち上がっていくだけという、誰にでもわかる簡単なシステムだ。

出場メンバーは世界でも名の知れたファイターばかりだ。

もちろん、ケンも北米代表として出場する。俺も日本代表として世界大会に出場することになっていた。

俺とケンは、公式戦で互いの強さを競うべく、出場国代表として切符を勝ち取ってきたことになる。

この大会には体重別という制度はない。年齢制限もなければ対戦者同士の年齢差も関係ないとしている。要は実力だけの厳しい世界なのだ。

「絶対に勝ち上がって来い。決勝の相手がリュウでなければ優勝しても意味がないからな」

「その言葉、そっくり返すぜ」

ケンと別々の道を歩み始めてから十年。

ケンは真っ直ぐに道を行き、俺は紆余曲折しながら今に至る。

最強の自分になったときに、決着をつける。

これが俺とケンの約束だった。

決着をつけるときが、まさに今なのだ。

大会が始まった。
俺の最初の対戦相手はもうひとりの北米代表だった。北米代表者は二名。ケン以外にもうひとりいる。名前はアレックスというらしい。俺には初耳の名前だった。
俺がリングに控えているとき、大柄の男が遅れて会場に入ってきた。
歳は俺より五歳ほど若い。長い金髪は後ろで一つに縛っており、目深く額に巻かれた赤いバンダナが印象的だ。鍛え抜かれた上半身は筋肉の甲冑のようだ。
どうやらその男がアレックスらしい。アレックスは俺の姿を認めると、にらみながら俺に近づいてきた。
「リュウ、俺はあんたと闘うためにここまで来た。噂ほどの男かどうか、俺が確かめてやる」
「うむ……なかなかいい眼をしている。遠慮はいらん。はじめから全開で、こい！」
俺とアレックスがリングに上がると、ゴングが鳴った。
重心を低く沈めたかと思うや否や、アレックスは猛然としてこちらに突進してきた。その姿はまるで、飢えた豹がやっと獲物にありつけたかのようだった。
俺は豹に鎌首を食いちぎられまいと、半身を翻してかわした。
（この男、間合いを殺すつもりだな）
近距離戦で詰め寄せる算段か。ホールドされたら俺は蟻地獄に落ちた蟻となってしまうだろう。こういうタイプの対戦者は、ひとたび相手を捕らえると、決して放さないものだ。
アレックスは体勢を低くして再度間合いをとって構えている。絶対に逃がしてなるものかという、強烈な闘志が剥き出しだった。
俺は、アレックスの射抜くような目を見てかつての自分の姿を見た。
むさぼるように強い者を求めては勝利することを最上としていた頃の俺の姿を……。
接近戦に持ち込まれる前にと、まずは中段蹴りを放つ。そのチャンスを相手は待っていたようだった。俺の右足を両腕で捕らえ、そのまま俺の身体をリング上に叩きつけて腹ばいにさせたのだ。
一瞬の不安がよぎる。こういうときの不安とは、本能というものに近い。
死角に入ったアレックスは、俺の左腕を後方にねじり上げ、全体重をかけて飛び込んできたのだ。
「グワーッ！」
俺の叫び声が会場に響き渡った。

その叫びが尋常ではないということを、周りはすぐに判断した。なぜなら、俺の左腕があらぬ方向に向いていたからだった。

白いタオルがリング高くに舞い上げられたのを認めると、俺はまぶたを閉じた。

全世界制覇の夢は、思わぬ事態で破れた。

階段を駆け上がるように勝ちあがってきた俺は、一気に奈落の底へと転落した。

肩関節を脱臼し、選手生命に関わる事態となったからだ。

三百六十度回せるはずの腕が、回らない。疼痛に苦しみ、パワーを出し切れない。相手の技を受け止められるはずもない。こんな状態で、どうして闘えるというのか。

怪我をしたからといって闘うことを一時的にやめるというわけにはいかなかった。闘い続ける人生を生きてきて、これまで立ち止まることなどなかったからだ。

だからといって怪我をした身で試合に出ることはリスクが大きすぎる。しかし俺は、過酷なリハビリに励みつつ、リングに立つことを選択したのだった。

当然のことながらうまくはいかなかった。焦りが苛立ちになり、体を動かすことで不安を取り除こうとした。

闘うことをやめることは、俺が俺でなくなってしまうことと同じことだ。

(もう、これ以上進めないのではないか)

俺の中の恐れは焦りに変わり、焦りが煮えたぎる情念へと姿を変え、内側から俺を突き上げはじめた。

その瞬間、耐え切れないほどの憎悪の念が身体の芯から噴きあがってきた。

同時に、内部にいるもうひとりの俺が震え上がるほどの憤怒の情を帯びていることに気がついた。

俺はこのときはっきりとわかったのだ。俺の中には確かに修羅がいると。その修羅が許さないのだ。俺が前進しないということを……!

修羅は俺を決して殺さないだろう。真の強さを見つけるまでは、道を引き返すことも、立ち止まることも、やめてしまうことも許さないだろう。俺の中に棲む格闘の修羅は、決して他の追随を許すことはない。どんな苦境に立たされようとも進むしかないということをこのとき悟った。それはまぎれもなく殺意の波動そのものだったのだ。

俺は、やはりリングに立つことを選んだ。しかし春麗はそれを許さなかった。

春麗は気功の達人である。春麗が教えるクンフー教室では、武術クラスのほかに、気功

クラスを設けているが、美容や健康増進のために気功を習う人も多い。
春麗は毎日俺に気功を施してくれた。
精神的に追いやられた俺を気遣い、サポートしてくれた。そのことを感謝しつつも、自分自身でどうにもならない現実に、切歯扼腕していたのだった。
早朝に起床し、いつものように稽古し、坐禅を組み、食事をし、トレーニングに出かけ、そしてリハビリに打ち込む。俺は俺で、平常心を保つための臨界点にいた。
こんな毎日がいつまで続くのだろうか。
俺はいつになったら、傷が全快するのだろうか。
いつになったら勝てるのだろうか。
負のサイクルというのは、自分の思考がネガティブモードに入っているために、ポジティブな思考ができなくなっている。むしろ、楽観的なことを考える自分を馬鹿馬鹿しくさえ思えてくる。
――そんな甘い考えが通用するわけがないだろう？　――と。
がんじがらめになっている俺に対して、春麗は冷静だった。
「ちゃんと治してからリングに上がるべきよ。これからだって先は長いのよ」
「わかってる。心配するな、これしきの怪我で負けるもんか」
「意地は必要ないわ。わたしはあなたがリングに立つことには反対よ」
「春麗、俺は進むしかないんだ。わかってくれ」
春麗の強い反対を押し切って公式戦に登録した俺は、肩関節の怪我は完治したと公言してリングに上がった。
対戦相手は、もちろん俺が肩を負傷したことを知っている。
弱点を攻めるのは、勝負においての常道である。俺より格下のファイターにことごとく肩を攻め立てられ、俺の肉体と精神のぐらつきによって試合の結果を下されたのだった。
負けた事実は決して消せはしない。
ならばまた勝てば良いではないか。
それが、甘い考えだったのだ。対戦するたびに、ことごとく負け続けたのだ。
負けるということは、自信を失い、不安になり、苛立ちと悔しさと後悔と、自己嫌悪に陥るものだ。勝ったときの感情とはまるっきり反転した感情にさいなまれることになる。
負けたときに、これらの感情が強ければ強いほど、負のサイクルに陥ってしまうのである。いわゆる、スランプだ。

闘っても闘っても、勝てない。
トレーニングに打ち込んでも打ち込んでも勝てない。
リハビリに励んでも励んでも、治らない。
自分自身を思い通りに動かせず、自分の人生を思うとおりに動かせない。
負傷してからの試合の結果は三連敗。俺を失意のどん底へ陥れるには、十分過ぎる結果だった。
周りは俺の進退を伺い、引退説をそそのかし、指導者として身を立ててみないかという誘いや、マスコミへの誘いなど、様々なオファーが次々と来た。負けたその日にだ。その日ついに俺はコミッショナーに呼び出された。
「残念だったな。しかし君は単に不運だったんだ。その怪我では仕方あるまい。……このごろ君の引退の噂を耳にすることもあるが、わたしは君に一目置いているんだ。実のところ、どうなのかを聞かせてくれないか」
「わたしは自分の仕事はただひとつだけだと思っています」
「そうか……。君は金で動く男ではないということは、わたしがいちばん良く知っているつもりだったが、それを聞いて安心したよ。だが、自分の信念を通そうとすることは、むしろ余計に傷つくこともある。どうだ、ここは潔く休場してはどうか」
「……」
「わたしは君の雇い主でもあるが、個人的なファンでもある。君にはこれからも格闘技界にいてもらいたいと思っているんだ。君もプロフェッショナルだ、わたしの思いを分かってくれるね」
「ありがたいお言葉、感謝します。……しかし、しばらく考えさせてください」
「よい返事を期待しているよ」
コミッショナーの申し出はありがたかった。しかし、勝てなければいずれは格闘技界を去らねばならないことには変わりない。俺が頑なに周囲のアドバイスを聞けなかったのは、俺が家族と格闘技界から必要とされなくなるのではないか、という恐れがあったからだ。闘うことしかできない俺にとっては、一種の恐怖でもあった。
過酷なリハビリによって自らに鞭打つその行為の背後には、男としての自尊心を失うことを最も恐れていたのだった。
コミッショナーと面会したその日――つまり、三連敗を喫した日――春麗はいつものよ

うに俺を迎えた。
「おかえりなさい。さあ、ちょうど食事の用意ができたところよ。あなたは運がいいわね」
無言で食卓に着き、無言で食べ、無言で風呂に入り、無言でベッドに潜り込んだ俺に、妻は何も聞かず、何も変わらずに振舞っていた。むしろ、明るさが増してさえいた。
軋むような空気感。その空気は紛れもなく、俺が醸し出していた。
そんな空気を中和するかのように、春麗もまた、空気を和ませようとしていたのだった。
妻は俺と対極の位置にいた。
俺が陰なら妻は陽。ネガティブな俺に、ポジティブな妻。それが俺には余計に神経を逆なでさせたのだ。
「怪我は自分の意思ではどうにもならん。怪我が治らなければ、俺は格闘家でなくなってしまうんだ。そんなことを、考えるだけでおかしくなりそうだ」
「だったら、休戦しましょうよ。引退じゃなくて、怪我の回復を目的とした休戦よ。あなたは立派な格闘家には変わらないのよ」
「しかし、試合から遠のくと勘が鈍ってしまう。それはおまえもわかるだろう?」
「わからないわ。毎日の稽古やトレーニングをしていれば、勘は鈍らないわ。あなたは自分で自分を追い込んでいることに気づいていないのよ。それが分からなくて、一流の格闘家だって言うの?」
「クソッ!」
俺はテーブルに右拳を打ちつけ、その天板を真っ二つに叩き割っていた。
内に溜め込んできた鬱憤を、爆発させてしまったのだ。一度引き金を引いたら、もう止められない。俺は自分で自分を制御できなくなることを怖れる一方で、この機会にすべてを吐き出してしまいたい思いに駆られた。まるで、眠らせたはずの殺意の波動のスイッチを自ら押そうとするかのように。
「表に出なさい! 外でわたしと勝負するのよ。わたしに勝って、自分を証明してみなさい!」
春麗もまた、今までの憂さを一気に爆発させた。
売り言葉に買い言葉で、俺と春麗は、深夜の公園で真剣勝負を繰り広げることとなったのだった。
静寂な夜の闇に、街灯にほの明るく照らされた公園で、俺と春麗は結婚後はじめて対戦することとなった。

互いに対峙したときには、テーブルを叩き割った時の感情の激しさは消え失せ、むしろ冷静になっていた。
春麗は中国拳法の指導者として、日々稽古を欠かさない。
勘というのは、つねに自分をその空間に置くことによって保たれる。春麗は結婚した今も、やはり格闘家だった。
女だからといって軽く見てはいけない。これはもはや俺個人の問題だけでなく、男の沽券に関わる問題でもあった。
このとき俺と春麗は、おそらく世界で最も真剣な――そして最も壮絶な――夫婦喧嘩をしようとしていたのだった。
暗闇に浮かぶ街灯に照らし出された春麗が、悠然と構えている。
いつもは見せない、真剣な目。俺を貫くように見据えている。
春麗は昔から、俺の内側を見透かしているのではないかと思わせるところがある。春麗のこんな目を、俺は本当に久しぶりに見たと思った。
そして繰り返しの日常の中で、いつの間にか春麗の存在が当たり前になりすぎていたことに気づいた。
俺は、これまで幾度もアドバイスしてくれていた春麗に対して、全面的に向き合っていなかったことを思い知ったのだった。
今頃になって、そのことに気がついた。そう思った途端、俺の戦闘意欲は消失し、自然と構えを解いていた。
「……参ったよ。降参だ」
春麗もまた構えを解いて、いつもの表情に戻った。
「あなたらしさを取り戻したようね、安心したわ。あなたが中心にいないことがずっと気になっていたのよ。でも、それはあなた自身が気づかなければならないことだったのよ」
「俺の負けだよ。完敗だった」
「いいえ、あなたは負けなかったわ。あなたが一流の格闘家だってことを、見事に証明してくれた。自分で中心に戻ることを思い出したんだもの」
「君のおかげだよ」
「わたしたちは夫婦よ。それに、チームなのよ。だからあなたひとりで闘っているんじゃないってことを、忘れないで」
「そうだったな……」

「でも、壊したテーブルは、何とかしてよね」
「参りました」
自縄自縛し意固地になっていた俺は、妻のアドバイスを受け容れることを、やっと許すことができたのだった。
俺たちは、夫婦喧嘩しようとして歩いて来た道を、手をつないで家に戻ったのだった。道すがら、こんなことを話しながら……。
「あなたは自分の肉体だけを、なんとか元に戻そうとしているけれど、それだけじゃダメよ」
「どういうことだ？」
「人間は、肉体と精神と魂でできているからよ。だから肉体と同じように、精神と魂も癒してあげなきゃいけないのよ」
「精神と魂か……。確かにそうだ。俺の氣が散漫になってしまっていたということは、俺の中のすべてがバラバラだったというわけだ。だから身体も思うように動かせなくなってしまったのだろう」
「さすがね。自分の中心からずれが起きるとものごとはうまく運ばなくなるのよ。だからピンチは中心からずれていることを教えてくれている合図なの。あなたはそれに気づいたのよ」
「俺はスランプから抜けられるだろうか？」
「もちろんよ！　危機（ピンチ）は好機（チャンス）なのよ。いい？　あなたは筋肉の鎧を大きくすることで負傷部分を覆い隠そうとしているけれど、それではダメよ。まずは中心から癒すこと。だから、素直に休みなさい」
俺は、春麗の説得に折れて、正式に公式試合を休場することに決めたのだった。

実際、試合に欠場すると決めてからも、俺の心は常に緊張でいっぱいだった。頭では理解したつもりでいても、やはり俺にとって、ゆっくり休養することは、格闘家として生きることをやめることと同じだったのだ。
気晴らしに散歩をしてみたり、映画を観たり、ドライブしてみたりしてみたが、俺の心は、いつだってリングの上にあった。
独身時代の俺は、闘いで死ねたら本望だと思っていた。しかし、今は違う。死ぬに死ねないのだ。

今、俺が苦境の中で死んでしまえば単なる負け犬と世間は言うだろう。それが俗世間で生きるということだ。いつかケンが言った、「生き抜く覚悟」がどれだけエネルギーを要するかということを、身を持って痛感したのだった。

そんなある日のこと。

俺は家の書棚からなんとなく一冊の本に引き止められたような気がした。その本は春麗が実家から持ってきたらしきものだった。手にとって見るとやはり漢文で書かれており、相当古いものだった。変色していてほこりにまみれている。ところどころにしみや破れもあり相当古い。表紙には『老子道徳経』と書かれているのがやっと読み取れた。このような本を手に取ったのは、かつて剛拳のもとで修行していた頃以来だ。

「あなたが読書だなんて、めずらしいわね」

振り返ると、籠いっぱいに取り込んだ洗濯物を抱えた春麗が立っていた。

「その本は、父さんが大切にしていた本なの。なんとなく父さんの一部のように思えて、一緒に持ってきたのよ」

中国古典は俺の大の苦手の分野のひとつでもある。かつて剛拳に読まさせられた漢文の修行が、俺には最も苦手とする修行だったからだ。それなのに今は妙に気になっているのだ。

日本では、老子よりもむしろ孔子の教えの方がもてはやされている。社会を生きていく上で必要な処世術や社会的規範を説いた『論語』は教科書にはたいてい載っている。現代人を育てるには、孔子の教えを広めた方が都合がよいのだろう。

俺はその場に座り込んで『老子』を開いてみた。

「柔弱は剛強に勝つ」

「哀れむ者は勝つ」

「天の道は、争わずして善く勝つ」

常識と反対のことや、逆説的な表現の多い不思議なこの本に、俺はとりわけ取り付かれた。読めば読むほど簡単な言葉の中に、深遠な真理が隠されているように思えた。ただ、理屈では説明できる類のものではないようだ。

『老子』の解説書のようなスタンスにあるのが『荘子』だ。『荘子』もとらえどころのない、霞をつかむような内容だったが、読み進めているうちに、俺はこの本を知っていると思った。なぜなら、剛拳から与えられた禅の書と同じ内容が記されていたからだ。

紀元前三百年前後に生きた荘子は『老子』を深く研究した諸子百家のひとりである。
『老子』と『荘子』の思想を老荘思想といい、道教の根幹を成す思想である。探究していくうちにわかったのは、この老荘思想はのちに仏教と融合し、禅の思想が生まれたということだった。
禅は無を追求することが教義である。禅は中国で生み出されたにもかかわらず、中国ではほとんど発達しなかった。
ところが禅は日本に輸入されるようになると一気に広まった。命のやりとりが迫られる武術に、禅の思想が取り入れられるようになったからだ。人を殺める前に禅を学ぶことが武士の心得として必要不可欠なことであり、これが日本人の死生観を培ってきたといえるだろう。
護身術である武術に、道をつけたのが明治維新後に生まれた武道である。道とは人間が生きるうえで大切な道理であり思想である。
武道は命のやりとりを実際には行なわないが、命のやりとりが前提であるという精神は失ってはいない。闘うことを通して人間とは何か、生きることとは何かを問い、答えを求め、自ら見出すことがその本質であるといえるだろう。
剛拳が弟子に禅の書を読ませた理由がここにあった。闘うことに本理を求めず、精神を鍛錬することを第一にした剛拳の思惑が、今になってわかったのだった。
俺は闘うことの意味を、何にもわかっちゃいなかったということが、このときやっとわかったのだった。
俺は興奮冷めやらぬうちに、その旨を春麗に話して聞かせた。
「春麗、老子は日本の禅や武士道の原点だったよ。なんとなくしか意味がわからんことの方が多いが、この本が宇宙を解く鍵のように思えてくるから不思議だよ」
すると意外にも春麗からはこんな言葉が返ってきた。
「老子書は、両親の故郷に脈々と伝わる叡智なの。ただし、その奥義は秘密のコードが刻印されていて読み解けないように書かれているらしいのよ」
「そうなのか！？」
「あなたが見出した答えは一般的には正解よ。でも、きっと父さんなら、まったく違う答えを出したと思う」
答えを見つけたと有頂天になっていた俺に、春麗が放った言葉はまさに、青天の霹靂だった。まるで優勢だった試合で制限時間ぎりぎりで一本取られたような、鮮やかな極め技

で逆転負けを喫したかのような思いに陥っていた。これがもし実戦だったなら、仰向けになったまま放心状態になっていただろう。そんな俺の心の動揺を知ってか知らずか、春麗はにっこり笑って言った。

「ふふっ、一生かけて解いてみて」

春麗は嬉しそうに言ったのだった。

☆ ケンの決意

ちょうどその頃、ケンからエアメイルが届いた。全米格闘技選手権における、ケンの全米チャンピオン防衛戦の招待状だった。

「ケンからの招待状？　行ってらっしゃいよ。ケンに会えばきっと気が晴れるわ」

「そうだな」

俺は春麗に後押しされてアメリカへと発った。全米格闘選手権にケンは選手として出場し、俺はVIP席で試合を観覧することになった。

ケンと最後に闘ったのは約二年前。

全米チャンピオンになったケンと非公式試合でやり合って以来だ。その試合では敗北を喫したわけだが、それは通過点に過ぎない。

今も、これからも闘い続ける俺たちには、その試合がまだ勝負の決算となる試合ではなかったことは互いに知っていた。

俺はケンの招待試合から大いに得るものがあるにちがいないと確信していたのだった。

会場に到着すると、そこかしこにケンのポスターが貼られていることに気づいた。この大会のポスターだけでなく、映画やＣＭのポスターなどにもケンが堂々と映っていたのだった。

甘いマスクを備えた格闘王は、ハリウッド映画の主演に抜擢され、必殺技を駆使した作品が爆発的に受けたのをきっかけに、アクション映画界に新風を巻き起こしていたのだ。

その上ケンはアメリカ屈指の資産家でもある。つまり、今やケンは格闘王であり、ハリ

ウッドスターであり、マスターズ財閥の御曹司――つまり経済界の要となる人物――となっていたのだった。
会場関係者のスペースに、スタッフをたずさえてウォーミングアップしているケンを遠目に見た。久々に見るケンは、肉体改造をしたらしくひとまわり筋肉をつけてパワーが格段にあがっていることが予想された。
スーパースターであるケンは、精神・肉体ともに最も充実しており、公私ともに最も脂が乗っている時期だった。
ケンにはチャンピオンの風格が確かに備わっていた。ケンからは何一つ恐れなどないようにさえ感じられる。自信そのものがケンを強くし、そこにいるだけで強力な存在感を放っていた。
ケンからもらった招待席はリングが真正面に見える最高の席だった。俺にこの席を与えたということは、ケンの覚悟だったのだ。
「リュウさん、ようこそおいでくださいましたわ」
俺が席に着くや否や、ブロンドの髪の女性が声をかけてきた。
「奥様と坊やもお元気でいらっしゃる？」
「ああ」と返事をしながら差し出されたしなやかな手と握手する。ブロンドの髪のやわらかな香りが、俺の鼻腔をくすぐった。
「ケンはあなたに自分の闘いぶりを見てもらえる日を心待ちにしていましたの」
この女性はケンの妻・イライザである。
真っ赤なルージュと蒼い瞳、そして長い睫は、はじめて会ったときの印象とまったく変わっていない。ただ、イライザの横に小さな男の子がひっついていることと、イライザに新たな命が宿っていることだけは月日が流れたことを感じさせた。
「メル、大きくなったな。もうすぐお兄ちゃんになるのか」
俺はメルの頭に手を当て、イライザに似た瞳をほほえましく見つめた。
メルは三歳になったばかりだ。リングの上で闘う父親の姿を記憶に残すかどうかは分からない。けれど大きくなれば、きっと父親のような男になりたいと思うことだろう。それが男の子というものだ。
ケンはこの小さな応援団のおかげでエネルギーを無限に引き出すことができるのだ。それは今や俺も同じだ。さぞやケンは格段に強くなっていることだろう！
「ケンはあなたに大事な話があって、あなたをここに招待しましたの。ケンは自分の出し

た答えをあなたにいちばん聞いて欲しいと思っているのです。リュウさん、あなたに」
イライザはそう言うと、メルの手を引いてリング前へと降りて言った。俺はイライザの言葉を聞いて、ケンが観戦のためだけに俺を呼び寄せたのではないことを知った。
ケンの出した答えとは何なのか。
リングの周辺で関係者がせわしなく動いている姿を見ながら、試合が始まるのを静かに待っていた。
試合がまもなく始まるようだ。
会場はオープニングテーマが大音量で流れ、華美な照明効果や花火などの壮大な演出の中、選手たちが入場してきた。
ケンが会場に現れると、ひときわ盛大な観衆からの歓迎が起こった。
熱狂的な声援が、間違いなくケンが名実ともに、最も認められた選手なのだということを改めて思い知らされたのだった。
ゴングが鳴った。
俺は誰とも会話することなく、ひとりでアメリカ人選手同士が闘う姿を見ていた。
ここはアメリカ中のすべての強者が勢ぞろいしている。誰も彼も筋肉の鎧に身を固め、猛々しく威嚇しあい、自らの力量を誇っていた。
アメリカ競争原理主義社会の中で生きていくには、弱肉強食の原理を生き抜かなければならない。
彼ら格闘家も同様に、強者が弱者を貶め、より強い者が名誉と成功を獲得するという構図に組み込まれている。リングに立つ誰もが神の名の下に自らの矜持を誇る一方で、相手を罵倒し言葉の暴力をふるっていた。
なるほど、格闘家は相手を打ち負かすことで成り立っている。俺も格闘家の端くれ。この世界では、強くなければ生きてゆけないのは当たり前のこと。しかし対戦相手を蔑むのは人として意味を履き違えている。しかし皮肉にも、それらの格闘家の姿が現代のゆがんだ人間社会を反映しているのかもしれない。人間は精神が伴ってこそ人間なのであって、動物ではないはずなのだ。
そもそも人間とは、人類の文化遺産や叡智を受け継ぐべき存在のはずである。勝負においても、動物的な強さを競うものであってはならないはずだ。
強さを競うということは、単に豪傑の力比べということではない。人間的に創られた強さイコール技でなければならないのだ。その技の背後に見え隠れする人間性というものが

あってこそ、人間なのである。つまり、技として創られた強さ、そこに研ぎ澄まされた精神があってこその強さを比較しなければならないのである。

そして誰もが生まれてから今日に至るまで一個人としての歴史性を把持している。

格闘家として生きる者は一日一日が今日のための礎となり、闘う相手は他者ではなく常に自分自身である。他者は自分を映す鏡と見ることに意味がある。

わきまえた格闘家であるならば、誰しも虚栄心や自己の強さを証明するために試合をするわけではないことを知っている。むしろ対戦相手に敬意を払い、尊敬の念をもって拳を交わさせていただくのである。

勝負の本質は全人格をあげての命を懸けた闘いである。そこに一切の損得利害は存在しない。

千日の稽古の延長線上にあるのが試合であり、勝ち負けはもはや表裏一体。勝っても負けてもその者の築き上げてきた歴史は崩れることはない。

とはいえ、現実は残酷なまでに手厳しい。「勝てば官軍、負ければ賊軍」に祭り上げられる。格闘家はリングに上がれば古代ローマの剣闘士と化すのだ。

観衆は格闘家同士が闘う姿から精神性を見いだすことはない。彼らにとっては、格闘家個人の人間性よりもむしろ、演出性やエンターテイメントとして楽しめることのほうが重要なのだろう。要はどちらが勝つか負けるかが大事なのだ。

ファイターの姿を見て、現実社会の構造を無意識的に投影しているといったらどう思うだろう。けれども競争社会は勝ち組、負け組という二極化構造を作り上げ、勝っても負けても自己責任という暗黙のルールがそこには歴然と存在している。これが現在の、いや、長い歴史から見た格闘技なのだ。格闘家は思惑になくとも、社会の息苦しい構造のひな型であることを証明するのに一役買っているのかもしれない。

組織はまた、ファイターに観衆やファンの心をくすぐることを求める。それは派手なパフォーマンスやショー的なこと、そして強者であるということだ。それらを総括した者には多額の報酬が支払われる。報酬と名誉を得るための手段として、この業界に参戦する者も少なからずいる。

理想と現実は常に相反するのが世の常なのだろうか。俺はそのことを考えるとリングに上がることを躊躇してしまう。俺は格闘家である一方、ひとりの日本人でもあるからだ。

日本の武道はまさに、人間を創り上げるための道を求める手段として今日まで伝えられた伝統文化である。そのため、技をパフォーマンスとして披露したり単なる力比べをした

りしているようでは、達人だとは到底言えない。パワーに依存しない身体的動作が伴わなければ、人間的に創られた技を生み出すことはできないのだ。

日常的動作の延長上にあるスポーツとは一線を画するのが武道の身体論である。これは西洋的身体論ではなく、日本古来の身体操法――非日常的・合理的動作を身体に叩き込むことを軸とした日本独自の経験知による身体論なのである。これには身体の大きさや年齢といった条件は解除される。小さな老人が神業を繰り出すことができるのは、こういった理論があるからなのである。

それに加え、人間的洞察力、普遍的文化と歴史性、精神の練磨といった肉体以外の追求も伴うのが日本の武術や武道である。身体と精神は両輪なのであって、どちらか一方だけでは成り立たないからである。

だからこそ身体の大きさや身体能力、年齢の差といった条件で勝負が決まるようではスポーツの域を出ないといえるのである。

ふと、俺自身が剛拳の教えを忘れてパワーに頼った闘い方をしていたということに気がついた。

傷ついた体に鞭打って、筋肉の鎧を身にまとうことはもう必要なかったのだ。パワー重視の試合を再開させようとすることは、もはやナンセンスだということに気づいたのだった。

もういちど日本古来の身体論を見直すいいチャンスかもしれないという希望を、このとき見出したのだった。

――決勝戦。

ケンの対戦相手はマイクという黒人ボクサーだった。

マイクは試合中に対戦相手を殺害した経歴の持ち主。ボクシング界から追放されたために総合格闘技に転身したという、曰く付きの格闘家だった。

体格はケンよりもかなり大きいためにリーチもパワーもある。それでいてスピード性も高い。つまり、西洋的身体論的見地ではマイクが圧倒的に優位だといえる。マイクはケンと闘うことにすべてを費やしてきたらしく、その意気込みは尋常ではなかった。

リングに立つや否や、リングの周りをけたたましい咆哮を上げて歩き回っては観衆に向けて自己アピールを繰り広げた。

「俺こそが最強」という言葉を連呼し、ときおりケンサイドのコーナーに向かって挑発的

なパフォーマンスを見せていた。
一方、ケンはマイクの挑発など意に介することなく、淡々とウォームアップを図っていた。
ケンはセコンドのショーンにマウスピースを装着してもらと、リングの中央に立った。
対してマイクは落ち着きなく跳ね回り、レフェリーに制止されてやっとゴングが鳴らされた。
先手はマイクのダッシュストレート。
ケンはマイクの一発が即K.Oとなる確率が高いことを知っているのか、まずはかわした。
ケンの攻撃を封じる算段なのか、マイクはたて続けにストレートとアッパーを繰り返した。
ロープへと追い込まれることになったケンは、はじめてマイクに蹴りで反撃した。が、マイクのグローブで防御され、クリンチを受けたときにマイクの頭突きがケンを襲った。
ケンが額を押さえながらふらついたところをマイクは容赦なくボディを攻めてきた。ケンはひたすら防御している。「攻めのケン」にとっては珍しい光景だ。
おそらくマイクはこの日のために計算しつくしてきたのだろう。ケンの得意技を封印するかのような攻撃を次々ととった。
距離を縮めることにより、ケンに飛び道具を撃たせなくさせている。ストレートの応酬を浴びせ、極めつけにターンパンチを繰り出した。
が、その一瞬の隙をケンは見逃さなかった。蹴りを瞬時のうちに繰り返してマイクを後退させた後だった。
「神龍拳！」
炎をまとった拳をマイクの正中線上を貫き、マイクは失神しながら虚空に舞い上げられた。
このとき観客の網膜に、ケンが炎と一体化したかのような残像を焼きつけた。
マイクの巨体はリング上に轟音をたてて落下し、気絶したまま担架に乗せられて花道をくぐり抜けていったのだった。
またしても、ケンは優勝を勝ち取った。
リング上ではケンがイライザとメルを肩に抱いて星条旗を掲げている。凄まじいフラッシュの嵐が鉄壁のチャンピオンを捉えていた。
ケンは間違いなく全米一のヒーローだということをリングの上で証明したのだ。

俺は粛々とした気持ちで、妻と息子と抱き合っているケンの姿を見つめていた。ケンは確かに頂点を極めた男となったのだった。

大会終了後、俺はケンの自宅へと招待された。

ケンは格闘家としてもアメリカ人としても特別な存在なのだということを思い知らされながら豪邸のロビーに通された。

「リュウさん、ごゆっくりなさってくださいましね」

「ありがとう」

イライザのもてなしを受け、改めて俺とケンは互いの再会を喜び合った。

戦のあとは腹の虫が騒ぎたてる。イライザの腕を振るった料理をいただいた後、ケンは絶景を眺められるという、広い二階のバルコニーへと俺を案内した。

暮れゆく茜色の空に照らされたのどかな田園風景が一望できる。日本とのスケールの違いを改めて感じながら、そこに立つケンはアメリカの象徴そのものに思えた。俺たちは酒を酌み交わしては、心地よい風に当たっていた。

ケンはワイングラスを片手に遠くを見ながら言った。

「おまえ、怪我の具合はどうなんだ？」

「時間がかかるようだ。春麗はゆっくり治すのがいいと言っているが、そうもいかんだろう」

「おまえは春麗の言うことを素直に聞いていりゃいいんだ」

「そうだな」

俺はため息混じりに苦笑した。

「おまえの気持ちは俺にもわかる。だが、誰にもおまえの問題は解決することはできないのさ。こういうときは、ただじたばたするしかないんだよ」

茜色の空は深みを増し、ひときわ輝く金星を眺めていたケンは、白い歯を覗かせて言った。

「ケンの言うとおりだ。今日の試合で俺はじたばたしていただけだったことに気づいたよ。それからひらめいたこともあった。帰ってから早速試してみる」

「ははっ、ただでは起きないところがおまえらしいぜ」

ケンは大口を開けてふざけた笑いをしてみせた。

「実は指導者にならないかという誘いも来てたんだ。さらさらその気はないけどな」

「引退か。まあ、人生いろんな選択肢があってもいいと思うが、おまえがそれを選ぶとは考えにくいな」
「春麗にも言われてる。家族のために闘うのなら、辞めてもいいってな」
「辞めてもいい、じゃねえよな、辞めたくないんだから」
俺たちは笑った。
「俺はいつの間にか闘うことの意味がすりかわってしまっていたようだ。だからこそ余計に引退するわけにはいかないんだ」
ケンは目を丸くして俺をじっと見ていた。そして大声をあげて笑った。
「おまえ、進歩したよな」
「いや、進歩したのはケン、おまえの方だよ。あの極め技には驚いた。あれをくらえば誰だってひとたまりもない。何ていう技だ？」
「神龍拳だ。この日のために編み出した新技さ」
「なるほど。映画俳優としても最高の演技ができるわけだ」
「よせよ」
ケンは投げやりに笑った。
「“ブルース・リーの再来“だなんて言われているが、俺の技はパフォーマンスなんかじゃないぜ。世間はそうは見ないだろうけどな」
アメリカ人はパフォーマンス性の高い人物であれば、たとえ演技の素人であろうとも、俳優として抜擢することに何のためらいもないらしい。それはどこの国も同じかもしれないが。
「リュウ、おまえから見れば、俺が道からそれているように感じるかもしれないが、俺にとってはショービジネスも大事なことなんだ」
ケンは遠くを見ていた視線を、俺に向けた。
「俺は来年、マスターズ財団の社長に就任する。だが格闘家を辞めるつもりはない。むしろ、新流派を立ち上げようと思っているんだ」
俺は「ケンの答え」がこのことなのだと思った。酒はずいぶんと飲んだはずだが、ケンは酔ってはいなかった。
「アメリカ人は肉を食いすぎているせいで、精神が凶暴化しているってことを知っているか。さっきの試合を見てもわかるだろう？」
ケンの言わんとすることはよくわかる。

ファイターの品位は年々下がっていることは認めざるを得ない。ケンのように武道の精神を心得ている者にとって、この現状は憂いに感じるのは当然のことだ。
「そこへきて銃社会だ。しかし、今やアメリカは自由の国ではなくなってきている。実際、国民の自己防衛のために持たされていたはずの銃さえ、政府は取り上げようとしているんだ」
ケンは真面目な顔になって言った。
「それがどういうことを意味するか分かるか？　国民を丸腰にするつもりなのさ。その上で政府は警察権力を行使して、権力に逆らう者を強制収容所に入れようとしているのさ。現実のアメリカには正義のヒーローはどこにもいないんだよ。政府が暴力と権力で世界を支配している限り、犯罪も戦争も永遠になくならないだろう。いつ危険な目に遭っても不思議ではない世の中だ。自分の命は自分で守らなきゃならねえ。格闘技は本来、そのためにあるべきものなのさ」
「護身術として」
「そうさ。犯罪に巻き込まれたときには、俺の必殺技も役に立つだろう」
「なるほど」
「人材を育成できればいずれ各州に道場を設けるつもりだ。俺が社長になっていちばんやりたかったことはこのことなんだ。映画の出演に一役買ったのもこのためさ」
ケンは俺とは立場が違う。マスターズ家の長男として生まれてきたからには、必然的にアメリカを牽引せねばならない宿命を背負っている。
ケンもまた、アメリカの真実を知り、格闘家としての自分に何ができるのかを真剣に考えてきたのだろう。ケンはケンなりのアプローチの仕方で真の格闘家を目指していたのだ。
「おまえの必殺技を体得できると知ったら、世界中から弟子入り志願者が来るだろうな」
「だが俺は剛拳のようにはやらないぜ。逃げ出して誰もいなくなっちまう」
「ははっ、それもそうだ」
俺たちは声を揃えて笑った。互いに剛拳のもとで修行していた記憶を鮮明に思い起こしながら……。
「リュウ、おまえがいたから俺は厳しい修行から逃げ出さずにやってこられたんだぜ。俺はおまえにだけは絶対に負けたくなかったからな」
「いや、ケンは常に俺の前を歩いていたよ。今もそうだ。おまえはこうして答えを出した。俺はまだまだのようだ」

「よく言うぜ、長年放浪していたおまえが今や一家の主だぜ？　百八十度、人生の方向転換をしたんだ。これから先、いつ追い越されるかもわからねえ。まったく気が抜けねえよ。さあ、もっと飲め！　今晩は飲み明かそうぜ」

ケンは俺のワイングラスにとびきり高級であろう赤ワインを勢いよく注いだ。

「いや、今日は帰る。かわいい女房と息子が待っているんでな」

俺は一気にワインを飲み干して言った。

「言ってくれるじゃねえか。この万年格闘バカが」

ケンは笑いながら言った。

「フッ、お互い様だ」

「リュウ、きっとリングに戻って来いよ。おまえがいなけりゃ俺は腑抜けになっちまうからな」

「ああ、必ず戻ってくる。おまえこそここ一番で逃げるなよ」

俺たちは別れのときが来たことを知った。同時に、いつか俺とケンが、人生の集大成となる決着をつける日が来ることを予感していた。俺たちは拳を交し合って、別れたのだった。

肩の怪我は俺にとって必要なプロセスだったのだと思う。

ひとりで闘っているという思い上がりから目を覚ますきっかけになり、ひとり身でいたなら決して知ることのなかった、家族や周囲の支えに感謝することの大切さを再認することができたからだ。

それに、剛拳が教えようとしていた大切なことをようやく紐解くことができた。そして、何ごともあせっては事が運ばないということも気づいた。何より、自分が日本人だったと我に返ったことが大きかった。

今日の試合で俺はヒントを得ることができた。パワー重視の闘い方は、ここいらで卒業する時期に来たのかもしれない。日本古来の身体論を再度応用することで俺の闘い方はずいぶん変わったものになるだろう。

怪我という現実に執着していた俺は、視点を切り替えることにより、自分を一段上に上げる可能性を見出せたのだ。その可能性を、いち早く現実化させたいという気持ちを高めながら、俺は帰路を急いだ。

帰国後、俺は早速日本古来の身体論の研究に取り組んだ。

中世の日本人は、現代の日本人からは想像もできないような日常的動作を用いていたようだ。日本人は本来、走ることをしなかった。かわりに手足同側を同時に動かすという、一見不自然に思える動作をしていたのだ。しかしこの動作をすることにより、身体に捻りを生じさせることがなくなる。これは本来、武士が抜刀する際に最も合理的な動作となることにも注目することができる。

武士や武道家が身につけている袴には意味があることを、おそらく知る者は少ないだろう。袴の役割は膝の動きを隠すためにある。予備動作として次に動く方向やタイミングを悟られないために作用するのだ。一見、身動きが取りにくそうに思えるが、立ち居振る舞いを正しくしていれば、動作に制限されることはなく、いざというときに身を助けてくれる合理的なものなのだ。

戦国時代から江戸初期の武将たちは、鉄砲も実戦もふくめて世界一強かったのだという。そのため、西洋人が大陸を見つけては次々に植民地化していたこの時代に、日本は西洋人の侵略をはねのけ、約二六十年間も独立を維持できすることができたのだ。

近世江戸時代までの日本は、唯心論に基づいた非科学的な文化だったと批判されがちだが、その実は大変すぐれた文化だった。かつて神秘の国といわれた日本独自の文化には、多くの智慧が隠されていたのだ。

日本人は――ことに武士は――命懸けの闘いをすることの覚悟を常日頃もっていた。そのために、護身のために動くことが日常的動作だった。

現代人にとってはぎこちなく動かしにくい動作に見えても、身体構造論的に見れば、非常に合理的に動いていることになる。それゆえ、現代人のように腰を痛めるようなリスクが軽減する。これは長年格闘術の修行をしてきた俺にとっても至極納得のいく理論だった。

このことを突き詰めていけば、筋肉に無駄な力が入らないため故障しにくく、パワーを必要としなくなるのだ。

致命傷を負った身体であっても負担は軽減され、相手の動作に同調することでパワーとパワーのぶつかり合いではなく、パワーを吸収して自分のパワーに変換することが可能になる。いいことづくめだ。これは体力の少ない女性にも十分通用する。

春麗は世界を股にかけて活躍してきた女性格闘家だ。俺も何度敗れたか分からないほどの腕前の持ち主だ。

春麗が強いのには理由がある。パワーに頼らないからだ。

その点、男はもともと力を持っているために、パワー以外の要点をおろそかにしがちになる。

春麗は女性であるが故に、西洋的身体論的見地で技を身につけていては、格闘技界に通用しないことを知っていた。こんなに近くに手本となる人物がいたというのに、俺は自分の流儀にこだわりすぎて見えなくなっていたのだ。

俺は女性がそうであるようにパワーに頼らない技法を学ぶべく、春麗に協力してもらうことにした。

最初に、春麗はこのようにアドバイスしてくれた。

「本来はパワーなんて必要ないのよ。必要なのは、方円の器に従うように、流れに逆らわないことなのよ」

実のところ、俺は春麗と勝負して一度も勝てたことがなかった。

もちろん、春麗のほうがより実力があったからなのだが、それだけではない。俺が春麗に勝てない本当の理由は惚れた弱みというやつだ。

もし仮に、春麗を負かすことができたとして、俺はそれで満足かといえば決してそうではない。

かつて春麗を高嶺の花と見ていた頃のように、俺の中では春麗はどこまでも強い存在であって欲しいと思うところがどこかにあった。そして実際にそうだった。それは俺をどこまでも高みに引っ張り上げてくれるという、モチベーションを保ち続けられる秘訣でもあった。

矛盾するようだが、春麗の実力を認める一方で、どうしても降参できない自分も確かにいた。なぜなら、春麗の格闘術を全面的に受け容れてしまえば、俺がこれまで築き上げてきたものを捨てなければならなくなるからだ。

しかし、男のつまらないプライドにしがみつくことを捨て、初心に返ることを決意した俺は、ゼロから学ぶスタンスをとる決意を固めた。男がここ一番で必要とするのは、意地ではなく覚悟なのだ。

忙しい合間を縫って、春麗は俺に付き合ってくれた。道場の中央で互いに向き合いながら、春麗はこう言った。

「気沈丹田、内外相合、上下相槌、虚領頂勁、動中求静、剛柔相済……。あなたには分かるわよね、わたしが言いたいことは何か」

「基本に戻れ、ということだな。確かに、今の俺に必要なのは原点に戻ることだ」

「さすがだわ。あなたとわたしはうまくコラボレーションできそうね」
「ああ、楽しみだ！　春麗がいると百人力だからな」
「フフッ、光栄だわ。中国四千年の歴史をあなたと分かち合えるなんて。わたしもうれしいわ」
「なるほどそうだ。俺たちは中国の叡智と日本の伝統文化を融合しようとしているというわけだ。最高じゃないか、春麗！」
俺は春麗とともに技の研究をすることによって発見する喜びを得た。そのことがきっかけでスランプから一転し、若かりし頃のように新鮮な気持ちで稽古に励むことができた。
こうして一度解いた縦糸と横糸を違う手法で織りなおすことで、強靭な縄を作り上げようとしていったのだ。
その甲斐あって、俺の格闘スタイルはずいぶん改良された。
隙を生じさせる大振りな技はそぎ落とされ、基本技が残される結果となった。
「基本の技は必殺技であり、必殺技は最高の型である」という剛拳のセオリーは真実だったと、このときになってようやく確信するに至ったのだった。
日本人は、ことさら西洋の技術に心を奪われて、ひたすら欧米諸国に肩を並べることを必死でやってきた。その代償に日本固有の文化や技法を忘れてしまった。
今や武道さえも西洋のスタイルに飲み込まれてしまい、ポイント制によって勝敗が決められるという有様だ。オリンピックの種目として参入した結果、柔道はJUDOと姿を変えていった。
ここで特筆しておくべきことは、武道は決してスポーツではないということだ。武道は競争するものでは決してない。日本人にとってはJUDOから柔道の精神を見ることは難しいかもしれない。俺の立つリングの上でもまた、純粋な武道の精神を見ることは難しいだろう。俺もひとたびリングに立てば、JUDOの選手と同じ立場となる。
しかし、彼らスポーツ柔道を生きる者や、リングで闘う格闘家たちも、武道の精神を熟知し、謙虚な気持ちで相手と対峙し、武道家としてその精神を発揮して試合に臨んでいることに何ら変わりはない。
武道とは連綿と受け継がれてきた文化と智慧、そして精神を学び、肉体を鍛える手段であることを忘れてはならない。
かつて剛拳が言っていた言葉――一に修身二に実践。三に技なり――このことの本当の意味が、この年齢になって痛いほど分かるようになったのだった。

おかげで俺は見事リングに返り咲くことができた。
まったく新しい手法を使うことで対戦者は皆、戸惑いを覚えたようだ。
相手は俺の弱点は肩だと分かっているのだから、やはり肩を攻めてくる。しかし俺は狙われることを知っているから、こちらはその対応策の手段を揃えて待っている。
それにパワーに頼らない手法を使うため、肩に負担をかけずに攻撃することができる。直線的な攻撃は、避けられれば隙を生むが、曲線的な攻撃は、死角をつくらずに即防御となる。その際、大技は必要でなくなる。最も大きな力を生むのは、最も軽いタッチであることを、俺は怪我の功名として会得したのだった。
リングに復帰した俺は、これまで骨身を削って命をすり減らすような勝負を捨てたおかげで、楽に勝つことができるようになった。
基本技を実戦に応用することで、ますます技が冴え渡り、次第に自分の技を洗練させることができるようになったのだ。
驚くべきことに、俺には必殺技さえ必要としなくなっていった。
言い換えれば、必殺技を出す必要性に迫られる以前に試合を決められるようになっていたのだった。
俺にとっての勝利はもはや当たり前のこととなった。
俺の格闘人生は、怪我で終えるような結末とはならなかった。むしろ、怪我はターニングポイントとして位置づけられ、さらに遠き終点を求めながら格闘人生を歩むこととなった。これこそ、真の格闘家へ近づくための一歩だったのだろう。

円熟の時期といえる三十代後半にもなれば闘い方が本当の意味でシンプルになった。
組んだ相手の刹那の隙に入り込むことが、頭ではなく勘で行動するようになった。
この頃にはもはや頭脳プレーはそれほど重要ではなく、むしろ目を閉じていた方が相手を読み取れるのに有利ではないかとさえ思えるようになった。
勘というのは直観のことであるが、第六感のことをいうのかもしれない。直観と頭脳が見事にバランスを取って俺に的確に命令を下すようになった。
不思議なことだが相手の心理を手玉に取るように読み取れるのだ。
だからこそ相手の出す技を的確に先読みすることが可能となり、前もって対処することができるというわけだ。
それは、一瞬のうちに勝負を決めるという結果を生み出す。これは単に身体知によって

創出した技だけでなく、氣という見えない力が創出した技に作用することにより、相手を圧倒することができる。そして身体知を越えた技、その奥儀のひとつが波動拳なのである。

波動拳とはいっても、二十代の頃に躍起になって体得しようとしていた頃の波動拳と、三十代前半と後半の頃に発する波動拳、そして四十歳の俺の波動拳とはすべて質が異なっている。なぜなら、俺自身の波動が違うからだ。

一方、ケンは宣言どおり、マスターズ財団の社長として組織を統率するという大役をこなしつつ、次々に道場を開設していった。

殺傷力の強い必殺技を身につけたいと志願する者で道場は所狭しとにぎわい、今では全米で最も弟子の多い流派となった。

ケンのカリスマ性は、社会的地位だけでなく、情熱的で少年のような冒険心と天性の強運が加味されたものだ。それをひけらかさずに振舞う姿が、むしろ余計に人を引きつけるのだろう。

ケンの強さにあこがれた男たちだけでなく、少年少女や甘いマスクの全米チャンピオンを目当てに入門する女性たちも多いようだった。

今やケンには、手に入れられないものなど何一つないかのようだ。しかしケンは決して現状に満足する男ではない。立ち止まることができないのは、俺と同じだ。さらに進化を求めて日々精進しているに違いなかった。

――そして迎えた四十代。

気がつけば、俺は三児の父親となっていた。俺は飽きもせず、今もなお格闘技界に生き残っている。

この世界は、弱肉強食の原理がじかに働くため、古参のファイターは、若きファイターに引導を渡されてリングを降りてゆく。

ほとんどのファイターは、肉体の限界を理由にリングを去っていくのだ。

現実を受け容れられないファイターは、過去の栄光を捨てきれずにリングにしがみつくが、大抵、余計に傷つくことになる。

俺は彼らの姿を見ていて、もしかしたら自分もそのうちのひとりになっていたかもしれないことを思うのだ。

仲間がひとり、またひとりと去っていく姿を見送るごとに、複雑な心境になる。しかし俺はもはや、昔の俺ではない。

パワーを手放した今となっては、三分かかる試合を数秒で決めることができるようになった。

おそらく、二十代の俺と今の俺が闘っても二十代の俺は今の俺に勝つことはできないだろう。

ひと言で言うならば、四十代の俺は、肉体は衰えようとも、波動が格段に上がったということだ。

今となっては、無限のエネルギーをとりこんで自分のエネルギーに変換することができる。パワーを手放した今の俺にとって、肉体の条件はさほど重要ではないのだ。

このことを考えるとき、かつて剛拳師匠と交わした闇稽古を思い出す。

あのとき、目隠しをした師匠に真剣を持った俺たち弟子は、まったく太刀打ちできなかった。剛拳はもはや、パワーだけでなく、視覚をも頼らない名人の境地にいたのだ。

人々が言うように、俺は達人の境地に到達したといえるのかもしれない。だが、達人はすべてを極めた者を意味しない。達人を超越することにより名人へと至れるのである。

真の格闘家をめざす俺にとって、この名人にたどり着くことなしには決して真の格闘家にはなり得ない。

そもそも達人とは、技の総合的な技量をもった者をさす。つまり技術が洗練されていて、なおかつ身体知としてしっかりと身体に刻み込まれており、いかなる相手に対しても冷静に対処し、確実なタイミングで確実に技を出すことができる者のことをいうのである。

対して名人とは何か。

達人レベルでなおかつ、完成された人格を具えた者のことをいうのである。

いかなる諸芸において、行きつく先は「人間とは何か」というテーマであり、人格を陶冶することに相通じる。

自ら体得した技をひけらかしたり、相手を叩き潰したりする手段とするならば、単に自己満足をしているだけの未熟者だといえるだろう。

とはいえ、ひと言で人格を陶冶するとは言っても、なかなか難しい。他人のことはよく分かっても、自分自身のことを知ることはたやすいことではないからだ。

俺は長い間、闘いを通して自分自身を知るための旅をしてきた。

そのなかで人生の変化もあり、価値観も変化し、俺という全体像が常に変化していることを認めることができる。

それを世間では成長と言っているのかもしれない。

もはや俺は青二才ではない。しかし、青二才の時代があってこそ今がある。
今となっては世間では「強さを極めた男」と謳われている。
しかし周囲の評価とは相反して、俺自身はその実感を得たことは一度もないのだ。勝てども勝てども、求めてきた境地に至ったという充足感はなかった
周りから最強の男だと言われようが、そんなことはどうでもよかった。たとえ今の時点で最強であったとしても、それはすでに過去のことに過ぎないのだ。
よしんば強者の頂点に立ったとしても、真の強さを体得した実感は一度も得られないのはなぜなのか。
いったいどうすれば、魂の歓喜を味わうことができるのだろうか。
あれほど強烈にあこがれた強いということが何なのか、今では分からなくなっていた。
強さの絶対的な証明であるはずの勝利を常に勝ち取り、万人の格闘家の頂点に立ったというのに、真の強さはそこにはいないということを知った俺は、未だ真の強さとは何か、真の勝利とはどういうことを意味するのかを探求し続けているのである。
未だ実態の知れない、真の格闘家の境地を求めて生きているのだ。

「……あなた、あなた、ねえ、あなた！」
春麗の呼びかける声に、俺の心は現在に引き戻された。
ずいぶん長いこと黙想にふけってしまっていたようだ。気づけば腹の虫が騒いでいた。
「ずいぶん長い朝稽古だったわね」
「ああ、ちょっと昔を思い出していたんだ」
「なにかいいヒントは見つかった？」
「ああ。腹が減っては戦はできぬ、っていうやつだ」
道場を出ると、朝日はすでに高くなっていることに気がついた。

☆　大死一番

今回は十四歳年下のファイターを相手に、タイ王国で公式試合に出場することになっていた。

日本代表として単身で競技場に入った俺の対戦相手は、二十六歳の若きファイターだと聞いていていた。しかし実際は、七歳の男の子を筆頭に三人の父親でもあるファイターだったのだ。

タイの男たちは一攫千金を夢見て幼い頃より強さを求め、ファイターとして食い繋いでいるのがこの国の実情なのだ。

俺の相手も例外ではなく、家族のために拳を振るってきた男だった。

対戦者の妻は乳飲み子を抱えていた。まだ幼い子どもたちにまとわりつかれながら夫の勝利を祈りつつ、リングを見つめていた。

対戦者の長男は、リングの前でせわしなく父親に声援を送り続けている。最強と信じている父の息子であることを誇りに思っている様子だった。

対戦者の家族に、自分の家族を重ねてみることはあっても、格闘家として情にほだされるわけにはいかなかった。

俺は異国の格闘家。

会場はまだ勝負が始まっていないにもかかわらず、すでにタイのファイターが勝利を収めたかのような盛況ぶりだった。

ここに異国の者が勝利するという筋書きは一切ない。あるのはタイ王国の英雄としての「筋書きどおりの勝利」に他ならない。誰もが皆、あと数分もすれば国民の英雄を讃える祝杯に酔いしれるつもりだったろう。

ここでは、かつてムエタイの王者サガットを破った男と銘打ってリングに上がることとなった。

サガットは今ではムエタイ界の英雄として神格化された存在だ。ルンピニーで俺にただ一度敗れた試合を除けば無敗の王者だった。

サガットとはその後、インドでの野外試合を果たしたが、俺は敗北を喫した。俺は自分自身に負けたのだ。

殺意の波動に支配された俺の目を覚まさせてくれたのは、すべてを捨てたサガットだった。

あの時見せた、サガットの闘いに対する真摯な精神に、俺は胸を打たれたのだった。

帝王の座を捨ててまで、俺を倒すためにすべてを懸けた男の生き様……。サガットは俺が刻み付けた胸の傷を、臥薪嘗胆の思いで這い上がってきた。地獄を見た男は、再びムエタイ界に返り咲き、ムエタイのレベルを引き上げたことで、タイの国技を世界中に知らし

めたのだ。サガットは偉大な功績を残した格闘家となったのだった。

――試合前のことだ。

控え室で氣を高めていた俺に訪問者があった。

（この氣は……！）

振り向くと、隻眼の巨人が立っていた。

「来てくれたのか」

俺に対して憎しみさえ抱いていたあのサガットが、拳を突き出して白い歯を見せた。その拳に俺の拳を当て、かつてのライバルとの挨拶を交わした。

偉大な男からは、若かりし頃の猛々しい氣は消えうせ、情熱を内に秘めつつも柔和な雰囲気を醸し出していた。

「あんたは変わらないな」

齢五十を過ぎたところだろう。スーツ姿からでも、現役で闘っていてもおかしくはないほど筋肉に張りがあることがわかる。

王者として君臨してきた名高い格闘家であっても、引退してしまえば肉体の管理はおろそかになり、筋肉の代わりに脂肪をまとうのが常である。肉体の緩みは、精神の緩みがあってはじまるものなのだ。

しかしサガットには肉体の緩みは微塵も感じられない。おそらくサガットは、年齢を重ねるごとに精神を陶冶してきたのだろう。サガットの片眼の奥に達観した光を宿していたことがそれを物語っていた。

「おまえは変わったな」

サガットは俺をひと目見て言った。

「そうか？」

「……強くなった」

しばらくぶりに見る俺に、何かを感じたのだろう。年輪を重ねた王者の言葉には、これまでの俺の人生を見透かしているかのような重さを感じた。

「おまえはまだ旅を続けているのか」

「いや、今は日本で暮らしている。しかし真の強さを求める旅は、未だ続行中さ」

「必ずやり遂げろ。それがおまえの天命だからだ」

「ああ。必ずやり遂げてみせる。だが、まずは目の前にある試合に勝つことだ」

「おまえの相手はタイで最も強いファイターのひとりだ。彼はわたしの弟子でもある。おまえの闘いぶりを楽しみにしているぞ」

ニヤリと笑みを見せたサガットの揺ぎのない左眼は、しっかりと俺の目をとらえて離さなかった。

射抜くようなまなざしの奥に、ライバルを超越した格闘家同士の強い絆が結ばれていたことを、このとき悟ったのだった。

「リングの上でおまえが出した答えを、この目でしかと見届けてやる」

そう言い残して、サガットは部屋を出て行ったのだった。

――サガットとのやりとりなど知る由もない観客にとっては、二十年前に英雄サガットを破った日本人だと聞いたところで、年老いた格闘家の勝機の目算はほぼゼロだと見ていた。

相手は経験と体力がバランスよく充実している二十六歳の男。対して俺は四十を過ぎた老境のファイターだ。前評判で圧倒的にタイのファイターが有利といわれるのも至極当然のことと思われた。

まもなく試合が始まる。

リングの鐘が鳴り、試合は始まった。

相手はやはりムエタイの使い手。独特の構えでにじり寄ってきた。

が、すでに俺の回し蹴りが後頭部に直撃したため、相手は崩れるように意識を失った。試合が始まってわずか十秒足らずの出来事だった。

会場はあまりの展開と幕切れの速さに、しばらく水を打ったように静まり返った。

レフェリーさえ、自分の役割を忘れ、俺が礼をしてから初めて判定を下したのだった。

まさか筋書きがわずかな時間で書き換えられようなど、誰も思いもよらなかったことだろう。

直ちに会場は怒号の嵐とリングに物を放り込まれる事態となった。

怒りの標的は、勝者と敗者の両方だ。

勝利を裏切られたその背景に、賭博が絡んでいることは周知の事実だったからだ。

俺は、対戦者の生活だけでなく、ここにいるほぼすべてのタイ人の生活までも揺るがせることになったのだった。

リングを降りたとき、対戦者の長男と目が合った。

少年は歯を食いしばり、涙を大きな瞳いっぱいに溜めている。父親をタイの裏切り者にした俺に対して憎しみのこもったまなざしで見つめていた。

俺にも同じような年頃の息子がいる。もしかしたら少年の傷ついた心は、息子の心と引き換えになっていたかもしれない。

ここにいては命の危険すら危ぶまれる。花道を逃げるように通り抜けたとき、サガットの無言の問いかけが胸に響いた。

――これがおまえの答えなのか？――

一瞬立ち止まりかけたが、振り返ることなく控え室へ向かう足を、むしろ早めていたのだった。

（俺はいつまでこんなことをしているんだ……いつまで……）

勝利の喜びなどなかった。今まで鬱積してきた課題をまざまざと突きつけられた現実に足をすくわれた結果に終わったのだった。

――サガットに答えられる言葉は今の俺にはまだないこと――それが、答えだった。

帰路は帰るべき家ではなかった。

気がついたら大自然の地、霊験あらたかな熊野の地に降り立っていた。

古の時代より、人々は真理を求めて熊野に向かう遠く険しい道を踏みしめてきた。

熊野古道は聖地熊野三山である熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社をめざす信仰の道である。現在はこの地一帯が世界遺産に登録されている。

人々は神々の魂に触れるこの遠い道のりを「馬にて参れば苦行ならず」といい、歩くこと自体が修行とされてきた。道を求める者はその答えを求めるゆえに熊野をめざすのだ。

その中でも標高千七百メートル級の険しい山々が連なる大峰山脈は、修験道の聖地のひとつである。

修験者は、大峰山の入り口である吉野で身を清めてから峰入りし、荒行、苦行を経て熊野三山へ参拝するのだ。

この地は過去に何度も訪れている。最初に来たのは、剛拳による波動拳伝授のためだった。

魂が求めるのだろう。答えを探しているときは、決まってこの地に足が向いた。

ここへ来ると修行に明け暮れていた若かりし日を思い出す。弱さや恐れ、不安を克服するために、よく滝に打たれに来たものだ。

今となっては、がむしゃらに強くなることだけを求めていた頃の自分が懐かしくさえ思える。

長い間、ここへ来ることはなかった。結婚してから十年は熊野の地とはおよそかけ離れた俗世にいたことになる。

タイでの試合の後、ここへ来てから今日でちょうど三日がたっていた。

その間宿坊を転々としながら荒行にいそしみ、あらゆるしがらみから逃れて独身時代の風来坊に還っていた。

その間、一度も家に連絡を入れることはしなかったのだった。

宿坊の浴場で汗を流した後、断りを入れてから外へ出た。

人里離れた山野は夕涼みに丁度良い。群青から茜色にわたるグラデーションが雲ひとつない空一面に広がっている。大自然の一大パノラマは、日常の喧騒が非日常であるかのような錯覚を呼び起こす。

俺は浴衣の袖をまくり上げて熱せられた身体をそよ風にさらしていた。梅雨入り前の風に、心地よい爽快感を覚えた。

今ごろ家族は何をしているだろう。

家族を置いて出てきたというのに、思うのはやはり家族のことだ。

そのとき、今や家庭人となった俺がかつて風の吹くまま、気の向くままに生きていた流浪人だった頃の記憶が頭をよぎった。

はぐれ狼だった俺が、一匹狼となる道を選んだ。

確かに、俺はその道を歩むことで強くなった。しかし、その一方でいまだに分からないことがある。

俺が勝ったことで得たものは何か。

そして失ったものは何だったのか。

得たものといえば、おそらく名声や賞金、それと自己満足だけだろう。

原点の俺は、名声も金も何も求めずにただ勝つことだけを求め続けていた。

今となっては、勝ち続けることで望まずとも結果として名声と富を得ることになった。そのおかげで家族を養うことができた。独り身だった頃の俺には十分すぎる生活をすることもできた。このことを世間では「成功」というのだろう。

安定した人生の中に浸かった俺は変わった。

いつしか本来求めていた無形の強さが、形ある強さを求める気持ちへと変換していった

からだ。それで家族を守ることができると信じてきたのだ。
そんな俺を気遣って、春麗はたびたび言った。「あなたの目指す道を歩いてほしいの」と。
剛拳は自由に生きよと言った。
その言葉を信じて俺は自由に生きてきた。そうすれば、師を超えられるだろうと剛拳は言ったからだ。
しかしどんな道においても守・破・離を通らねば師を超えることはできない。
俺にとっての「守」は轟鉄一門の信念を受け継いだこと。「破」は結婚を果たしたこと。問題は最後の「離」なのだ。
俺の目指す道――それは勝負を超えた境地にたどり着くこと――
これぞ求める「離」の境地。目標はいつだって色褪せてはいない。その境地をただひたすらに求めてさまよっているのが今の俺なのだ。
では、勝つことで失ったものがあるとするならば、何か……。
明らかなのは敗者の地位と名誉、そして自尊心だろう。
かつて英雄だったサガットに勝った俺は、サガットの人生を狂わせてしまった。あのときから、俺は勝つことの虚しさを知ってしまったのだ。
しかし、今や俺にとっての格闘技は生業。守るべきものは家族なのだ。家族のためなら何度でもリングに上がる。リングで闘って、勝ちにいく。
厳しい競争原理の中で生きている以上、現実が俺を動かしていたのは確かだった。
どんなことがあろうとも、俺は勝ちたかった。それが俺のすべてだった。
ふと、ある言葉が頭をよぎった。
――勝者は敗者によって存在している――
頭を殴られたような感覚が俺を襲った。
俺はずっと、勝利は勝ち取るものだと思っていたからだ。自分自身の実力の証が勝利だと……。
――勝者は敗者によって存在している――
これは真実だ。しかしこれを真実だと認めてしまえば、これまで追い求めてきた勝利と実績が一瞬にして崩れ去ってしまうことになる。俺は勝利に対する新たな側面を見つけてしまった。
俺にはもう、勝つことと負けることの意味すらわからなくなってしまった。

たった一人が歓喜しているかたわらで、他のすべてのファイターが唇を噛み締める思いを強いていたのだから。

チャンピオンは、相手が負けてくれたおかげで王座に就くことができるのだ。そう思うと、俺はいったいどれだけのファイターに支えられてきたことか。そんなことも分からずにいたなんて……。

そう考えてみれば、タイでの勝利は、対戦者とその家族の失意と引き換えに得たものなのだ。

容赦なき勝負の世界に生きる男の宿命を恨んだところで、現実は何も変わりはしない。

――真の闘いとは、怒りや憎しみを超えたところにあるはず――

かつてサガットを破ったときに抱いた感情を、対戦者の息子の涙によって改めて思い知らされた。

そのとき、俺は原点に立ち戻っていた。

試合の後、賞金をすべて対戦者に渡すようにと大会関係者に言付けて、身一つで会場を立ち去ったのだった。

決して恩を着せるつもりではない。

金は生きてゆくための道具に過ぎない。タイ人の少年がうまいものを食べ、新しい靴を履いて笑ってくれたなら、それでいい。

春麗は怒るだろうか。それは当然のことだろう。しかし俺にとって春麗は、最も理解してくれるかけがえのない存在なのだ。

では反対に、負けることで得たものもあるにちがいない。

それは間違いなく明日への闘志、臥薪嘗胆の気持ちが自分を奮い立たせてきたということだ。

自分の未熟さを反省し、弱点を強化する起爆剤が敗北だろう。そしてそれこそが、真の強さへと導く不断の決意を固める動機だったのだ。これこそ俺を真の強さを求める旅に駆り立てる原動力だったといえる。

広い世界に飛び立てば、自分よりも強い相手がたくさんいた。その相手に勝つことで真の強さとは何かという答えを得られると信じてきた。

ひとり、またひとりと強者を求めて闘っていくうちに、いったいどれ程の相手と拳を交えてきたことだろう。

一戦ごとに、得られたものは確かにある。

しかし試合の総和が強さへの答えというわけでもなかった。
俺の長い旅の中で出会った人物は、それぞれが俺に大きな影響を与えてきた。
剛拳、豪鬼、サガット、ケン、春麗、そして長い旅の中で出会ったすべての格闘家たち……。俺にとって彼らは、それぞれ俺にない部分を持っていた。しかしそれは俺が奥底に眠っているものを引き出すきっかけを与えてくれたのだとも言える。
人は、自分の半身を探し求めて生きているのだ。
その半身を見出して同化していくにつれ、より完全なる存在になってゆく。俺の長い旅は、単に強者を求めていただけではなかった。俺にとっての旅は、俺という未完成のジクソーパズルのピースを探し求めていたことになるのだろう。
――求め続けた真の強さとは何か――
それは決して肉体のパワーのことをいうのではない。若さやエネルギーのことをいうのでもない。世界一の格闘家になったから備わった、ということでもないのだ。
ならば精神力のことを言うのか？　いや、それも違う。
なぜなら精神は理性、つまり頭で思考することだからだ。
理性で感情を抑制し、打ち克とうとすることを昂じれば、精神に支障をきたすことになる。殺意の波動に狂った俺のように。
誰もが見て分かるような強さ――自分の能力を外に表現できるような強さ――であればとっくに答えは見つかっているはずだ。俺は人生のほとんどを費やして外側にある強さを求めてきたのだから。
しかし、強さを外に求めれば求めるほど虚しさを覚えるのはなぜなのか。
だったら、俺自身が強さそのものになればいいのではないか？
……もしかしたら、俺自身がすでに強さを持っていたとしたら？
そうならば、真の強さは外側にあるのではなく、俺自身に存在したということになるのではないか？
そうだ。俺はすでに強いのだ。
……そして、弱い。
強くて弱い。その両方があって、俺なのだ。
そのひらめきは、すぐに確信へと変わった。俺はこのとき、強さを求める旅に終止符を打つことを決心したのだった。

瞼の向こうから差し込む日差しに目が覚めた。東向きの窓が朝日で輝いている。

昨晩のひらめきで高揚していた俺は、布団に仰向けになりながらいつのまにか眠ってしまっていたようだ。ともあれ、目覚めがすこぶる良い。それに腹の虫も早々から騒いでいる。今日も体調は万事良好だ。顔を洗いに階下に降り、朝食を摂った。

めざす熊野本宮大社はここを南下すればたどり着く。旅支度を整えると、残る峻厳な道を歩き始めた。

山歩きは人の煩悩を振り払い、山の空気は人間の五感を研ぎ澄ます。吸い込む息は体内を巡って肌肉（きにく）を潤して浄化する。どこからともなく聞こえるカッコウの声がこだまとなって遠くへと駆け抜けてゆく。

奥深い木々をかき分け歩を進めると、鮮やかな青が目に飛び込んできた。ヤマアジサイだ。ひんやりとした山の大気がヤマアジサイの鮮明な青により一層深みを与えているようだ。

山は異次元への接続の場だという。人間がそこにたたずむとき、異界に踏み入ったのである。

この地で繰り広げられる山駆けは捨身の行といわれる。世俗でまとわりついた価値観をそぎ落とし、自然と一体化することによりあるがままの自分を取り戻そうとするのである。

もはやこの地においては常識や観念、束縛といった価値観さえなく、善悪、美醜、強弱といった二元性さえ意味を成さない。常識や観念といった社会通念は所詮、人間社会を生きる上で作られた便宜でしかない。

行者は異次元へと接続する場に自身を踏み入れることで、三次元世界に生きることを選んだ意味を思い出そうとするのである。

人間界を動かしているのは木であり、木（氣）を動かすものは石（意志）である。

日本人は古代から木や火、風や水、石ころのひとつひとつに神が宿ると信じてきた。万物に八百万の神が宿るなら、自分は一体何者なのかを思い出そうとするのである。

昨晩得たひらめき――俺自身がすでに強さを持っていたということ――を得たあの時、俺は今までの人生にしがみつくことを止めて新たに生きることを決心したのだ。

俺はあたりを見回した。木々がどよめいたからだ。木のうろから生ずる声とでも言おうか。葉がすれ合う音も、葉の一枚一枚が自らの意志をもって話しかけてきているかのようだった。蒸気に満ちた冷たいつむじ風が、俺の身体をすり抜けてゆく。

足元が濡れていることに気づいて下を見る。夜露をふんだんにいただいた名も知れぬ草

花が、俺の足元にまとわりついていた。不思議なことに、自然界は俺という来客をもてなしてくれているように感じたのだ。上を見上げれば、いまだ木々がざわめいている。

何かが頭上から舞い降りてきた。思わずつかみ取る。手のひらには青々とした一枚の葉があった。俺の直観に応えてくれたのかもしれない。

自然界はいつだって見守り、語りかけてくれていた。そう気づいた時、今こうして生きている自分がまるでおこがましく思えた。

清浄な空気を吸えること、

空が青いと感じられること、

二本の足で大地に立つことができること、

風を肌で感じることができること、鳥の美しいさえずりが聞こえること、

水で渇いたのどを潤すことができること、

若竹の生い茂る土のにおいが感じられること、

この手で対戦者を殴ることもできれば、愛する者を抱きしめることもできる。

そうだ、いつだって俺は思いのままに身体を動かせることができたのだ。すべて思い通りに……。

もしかしたら、当たり前のことが当たり前でなく、奇跡の連続なのではなかろうか。

天と地の間に、俺という人間が生かされている。天も地もなければ俺は存在すらできないはずだ。ここに、俺という存在があるということは、存在することを許されたということなのではなかろうか？

人は生きているのではなく、天と地に抱かれて生かされている。森羅万象はすべて、等しく同じなのではなかろうか？

そのとき、足下から螺旋状に立ち昇る氣が、一瞬にして頭上を貫いた感覚があった。同時に、一人の人間が大自然の一分子であり、大宇宙の一原子として存在していることを覚知した。全身の毛が逆立っていた。

大宇宙が意志をもっているならば、その一原子としての意志もあるはず。宇宙は一切の理によって創られているならば、その一原子としての役割とは何か。

俺の人生、宇宙の一切の理に気づかず我欲にとらわれ、己が創りだした幻想と闘い続け、その我欲がいかに些細なことであったか。

ならば今こそ原点に立ち返ろうではないか。一原子として生み出された自分が生かされているわけを、思い出そうではないか。

天籟(てんらい)を聞いたと確信したとき、木々はざわめきで応え、草花は風に揺れ動き、鳥たちは一斉に虚空へと舞った。
俺はいつだって一人ではなかった。すべてとともにあったのだ。
天を仰いで心を無にし、自分が存在していることに対しての心からの感謝の気持ちに思い至ったとき、悲しくもないのに涙があふれ、流れ落ちた。
涙は全細胞が宇宙と共鳴した証としての、名状しがたい歓喜の表現だった。
全身がエネルギーで充満している。足取りは実に軽い。
俺はこだわりを捨て去り、晴れ晴れとした心で止まることなく終着地をめざした。

早朝の参拝客は誰もいなかった。
静かで清浄な空気の立ちこめる本宮大社の鳥居を見上げると、神妙な思いでくぐった。
石段の両脇には「熊野大権現」と書かれた奉納幟が立ちならんでいる。俺は高みへと続く杉木立の石段へと臨んだ。
苔むす岩、薄暗い林、陰を求めて生きている植物に目をやりながら、一足ごとに階段を踏みしめる。先人たちも同じ風景を見ていたのだと思うと、時を越えて同じ時代を生きているかのように感じた。
残すところあと数段のところで見上げると荘厳な社殿が待ち構えている。ひとつ深呼吸をすると、残る石段を渾身の力をこめて踏みしめた。
目の前に、神門が立ちはだかっている。気高くそびえた終着地を前に一礼してから深呼吸した。
「人生の出発の地……」
神門にかかげられた大きな文字に圧倒され動けずに立ち尽くしていた。
神妙に厳かな神門をくぐり、本殿を見上げたそのときだった。
吹き上げる風の流れが変わった。ざわめく木々が沈黙する。背後に轟々と沸き立つ気配が立ち上っていることに気づいた。
……俺は悟った。神は俺に最後の試練を与えたということを。
振り向きながら、鬼の名を呼んだ。
「豪鬼！」
鬼は、朝日を背に負いながら闇を抱き、逆光の中にいた。
「このときを待っていたぞ、リュウよ」

「俺もだ」

これまで豪鬼に相手にもされなかった屈辱を舐めてきた。しかし今まさに、豪鬼と最初で最後の真剣勝負を迎えたのを知った。

実兄である剛拳を、自らの拳で殺めた豪鬼は、俺にとっては師匠の仇である。

今でもときどき師匠が生きていたら、と思うことがある。もしそうだとしたら、俺の人生も変わっていたかもしれない。

たとえ師匠が豪鬼を赦しても、俺にとっての豪鬼は、かけがえのない師匠を殺した相手には変わりない。豪鬼はなぜ兄を殺さなければならなかったのか。そのわけを俺は何も知らないのだ。

豪鬼が師匠を殺めてから二十年。そして俺がはじめて豪鬼と対峙したときから二十年。

豪鬼と対決できる今このときを迎えるまでに、二十年もの歳月がかかったのだ。

いや、二十年かけなくては太刀打ちできる相手ではなかった。それほどまでに、豪鬼は超越した存在だった。

松風が蕭々と鳴る中、対峙する。

不思議だった。

鬼を前にして一片の恐れもなく、水を打ったかのような静けさの中にいたからだ。

豪鬼は左足を半歩後退し、腰を深く沈めて構えた。右手は青眼の構えで俺を捕らえている。

これまで幾人もの血で塗らしてきたであろう豪鬼の拳は、かつて畑を耕すときに見せた剛拳の熊手のような手の面影を忍ばせていた。

おそらく豪鬼の熊手の切っ先は、俺の頸を掻っ切って息の根を止めることだろう。ここへきて、俺は本当の意味で死ぬ覚悟を決めたのだった。

豪鬼と同様に、俺も轟鉄一門の流儀を受け継いでいる。

それを証明するまでもなく、俺の構えは豪鬼とまったく同じであった。互いの拳の切っ先は、一定の距離を保ったまま静止している。

――人生を懸けた命懸けの闘い――俺と豪鬼の、それぞれが見出した答えを、今ここで照らし合わせようとしているのだ。

沈黙の構えを先に破ったのは、豪鬼だった。

豪鬼は、残像を残してその実体を消し去った。その刹那。俺の目の前に姿を現し、拳氣を込めた一撃が、俺の肚にねじりこんだ。

「ぬうううん！」
「うぉ……っッ！」
血の混じった胃液がこみ上げる。格闘家としてこのような攻撃を受けたのは、本当に久しぶりだった。
これまで闘ってきた相手とはまったく異質の豪鬼の氣。その実存さえ確かなものかどうかつかみきれない奇怪さが常にある。
おそらく、豪鬼の年齢は八十歳半ば程であろう。しかし肉体の衰えを微塵も感じさせないのだ。やはり人間離れしているとしか言いようがない。
人間を超越した豪鬼のレベルに、人間である俺が勝負を挑んでいるのだ。
豪鬼は、俺の肚から拳を抜き納めて構え、再び残像を纏うも水平を保ったまま、俺を取り囲むように幻影を映しだした。
この豪鬼の動きを肉眼で捉えることは難しい。残像は幻影であり、幻影に攻撃しても空を切るばかりだからだ。
その技は、強烈な憤怒を帯びた氣を発しつつ、残像で取り囲んだ空間に結界を張っているかのようだった。
まるで阿修羅だ。実際、俺は金縛りに似た感覚に陥っていた。
かつて剛拳と豪鬼が勝負したときに見た、異質な空気の中でのやりとり――肉眼でとらえきれない勝負――を、今俺が豪鬼を相手に繰り広げているのだ。
――師匠なら、どう闘うだろう――
死ぬかもしれない勝負の真っ只中にいて、そんなことを思った。このとき俺は、まだ師匠を超えてはいないことを痛いほど思い知ったのだった。
リングの上では誰にも負けないようになった。だが、超えるべき何かがあり、それが何かを俺はまだ知らない。
闘うことに人生を捧げ、格闘技界の頂点に立ったというのに、人間である俺は、鬼を相手にどのように闘えばよいのかが分からない。
まるでクモの巣にかかって動けなくなってしまった羽虫のように、豪鬼の術中にはまってしまっていた。がんじがらめになった身を、どうすることもできなかったのだ。
幻影に囚われてはなるまい。
肉眼ではなく、心眼をもって豪鬼を観る。目を閉じ、上下左右も地平線もない果てなき空間に見据えた豪鬼を観たとき、閃光が脳天を貫かれた感覚がよぎった。

「瞬獄殺！」

激しい拳の乱舞が、容赦なく俺の身体を滅多打ちにしている。まるでピラニアの大群が一斉に獲物を食いちぎるかのように。

（強い。見事な強さだ……）

豪鬼の拳を全身に浴びている最中、これほどまでに鮮烈で完璧な強さになら、俺は喜んで果ててみたい。そんなことを思った。

恐怖や痛みを超越した何か……それは言い表しようのない恍惚感でさえあった。ただしその感覚さえスローモーションの中にいた。

肉体にねじ込まれる拳のひとつひとつが、実にゆっくりと見える。すべてをかわせるほどのロースピードだというのに、俺は自分の身体を動かすことができなかった。

コンマ一秒を争う世界で生死をかけてきた俺が、たった一秒が三秒、四秒に感じる奇妙な感覚に囚われていた。

異次空元の狭間に迷い込んだかのようだった。時間の観念が根底から覆されたような違和感……。たった数秒のうちに打ちのめされたはずの俺は、一時間か、あるいは一日も経ったかのような錯覚に陥っていた。

ただ、感覚だけは冴え渡っていた。

剃刀のように研ぎ澄まされた拳で、肉体を切り刻まれていく。同時に、俺の人格まで引き剥がされていくような感覚だけが、取り残されたのだった。

不思議な空間に彷徨った俺は、いつしか肉体の痛みを忘れ、なぜ闘っているのかさえも忘れ、置いてきた家族を忘れ、自分が格闘家であることを忘れ、日本人であることを忘れ、男であることを忘れ、リュウという名であることを忘れ、自分が誰なのかということ一切を忘れてしまうことを完全に明け渡していた。

夢と現実が錯綜している……。

現実が夢なのか、夢そのものが想念の海なのか。そして俺は想念の海に漂っている、はかない海月（くらげ）なのか……。

一枚一枚、皮を剥ぎ取られるかのように、自分という意識を手放してゆく。その作業はまるで、時計を巻き戻しているかのようだ。幾重にも積み重ねた年輪を剥いでいくようでもある。歳を重ねるごとに手垢にまみれていった自分をたとえるなら、純粋無垢な赤子に戻っていくような感覚といえるのかもしれない。ただ、そこに痛みや苦しみはなく、むしろより一層身軽になっていったかのようだった。

一人の人間として存在していた俺自身が、細胞ひとつひとつに分散していく。まるで塵のように風に舞い散っていくかのようだ。その塵ひとつにも、はっきりと意識が存在している。俺は一人の人間としての俺でなく、散っていった塵すべてが俺だった。

不思議だった。塵として意識を持っていると自覚したとき、存在するすべてが自分自身だったとわかった。その瞬間、これが宇宙なのだと率直に観じた。

気がつくと、地面に突っ伏している俺を、上方から見下ろしていた。

そして倒れた俺を見下ろしている豪鬼の姿があった。俺は俺という肉体さえも離れ、しかし確かに、ここに存在していた。

そうすると、いったい俺は誰なのか。

見渡すと、熊野の原風景が、緩やかな濃緑の円弧を描いた地平線上に広がっている。

この地一帯に掛けられた結界は解き放たれたようだ。よみがえった龍のエネルギーが地中から噴出し、虚空を自由自在に舞い始めたからだ。止まっていた地球が、再び動き出した。時はリセットされ、再起動されたのだ。

朝日が強烈な太陽光線を放射状に放ちながら、ゆっくりと地平線を離れてゆく。何万年という歳月をかけて四季を辿った山々があり、朗々と流れる穏やかな川がある。その行く先は、大いなる海。その上には見渡す限りの空。更に上空には無限の宇宙が広がっている。俺は果てなき宇宙がどこまで続くのかを、見極められるはずもないのに上へと手を伸ばした。

ふと自分がもといた場所を振り返った。そこには台湾を玉として仰ぎ見る龍体・日本列島が立ち昇る姿が認められた。ついさっきまで自分がそこにいたはずなのに、強烈に懐かしさがこみあげてきた。何万年も前に降り立ったころを思い出したかのように。

どこからともなく音が聞こえはじめた。いや、観じたのだ。

耳から聞こえるのではなく全身で音を観じるのだ。音を触っているような、振動とともに在るかのような奇妙な観覚だった。

音は音楽ではなかった。ひとつひとつの音がざわめくように共鳴していて、和音のシャワーを浴びているかのようだった。細胞のひとつひとつに氣がみなぎっていく。音のシャワーはどこから降り注いでいるのだろうか。

上へ上へと見上げるとともに、暗黒の闇の中へ吸い上げられそうになるのを、身をゆだねようとする自分がいた。

その先にある一点の光が虹色に輝きを放っている。俺は燦々と輝く光に無性に惹かれ、

溶け込みたいと強く願う気持ちが芽生えた。
虹色のスペクトルは、あらゆる色のグラデーションのカーテンを揺らめかせて俺を包み込んだ。俺は色と共に在った。
とても懐かしい、そしてそこがどこであり何なのかをすでに知っていると思った。
そして、名状しがたい感情――それをひと言で言い表すことは到底できない。しかしあえて表現するならば、自分が存在しているという奇跡と驚嘆。そして心の底から湧き出る歓喜。それらを総称するなら真なる感謝の思い――に打ちひしがれたその瞬間、自分自身が光り輝いていることに気がついた。
ただ、光あるのみ。俺という姿かたちはどこにもなかった。
俺は、光そのものだったのか……？
気がつくと、足元には壮大なる地球の全貌を眺めていた。そして次第に遠い遠い記憶がよみがえってきた。
美しいこの青い地球に、魂の奥底からあこがれて、あこがれ続けた俺は、志願してやっとのことで地球人として生まれることを許されたのだ。
なぜこの地球に生きたのか。なぜこの時代に生きたのか。なぜ日本人として生きたのか。なぜ格闘家として生きたのか。なぜ男として生きたのか。なぜリュウとして生きたのか……。
その答えを、すべて知った。
この地球で闘い続ける人生を、俺は何回も何回も繰り返し生きてきた。そして何回も何回も、闘うことの意味を見いだせないまま人生を終えてきた。今度こそはと、答えを思い出す約束を神と交わして、再びこの地球に降り立つことが許された。
そして、闘い続ける人生に終止符を打つことを決心して、激動の時代の日本で、和を重んじる日本人・リュウとして生きることを選んだのだった。
豪鬼を前にして、俺の人生を今後どのように生きるのかが試されている。ふと、ある言葉が思い浮かんだ。魂に刻み込まれていた記憶があぶりだされたかのように。
――武士道というは、死ぬことと見つけたり――
勝負の世界において、死ぬことを怖れない日本人の魂は、おそらく他の国の人間には理解しがたいことだろう。
武士の本分とは、命のやりとりのさなかにありながら、死ぬことを怖れず、感情に揺れることなく感覚を研ぎ澄ませることをいう。

武士の目の前には、常に生きるか死ぬかの選択が迫られている。武士にとっての生死に善悪は存在しない。生きることが善で死ぬことが悪だという価値観は成り立たないからだ。たとえ生きながらえたとしても、生き恥をさらすよりも、鮮やかに死に花を咲かせるほうが美徳とされるのが武士道の価値観だからだ。武士は生きることに対してさえも執着心を持っていないのだ。

それは、生きながらにして死す覚悟を実証しようとした、武士の心意気。最も神聖で高徳な大和魂のあらわれなのだ。

武士の精神には禅の思想が根底にある。

死ぬということを、俺自身が今体験している。俺はこのときはじめて死ぬということの本当の意味を知った。

――武士道というは、死ぬことと見つけたり――

死ぬということは、肉体を死なせることをいうのではない。

この世のフィクションをもとに作り上げられた観念を、無に帰するということなのだ。死ぬべきはアイデンティティであり、信念であり自我なのだ。

手垢にまみれた自分から離れ、本当の自分が誰なのかを知ることこそ、真の叡智なのだ。戦争を過去のものとし、物質文明最高潮の時代に生まれ、男として生まれ、格闘家として生き、真の強さは何かを求めつつ、本当の自分は誰なのかを知ろうとしてきた。

それを知るためには、自分という個性を真に見極めつつ、人生のなかで培ったアイデンティティを脱却していかなければ見えてこないという仕掛けがあったのだ。

これは真実を知るためのパラドックス――逆説の中にこそ、真実があるのだ。

それを究極に求めた行動が武士の切腹なのだろう。日本人は、脈々と流れるその血の中に、知らずしてその答えを知っていたのだ。それは言葉では言い表せない暗黙知の世界にしっかりと息づいている。

俺は天命をまっとうさせていただくことができたのだろうか。そう思った瞬間。

「これぞ我が拳の極意なり」

豪鬼はそう言い残して去ろうとしていたときだった。

「待て。まだ終わってはいない」

俺は、重い肉体をやっとのことで立ち上がらせ、構えた。ぬるり、と額から血が滴っているのを感じていた。

俺は、まだ死んではいなかった。

――生きて、全うせよ――

そう言葉が体内の奥から発せられたような気がした。

そのときの豪鬼の表情は、未だ見たことのない奇妙なものを見たかのように、眼を見開いた。

「瞬獄殺を受けて立ちあがろうとは……うぬがはじめてぞ」

ニヤリ、と不気味な笑みをたたえて豪鬼もまた、再び構えた。

止まっていた風が、再び吹きはじめた。

豪鬼の超人的な技を回避するには十分な間合いをとってある。二度も同じ攻撃を受けるわけにはいかない。俺は先ほど感じた、自分が自分でない感覚をもう一度呼び起こすために、目を閉じた。

目で見ず、心で観る。

緊迫しているはずの俺は、暗黒の静寂の中にいた。

心眼を見開き、闇の中に耳を澄まし、触れる空気を読んでみる。

豪鬼の独特の氣が、俺を大蛇のように取り巻いている。それが、豪鬼をつかまえる唯一の手がかりだった。

「滅殺！」

豪鬼の裂帛（れっぱく）の気合が緊迫した空気を真っ二つに切り裂いた。

俺を取り囲む四方八方から、拳が突き刺さるような感覚を覚えたそのとき。俺の肉体が意図せずして動いていた。豪鬼の拳をことごとくかわす。豪鬼の呼気と吸気の境目に見せた、わずかな無呼吸状態にあった隙を、俺の拳は捕らえていたのだった。

鬼がまとう鎧の肚に、懐剣を刺したかのような手ごたえが、確かにあった。

豪鬼の鳩尾に深く沈みこませた左拳を水平に打ち抜いた直後――左拳で豪鬼を捕らえたまま――右拳は垂直方向へと任脈をえぐりつつ閃光を帯びながら、豪鬼を確かに捕らえていた。

「真・昇龍拳！」

俺と豪鬼は、空気を切り裂いた真空の空間の中をともに上昇し、豪鬼は地面に叩き落ちたのだった。

「ぬう……っ！」

はじめて豪鬼に当てた必殺技は、一分の狂いもなく完璧だった。驚くべきことに、負傷したはずの左肩関節に、痛みはなかった。

俺がこの技を実戦で使うのは、今回が最初であり、最後であろうことは、地に伏せった豪鬼の背中を見たとき悟った。

俺は豪鬼が立ち上がるのを待った。立ち上がってくれなければ、勝負を終えることができないと思った。

ゆらり、と鬼は立ち上がった。まるで人間のように肩を上下しつつ、肚を抱えて。

あの豪鬼が確かに負傷し痛みを感じている。豪鬼もやはり、生身の人間だったのだ。ただし、阿修羅として生きた人間だった。

今なら、豪鬼を打ち負かすこともできるかもしれない。しかし俺は、豪鬼の呼吸が整うのを待った。待たなければならないと思ったのだ。

「ぬう……。猪口才(ちょこざい)なり！」

豪鬼は俺が待ったことに対して憤った。

勝負はまだ続いている。

刹那。互いの呼吸を合致させたかのごとく、同時に間合いに飛び込み、ちょうど磁石のつなぎ目に当たる部分で両拳をつかみ合った。

互いの拳が軋む。

両拳を頂点に、地面を底辺にして、三角形を作り上げた状態にあった。俺と豪鬼が天と地の中継点に位置したのである。互いの拳を中心にして、上空を渦巻く天の氣が右螺旋状に円錐を下にした状態で吹き降ろしている。そして、地の氣が両拳を頂点とした円錐の形状を左螺旋状に上空へ向かって吐き出しているのを感じとっていた。

「虹の戦士か……」

豪鬼の口から、聞き覚えのある言葉が洩れた。それは剛拳が俺に残した言葉と同じだった。

その言葉に立ち返った瞬間、上空から大地へと吹き降ろしていた天の気の流れと大地から上空へと吐き出す地の氣はぴたりと止み、無風無音、まるで静止画像の中に閉じ込められているような感覚の中にいた。

不思議だった。

俺と豪鬼はまるで砂時計のくびれたポイントにいるかのようだった。その砂時計の姿をした天と地の大いなる氣は、青と黄金の光と漆黒の闇でオーロラを織りなしていたのだった。

そしてその場は限りないエネルギーで充満し、俺自身も内側から溢れ出る無限のエネル

ギーを全身全霊で感じていたのだった。俺は命懸けの闘いのさなかにありながら、静寂と平和を感じていたのだ。双方、微動だにして動かず、天と地、光と闇の一体化が、ここに実現していた。

――ゼロ・ポイント――俺と豪鬼がいる空間を例えるなら、これが最も適切な言葉なのだろう。

この空間にいることを認識したとき、俺と豪鬼はもはや対立関係にあるのではなく、合一した存在であると悟ったのだった。

勝負の場において、これほど静かで満ち足りた気持ちになったことは初めてだった。そしてこの瞬間が今現在でありながら、永遠でもあると感じていたのだった。それは豪鬼も同じだったに違いない。

やがて硬く握り締められた互いの拳はほどかれ、構えを解いて向かい合った。汲めども尽きぬ強烈なエネルギーは、豪鬼とつながっていた接点から離脱した瞬間に、途絶えた。

――勝負はついた。

豪鬼は何も言わずにただ静かに構えを解いただけだった。俺も豪鬼も、この勝負が引き分けであることを知っていたのだ。

俺は神との約束を果たすことができただろうか？　それは神のみぞ知ることだ。

この勝負が、闘い続けた俺の人生にひとつの終止符を打ったであろうことは間違いない。その証拠に、魂がいまだに打ち震えていたからだった。

「……ひとつだけうかがいたいのです」

あらゆる思考が錯綜していたが、俺は豪鬼にどうしても聞かなければならないと思った。それは、意識せずして出た言葉だった。そしてすでに、豪鬼に対する長年にわたる敵対心は、消失してしまっていたのだった。

「いつかこんな噂を聞いたのです。あなたが轟鉄老師を殺害したと。それは本当なのですか」

豪鬼は背中を向けたままじっと黙っていた。風が再び木々をざわつかせはじめたとき、ようやく口を開いた。

「……さよう。我こそ老師を殺めし者よ」

その言葉とは裏腹に、「天」の字を背負った背中が押し黙っているように感じ取れた。それは、かつて同じ質問をしたときに見せた、剛拳の背中とだぶって見えたのだった。

「いや、あなたは何かを隠している。あなただけではない、師匠もそうでした」

豪鬼はしばらく逡巡しているかのように、向こうをじっと見つめていたが、やがて振り返って重い口を開いた。
「ふん、老師を殺めたのは、兄者よ。うぬにその真意はわかるまい」
「……！」
豪鬼はそう言ったが、俺にはその真意がわかった。豪鬼と剛拳は同じことを言ったからだった。
「あなたは、剛拳師匠の罪を着て村を去った。たった一人の肉親を、あなたは守りたかった。そうだったのではないですか？」
鬼はぬう、と深く呼気をつくと、ニヤリと嗤った。
「クッ……、クックックッ……」
豪鬼が嗤うのを見て、笑いながら事切れた剛拳の最期を思い出した。剛拳が笑った意味を、豪鬼の一笑によってすべてが解けた。
俺は剛拳と豪鬼の間には、深い溝があると思いこんでいた。
しかしその実は、まったく逆のことだったのだ。
血を分けた唯一の肉親であり、唯一の兄弟だからこそ、固い絆で結ばれていたのだ。
そんなことも知らず、俺は勝手に剛拳と豪鬼のふたりの間には確執があるように見ていたのだ。
弟は、兄のために自ら修羅となったのだ。俺は豪鬼の真実がわかったとき、立ちながらにして打ちひしがれていた。
「あなたは真の修羅だ……常人だったなら、それほどの所業はできなかった……」
「修羅となったは兄者のためならず。我が道を選んだまでのこと。我は修羅道を極めし者。求めしものは闇。それが我の生きる道なり」
光は、闇がなければ己を悟ることはできない。闇もまた、光がなければ己を悟ることはできない。
剛拳は光を、豪鬼は闇を生きることで互いを照らし合わせ、悟りの境地へと達したのだ。
対極の道を生きた二人であったが、結果的には、豪鬼は兄のために闇を生き、剛拳は弟のために光を生きたのだ。剛拳と豪鬼はまさに阿吽。対極の存在でありながら、本当はひとつだったのだ。
――剛拳と豪鬼の最後の勝負。この兄弟は死ぬことの本当の意味を知っていたからこそ命のやり取りを怖れなかったのだろう。

そして、剛拳は自らの命さえ差し出すことができたのだろう。かつて轟鉄老師が剛拳にすべてを与えたように。

命を差し出すことこそが、一子相伝の究極の奥義だったのだ。

命を差し出された者は、その奥義を受け継ぎ、印可を与えられたのだ。

そして奥義を受け継いだ者はまた、弟子にすべてを差し出す。

一子相伝の究極の奥義とは、身体知をも超越した叡智――生きることは何か、死ぬこととは何か、そして自分は誰かを知る――伝承なのだ。

俺はこのことを、一瞬にして悟ったのだった。

「剛拳師匠は、轟鉄老師を超えられないとも話しておりました。そのわけを、わたしはたった今知りました」

「なにゆえか」

「轟鉄老師は、剛拳師匠にすべてを与えたと聞きました。老師が与えたのは、一子相伝の秘技――。つまり轟鉄老師は、命をもって剛拳師匠に究極の奥義を授けたのです。その行為はまさに弟子が師匠を殺める行為。あなたは剛拳師匠が轟鉄老師を殺めた罪を、自ら着て村を去った。兄、剛拳師匠のために」

豪鬼はじっと聞いていた。

「その奥義を受け継いだ剛拳師匠は、二十年前の勝負ですべてをあなたに授けた。それが、剛拳師匠の死だったのです」

「なにゆえそう申すか」

「それは……わたしはあなたの技を受けて、一度は死んだからです。あの技は暗殺拳ではなかった。あれは究極の活人拳――生きながらにして死す、一度死んで生き返る技――己が誰なのかを悟らせる究極の奥義だったのです」

ジロリ、と俺の目を見据えると、豪鬼は真っ赤な目を見開いて近づいてきた。

「そのとおりよ。無こそ秘技伝授の極意なり。一子相伝の極意を受くるには、うぬは我を殺さねばならん。うぬにそれができるか」

俺は豪鬼の目をそらさずじっと見つめた。

「いえ。わたしはあなたを殺さない。今日の勝負でわかったのです。わたしは守・破・離の境地を、命を懸けて踏破してみせます」

そう言うと、豪鬼はニヤリと嗤った。

「大死一番。すでに死んだうぬならばできよう」

豪鬼が踵を返すと、俺はたちまち強烈な痛みに襲われ、その場に倒れこんでしまった。豪鬼から受けた肉体の傷が、今頃になって痛み出したのだった。

やがて意識が遠のくと、瞼が閉じてしまう瞬間まで、豪鬼の背中に背負った「天」の字を見つめていたのだった。

気がつくと、茶色に変色した木目の天井を見ていた。俺は知らない部屋に敷かれた布団の中にいた。

そこは、四畳半ほどの広さの和室で、家財道具などは一切置いていなかった。日に焼けた畳と土壁のにおいが、どことなく懐かしさを感じさせた。

起き上がろうと身体を動かすと、全身の筋肉が軋むような激しい痛みが走った。

そうだ、俺は豪鬼と闘ったのだった。それはまるで夢だったかのようにさえ感じられた。しかし、肉体の痛みが夢ではなかったことを証明していた。

ほどなくして、部屋のふすまが開いた。

「あでよ、起きちゃーったか」

入ってきたのは、初老の男。おそらく、ここの主人だった。

「おまん、丸二日間も寝てたんやで」

「丸二日間も……？　何も覚えていない」

「ほっほっ、ここは行者しか知らん秘湯の地なんでよ。ゆっくり湯治しやらんし」

「ここへ連れて来てくれた人はどんな人でしたか」

「ああ、一年に一度は来やるんやで。なんや、怖い顔の人やけど、わえは毘沙門天の化身やと思とうよ。あの人が来よったら、邪気が祓われるんでよぉ」

「毘沙門天……」

毘沙門天は軍神・闘いの神である。

豪鬼が背負っていた「天」の文字――阿修羅はかつて天に住んでいたといういわれがある。

豪鬼は本当に、阿修羅として生きた毘沙門天の化身だったのかもしれない。

すべては豪鬼の背中が物語っていたということに気づいた途端、二十年間滞っていた溜飲が下りたことを思い知った。

「さあ、しっかり食べちゃってくらんし」

主人はそう言うと、食事の用意を置いて出て行った。

豪鬼が俺をここまで運んで来てくれたのだ。
豪鬼にも惻隠の情があったのだと思うと、闇の中にひとすじの光を見た気がした。
それに、豪鬼が一年に一度ここへ来ていたということは――おそらく、豪鬼も轟鉄一門が辿った修行の地を訪れていたのだろう。
豪鬼との最初にして、最後の闘い――。
俺は、勝ちも負けもしなかった。因縁の勝負はどちらかの命が果てるまで闘うこともできたかもしれない。いや、そうしなければ因縁は解き放つことができないと思っていた。しかし両者決着つかずという結果に終わった。
……いやちがう。
俺と豪鬼が死闘の末にたどり着いたのは、陰陽和合の境地――これは対極の存在同士が最高の境地に至ったときに体現できた永遠なる瞬間だったのだ。
俺と豪鬼は、共に勝利したのだ。
それ以外に何があるというのだろう？
求め続けた勝負を超えた境地……。それは豪鬼の存在なくしてたどり着くことはできなかった。
光と闇――対極の境地に立つ者同士で顕現したのがあの勝負の本質だったのだ。
俺と豪鬼の決戦は、まさに光と闇の融合だった。今、闘いを終えて再び光と闇に別れた。俺はこれからも光を求め、豪鬼は闇を求めて生き続けるだろう。いや、これからは俺は光として、豪鬼は闇として生き続けるのだ。もう、求めずともよいのだ。住む世界が違う豪鬼とは、今後二度と会うことはない。それは俺の確かなる直観だった。
光と闇、陰と陽、強さと弱さ、勝利と敗北、善と悪は表裏一体であって、これらは別々ではなくてそもそもは一つのものなのだ。
そしてそれらは森羅万象の中に存在し、ときには関係を逆転させてはバランスを保ちながら流転している。
その本質を知らぬから、互いに対立し、誰もが強さや勝利、正義だけを求めたがる。その結果、争わねばならなくなるのだ。
世界中のものごとすべてが争いに満ち満ちている。そしてそれが当たり前すぎて誰も疑わない。「勝ち取らねばならぬ」と。
それがどれだけ個人の、国の、世界のすべてが息苦しい思いを強いられていることだろう。我々は、あまりにも闘うことに慣れすぎてしまった。

轟鉄一門が求めた境地……。それは勝ち取ることではなかった。
自分が誰なのかを悟ることこそが、僧侶として生きた轟鉄一門の究極の奥儀。
剛拳は俺にそれを教え、豪鬼は俺に体験させたのだ。
俺はこれまでずっと、剛拳という不動明王と、豪鬼という毘沙門天の加護を受けてきたのだ。
天井を見上げながらそのことを思い至ったとき、ひとすじの涙が頬を伝って流れた。

☆　方円の器

陽は傾きかけている。俺は一直線に家へと向かっていた。
普段となんら変わらない見慣れた風景。世界は何も変わってはいないというのに今までとはまるで違って見える。
混沌としたこの世界にも秩序がある。何一つ取りこぼしのない、完璧な世界。
それが見えるようになったのは、俺自身が変わったからだろう。
そうだ、自分が変れば世界は変わるのだ。
結局、湯治場には五日間留まった。
満身創痍の身体が回復するまでには――少なくとも日常動作ができるようになるまでには――五日間もかかってしまったのだ。傷を癒す秘湯だったからこそ、五日間で済んだのだろう。いずれにしても、俺は家族に無断で十日間も家を空けたことになる。
しかし俺には帰るべき場所がある。家族からどんな非難の言葉を浴びてもいい。この十日間の勝手を許してもらうためにはどんなこともする覚悟でいた。
見慣れたはずの風景が実に懐かしく感じる。十日間の旅が百日間もの旅をしてきたかのようだ。夕暮れを彩るオレンジの空と、駆け抜ける熱風を焼けた肌に感じながら、いつも歩く街並みを急いだ。
子どもたちは俺の姿を見てどんな反応を示すだろうか。おそらく無断で家を十日間も空けた父の無責任さを叱責するだろう。一呼吸おいてから、玄関のドアを開けた。
「ただいま」

中から子どもたちの走る足音が聞こえてきた。
「あ！　父さんだ！　父さんが帰ってきたよ！」
九歳の長男と七歳の長女に三歳の次男が廊下を走って飛びついてきた。
「おかえりなさい！　僕、いい子にしてずっと待ってたよ！」
子どもたちは目を大きく見開いて喜々としている。
「パパ！　どこに行ってたのよ～」
長女と次男はしがみついて頬を寄せてきた。子どもたちの予想外の反応に、しばらく答えてやる言葉が見つからずに、精一杯抱きしめた。
「おかえりなさい」
見上げると、春麗が微笑んで立っていた。
「心配かけてすまなかった……。俺はひどい父親だな……」
「なんで？　父さんはうんと強くなりに行ってたんでしょ？　真の格闘家になるために」
長男の言葉に今まで張り詰めていた心が、一気に崩れ落ちた。俺は唇を噛んで子どもたちを胸にかき抱いた。
「パパ、おひげが痛い！」
突然娘が苦虫を噛み潰したような顔をして言った。陽に焼けたひげ面の父親が、娘には別人に映ったようだ。不思議な顔をして俺を見ている娘の様子に、春麗は吹き出した。俺もつられて笑っていた。家族の空気がいっぺんに和らいだ瞬間だった。
「お父さんは旅から帰ったばかりなのよ。今日はゆっくりさせてあげなさい」
「はーい」
「一緒に風呂に入ろうか」
「うん！」
「あたしも！」
「ぼくも！」
俺は子どもたち三人と湯船の中で、山ほどある近況報告を聞くことと、タイでの試合についての質問に答えることに忙しい時を過ごしたのだった。

食事を終え、子どもたちを寝かしつけた後、俺は居間へと向かった。
茉莉花茶（ジャスミンティ）の香りが辺りを包んでいる。しばらくぶりに嗅ぐこの香りに、家庭のやすらぎを取り戻したことを実感した。

「この香り、懐かしいでしょ？」
春麗は湯飲みを置くと、ソファに座った。
「そうだな。やっぱり家がいちばんいいよ」
しばらく沈黙が続いた。
しかし空気は決して緊迫しているわけではない。むしろいつもと変わらない、いつもの過ごし方だった。
（なぜ春麗は何も聞かないのだ？　そして俺は何から話せばよいのだろうか）
そんなことを頭の中で渦巻いていたとき、春麗が口火を切った。
「あなたが帰ってきたときの顔を見て、昔のあなたを懐かしく思ったわ。……あの頃は、いつ来るかわからないあなたをずっと待ってたのよね」
感慨深く語る春麗の横顔は、年齢を重ねても美しいと思った。あの頃は、まさか春麗と家庭を築くことになるなんて夢にも思わなかった。……いや、もしかしたら春麗は、その当時からそのことを夢見ていたのかもしれない。
「あなたが帰らなくなってから三日目に、子どもたちに言い聞かせていたの。『あなたたちのためにお父さんは強くなる修行に出たのよ』って。そしたらなんて言ったと思う？『じゃあ、僕ももっと強くなって待ってるんだ』って。『悪者が来たら、僕が家族を守ってあげるから心配いらないよ』ですって。わたしが逆になぐさめられちゃったのよ」
「そうか……あいつがそんなことを……。心配かけて、本当にすまなかった。俺は自分のことしか考えられない不良親父だ。今までもずっと、そうだった」
春麗はお茶を飲んで一呼吸おくと、俺の顔を見た。
「わたしは、あなたと結婚することを決めたときから、いつかこの日が来るだろうことを覚悟していたわ。そのときは笑顔で送り出してあげようと心に決めていたの」
真っ直ぐに俺を見ている春麗の目は、母親として、妻として、女として、そして格闘家としてすべての決意を宿していた。
おそらく、俺がタイへ遠征試合へ行ったまま帰ってこないということは、昔の俺に戻ったのだと分かったのだろう。そしてその時点で、肚をくくったのだろう。
春麗は俺の原点を知っていた。俺のように遠くに答えを求めずとも大事なことはむしろすぐ目の前にあるのだということを知っていたのだ。
どんな状況にあっても動じない、そんな春麗のことを強いと思った。
――本来はパワーなんて必要ないのよ。必要なのは、方円の器に従うように、流れに逆

らわないことなのよ――

かつてスランプに陥った俺にアドバイスしてくれた春麗の言葉は、春麗自身のことだった。

春麗は自分の人生や環境の変化にさえ逆らわなかった。むしろ変化を楽しんでさえいた。女性の人生は結婚すれば大きく変わる。住み慣れたふるさとを離れ、習慣も価値観も異なる土地に住まう。妊娠・出産は女性の肉体や精神に大きな変化をもたらす。そして育児に明け暮れる慌しい生活に一変する。春麗を見ていると、男には体験しようのない姿を見せてくれていたことに気づく。

命を生み出す女性の痛みを、男は永遠に体験することはできない。考えてみれば、滝に打たれるなどの過酷な修行をするのは男たちばかりだ。それは出産に相当する痛みを体験することで、何かを得ようとする代償行為なのかもしれない。

強さとは水のごとく、柔らかで滑らかでかつ自在に姿を変えても本来の性質を変えることはない。常に万物の下にいて、あらゆるものを受け容れる。深く穏やかなせせらぎは流れることをやめないで一切を洗い流して過ぎ去ったことにこだわらず、常に今ここを生きている……。

それはあたかも聖母マリアや観世音菩薩のごとく無条件ですべてを受け容れ、見守り、静かに微笑む女性的存在そのもの。ふと、湯気をくゆらす春麗の横顔を見た。

十日間の俺の勝手を怒りもせず、心配もせず、慌てた様子もないようだ。そこにあるのはただ、俺に対して信じる気持ちだけだったのだろう。俺の格闘道楽を黙って見守ってくれる春麗には何のこだわりや執着心は見られない。

ただ、水のように喜怒哀楽を見せては日々の生活をよどみなく営んでいる。

呆然と見つめる俺の視線を感じて、春麗がこちらを見た。

「どうしたの？」

「いや……」

春麗は俺が思い巡らせていたことすら気にもかけていない様子だ。そんな彼女を見ていて、自分自身がおかしくなってきた。いかに自分で答えを難しくしていたことか。

俺の登りつめてきた高い山などは最初からなかったのだ。幻の山を作り上げ、命懸けで答えを求めて登っていただけだったのだ。

男は答えを勝ち取るものだと思い込んで日々生きている。それが生きるということだと信じている。男は闘う人生を自ら創りあげて生きているのだ。最初から闘う必要などない

ということに気づかないままに。
春麗はそんなことは最初から知っていた。それは女の本能というやつなのだろう。
春麗はもともと強かった。だから強くなろうとしなかった。
命を産み、育てる。もしかしたら、女性は新しい命を授かったときに、すでに死ぬことを見ているのかもしれない。そう考えれば、男は永遠に女性を超えることはできないと悟るしかないのである。
俺は答えを探すことに心を奪われて遠くばかり見ていた。……春麗こそ俺が求めていた答えそのものだったのだ。近くにいすぎて気づかなかった。自分は今まで春麗の手のひらの上で転がされていたに過ぎなかったのだ。
「今、やっとわかったよ。どんなにあがいても、俺は春麗にはかなわないってことをさ」
「ふふっ、何があったか知らないけれど。あなたは旅先で何かをつかんだんでしょう。帰ってきた時すぐにわかったわ」
「そうだったのか?」
俺の敗北宣言にさえ、気にも留めないでお茶を再びすすっている。俺は完全に参ってしまった。
女とは恐るべき生き物だとつくづく思う。
女性の柔軟さという特性は、あらゆることを取り入れて自分の中で一つにすることにあるようだ。
「力ある者が強者である」
「より勝ち取れる者こそ成功者だ」
「力で正義を勝ち取らねばならない」
などと言うのは男だけだ。
歴史を振り返れば、主導権はどの時代でも男にあった。そのほとんどが争いに身をやつし、奪い合いに明け暮れ、勝ち負けに人生を投資してきた。結局、人生とは壮大なゲームにすぎなかったのかもしれない。そのことに気づけばいいだけのことなのだ。
女に主導権を持たせてみたら、世の中はずいぶん気楽なものに変わるのではないだろうか。女の考えることは、およそ身の回りのことが大半で、皆が健康で衣食住が事足りればよいとする簡素なものだ。女の考える思考原理は家族を一つの単位とし、社会全体へとひろがり、ひいては地球規模に拡大してゆくといったボトムアップ型なのではないだろうか。
現代社会の構造はそれとは逆だ。まず世界があり、国があり、地域があり、最後に家族

という構造になっている。このようなトップダウン型では末端である家族単位は必然的に先細っていくことになる。その仕組みは社会構造全般にあてはめられている。末端でいたくなければ、競争社会を勝ち抜いて上に上がればよいというしくみなわけだ。これが男が作り上げた現代社会だ。

いつか春麗と試合したときに思ったことがある。春麗ほどの中国拳法の腕前があれば、世界に名を馳せることも可能だったはずだ。けれど春麗にはそんなことには興味がなかったようだ。

もし春麗が男だったら、おそらく格闘家として生涯を通してのよきライバルとなり、切磋琢磨しあった仲となっていただろう。そう思うと、春麗が女であったことが悔やまれる。

しかし春麗にとっては格闘家として世界に自分の名を知らしめることよりも、命を産み育てることと、クンフーを通して子どもたちに真善美を伝えることが何より大事なことだった。慌しい生活に追われながらも目の前にある小さなしあわせを大切にする日々を送ることが最優先事項だった。

春麗を見ていて、男が考えること――勝負に勝つことよりも、実はそのもう一段階上の段階に視点を定めていたのではないかと思った。剛拳師匠は自らの腕前をひけらかすことなく、能ある鷹は爪を隠していただけだった。争いを好まず、自然と調和した生活を日々実践していた。かつて師匠は俺にこう言ったことがある。「まことの修行は家事にあり」と。

俺は一息ついてからバンコクでの試合から豪鬼との死闘の一部始終、そして帰宅するまでを話して聞かせたのだった。

「そうだったの……。とても貴重な体験をしたのね」

「すまなかった。何もかも、棄てて帰ってきちまった。おまえたち家族まで一度は棄てたんだ……」

「でも、帰ってきてくれたわ」

「今まで苦労かけたな。本当に感謝してるよ。なんだかんだ言っても、俺はおまえなしではダメなんだ」

すべての始まりは、春麗と出会ったことから始まったのだ。

俺の迷い求める姿を誰よりも知っていたのが春麗だ。春麗と出会わなければ、殺意の波動から抜け出せないまま狂い死にしているか、およそ人間らしい暮らしなどしていなかっただろう。そして、真の強さの意味を知らずして人生を半ばにして終えていただろう。

春麗の存在は陰の生き方しか知らなかった俺の人生に陽の光を浴びせてくれた。どんなときも苦楽を共にしてきた最高のパートナー。今となっては春麗のいない人生など考えられない。

「どうだ、いつか行ってみたいと言っていた、お父さんの故郷へ行ってみないか？　今度の夏休みに」

「本当？　子どもたち、きっと喜ぶわ。それに、父さんも」

そう言いながら、本人がいちばん喜んでいた。

「春麗」

「なあに？」

「俺、闘うのをやめることにした」

「えっ……」

春麗は目を丸くして俺を見つめている。

「もう、俺の闘いは終わった。これからは勝負を超えたところに行くつもりだ」

「あなた……。やっと答えが見つかったのね……」

春麗は潤んだ目で俺を見ている。

「春麗、今夜は飲もうか」

その夜、久方ぶりに春麗と夫婦水入らずで晩酌を交わしたのだった。

☆　放蕩息子の帰還

日ごろ酒など飲まないリュウが、静かに猪口をすすっている。

タイへ試合に行く前の思い詰めた表情とは違い、穏やかな面持ちでお酒を味わっている。

リュウにとっての十日間の体験は、四十年間の人生の総決算だったようだ。生来の風来坊がたどり着いた最後の場所は、我が家であり、リュウ自身だった。

旅先での出来事を感慨深げに話すリュウは、迷いから解き放たれた行者のように見えた。

リュウが変わったのは、これで二度目だ。わたしは最初にリュウが変わった十年前のことを思い起こしていた。

リュウが変わった最初の転機は、結婚を決めたときだった。
わたしは当初、ずっと疑問に思っていたことがあった。
それはリュウがなぜあれほど強烈に強さを求めているのだろうということだった。リュウの強さに対する真摯な態度は格闘家としてあるべき姿だと思う。けれど家庭とか家族とかいった、人として目の前にあるはずのものを求めずに、形のない強さを求める理由がわたしにはわからなかった。
わたしは青年時代のリュウを知ってはいたけれど、リュウの素性を何も知らないでいた。リュウも自分の過去を話そうとしなかった。このことについて、本心では気になっていたのだけれど、今が大切なのだから、リュウの過去を詮索することはやめておこうと自分に言い聞かせていたのだった。
リュウとはじめて会ったのは二十年近く前、わたしがインターポールの麻薬捜査官だった頃だ。リュウを悪の組織シャドルーの総帥・ベガから守るという任務のために日本へ行ったときだった。
あのとき、わたしの目の前でリュウは狂った。ベガの波動に共鳴したせいだった。
リュウの狂気は、純粋ゆえに強力な波動に感化されやすい特性があった上、蓄えられるエネルギーの容量がはるかに高い人物だったからだ。インターポールではリュウの潜在能力の高さゆえ起きた結果だったのだろうと結論づけられた。
わたしたちが格闘家という間柄を越えてからも、リュウは家族の事についてのことを頑なに話そうとしなかった。
ある日、日本領事館へ向かう道すがら、小さな教会の前を通ると新郎新婦がライスシャワーを浴びている場面に出くわした。
わたしたちは足を止め、幸せそうな新郎新婦と、涙を拭いている花嫁の両親の姿を見ていた。わたしは以前から思っていたことを、ごく自然に言葉にしていた。
「あなたのご両親は、ご健在なの？」
花嫁がブーケを空高く放り投げた。友人らが一斉にそれを受け止めようと声をあげている。一連のドラマを遠巻きに見ながら、リュウの言葉を待っていた。
言葉よりも先に、リュウが歩き出した。慌ててついてゆく。リュウはすぐ目前にある土手を越え、蘇州川の河川敷に立って、穏やかな川の流れを見ていた。リュウが芝生の上に腰掛けるとわたしも並んで座った。表情を伺ってみると深刻そうに考えている様子だった。
「君には話しておかないといけないことだから、言うよ」

川の流れを見つめながら、リュウは滔々と語りだした。
「俺は、勘当されたんだ。十八の頃だ」
「え……！」
わたしは思いもよらない科白が飛び出したことに、言葉を失った。
「父親は厳格な学歴至上主義の人間だった。母親も俺に期待をかけていたよ」
予想外の話の展開に、わたしはリュウの言葉を理解するのに少々時間を必要とした。
「父親は弱かった俺を丈夫に育てようと、三歳の頃から剣道場や柔道場へ連れて行ったんだ」
リュウは遠い眼をして懐かしんで言った。
「最初はひ弱だった俺も、だんだん面白くなって一生懸命にやった。勉強そっちのけでな。親父は自分の目論見が裏目に出たと思ったのだろう、俺が小学生になったと同時に塾通いを命じたんだ」
リュウがご両親のことを話さないのは、わたしに遠慮しているせいだとずっと思っていた。けれどそんな単純なことではなかったことにショックを覚えた。
「……だが俺は学校の勉強には興味がなかった。親の期待が学業で一番を修めることならば、俺は武道で日本一を目指した。それなら文句は言われないだろうと思った。実際、大会で優勝したこともあった。でも親父は、それでも勉強で一番にならなければ認めないと言った」
わたしはリュウと同じように物心つく前から拳法を身につけていた。けれど父さんから当たり前のように拳法を教わっていたわたしとリュウとはまったく条件が違っていたことをはじめて知ったのだった。
「十五のとき、氣を物質化させることができるという、伝説の格闘家がいることを耳にした。俺は必死でその男を探して弟子入りを志願した。……剛拳師匠は弟子など取らぬの一点張りだった。だが俺もあきらめずに毎日毎日門を叩いた。百日目、やっと弟子入りを認めてもらえた。その一年後にケンが入門したんだ。アイツはすんなり弟子入りしたけどな」
リュウは懐かしそうに遠くを見つめて微笑んでいた。
「十八のとき、親父の怒りは頂点に達した。俺が勝手に大学進学を白紙にしたからだ。そりゃそうだ、俺を名門大学に入れて、官僚にしようとした息子が格闘家になると言い出したんだからな」

また、リュウは笑った。空を見上げて柔らかな日差しを仰いでいた。当時は笑うことなんてできないくらい、大変な状況だったんだろう。
「リュウがお役人だなんて、想像もつかない」
「そうだろ？」
そう言ってまたリュウは笑った。
「親父は高校卒業を最後にこう言った。『勘当だ。二度とこの家の門をくぐるな』と。若気の至りだ、俺もその言葉を真に受けて家を出た。母親は俺に何度も親父に謝ってくれと説得したよ。だが、俺は謝らなかった。そんな俺を師匠は内弟子にしてくれたんだ」
……リュウもまた、親子の縁を切ったという辛い過去を背負っていたんだ。わたしは長い間リュウの生い立ちについて何も知らずにいたことを悔やんだ。
「二十一のとき、師匠が死んだ。豪鬼との勝負でな。それは同時に最強と信じていた格闘術が敗れたことを意味した。俺は大いに挫折したよ。今更のこのこ帰るわけにもいかない。それで修行の旅に出たんだ」
「もしかして、あなたが真の格闘家を目指してきたのは……」
「そうさ、親父に認めさせてやりたかったからというのもその理由のひとつだ。でもな、そんなつまらない意地だけじゃない。俺は本当に何のために闘うのか、本当の強さとは何なのか、その本当を知りたいと思っているんだ」
ゆっくりとわたしに向き合ったリュウは、穏やかな顔で言った。
「俺はとんでもない親不孝者なんだよ。だから、君にはずっと言えなかったんだ。……すまなかった」
リュウは長い間、人に言えないほどの苦しみをひとり胸に秘めていた。
親子の確執の溝は深い。
もしかしたらリュウは親を恨んだことさえあったかもしれない。親に理解してもらえない辛さと悲しみを背負っていたリュウの胸中を思うと、やるせない気持ちになった。父親を拒絶しながらも、心は求めてやまなかったのだと思う。リュウの心は、「ありのままの自分を受け容れて欲しい、親の期待に応えられない息子でも、まるごと愛してほしい」と叫び続けていたのだと思う。
リュウの心は、少年のまま時が止まっていたんだ。少年時代の叫びを癒せるのは、リュウが再び少年に戻って、親子の縁をもう一度結びなおすこと以外にないと思った。
「ご両親に会いに行きましょう！」

「……だめだ」
リュウはかぶりを振った。
「親不孝者だなんて。あなたは立派に自分の道を見つけて歩んできたじゃない」
「いや、俺はまだ自分の求めた答えを見つけたわけじゃない。俺はまだ、帰れないんだ」
目を伏せて首を横に振るリュウの姿が、その苦悩の深さを物語っていた。生きているのに会いたい人に会えない苦しみ……。リュウには両親と死別したわたしとは違った両親への思いがあったのだ。わたしは、どうしてもリュウをご両親のもとへ帰さなければならないと思った。
「あなたは一流の格闘家よ。きっとご両親はわかってくださるはずよ。だって、あなたのお父様とお母様じゃない」
なぜか涙が頬を伝って落ちた。そんなわたしをリュウはきつく抱きしめた。
「君の気持ちも知らないで、俺はどうしようもない奴だな。……よし、明日、朝一番に行こう。君がいれば何も怖くないからな」
結果、わたしたちふたりでリュウのご両親に会いに行くことを決意したのだった。

翌朝、気合を入れて背広を着込んだリュウは、まるで試合に臨むかのように見えた。
上海浦東空港を発ち、約二時間かけて日本の関西国際空港に降り立った。そこから何本か電車を乗り継いでリュウの故郷の地を踏んだのだった。
「ここがリュウの生まれた家……」
純和風の門構えはとても立派だ。風雨にさらされて年季の入った木の表札には、墨で名字が書かれていた。
（これがリュウの名字……）
リュウは家の様子を伺うわけでもなく、ただじっと門の前で立ち尽くすだけだった。そんなリュウの背中をポンと叩いた。
「ああ」
気を取り直して深呼吸をする。リュウの心構えができたことを確認すると、わたしは呼び鈴を押した。
「はい」
程なくしてインターホンから女性の声がした。リュウはその声が誰なのか、すぐにわかったようだった。けれども名乗りをあげずに黙りこくっていた。

ゆうに一分はたっただろうか。奥からカラカラと門の引き戸が開く音と、履物の音が聞こえてきた。出てきたのは白髪のまじった小柄な和服姿の女性だった。
リュウの後ろ姿を見るなり、女性はいっぺんに表情を硬直させ、胸に手のひらをあてて肩を上下させていた。わたしはこの女性がリュウの母上だとわかった。
「……リュウ、おまえなのね」
母上はおそるおそるリュウの前に回りこみ、長年待ちわびた息子の顔を見上げると、その場に崩れた。リュウは屈みこんで嗚咽している母上に言った。
「ただいま、母さん」
そのまま母上を両腕に抱き上げて、一息つくと正家の門をくぐったのだった。
広い玄関に入ると目に飛び込んできたのは、正面に置かれた大きな花瓶に生けられた、色とりどりの花だった。リュウは母上を上がりかまちに降ろした。母上は着物の裾を整えて正座すると、わたしに向かっておっしゃった。
「あなたがリュウを連れてきてくださったのですね。ありがとうございます」
慌ててわたしもご挨拶申し上げた。
「はじめまして。春麗と申します」
「せっかく素敵なお嬢様がおいでくださったのに、まともなお出迎えのできなかったことをどうぞお許しください」
深々と頭を下げられるとわたしはすっかり恐縮してしまった。
「どうぞお上がりください」
「おじゃまします」
靴を脱ごうとしたわたしを引き止めさせたのは、相変わらず突っ立ったままのリュウの姿だった。
「リュウ、何を遠慮しているの？　ここはあなたの家なのよ、さあ上がりなさい」
リュウは母上に促され、ためらいながら十数年ぶりに生家の床を踏んだのだった。
応接間に通されるとわたしたちは並んで座布団に座った。肩に力が入っているわたしよりも、リュウはもっと重い胸中だったに違いない。
背筋をピンと伸ばし、正座したリュウの膝の上には両拳が握られていた。武道家の精神が骨の髄まで染み込んでいるリュウの姿は、サムライそのものだった。
周囲を見回してみると、縁側の向こうには明るい庭が広がり、枯山水が美しい弧を幾重にも描いていた。見上げるときめ細かな彫刻が施された欄間、二間分ある床の間には、生

け花と見事な掛け軸が対でかけられていた。
このときリュウのことが、格式高い良家のひとり息子であることを目の当たりにしたのだった。
「遠方からいらしてくださったんでしょう、さあ一服どうぞ」
母上はお茶をたててもてなしてくださった。はじめてみる日本の茶道。お作法もわからないわたしは茶碗とにらめっこしていた。
「どんな召し上がり方でも良いのですよ」
そう言ってわたしに優しく微笑んでくださった。リュウは、先に和菓子をいただくと、目の前に置かれた漆黒の茶碗の前に指をついて母上に一礼した。茶碗を手に取ると、感慨深げに眺めていた。漆黒の茶碗は角度によって黒の表情を変えている。素人のわたしでさえ、名品であることがわかった。
「あなたのお茶碗よ」
リュウが昔使っていたものを母上はずっと大事にされていたのだろう。
そしてリュウは茶碗を二度ほどまわしてからお茶をいただいた。最後に音をたててすすり切った後、指先で軽く茶碗のふちを拭きとって茶碗を反対方向に回して前に置いた。
わたしも「いただきます」と言ってから、しどろもどろながらリュウの通りにやってみると、お茶と和菓子の絶妙な組み合わせに思わず「おいしい」とつぶやいた。母上は微笑んでうなづいておられた。わたしは初めて、和の上品な味わいと日本固有のおもてなしの心を知ったのだった。
「母さん、俺は……」
「いいのよ。何も言わなくてもいいの。こんなに立派になって帰ってきてくれたのだから」
目頭を押さえながら話す姿から、相当苦しんでこられたことを十分に察することができた。
「お父さんと、やっと話し合えるときが来たのね……。どうか、わたしたちを許して……」
感極まった母上は、口元を押さえて応接間を出て行かれた。
ここへ来てからどれくらいたっただろう。わたしにはとてつもなく長い時間がたったように思えた。リュウは相変わらず固い表情のまま黙っている。これから展開される父と息子の再会劇を、心落ち着かないままじっと待つしかなかった。
時が動いた。父上がゆっくりと応接間に入ってこられたのだ。

父上は和装をたしなみ、銀髪に口ひげを生やしておられ、厳格さを絵にかいたような人だった。わたしたちの存在を認めると、厳しい目でこちらを見た。目は、リュウと同じだと思った。父上は上座に座り両手を袂の中に入れると、いっぺんに空気が硬直した。

「ご無沙汰しておりました」

リュウが両手をついて礼をした。わたしも続いて頭を下げた。顔を上げると、横でまだ顔を伏せたままのリュウに気づいて、慌てて頭を下げた。日本人の礼儀正しさに驚かされる一方で、作法の難しさにわたしは戸惑うばかりだった。

「顔を上げなさい」

低く静かな口調だった。その一言でリュウは、元の姿勢に戻った。再び張り詰めた空気が漂う。わたしは落ち着かなくて何かを言おうとしていたときだった。

「彼女の名は春麗といいます。今日ここへ参ったのは、彼女と結婚することを報告に来たからです」

このときリュウがはっきりと言ってくれたことで、正直ほっとした。

「春麗さん、よくぞおいでなさった」

「はじめまして。春麗と申します。どうぞよろしくお願いいたします」

リュウはただ、わたしの横で押し黙っているだけだった。そして父上もまた、そうだった。母上はただ涙をふいているだけだった。

長い沈黙が、十年以上もの空白期間を探りながら手繰り寄せているかのように感じられた。そしてこの無言の対話こそが、父と息子との絆を修復するには最善の手段なのかもしれなかった。

「おまえは格闘家としてリングに立っているそうだな」

沈黙を破ったのは、父上だった。

「はい」

「だが、殴る蹴るの行為から何を生み出すというのか？」

父上に真っ直ぐ視線を返してリュウは言った。

「格闘家は、ただ殴り合っているわけではありません。互いの肉体と精神の限界をぶつけ合うことで、人間の限界に挑戦しているのです。勝負を超えたところに何があるのかを、追い求めているのです」

リュウと父上は、互いの鋭い目をじっと見合ったまま、何も言わなかった。お互いの心を読み合っているかのように。

「闘うことは勝利を勝ち取ろうとすることだ。わたしは社会の構造を担う立場の人間になることで、既存の社会と闘おうとした。実際、熾烈な競合を勝ち抜いてきた。勝ち取ってみて、見えてきたものがそこにはあったのだ」

厳しい光を宿していた父上の目が、より一層光った。

「リュウよ、まことの強さとは何か。その答えは」

ふたりの視線が真っ直ぐにぶつかり合った。リュウは堂々と答えた。

「わかりません。求めれば求めるほど、自分は何も知らないということがわかっただけです」

それを聞いた父上は、ニヤリとかすかな笑みを見せた。そしておもむろに立ち上がると、和箪笥の扉を開けて奥から桐の箱を取り出した。

「これを開けてみなさい」

リュウは目の前に置かれた桐の箱を引き寄せると、木箱に巻かれた紫色の紐を解いてふたを開けた。中には数十通の書簡が収められていた。

「これは……!」

差出人の名を見たリュウは、固唾を呑んで中の手紙を広げた。

「剛拳和尚はおまえのことをずっと我々に報告してくださっていた。毎月一通、多いときで週一通、こうして手紙を送ってくださっていたのだ」

リュウは無心で積み上げられた手紙を読んでいた。

「手紙にはこうあった。『いつかは我を超え、拳の道を極めるだろう』と。良い師を得たのだな……。それを失った悲しみはひとしおだったろう」

父上の言葉に触れたとき、手紙を読むリュウの手が小刻みに震えた。

「おまえがリングの上で闘う姿を見て、おまえとわたしは同じ生き方をしていたことを知ったよ。おまえもわたしも、厳しい勝負の世界で一番になるために命懸けだったのだと……。わたしはおまえに詫びなければならない。人生は、自らが創るものだったのだ。ひとりの人生を他人が決めることなど誰にもできん。たとえ血を分けた親であろうとも……」

リュウは感極まってその場に手をついて頭を下げ、涙にむせぶ言葉を絞るようにして言った。

「今まで……申し訳ありませんでした……!」

ずっとずっと溜め込んでいた深く重い言葉を、やっと言うことができたのだった。わたしはこのときはじめてリュウの涙を見たのだった。

「いや、謝るのはわたしだ。おまえの人生を思うあまり、おまえの自由を奪ってしまった」
父上の唇は小刻みに震えた。
「おまえが行方知れずになってからというもの、ただどこかで生きていてくれさえすればそれだけでいいと願う日々が続いた……。なにもいらない、ただ、達者でいてくれと……。そのとき、おまえが生まれてきてくれた日のことを思い出したよ。あのときは、おまえがわたしのところに生まれてきてくれたことにただ感謝したというのに……。おまえを失ってみなければ気づけなかった愚かな父を、許してくれ……」
父上は自身よりも大きくなった息子を抱きしめ、慟哭した。母上はその姿を見て、声を上げて泣いた。わたしは放蕩息子が帰還を果たした一連のドラマを涙ながらに見ていたのだった。
ひとりの男が、本当の男になった瞬間だった。

父子の和解を果たしたことで、リュウの背中にあった翳りに、光が差し込みはじめたのがリュウの最初の変化だった。これをきっかけに、リュウの積年のわだかまりが解け、今の自分があるのは両親のおかげだと感謝さえするようになっていった。
わたしは頬がほてっているのを感じながら、一口、お酒をするリュウの横顔を見た。
「きっと、あなたの成し遂げたことを、お師匠様は喜んでいらっしゃるわ。それに、お父様も」
「……そうだといいな」
もしも、リュウの父上が理解あるよき父親だったなら、今のリュウはいないかもしれない。皮肉なことだけれど、リュウの父上に対する反発が、ものごとを成し遂げるエネルギーの根源になっていたのだと思う。
同時に、剛拳師匠がリュウの人生の師となり、育ての父としての役割を果たしたことで、父性のバランスが保たれていたのだと思う。
人は、求めれば必ず必要なものが与えられる。それは人生の師であろうとも、例外ではなかった。リュウは、生きてゆく上で、強さとは何かという答えを強く求めたからこそ、剛拳師匠とめぐり会うことができた。
そしてリュウが父上の期待通りの人生を歩んでいたなら、わたしと出会うこともなかったにちがいない。
真珠は体内の異物を核に取り込んではじめて育つ。異物は苦しみの果ての結実として、

美しい真珠として生み出される。リュウは真珠と同じように真実を生んだのだ。
わたしは飲み干したリュウの猪口にお酌をしながら言った。
「ねえ、覚えてる？　はじめてわたしたちが会ったときのこと」
「んん？」
リュウは突然昔のことを話題に持ち出されたものだから、記憶の焦点を合わせるのに時間を要したようだ。
「あのとき、あなたわたしに何て言ったか覚えてる？」
「さあな」
「『女に助けられるようじゃ、俺の格闘人生も終わったようなもんだ』って言ったのよ」
「そんなこと、言ったか？」
「言ったわよ」
「そうか……。俺、そんなことを言ってたのか」
リュウは陶然と笑ったあと、黙して思いにふけっていた。数々の思い出がリュウの脳裏を駆け抜けていたのだろう。
「なあ春麗、俺の最後のわがままを聞いてくれるか」
リュウは向き直り、格闘家としての顔に戻っていた。
「俺が死ぬときを、見届けて欲しい。それだけが頼みだ」
「どうしてそんな……」
変な冗談はよしてよ、と言いかけたわたしは思わず言葉を飲み込んだ。リュウの目を見て、リュウが本気だとわかったからだ。
「俺が最強なのは、死ぬときだからだ。俺が死ぬとき、真の格闘家になれたかどうかを、おまえに確かめてもらいたいんだ」
「リュウ……あなたって人は……」
わたしは思いがけず涙が込みあがってきたために、必死でこらえた。リュウはわたしの肩を抱き寄せた。リュウの熱くなった手が、わたしの冷たい腕をじんわりと温めた。
「どうしようもない男だよ、俺は。でもな、春麗のおかげで俺は頑張れるんだ」
リュウの腕の中で、この男になら、わたしのすべてを差し出してもかまわないと思った。そして、真の格闘家を見届けることがわたしの使命なら、まっとうしたいと思った。
「不思議なのよ。あなたが帰らない日が続いたのに不安にならなかったの。ああ、やっぱりあなたはリュウだったんだ、はぐれ狼の本性を思い出したんだって思ったの」

リュウは黙って聞いていた。
「たとえあなたが地球の果てまで行ってしまっても、わたしはいつだってここであなたの帰りを待っているわ」
「春麗……」
リュウは腕を緩め、わたしの両肩を再度掴んで正面に向かせた。そして神妙にわたしを見た。風来坊だった頃の目で……。
「……ありがとう」
リュウの心から出た言葉は、じんわりとわたしの胸に広がって染み込んだ。そっと、熱くなった目に手を添えた。
「お祝いしなくちゃね。今日はあなたの第二の誕生日だもの」
祝杯を高く上げたわたしに、リュウは微笑んで頷いた。静かな祝宴は、夜更けまで続いたのだった。

☆　日本人

夏休み。
わたしの父の故郷である、雲南省の山奥にある村を目指して、一家で飛び立った。
父が残した地図はおよそ地図とは呼べる代物ではなく、セピア色に褪せたしわくちゃのメモには、その土地に住まう者しか解読できない記号のような文字が記してある。わたしたちは心もとないその地図と父が語った故郷の話を頼りに、中国は雲南省へと飛び立った。
雲南省は中国の南西部に位置し、ミャンマー、ラオス、ベトナムの山岳地帯の国境にある。標高二千メートル級の辺境の地が点在しており、中国に五十五ある少数民族のうち二十六もの少数民族が複雑な地形に棲み分け、固有の文化をもって暮らしている。
まずは香格里拉（シャングリラ）を目指して飛行機で飛んだ。上空から見下ろすと、雲の合間から緑の草原が見え隠れする。雲南とはよく言ったものだと感心していると、標高五千メートル級のチベット山脈が、人間の往来を簡単に許可せぬよう立ちはだかっている。
空港に着くと、バスに乗り込んで六時間の長距離を走った。さらにガイドに案内してもらい、車に揺られること二時間、道なき道の山林を駆け抜けた。

もう着いたと思われたその場所で、ガイドは言った。「ここからは歩いて行くのだ」と。
わたしたちは秘境探しの探検家として気持ちを切り替えて歩くこと一時間。子連れには限界と思われた森の中で、四人の少女たちがこちらに笑みをたたえて立っていた。
少女たちは十〜十二歳くらいで、皆長い髪を高い位置に結わえていて、鮮やかな青を基調に、意匠を凝らした刺繍を施したスカートをはいていた。
わたしはすがる思いで彼女たちに父が残した地図を見せた。少女たちは互いに顔を見合わせるとはにかんで言った。
「こっちだよ」
彼女たちの足取りは軽く、必死でついて行く。木々が生い茂る道なき道を、草を払いながらたどり着いた先は——雲ひとつない青空の下に広がる山々のパノラマ。その中央には谷が刻まれ、雄大な大河が陽に輝きたゆたう。棚田が整然と山裾をあしらい、点在する家々には家畜が自由に駆け回り、草を食んでいる。
「桃源郷だな」
リュウは村をしばらく眺めてから言った。
「ここが父さんと母さんの故郷なんだ……」
両親のことを思い出して涙するのはいったい何十年ぶりだろう。自分の中に流れる血には、この地の記憶が刻まれていて、今ここにようやく原点にたどり着くことができた喜びと安堵と、懐かしさとせつなさが入り混じった気持ちがこみ上げてきた。
「さあ、あと少しだ」
リュウがわたしの肩に手を添えた。
「ええ」
涙を拭いて、再び歩き始めた。
四人の少女たちがこっちだよと言わんばかりに笑顔で待ち受けてくれている。わたしには恐れや疑いを知らない無垢な彼女たちが天女の娘たちのように見えた。
案内されたのは麻や漆喰などの自然素材で作られた一件の古い家だった。
わたしは父の残した地図を手に、玄関の前で立っていた。これからどのような展開になるのか、正直不安だった。
しばらくして小柄なおばあさんが出てきた。年齢はよくわからない。なぜなら、腰は真っすぐで肌もつやつやしていてしみ一つなかったから。
「あなた方がここへ来るのを待っていました」

わたしは思いもよらない言葉に、さっきまでの緊張が一気に解けた。まるで、「おかえり」と出迎えてくれたかのような安堵感を覚えた。同時に、まったく初対面の見知らぬわたしたちのことが、なぜわかったのだろうという疑問と驚きと包容力に圧倒された。

「あなたは王堯（ワンヤオ）と劉芳（リュウファン）の娘さんですね」

「は、はい」

なぜわたしの素性がわかったのかを聞く間も与えず、おばあさんは言った。

「王堯が肉体を離れたとき、王堯の意識体がわたしにこう伝えたのです。『娘は準備ができたとき、ひとりの日本人とともにこの村を訪れるでしょう』と」

「父が……そんなことを……？」

「われわれ一族は、秘儀を体得した者ならば意識体同志で伝えあうことができるのです。これは本来誰にでも備わっているのですが、ほとんどの人間はその能力を忘れてしまったのです」

わたしが日本人とともにこの村を訪れるだなんて、父さんはどうしてわかったのだろう。父さんはわたしがリュウと結婚することがわかっていたのだろうか。わたしはリュウと目を合わせて、お互いの驚きと戸惑いを共有しあった。

「ここは中国政府が介入できないよう、外部の人間は決してたどり着くことができないようになっています。わたしはあなたがたがここへ近づいているのがわかったので、四人の少女たちを使いに出したのです」

そのとき、四人の少女たちがわたしたちの前に再び現れた。

少女の一人が、白い歯を見せながら長男の手を引いた。長男は少女の誘導について行った。長女も次男も続いて行った。子どもたちが導かれた先は、滝のほとばしる川だった。そこではたくさんの子どもたちが全裸で遊んでいる。

「心配いりません。すべての子どもたちは守られています」

おばあさんはわたしの心を読み取ったようだ。

「ついていらっしゃい」

老人はとある方向へと歩き始めた。

わたしたちは小高い丘の上にたどり着いた。そこは村の様子が一望できるちょうどよいアングルに位置していた。丘全体は丸みを帯びていて小さな野草が生い茂っている。

この丘にたどり着いたとき、最初に目に留まったのは、四メートルほどあるひと柱の石柱が天に向かってそそり立っていたことだ。そしてその石柱から六、七メートル離れた位

置に一本の大木が立っていることにも気づいた。空に向かってもくもくと枝葉を生い茂らせている。石柱と大木が対になっているわけだ。おばあさんは石柱と大木の間の中心に立って言った。

「何か気づいたことはありませんか」

わたしは突然の問いかけに、頭が真っ白になった。

「丘の上に、石の柱と木があるくらいしかわかりません」

「しかし、こんなところに石の柱があるなんて、誰かが建てたのだろうか」

リュウが言った。

「よいことにお気づきですね」

おばあさんはそう言って、にこやかな笑顔を見せた。でも、まだ何かあるようだ。

「だって、ここは人工物のないところよ。人の手で石の柱を建てられるかしら」

わたしは石柱を見上げて言った。

リュウが大木のそばで何やら観察している。わたしも大木の方に近づいた。

「立派なクスノキだ。きっと御神木なのだろう。日本じゃ注連縄で封じられるのだろうが……」

わたしは木の幹から根にかけて、一か所の紡錘形に膨らんでいる部分があることに気づいた。膨らみの部分はシンメトリーの美しい割れ目になっている。

「ここを見て。ものすごい生命力を感じるわ」

おばあさんはにこやかな笑顔のまま、わたしたちのやりとりを見ていた。まだ、核心的な答えには至っていないのだろう。

「春分と秋分のある時間になると、ある現象が起きるのです。この石柱の影が、ぴったりと木に合わさるのですよ」

おばあさんのヒントをもとに、わたしはイメージしてみた。石柱の影が木と合わさる部分に何かあるのだろうか。

「木の割れ目の部分に合わさるんじゃ……」

と言ってみて、ハッとした。この木の割れ目が女性器のシンボルだとしたら……？　そして石柱の影が男性器のシンボルだとしたら……。

「陰陽和合、というわけか」

リュウが言った。

「その通りです。真理は人間の言葉で表現しないものです。自然界にすべての答えが表現

されているのですよ」
そのとおりだと思う。けれどおばあさんの言いたいことはそれだけではないはずだ。
これからもっと核心に迫った真理があるにちがいないと思った。
「宇宙のエネルギーは神聖なる性エネルギーそのものだということを、あなた方は知らされていません。それどころか、性について語ることはタブーとされてきたはずです。なぜなら、あらゆる生命の根源は性エネルギーから生み出され、霊性と霊性を融合させることによって無限の宇宙エネルギーそのものとつながることだからです」
おばあさんの言いたい核心部分が性に関することだったと知って、わたしは心なしか戸惑った。
「これまで人間はことごとく性エネルギーを封印されてきました。なぜなら、支配者と支配される者という関係を保つためには、宇宙の無限エネルギーを運用するすべを封じておかなくてはならなかったからです。それは宗教によって封じられ、広く深く人々の意識に浸透していきました」
だから性をタブーにするわけは、単に秘めごとだからだと思っていたけれど、そうではないようだ。一般的に性については、人間の根源的な欲求の一つであり、生殖のためには必要な欲求だとされているけれど……。
「性エネルギーは、低位チャクラである下半身だけのつながりだけでは不完全だということを、あなたがたは知らされていません。支配者は、低位チャクラのみの、切断された性エネルギーの交流法こそが正しいという嘘をあなたがたの意識に植えつけたのです。性は本来、生殖や性欲のためにあるのではなく、宇宙とつながるための一つの手段なのです」
支配者が嘘を意識に植えつけた――なるほど、世の中にはテレビや映画などの視覚的な媒体を使って、あらゆる嘘を刷り込んでいる。性についての嘘はアダルトビデオや雑誌などで人々を洗脳しているということになる。
洗脳されたほとんどの人々は、下半身レベルの一時的なつながり方しか知らない。不完全な性エネルギーは求めても求めても満たされることはないために、強烈な欲望となるわけだ。
それゆえ、男女間にあらゆる悩みやいさかい、トラブルなどを生じる愛憎劇へと発展してしまう。男性の性欲にまつわる商法がもっとも効率よいビジネスだとさえいわれる始末だ。
犯罪を起こす動機の一つに、人間のゆがんだ性欲が根底にあることを考えてみると、人

類が間違った性意識を持たされ続けていることを「知らない」ということが、なんと不幸なことだろうと思えてくる。

男女とも聖なる性エネルギーを膨大な宇宙のエネルギーに転化させるすべを知らぬまま、低次元の性欲にさいなまれ続けているというわけだ。

「あなたがたに備わっている性のシンボルは、決して恥ずかしいものでも卑しいものでも、欲望をかきたてるものでもありません。むしろ宇宙と直接接続できる聖なる器官なのです。性エネルギーを互いのチャクラにめぐらすために、聖なる器官が備えられているのです」

わたしはふたりでチャクラをめぐらすイメージをしてみた。確かに、無限のエネルギーだと思った。なぜなら八の字の軌跡は男女間の督脈と任脈を駆け巡る無限のシンボルだからだ。

「皮肉だな。宇宙の奥義が、人間が最も遠ざけようとしていた性についてだったとは」

リュウは感心して言った。

「もうひとつ。石と木は意識エネルギーをあらわしています。宇宙は意識エネルギーで満たされているのです。宇宙を構成するすべての存在に意識が備わっているのですよ」

おばあさんは、一息ついてから語気を強めて言った。

「わが村は老子（ラオツー）の真なる極意を受け継ぐ村。道（タオ）の真髄とはすなわち、性エネルギーの運用法であり、宇宙との接続法なのです。われらが老子は、今となっては名もなき銀河の臨在。老子の双子の意識体である観音（クワンイン）もまた、銀河の臨在であるのです。いかなる存在も対で存在し、性エネルギーによって生命を生み出す宇宙なのです。そして、大いなる意識体ほど、質量の大小に関わらず謙虚であり、すべてが同格であることを知っているのです」

叡智の人だ、とおばあさんを見て思った。わたしは小さなおばあさんから、膨大な氣が放射されているのを感じた。そしてこのおばあさんなら、何でも答えてくれると思った。

「父は、なぜわたしが日本人とここへ来ることがわかったんでしょうか」

「この地と日本は深い結びつきがあります。古代日本文明が栄えた頃、一部の日本人がこの地に移住してきたことで、その文明がこの地でも開花していたのです。今やあなたがた日本人はそのことを忘れてしまいましたが、われわれはその智慧を守ってきました。魂はすべてを記憶しています。あなたはこのことを理屈や論理にとらわれずに観ることを知っているでしょう」

確かにそうかもしれない。

わたしがリュウに惹かれたのは理屈ではない。

精悍な容貌に礼儀正しく、端正な立ち居振る舞いをするリュウの姿に、日本人男性としての美しさが備わっていることを知ったとき、胸の奥が震えたのを覚えている。リュウはわたしと初対戦したときも、勝利したわたしを称え、自分が負けたことに悔しがることもしなかった。そして常に謙虚だった。次第にリュウの内側に高潔な精神が宿っていることを知ったとき、リュウへの印象が特別な感情に変わっていったことを思い出していた。

「日本人であるあなたに、話しておきたい大切なことがあります」

おばあさんはリュウに向けて言った。

「あなたがた日本人は、いにしえの記憶を取り戻さなければなりません。地球と人類がもっとも調和していた縄文文明の智慧は、その後江戸時代に開花しましたが、明治維新時に西洋文明が導入されたことによって、その智慧は消滅させられてしまいました」

わたしはどうして雲南の僻地に住んでいるおばあさんが、こんなに日本の歴史を知っているのだろうと思った。もしかしたら、日本人の方が真の歴史を知らされていないのではないかと、わたしは直観的に思った。

「江戸文化は世界に類を見ない完全循環型社会だったと、知ったことがある」

おばあさんはリュウの言葉に微笑んでうなずいた。

「あなたがた日本人の魂の記憶を呼び戻すのです。まずはあなたがたに植えつけられた自虐的な観念を捨て去り、自己愛に目覚める必要があります。すべての存在は等しく自己愛をもたされています。自己愛を否定することは、自分自身の存在を消してしまいたいと思うことと同じことなのです」

リュウは殊勝な顔をしてうなずいた。

「あなたがたの国が良くも悪くも世界の標的となっているのは、日本の国旗が的をあらわしているからに他なりません。その本質は、日本の国旗が世界に稀に見る円をあらわしているということ、そして通貨もまた円であることに気づくことが重要です」

そのとおりだと、わたしは深く納得した。

「あなたがた日本人は国旗を自ら体現しなければなりません。円を自身の中央に据えるのです。直線の強さを超えれば円となる。和の精神とは円の精神であり、いにしえの文明の智慧なのです。人類が円の精神となれば、この地球は素晴らしい惑星として生まれ変わるでしょう」

わたしたちがこの地に呼ばれたのは、日本のいにしえの記憶を思い出させるためだったのかもしれない。父は日本のいにしえの記憶を思い出した人物のひとりだったのだろう。

すべての点が線になったと思った瞬間、すべてはつながっていて、つながれば円（縁）になるということに改めて気づかされた。父が「娘は準備ができたとき、ひとりの日本人とともにこの村を訪れるでしょう」と言った意味が、わたしの奥に深く染み入んできた。

「今後、日本の地において新たな文明の拠点となることは、宇宙の回転周期によって決められています。そのためには、日の本に住まうあなたがた日本人から目覚めなければなりません。リュウさん、あなたはまさに、日本の目覚まし時計なのです」

「すごいわ。ねえ、あなた！」

わたしはリュウの背中をパンと勢いよく叩いた。

そのとき。

リュウは意識を失って崩れ落ちた。

突然の出来事にあわてふためくわたしの横で、おばあさんはホッホッホと高らかに笑った。

「あなたの女性エネルギーが一気にこの方の全身を循環したために、気絶したのです。この方はあなたに触れられただけで至福の恍惚状態に至ったのですよ。見えませんか？　この方の周りを、虹がくるくる回っているのを」

☆　火水未済（かすいびせい）

雲南省の山奥から帰宅したわたしたち家族を待っていたのは、現在最も注目を浴びている若きファイター、ハヤテだった。

ハヤテといえば、抜群のセンスを持つ戦闘能力の高いファイターだ。公式戦では若干二十歳にして優勝を総なめにした経歴の持ち主だ。身体は決して大きくはないけれど、その分瞬発力と敏捷性に長けていて持久力が持ち味のファイターだった。

今どきの二十四歳の若者らしく、長く伸ばした髪を茶髪に染め上げていて、背中のタトゥが彼のトレードマークだった。派手なパフォーマンスが同世代の若者の共感を呼んでいることから、男女を問わずファンが多い。

ハヤテは一週間不在だったわたしたちをずっと待ち続けていたらしく、リュウの姿を認

めると、すぐさま駆け寄ってきた。その目は充血していた。
「リュウさん、格闘をやめるっていうのは本当なんですか」
「ああ、そうだ」
「俺と闘わないまま引退するなんて認めませんよ。だってリュウさんに引導を渡すのは俺だって決めていたんですから！」
メディア上知るところの派手な振る舞いをするハヤテとは違い、大真面目の真剣な態度でリュウに臨んでいる。けれどリュウが格闘技界から引退するという話はまだ公言していない。いくらハヤテとはいえ、このことは知らないはずなのだ。わたしは思い巡らせて考えてみた。
「……依林（イーリン）ね！」
依林はリュウに惚れこんだ女性番記者だ。彼女とは上海出身同士ということもあって、今ではわたしのクンフー教室にも積極的に参加してくれているよき友人でもある。
ただし、何かとスクープを狙っており、わたしに張り付いて何かをすっぱ抜こうとする魂胆が常にある。そんなことだから、依林は気の置けない友人というわけにはいかないのが本当のところだった。リュウが格闘魂を持っているのに対して、依林は記者魂にあふれた女性なのだ。
そんなことだから、依林にはリュウのことについて何も話していなかった。
人の視線に気づいて振り返ると、石垣の陰から依林がウインクしてこちらを見ていた。
「やっぱり！」
彼女のスクープを嗅ぎ分ける能力にはまったく敵わない。きっとわたしたちが不在のときに、ハヤテをそそのかしたのに違いない。
目の前で凄んでいるハヤテにリュウはいったいどう対応するのだろう。「もう勝負はしない」と言ったリュウの言葉が頭の中で渦巻いている。子どもたちも緊迫した空気を読んでか、ひと言も発せずに父親の行動を見守っていた。
「おまえの目的は何だ」
「俺より強い相手と闘いたいんです。俺はずっとリュウさんを目標にここまで来ました。だからどうしてもリュウさんと勝負したいんです。お願いします！」
ハヤテは頭を深く下げたまま動かない。リュウもまた、一歩も動かず黙っていた。
ハヤテの真摯な姿を見ていると、純粋に強い相手を求めて流浪していた頃のリュウの姿が重なって見えた。思わず夫の顔を見上げてみる。

目はあの頃と同じだった。口元には笑みを浮かべている。リュウもまた、若かりし頃を思い出したのだろう。

「いいだろう。中へ入れ」

敷地内にハヤテを招き入れ、道場の鍵を開けたリュウの目を、わたしは見つめていた。

（心配要らない）

リュウは無言でそう答えた。

道衣に着替え、グローブをはめると、リュウはいつもの赤いハチマキを額に巻いた。わたしと子どもたちは旅行してきたことも忘れて場内の隅に正座してふたりを見守っていた。気がつくと、依林がカメラを構えていた。

「依林！　あなたね、彼に耳打ちしたのは！」

「怒らないで。大丈夫よ、オフレコだから」

依林はカメラを構えたまま、わたしをなだめるように答えた。こっちの気も知らないでなんとうれしそうなことか。オフレコったって、こんないいネタを眠らせておくはずがないのだ！　ひとつため息をついた。

「いい？　お父さんの姿をしっかり見ているのよ」

子どもたちに囁いてから、対峙するふたりを見守った。

「思う存分かかって来い」

静かなリュウの声に対してハヤテは殺気立って構えている。闘志をむき出しにし、今日のこの日を待ちかねた様子が見て取れた。

古参のファイターであるリュウさえいなければ、ハヤテは今ごろ日本人最強のファイターのはず。きっと、打倒リュウさえ実現できれば、晴れて日本一、ひいては世界一の格闘家への道が開けると思っているに違いない。ハヤテにとって、リュウは目の上のこぶなのだ。

いつか試合を観戦して来たリュウが、ハヤテの天性の格闘センスについて話していたことがある。ハヤテは打撃系はもとより、絞め技が得意のようだった。自分よりも大きな相手をじりじりと追いつめるのがハヤテの手法らしい。かといって、立ち技も他の一流選手に引けを取らないという。

奇しくも、リュウとハヤテはいまだ対戦したことがない。リュウが格闘技界にいたなら、いつかは十七歳もの年の差のあるハヤテとリング上で闘う運命にあったはず。けれどその機会を待たずして、非公式試合で初対戦することとなった。

ふたりは互いに間合いをとって構えた。
「闘わない」と言ってからのリュウが闘う姿を、今回初めて見ることになる。
リュウの確かな決意がここで崩れるとは思えない。けれど相手はあのハヤテだ。リュウに引導を渡せる絶好のチャンスを取り逃がすはずがない。もちろんハヤテはリュウの決意など知るはずもない。
この猛々しい男を相手に、いったいリュウはどう応戦するというのだろう。道場の中央で対峙するふたりの間合いは崩されないまま、時計の針は無情に刻み込まれていった。
ただ、緊迫する雰囲気のはずが、何かが違っていた。
リュウとハヤテはいつまでたっても間合いをとったまま動かないのだ。まるで静止画像でも見ているかのように。
少なくとも子どもたちにはそう見えただろう。けれどわたしには、今までのリュウとはやはり何かが違うことに気がついていた。

――リュウが道場で稽古する姿を、幼い頃から子どもたちは見てきた。
普通の父親ならば、わが子にも自分の手筋を教え、育てようとするはず。けれどリュウは、子どもたちに一切技を教えようとはしなかった。隣で真似ようとする息子を横目に、ただ黙々と自分のための稽古を続けるだけだった。
長男が小学三年生になったとき、「父さん、僕にも教えてよ」とはじめて言った。そこでリュウは「習いたいのなら、他所(よそ)へ行け。おまえに本気でやりたい気持ちがあるのなら、必ずよい先生と出会えるはずだ」と答えたのだった。
そのことに対してあまりにもつれない態度ではないかと思ったわたしは、リュウに意見した。けれど返ってきた言葉は、「それがあいつのためには、いちばんいい方法なんだ」と言っただけだった。リュウは今の今まで、一度も指導者になろうとはしなかった。実の息子に対してさえも……。
リュウの考え方にはわたしでも時々分からないことがある。けれど今となっては、手取り足取り教えないことも、教える一つの姿なのだということが分かるようになった。あえて言うならば、父親の厳しさの中に光る愛――それは獅子がわが子を突き落とすさまに似ている。わが子を愛しているからこそ出た言葉だったということを、後になってから知ったのだった。
ただ唯一、息子に言った言葉がある。「最高の型を身につけろ。基本の技は必殺技であ

り、必殺技は最高の型だからだ」と――

「ねえ、父さんたち、どうしちゃったのかな」

長男がふたりを見据えながらつぶやいた。

「しっかり見ていなさい。ふたりは勝負の最中なのよ」

確かに今までのリュウとは違う。それを具体的に言葉で表現しようとするのだけれど、うまく言い表せない。

――最高の型を身につけろ。基本の技は必殺技であり、必殺技は最高の型だからだ――

そのとき脳裏をよぎったのは、リュウが息子に言ったあの言葉だった。リュウの構えは確かに完成されている。一分の隙もないほどだ。

それ以上に違っていたのは、リュウの氣だった。あれほど強烈に求めたはずの強さ、勝利を勝ち取るために燃やしてきた闘志がまったく感じられないのだ。リュウの言った「闘わない」ということ――ようやくその言葉の真意がわかったそのとき。

「参りました……」

ハヤテが構えを解いて、その場に座り込んだ。

「なんて凄さだ……。今の俺では到底リュウさんに勝てない……!」

先ほどまで血気盛んだった男が茫然自失の状態となっている。ついさっきまでの勢いは、もうなかった。

子どもたちは、一連のドラマの結末の意味がわからずに、わたしの顔を見上げた。けれどわたしは、ふたりのやり取りにくぎ付けになってしまっていた。

リュウはゆっくりと構えを解いた。

「経験を積むことだ。真の強さはその先にある」

リュウの口調は、穏やかだった。

うなだれているハヤテをそのままに、リュウはわたしたちのそばに寄って来て言った。

「しばらくそっとしてやってくれ」

その言葉を受けて、わたしは子どもたちを外に連れ出したとき、この現実がいつもとなんら変わらない日常であることに気がついたのだった。

リュウの朝はまだ陽が昇らない彼誰時から始まる。

静かな道場内で過ごすリュウだけの時間。坐禅を組み、それから朝稽古で一汗かく。こ

の時間だけは、リュウが自分自身と対峙する大事なひと時なのである。いつもと変わらない、いつもの毎日。リュウはただ、黙々と稽古を続けている。ハヤテとの劇的な対決さえなかったかのように。

「闘うのをやめる」と旅から帰ったあの夜に宣言してから、リュウは格闘に関してのことを一切語らなくなった。それどころか余裕さえ感じさせられる。

休日は子どもたちを野山に連れ出し、大自然と触れ合うことを体験させたり、家事に積極的に参加して、子どもに関心を持たせたりすることなど、およそ格闘とは程遠いことに活動しているのだ。このことはリュウの格闘一辺倒だった人生からの一大革命といっても過言ではない。

「闘わない」と決めたことがリュウの重荷から開放された直接の理由ではないことを感じ取ってはいた。むしろそれ以上に、旅先で何かを会得し、あらゆる束縛から解放されたことこそがリュウを自由闊達にさせたのだろう。

若い頃から当たり前のようにこなしてきたトレーニングや稽古で肉体を酷使することや、読書に没頭する姿や深遠なことを考えている様子……。それさえ解き放たれたかのようだった。

子どもたちに対しても、ハヤテとの対決について多くを語ることはしなかった。子どもたちにとってはまだ、幼すぎてあの勝負の意味が理解できない。いつか大人になったときに、本当の意味がわかるだろう。

最後の旅から帰宅したリュウが話してくれたこと。そのすべてがあの試合に反映されていた。リュウは答えをつかんだことをわたしに証明してくれたのだ。――語らずして、伝える――それが日本人の心を持ったリュウの流儀だった。

そんな何も変わらない生活を送っていたわたしたち家族に、嵐は再びやってきた。

「リュウさん、弟子にしてください」

ある日をきっかけに、弟子入り志願者が後を絶たない日々が続いたのだ。リュウはといえば、柳に風。どうやら弟子をとって指導者になるという意思はないようだ。ただ、志願者に決まって質問することがあった。

「強さとは何か」と。

皆、それぞれに答える。「最強の力を得ること」「誰にも負けないこと」「世界一の格闘家になること」……。

「そうか」

これが決まって答える言葉だった。そのやり取りは、半年の間、断続的になされたのだった。

ハヤテがやってくるようになったのは、あの試合から半年後。年が変わった真冬の頃だった。

「弟子にしてください、お願いします」

長い茶髪だった髪を、丸坊主にした姿で毎日家の門前でリュウを待ち続けるようになったのだ。

相変わらず何も語らないリュウは、他の弟子入り志願者と同様に、ハヤテの熱意に耳を傾けることはなかった。

ハヤテは毎日毎日、門前に立っていた。それが一ヵ月、二ヵ月と続いたときには、さすがにわたし自身が参ってしまいそうだった。

わたしはリュウに懇願した。

「彼の熱意は十分に伝わったはずよ。あなたには教える資格は充分にあるわ。彼を認めてあげて」

「いや、まだだ。俺にはまだ師匠を超えてはいない。あの偉大な師匠を超えてはいないんだ」

リュウは難しい顔で答えた。

「あなたには偉大なお師匠様がいらした。それだけでいいのよ」

「……そうだな。春麗の言うとおりだ」

それでもリュウは、首を縦に振ることはなかったのだった。

頑なに弟子をとらない主義を守ろうとするリュウ……。確かに、リュウが今まで積極的に誰かを指導したことはない。ただ、わたしが上海でクンフー教室をしていた頃に、一度だけリュウが教えたことがあった。

クンフーの稽古中にやってきたリュウに、わたしが指導を頼んだときだった。リュウは頑なに「俺は先生じゃないから」と固辞したけれど、後押しするわたしに折れたのだった。

リュウが教える姿を誰よりも興味深く見ていたのは、わたしだった。いったいリュウは、子どもたちを相手に、どうやって教えるのだろうと。リュウの指導者としての資質を見る絶好のチャンスを得たわたしは、道場の隅でリュウを見守っていた。

「さあ、三本勝負だ。一人ずつかかって来い」

わたしはリュウが発した「三本勝負」という言葉に反応した。やがてその真意は、リュ

ウが指導者として最も大切な素養を持っていることの証となった。
一本目は、子どもに勝たせ褒め称えた。二本目は、リュウが完膚無きまでに勝った。三本目は、引き分けとした。わたしはこの手法を見て胸がすく思いをしたことを、弟子入り志願者が来るたびに思い出すのだった。

春の予感が訪れたある朝、一本の電話が転機を変えた。
「リュウ、今からそっちへ行くから用意しとけよ」
ケンだった。ケンは今なお全米を超えた大スターの地位を守り続けている。超多忙スケジュールを割いて来るのだろう。よほどのことに違いない。
「ケンおじさんが来るの？」
「そういえば、ケンおじさんの出てる映画、かっこよかったな～」
子どもたちは大スターが家に来ることを跳び上がって喜んでいた。
リュウはといえば、相変わらずいつもの様子。新聞紙を広げたまま何事もなかったかのようにコーヒーを飲んでいる。男同士というものはそういうものなのかしらと思いながら、子どもたちを送り出す用意をしていたのだった。
ここへの到着はおそらく夕方頃だろう。今日はクンフー教室がある。子どもたちを送り出してから時計と睨めっこしながら忙しく動き回っていた。
午後五時。
一台のハイヤーが道場の入り口前に止まった。ドアが開くと現れたのは、サングラスをかけた金髪の男。ベージュのスプリングコートを翻して颯爽と車を降りると、ハリウッド俳優らしくサングラスを外した。
「いよう、春麗。元気だったか」
「ケン！　ホントに久しぶりね。皆さんも変わりない？」
「ああ。元気にしてる。……これからかい？」
道場に教え子たちが入ってくる様子を見てケンは言った。
「ええ」
「春麗、すまないがちょっと時間をくれないか。今日はどうしてもリュウとやり合いたいんだ」
いつもの軽い調子ではなかった。真剣勝負をかけた男の顔……。ケンもまた、リュウについての一連の騒動の真偽を確かめに来たのだ。

「わかったわ。でもあのひと、まだトレーニングから帰らないのよ」
「迷惑をかけるな」
「いいのよ。あなただって忙しい合間を縫って来てくれたんだもの」
わたしと話している相手があの大スター、ケン・マスターズだということがわかったらしく、道場は一斉に騒然となった。わたしとケンは、教え子たちに取り囲まれ、まるで芸能人のインタビューさながら押し問答に四苦八苦していた。
「春麗、黙ってないで教えてくれてもいいんじゃない？」
依林は慌ててカメラを持ってきた。
いよいよことが大掛かりになってきた。リュウはこの状況を知らずして帰ってくるだろう。
「父さんまだなの？　みんな待ってるのに」
長男はこれから展開されるだろう一大事に躍起になっている。長男だけでなく、ここにいるすべての者が浮き足立っていた。
ケンはすでに緋色の道衣に身を包んで集中している。まるで宮本武蔵を待つ、佐々木小次郎のようだ。
……しかしリュウは戻らない。
（いったい、どこをうろついているの？）
まさか、帰らないつもりでは……。余計な心配が頭をもたげた。
そのとき、扉が開いた。皆、一斉に扉に注目する。白い道衣に赤いハチマキ姿のリュウが、そこにいた。
「遅いじゃないの、何してたの？」
わたしは思わずリュウの元へ駆け寄った。
「すまなかった。トレーニングが終わってからしばらく休んでいた」
目を見てわかった。リュウもまた、覚悟を決めてきたということを……。
リュウは一礼してから、道場に入場した。そしてゆっくりと中央に歩み寄ると、永遠のライバルと対面した。久々の親友との再会に、懐かしがることもしないで、ふたりは間合いをとった。
ケンは白い歯を見せた。それに答えるようにリュウの口元がかすかに笑みを浮かべた。このふたりは互いの再会を喜び合っているのだ。言葉など必要としないままに……。
「ハヤテ、ここでしっかり見ていろ」

リュウがおもむろに声をかけると、扉の向こうからハヤテが遠慮がちに入ってきた。ハヤテはわたしの横二メートル程離れたところに歩み寄ると、神妙に正座した。

静まり返った場内。すでに勝負は始まっていた。

これまでのリュウとケンの公式試合はわずか二試合のみ。成績は互いに辛勝・惜敗の一勝一敗である。

非公式試合とはいえ、今回は三度目の試合となる。最強になったときに決着をつけると言い合ってきたふたりにとっては、今日の勝負は、人生最大の試合となるはずだ。

同時にリュウの出した答えを今ここで見ることになる。わたしの身体には思わず力が入り、心は動揺していた。こんな心境になったのは、本当に久しぶりだと思った。

リュウは日々の稽古を決して怠ることはない。やはりリュウはいついかなるときも格闘家だった。

多忙なケンも、日々の稽古は決して怠らない男だということは知っている。良家の御曹司であっても、骨の髄まで格闘家であるのがケンなのだ。

教え子たちは、格闘技界の双璧の試合を間近に見られるなど、夢にも思わなかっただろう。少年少女から大人まで、初心者から武術の心得のある者……。皆が固唾をのんで二人を見守っていた。

同門のライバル同士が己の全人生を賭けて対峙している。

リュウとケンがそれぞれの道を歩き出してから早や二十年。もはや技の形態はまったく別の方向へと向かっていた。リュウの技は年月がたつごとに簡素になっていったのに対し、ケンは勇壮かつ豪快な技を編み出していった。

「勝負を超えたところに行く」と言ったリュウの方向性は未だ明確ではない。リュウの魂に宿した確固たる答えが果たしてケンに通用するのだろうか。

いつもならば、どんな相手であっても、たとえケンであっても百パーセントリュウを信頼して試合を見守ることができた。けれど今回は予測のつかない展開に心が定まらないでいた。ハヤテとの勝負のときに見た、闘志を消し去ったリュウはどうやって最高のライバルと闘うというのだろうか。

道場は張り詰めた空気とともに、ふたりから発する吐息が一層寒さと緊張感を引き立たせている。

リュウの白い道衣はケンの鮮やかな緋色によって、より一層白く際立ち、ケンの緋色の道衣はリュウの真っ白い道衣でなお一層鮮やかな赤を際立たせている。ふたりの対比は、

同じ出発点からスタートした、それぞれが見出した境地を物語っているようだった。
ようやくケンが構えた。リュウもまた、ケンに続く。
ピン、と空気が張り詰めている。場内にいる誰もが、ふたりの一挙手一投足を取りこぼすことなく見守っていた。それだけでなく、ふたりの息遣いまでも聞き漏らさぬよう、全神経を冴え渡らせているようだった。
間合いは一定の間隔を保ったままだ。どちらかが均衡を崩さなければ勝負は始まらない。リュウとてケンの強さは気迫で十分感じているはずだ。互いの強さに、互いが動けずにいる、はずだった。
先手をきったのは、意外にもリュウだった。
なんと、完璧だった構えを解いたのだ。
半身の構えから、正面立ちになったのだ。おそらく、他人の目からはただ突っ立っているだけにしか見えないだろう。そんな隙だらけの状態で、勝てると思う者は、誰一人としていないに違いない。そして、場内にいる誰もが、リュウの行動の意味を知る者はいなかった。
ただ、わたしは知っていた。
隙だらけの状態に見えて、突っ立っているだけのリュウからは、周囲を圧倒するエネルギーで満ち溢れているということを……。
ケンは、リュウの意表を突いた行動に、内実戸惑ったように見えた。対してリュウは悠然と立ち、呼吸は静かに深く半眼の眼でどこをともなく見つめていた。視線の先は、ケンではない！　わたしは思わず唾を飲み込んだ。
リュウはまさに木彫りの軍鶏（しゃも）のようだった。どんな相手も手出しさせない、威風堂々たる態度。それでいて静謐としていて超然たる姿でたたずんでいるのだ。
わたしはわかった。
もっとも強いということは、もっとも静かであるということを。そして無為であるということを。
リュウは格闘家をやめたのではなく、闘うことを手放す境地に達した格闘家になったのだ。
（これこそが、勝負を越えた境地……）
気高い男は、ただそこにいるだけで完結していた。拳で証明することなど何ひとつないままに――

このとき、リュウが終の旅から帰還した日の夜に話してくれたことを思い出した。
――師匠が波動拳など必要ないと言った本当の理由がやっとわかったよ。人は外に「何か」を求めるのではなくて、すでに持っているということにただ気づけばいいんだ。外に求める「何か」というのは、人間を超越しようとすることだ。つまり、神になろうとすることなど必要ないんだ。なぜなら人は皆、もともと神だからだ――と。
張り詰めていた空気が一瞬にして解けた。ケンもまた、構えを解いたのだった。
「なるほどな……」
ケンの表情は穏やかだった。
場内は何が起きたのか理解できずに、ざわつき始めた。
「これがおまえの答えなんだな、リュウ。俺は必殺技を完成させることに心を砕いてきたが、おまえはすべての技を手放したというわけか……」
ケンは礼もせずに踵を返して場外へと歩いていった。置いてあった荷物を肩に背負うと振り返り、リュウに指をさして言い放った。
「逃げ帰るんじゃねえぜ。断わっておくが、この勝負、おまえが勝ったわけじゃないからな。次に会うときを覚悟してろよ」
立ち去ろうとするケンを、わたしはとっさに引きとめた。
「ケン！　今日はうちへ泊まってくれるわよね？」
「春麗、悪いが帰る。俺にはまだやらなきゃならねえことがあるようだ。今度また会おう！」
ケンはこちらを向いて右手を上げたまま、羽織ったコートを颯爽と翻して去っていった。
あまりにもあっけない再会と別れ。さきほどまで繰り広げられていたリュウとケンの人生最大の勝負が静かな夢だったかのようだ。
「次にアイツと会うときが楽しみだ。なあ、春麗」
「そう……ね」
リュウもまた、先ほどまで真剣勝負のさなかにいたことを忘れさせるくらいに落ち着き払っていた。
ケンとの久々の再会は、わたしの思うところをよそに、ほんのわずかな時間だけで終焉を迎えた。わたしは振り返ってリュウを見た。リュウは悠然とした表情のまま、腕を組んで友の去っていった方を見続けていたのだった。
呆然としていたわたしに、ハヤテがおもむろに語り始めた。
「リュウさんと勝負したとき、リュウさんのオーラが濃密で強力になっているようで、引

き込まれるような感覚になっていたんです。そんな人に拳を振るうことなんてできませんでした……。そのとき気づいたんです。僕は何のために闘うのかということを、何もわかっちゃいなかったんだって」

「そうだったの……」

ハヤテは、道場の中央でいまだたたずんでいるリュウを見あげながら、興奮している様子だった。

わたしはおもむろにリュウに近づくと、胸が震えていることに気づいた。思わずこみ上げる涙を悟られまいとこらえた。

「おめでとう……って言ってもいいわよね」

わたしには、それしか言葉を見つけることができなかった。子どもたちがわたしに駆け寄って抱きついてきた。

「やっと入り口に立てたんだ。春麗、俺の人生これからが本番だ。今後もよろしく頼む」

リュウはわたしの肩をしっかりと抱きしめてくれた。

わたしはリュウに言った。

「あなたの大器はやっと晩成したのね……」

「いや、そうじゃない」

リュウの言葉に、思わず見上げる。

「大器は、晩年に完成するんだ」

そこには虚空を仰ぐ会心の笑顔があった。

「超特ダネ独占スクープ、ついにゲットしたわよーッ！」

依林が叫んだ。

「あたしの目に狂いはなかったわ！　この才能を世間に知らしめてやらなきゃ！」

顔を高潮させながら右手を突き上げて喜びを露にしている。依林はひとり騒ぎながら、カメラを抱えて道場を退出していった。そんな依林の姿をリュウとふたりで見届けた後、目を合わせて吹き出したのだった。

依林が去ったあと、三人の教え子たちがリュウのところに駆け寄って来た。どの子も高校生の女の子だった。

「あのう、さっきはどうして闘わなかったんですか？　それにどうしてケンさんは帰っちゃったんですか？」

彼女たちは遠慮がちにリュウにたずねた。リュウは微笑んだ。

「さあ、何でだろうな。わかったら俺にも教えてくれ」
そう言うと、三人の女の子たちは互いに丸くした目を合わせあった。そして恥ずかしそうに笑いあってから一礼すると、はしゃぎ合いながら退室していった。
わたしとリュウは目を合わせた。そして阿吽の呼吸でうなづき合った。リュウは深く一息つくと威勢良く声を張り上げた。
「さあ、新しい時代の幕開けだ！　ハヤテ、準備はいいな！」
「は、はい！　ありがとうございます、師匠！」
ハヤテは正座し手をついて満面の笑顔で声を張り上げた。
「いや、俺たちは同志だ。ともに参ろう」
リュウは笑顔でハヤテに手を差し伸べた。

完